

# 史跡 植山古墳

2014年3月

奈良県橿原市教育委員会

## 序

ここに史跡 植山古墳の発掘調査報告書を『権原市埋蔵文化財調査報告 第9冊』として刊行します。

本書は、奈良県権原市五条野町に所在する植山古墳で実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

植山古墳の発掘調査は、平成4年から進められた権原市五条野町一帯の土地区画整理事業を契機として実施しました。平成12・13年度の発掘調査の結果、長方形の墳丘に2基の大型の横穴式石室が東・西に並んで設けられていること、東石室には遠く熊本県宇土半島から運ばれてきた石材で作られた家形石棺が安置されていること、西石室の玄門部には石製扉が存在していたと考えられること、古墳の周辺にも古墳と関連する遺構が存在することなど、様々な成果が得されました。植山古墳は我が国の古代史を語る上で欠かすことの出来ない貴重な遺跡であることが明らかとなったのです。

これらの成果を受けて、平成14年には国の史跡に指定されました。権原市では植山古墳の保存と活用を目的として、古墳周辺の整備を進めています。平成21・24年度には、そのために必要な範囲確認調査を実施し、新たな成果を得ています。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに整備の実施、また本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成26年3月28日

権原市教育委員会  
教育長 吉本重男

## 例　　言

- 1 本書は、史跡 植山古墳（うえやまこふん）の発掘調査報告書である。調査地は奈良県橿原市五条野町に所在する。
- 2 平成 12・13 年度の発掘調査は土地区画整理事業に伴う確認調査として、平成 21・24 年度の発掘調査は史跡の範囲確認調査として、奈良県教育委員会の指導の下、橿原市教育委員会が実施した。2000-4 次調査については五条野地区画整理組合が費用を負担した。その他の発掘調査は国庫補助事業として実施した。
- 3 各発掘調査の現地調査期間は以下の通りである。報告書作成には平成 25（2013）年度を充てた。

2000-4・8 次調査	平成 12（2000）年 5 月 11 日～平成 13（2001）年 3 月 30 日
2001-3 次調査	平成 13（2001）年 4 月 23 日～7 月 31 日
2009-4 次調査	平成 21（2009）年 6 月 26 日～10 月 2 日
2012-3 次調査	平成 24（2012）年 7 月 26 日～平成 25（2013）年 2 月 28 日
- 4 各発掘調査時および報告書作成時における橿原市教育委員会の体制は、以下の通りである。

平成 12（2000）年度発掘調査  
文化財課長 愛水正睦、課長補佐 波部吉伸、係長 齊藤明彦、技師 竹田正則・濱口和弘・平岩欣太・米田一、技術員 横関明世（調査担当：竹田・濱口・平岩・米田・横関）

平成 13（2001）年度発掘調査  
文化財課長 佐藤幸一、課長補佐 波部吉伸、係長 齊藤明彦、技師 濱口和弘（調査担当：濱口）

平成 21（2009）年度発掘調査  
文化財課長 齊藤明彦、課長補佐 豊島和代、係長 濱口和弘、主査 横関明世、技術員 石坂泰士（調査担当：横関・石坂）

平成 24（2012）年度発掘調査・平成 25（2013）年度報告書作成  
文化財課長 竹田正則、課長補佐 濱口和弘・中川明彦、統括調整員 平岩欣太、係長 米田一、主査 石坂泰士（調査担当・報告書作成担当：石坂）
- 5 現地調査および遺物整理を実施するにあたっては、地元各位をはじめ様々な方々の御指導、御協力を賜った。記して感謝申し上げたい。紙幅の都合もあり、個人名は省略させていただきます。
- 6 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。遺物の一部は、歴史に憩う橿原市博物館（平成 26 年 4 月 1 日開館）にて展示を行う予定である。
- 7 本書所収の写真のうち、現場調査写真は各調査の担当者が撮影を行った。遺物写真はアートフォト右文 佐藤右文氏および橿原市教育委員会が撮影を行った。
- 8 本書の執筆は、第Ⅱ章第 2 節と第Ⅳ章第 4 節を竹田・石坂が、残りを石坂が担当した。編集は石坂が行った。
- 9 2012-3 次調査は、橿原市史跡等調査保存整備検討委員会の指導の下、発掘調査を計画・実行した。当時の委員会の構成員は、委員長・石野博信氏（橿原市文化財審議会委員）、副委員長・木下正史氏（東京学芸大学名誉教授）、白石太一郎氏（大阪府立近つ飛鳥博物館館長）、菅谷文則氏（奈良県立橿原考古学研究所所長）、杉山洋氏（橿原市文化財審議会委員）、豊岡卓之氏（奈良県教育委員会）

員会）である。

- 10 各種の石材については、奥田尚氏に格別の御指導を賜った。記して感謝申し上げたい。

## 凡　　例

- 1 本書で示す方位は座標化を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第VI系）に基づく。  
2000・2001年度の調査時には日本測地系を用いており、既往の概報等の報告座標値も日本測地系である。今回、これらについても全て世界測地系に変換して報告を行っている。
- 2 図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 2009・2012年度調査では上層の色調記録に『新版標準土色帖24版』(小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社発行)を使用した。一方、2000・2001年度調査では、これを用いていない。本報告書では、各調査時の記録手法を尊重し、基本的にそのままの色調表現で報告している。
- 4 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示した。記述の無い図は任意の縮尺である。
- 5 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は0である。標高値は東京湾平均海面(T.P.)からの値である。
- 6 土層断面図・立面図中の斜線トーンは、特記の無い場合、地山を示している。また、格子目トーンは壁面中の石材を示している。
- 7 遺構番号は基本的に調査時に付与した番号を使用している。
- 8 遺物実測図の番号は本書全体の通し番号で示した。図版の遺物番号もこれに合わせている。
- 9 土器の実測図については、須恵器は断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 10 遺物説明文中の各部径は直径である。

## 目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯と調査体制	1
第2節 各調査の目的と範囲	2
第3節 調査の経過	5
第Ⅱ章 位置と環境	
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	12
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 墳丘・周塙の調査	
第1項 墳丘	15
第2項 周塙	47
第3項 出土遺物	49
第2節 東石室の調査	
第1項 石室構造	51
第2項 排水溝	55
第3項 石棺	58
第4項 出土遺物	60
第3節 西石室の調査	
第1項 石室構造	67
第2項 排水溝	71
第3項 圓石	72
第4項 出土遺物	73
第4節 石室閉塞土	77
第5節 南側平坦面の調査	
第1項 遺構面の検出	83
第2項 遺構	85
第3項 整地層	90
第4項 出土遺物	100
第6節 南西側平坦面の調査	
第1項 南西トレンチの調査	102
第2項 西トレンチの調査	109
第3項 出土遺物	115
第7節 背面丘陵の調査	
第1項 植山北古墳	117
第2項 柱列	121
第3項 テラス面	127
第4項 出土遺物	130
第Ⅳ章 総括	
第1節 調査成果の概要	133
第2節 西石室の石製扉	137
第3節 柱列と丘陵利用の変遷	138
第4節 植山古墳の評価	141
図版	143
報告書抄録	237

## 挿 図 目 次

図 1	各調査の範囲 (S = 1/800) . . . . .	3
図 2	調査地の位置 . . . . .	10
図 3	調査地周辺の地形 (S = 1/8,000) . . . . .	11
図 4	調査地周辺の道路 (S = 1/12,500) . . . . .	13
図 5	墳丘周辺調査前測量図 (S = 1/800) . . . . .	16
図 6	墳丘平面図 (S = 1/300) . . . . .	17
図 7	墳丘断剖部 道構平面・断面図 (断面: S = 1/40) . . . . .	19
図 8	東石室東側 墳丘→周縁断削上層断面図① (S = 1/30) . . . . .	20
図 9	東石室東側 墳丘→周縁断削上層断面図② (S = 1/30) . . . . .	21
図 10	東石室東側 墳丘→周縁断削上層断面図③ (S = 1/30) . . . . .	22
図 11	東石室東側 墳丘→周縁断削上層断面図④ (S = 1/30) . . . . .	23
図 12	東石室東側・北側 墳丘→周縁断削上層断面図 (S = 1/100) . . . . .	24
図 13	東石室北側 墳丘→周縁断削上層断面図① (S = 1/30) . . . . .	25
図 14	東石室北側 墳丘→周縁断削上層断面図② (S = 1/30) . . . . .	26
図 15	東石室北側 墳丘→周縁断削上層断面図③ (S = 1/30) . . . . .	27
図 16	内石室間 墳丘断削土層断面図① (S = 1/30) . . . . .	28
図 17	内石室間 墳丘断削土層断面図② (S = 1/30) . . . . .	29
図 18	西石室東側 墳丘→周縁断削上層断面図 (S = 1/30) . . . . .	30
図 19	西石室北側 墳丘→周縁断削上層断面図① (S = 1/30) . . . . .	31
図 20	西石室北側 墳丘→周縁断削上層断面図② (S = 1/30) . . . . .	32
図 21	西石室北側 墳丘→周縁断削上層断面図③ (S = 1/30) . . . . .	33
図 22	西石室北側・西側 墳丘→周縁断削上層断面図 (S = 1/100) . . . . .	34
図 23	西石室西側 墳丘→周縁断削上層断面図① (S = 1/30) . . . . .	35
図 24	西石室西側 墳丘→周縁断削上層断面図② (S = 1/30) . . . . .	36
図 25	西石室西側 墳丘→周縁断削上層断面図③ (S = 1/30) . . . . .	37
図 26	西石室玄室西側 墳丘断削土層断面図 (S = 1/30) . . . . .	38
図 27	西石室玄室門脇側 墳丘断削上層断面図 (S = 1/30) . . . . .	40
図 28	墳丘前面 上層図① (S = 1/100 連結図: S = 200) . . . . .	41
図 29	墳丘前面 上層図② (S = 1/100) . . . . .	42
図 30	墳丘前面 上層図③ . . . . .	43
図 31	墳丘前面 上層図④ . . . . .	44
図 32	墳丘南東隅 断削土層断面図① (S = 1/50) . . . . .	45
図 33	墳丘南東隅 断削土層断面図② (S = 1/50) . . . . .	46
図 34	東側周囲 遺物出土状況図 (S = 1/20) . . . . .	48
図 35	墳丘盛土出土土器 (S = 1/4) . . . . .	49
図 36	周縁出土土器① (S = 1/4) . . . . .	49
図 37	周縁出土土器② (S = 1/4) . . . . .	50
図 38	周縁出土跳器 (S = 1/4) . . . . .	50
図 39	東石室 平面・立面図 (S = 1/80) . . . . .	52
図 40	東石室入口 正面見通し図 (S = 1/80) . . . . .	53
図 41	東石室主軸から東側 見通し立面図 (S = 1/80) . . . . .	53
図 42	東石室床面下断削土層断面図 (S = 1/20) . . . . .	54
図 43	東石室排水溝蓋石除去後平面図 (S = 1/80) . . . . .	56
図 44	東石室奥壁裏 排水溝内遺物出土状況図 (S = 1/20) . . . . .	56
図 45	墳丘前面 排水溝立面図 (S = 1/40) . . . . .	57
図 46	家形石棺 (S = 1/40) . . . . .	58
図 47	家形石棺上層断面図 (S = 1/40) . . . . .	59
図 48	東石室出土土器 (S = 1/4) . . . . .	60
図 49	東石室出土手提付鉢金具 (S = 1/2) . . . . .	61
図 50	手提付鉢金具・製作工程模式図 . . . . .	63
図 51	東石室玄室排水溝出土金属器① (S = 1/2) . . . . .	63
図 52	東石室玄室排水溝出土金属器② (S = 1/2) . . . . .	64
図 53	東石室玄室堆積土出土金属器 (S = 1/2) . . . . .	65
図 54	東石室排水溝出土三輪玉 (S = 1/2) . . . . .	66
図 55	西石室 平面・立面図 (S = 1/80) . . . . .	68
図 56	西石室主軸断面見通し図 (S = 1/50) . . . . .	69
図 57	西石室床面下断削土層断面図 (S = 1/20) . . . . .	70

図 58	西石室漢道 遺物出土状況図 (S = 1/50) ······	71
図 59	闇石 (S = 1/40) ······	72
図 60	西石室出土土器 (S = 1/4) ······	73
図 61	西石室出土鉄器① (S = 1/2) ······	74
図 62	西石室出土鉄器② (S = 1/2) ······	75
図 63	西石室出土竈山石 (S = 1/10) ······	76
図 64	埴丘前面 東石室主軸上土層断面図 (S = 1/50) ······	77
図 65	埴丘前面 西石室主軸上土層断面図 (S = 1/50) ······	78
図 66	東石室 洞門部壁面上層断面図 (S = 1/60) ······	79
図 67	西石室 洞門部壁面上層断面図 (S = 1/60) ······	80
図 68	埴丘羅断面模式図 ······	81
図 69	石室閉塞土・埴丘南側地層検出範囲図 (S = 1/300) ······	82
図 70	埴丘南側平坦面平面図 (S = 1/250) ······	84
図 71	埴丘南側平坦面 道構断面図 (S = 1/40) ······	85
図 72	1・2トレンチ 整地層断面羅断面図① (S = 1/50) ······	86
図 73	1・2トレンチ 整地層断面羅断面図② (S = 1/50) ······	87
図 74	1・2トレンチ 整地層断面羅断面図③ (S = 1/150) ······	88
図 75	1トレンチ西壁 上層断面図 (S = 1/50) ······	89
図 76	1トレンチ中央南北軸 西面上層断面図 (S = 1/50) ······	90
図 77	1トレンチ南端・2トレンチ北端東西壁 土層断面図 (S = 1/50) ······	91
図 78	2トレンチ中央東西軸 上層断面図 (S = 1/50) ······	92
図 79	2トレンチ南北壁上層断面図 (S = 1/50) ······	93
図 80	3トレンチ南北壁上層断面図① (S = 1/50) ······	94
図 81	3トレンチ南北壁面②・4トレンチ西壁 上層断面図 (S = 1/50) ······	95
図 82	3トレンチ北平垣面 上層断面図 (S = 1/50) ······	96
図 83	5トレンチ東壁 上層断面図① (S = 1/50) ······	97
図 84	5トレンチ東壁 上層断面図② (S = 1/50) ······	98
図 85	6トレンチ東壁 上層断面図 (S = 1/50) ······	99
図 86	南側平坦面 堆積出土土器 (S = 1/4) ······	100
図 87	南側平坦面 整地層出土土器 (S = 1/4) ······	101
図 88	南西トレンチ 平面図 (S = 1/150) ······	102
図 89	南西トレンチ西壁 上層断面図 (S = 1/50) ······	103
図 90	南西トレンチ東・南壁 土層断面図 (S = 1/50) ······	104
図 91	南西トレンチ 道構断面図① (S = 1/40) ······	105
図 92	南西トレンチ 道構断面図② (S = 1/40) ······	106
図 93	南西トレンチ 道構断面図③ (S = 1/40) ······	107
図 94	南西トレンチ 道構断面図④ (S = 1/40) ······	108
図 95	西トレンチ 平面図 (S = 1/150) ······	109
図 96	南西トレンチ・西トレンチ 古墳柱列平面図 (S = 1/200) ······	110
図 97	西トレンチ・南壁 上層断面図 (S = 1/50) ······	111
図 98	西トレンチ 道構断面図① (S = 1/40) ······	112
図 99	西トレンチ 道構断面図② (S = 1/40) ······	113
図 100	西トレンチ 道構断面図③ (S = 1/40) ······	114
図 101	南西トレンチ・西トレンチ 出土遺物 (S = 1/4, 207 のみ 1/8) ······	116
図 102	楠山北古墳 平面図 (S = 1/250) ······	118
図 103	楠山北古墳 土層断面図① (S = 1/50) ······	119
図 104	楠山北古墳 上層断面図② (S = 1/50) ······	120
図 105	楠山北古墳 上層断面図③ (S = 1/50) ······	121
図 106	背面丘陵上 柱列 上層断面図 (S = 1/40) ······	122
図 107	楠山古墳柱列平面図 (S = 1/800) ······	123
図 108	2009年度調査区 平面図 (S = 1/400) ······	124
図 109	2009年度調査区壁面上層断面図 (S = 1/50) ······	125
図 110	2009年度調査区西半 柱列 上層断面図 (S = 1/40) ······	126
図 111	2009年度調査区テラス面 南北軸上層断面図 (S = 1/50) ······	128
図 112	2009年度調査区テラス面 道構断面図 (S = 1/50) ······	129
図 113	楠山北古墳周辺出土土器 (S = 1/4) ······	130
図 114	楠山北古墳周辺出土 鉄器 (S = 1/2) ······	131
図 115	楠山北古墳周辺出土 石器 (S = 1/1) ······	131
図 116	テラス面出土土器 (S = 1/4) ······	132

図 117 西石室 石製扉 想定復元模式図	137
図 118 植山古墳と五条野内垣内地図 ( $S = 1/1,200$ )	139
図 119 背面丘陵柱列変遷想定図	140

付図 1 植山古墳周辺図 ( $S = 1/400$ )

付図 2 植山古墳平面図 ( $S = 1/250$ )

## 表 目 次

表 1 歩掛付飾金具一覧表	62
表 2 三輪玉一覧表	65

## 図 版 目 次

図版 1 上 植山古墳 航空写真（俯瞰。上が南）	143
図版 2 上 植山古墳 航空写真 近景（南から。2000 年撮影）	144
図版 2 下 植山古墳 航空写真（南東から。2000 年撮影）	144
図版 3 上 植山古墳 航空写真（南南西から。2000 年撮影）	145
図版 3 下 植山古墳 航空写真（東南東から。2000 年撮影）	145
図版 4 上 植山古墳 航空写真（北から。2000 年撮影）	146
図版 4 下 植山古墳 航空写真（北東から。2000 年撮影）	146
図版 5 上 植山古墳 航空写真（西北西から。2000 年撮影）	147
図版 5 下 植山古墳 航空写真（南東から。右奥は歿佛山、左奥は二上山。2000 年撮影）	147
図版 6 上 植山古墳 航空写真（東北東から。中央右丸山古墳、奥は金剛山・慈城山。2000 年撮影）	148
図版 6 下 丸山古墳後内部から見た植山古墳（西から）	148
図版 7 上 植山古墳 調査前状況（東から。東側埋堆積土から。輝みは東石室）	149
図版 7 下 東石室 調査前状況（南から）	149
図版 8 上 西石室 調査前状況（南から）	150
図版 8 下 西石室玄室 調査前状況（南から）	150
図版 9 上 塗丘背面 完掘状況（北東から）	151
図版 9 下 塗丘西侧面 完掘状況（西から）	151
図版 10 上 塗丘背面 完掘状況（北西から）	152
図版 10 下 西側周壁 土層断面（南から）	152
図版 11 上 西石室玄門部西側 塗丘断削断面（南西から）	153
図版 11 下 西石室北側 塗丘断削断面（北東から）	153
図版 12 上 塗丘北西隅周壁 土層断面（北東から）	154
図版 12 下 塗丘北西隅 墓底 石敷断面（東から）	154
図版 13 上 東側周壁 遺物出土状況（南東から）	155
図版 13 下 東石室北側 塗丘断削土層断面（北東から）	155
図版 14 上 東石室北側周壁 土層断面（東から）	156
図版 14 下 東石室東側 塗丘断削土層断面（南から）	156
図版 15 上 東石室東側 塗丘裾部断削土層断面（南東から）	157
図版 15 下 内石室間 塗丘断削土層断面（南から）	157
図版 16 内石室間 塗丘断削土層断面（南西から）	158
図版 17 上 西石室玄門部西側 塗丘断削土層断面（南東から）	159
図版 17 下 塗丘北西隅 周壁石敷検出状況（北西から）	159
図版 18 上 周壁西辺 石敷検出状況（北から）	160
図版 18 下 周壁西辺 石敷南端検出状況（南から）	160
図版 19 上 周壁北辺 石敷検出状況（西から）	161
図版 19 下 周壁北辺 石敷検出状況（東から）	161
図版 20 上 塗丘一周壁南東隅 土層断面（北北東から）	162
図版 20 下 塗丘南東隅 土層断面（北東から）	162
図版 21 上 塗丘南東隅 墓裾部土層断面（北から）	163
図版 21 下 塗丘南東隅 塗丘断削土層断面（南東から）	163
図版 22 上 塗丘前面 2012 年度調査前状況（南西から。覆屋下が西石室）	164
図版 22 下 塗丘前面 2012 年度調査前状況（東から）	164

図版 23	東石室全景（南から）	165
図版 24 上	東石室 家形石棺出土状況（北から）	166
図版 24 下	東石室 家形石棺内堆積土層断面（南西から）	166
図版 25 上	東石室全景（北から）	167
図版 25 下	東石室全景（北東から）	167
図版 26 上	東石室正面觀（南から）	168
図版 26 下	東石室 家形石棺出土状況（南から）	168
図版 27 上	東石室 西道（北から）	169
図版 27 下	東石室 玄門部（北北西から）	169
図版 28 上	東石室 玄室（南から）	170
図版 28 下	東石室奥壁側 排水溝（北西から）	170
図版 29 左上	東石室奥壁側 排水溝（新）（上が入口側）	171
図版 29 右上	東石室奥道 排水溝（古）（上が入口側）	171
図版 29 左下	東石室玄室 排水溝（新）（上が入口側）	171
図版 29 右下	東石室玄室 排水溝（古）（上が入口側）	171
図版 30 上	東石室玄室 排水溝（古）（北西から）	172
図版 30 下	東石室奥道 排水溝（古）（南から）	172
図版 31 左上	東石室石棺東側 排水溝（北から）	173
図版 31 右上	東石室石棺西側 排水溝（北から）	173
図版 31 下	東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（俯瞰）。手前は石棺の身	173
図版 32 左下	東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（西から）	174
図版 32 右下	東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（東から）	174
図版 33 左上	東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（北東から）	175
図版 33 右上	東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（西から）	175
図版 33 下	東石室北側埴丘断面内 140SP 上層断面（東から）	175
図版 34 上	東石室北側埴丘断面内 140SP 完掘状況（南から）	176
図版 34 下	東石室家形石棺 碣掛突起 加工痕跡（南西から）	176
図版 35 上	東石室 家形石棺身 加工痕跡（北東から）	177
図版 35 下	東石室 家形石棺蓋 加工痕跡（南から）	177
図版 36 上	埴丘前面 東石室排水溝検出状況（南から）	178
図版 36 下	埴丘前面 東石室排水溝検出状況（南西から）	178
図版 37 上	埴丘前面 東石室排水溝構築掘方断面（南から）	179
図版 37 下	西石室 玄室（南東から）	180
図版 38	西石室 正面觀（南東から）	181
図版 39 上	西石室 開石（俯瞰。上が入口側）	181
図版 39 下	西石室 開石（南東から）	182
図版 40 上	西石室 開石（南から）	182
図版 40 下	西石室 開石（南から）	182
図版 41 上	西石室 開石 深道側床面下断割（南東から）	183
図版 41 下	西石室 開石 玄室側床面下断割（北西から）	183
図版 42 左上	西石室玄門部 東壁（南西から）	184
図版 42 右上	西石室玄門部 西壁（北東から）	184
図版 42 左下	西石室奥道 排水溝（南東から）	184
図版 42 右下	西石室奥道（俯瞰。上が入口側）	184
図版 43 上	西石室奥道 遺物出土状況（北西から）	185
図版 43 下	西石室人口部裏面 排水溝構築掘方断面（北西から）	185
図版 44 上	埴丘前面 西石室前面に断面（南から。表土除去時点）	186
図版 44 下	埴丘前面 內石室前面に断面（南西から。表土除去時点）	186
図版 45 上	埴丘前面 東石室前面に断面（南から。表土除去時点）	187
図版 45 左下	埴丘前面 東石室主軸上に断面（南東から）	187
図版 45 右下	埴丘前面 西石室主軸上に断面（南東から）	187
図版 46 上	埴丘前面 完掘状況（南から）	188
図版 46 下	埴丘南西部 盛上・地山上に断面（南から）	188
図版 47 上	埴丘南西部 盛上・地山上に断面（西から）	189
図版 47 下	埴丘南西部東半 盛上・地山上に断面（東から）	189
図版 48 上	東石室前面 閉塞土検出状況（南から）	190
図版 48 下	東石室入口部 構造遺構断面（北から）	190
図版 49 上	東石室入口部 構造遺構断面（南から）	191
図版 49 下	東石室入口部 閉塞土断面（北西から）	191

図版 50 上	東石室入口部 閉塞土断面（西から）	192
図版 50 下	東石室入口部 閉塞土断面（南西から）	192
図版 51 上	西石室前面 西石室構築側方断面（南から）	193
図版 51 下	西石室前面 閉塞土検出状況（南から）	193
図版 52 上	西石室入口部 土断面（北西から）	194
図版 52 下	西石室入口部 土断面（北から）	194
図版 53 左上	西石室入口部西壁側 土断面（北北東から）	195
図版 53 右一段目	西石室西壁奥門前 土断面（北東から）	195
図版 53 有二段目	西石室前面 塗瓦盛土（南から）	195
図版 53 下	西石室前面 石室構築掘方・石室閉塞土（南から）	195
図版 54 上	桶山古墳 航空写真（俯瞰、上方北、2001年撮影）	196
図版 54 下	桶山古墳 航空写真（北から、2001年撮影）	196
図版 55 上	埴丘南側平坦面 2012年度調査前状況（西から）	197
図版 55 下	1トレンチ北端 土断面（南から）	197
図版 56	1・2トレンチ 完掘状況（南から）	198
図版 57 左上	2トレンチ中央西半 耕作溝・整地層検出状況（南から）	199
図版 57 右一段目	2トレンチ 004・005SK 検出状況（西から）	199
図版 57 右二段目	2トレンチ中央西半 整地層検出状況（西北西から）	199
図版 57 下	2トレンチ南端 整地層・地山検出状況（南から）	199
図版 58 上	2トレンチ北半 整地層・地山上断面（西北西から）	200
図版 58 下	2トレンチ中央 整地層・地山土断面（北西から）・谷地形最深部	200
図版 59 上	2トレンチ南半 整地層・地山上断面（北西から）	201
図版 59 下	2トレンチ 整地層内 阿蘇溶結凝灰岩片 出土状況（西から）	201
図版 60 上	2トレンチ 整地層内 阿蘇溶結凝灰岩片 出土状況（西から）	202
図版 60 下	2トレンチ中央 整地層断面（西から）	202
図版 61 左上	5トレンチ 整地層検出状況（南から）	203
図版 61 右上	3・6トレンチ 整地層検出状況（南から）	203
図版 61 左下	3トレンチ北半 整地層検出状況（北から）	203
図版 61 右下	3トレンチ南半 整地層検出状況（西から）	203
図版 62 上	3トレンチ南壁 土断面（北西から）	204
図版 62 下	3トレンチ南壁 整地層断面（北西から）	204
図版 63 上	3トレンチ北半東壁 土断面（北西から）	205
図版 63 下	6トレンチ南端 整地層・地山検出状況（南西から・手前が整地層）	205
図版 64 上	4トレンチ西壁 塗丘前面盛土・地山土断面（東から）	206
図版 64 下	4トレンチ・5トレンチ北半・塗丘南西部 地山検出状況（南から）	206
図版 65 上	南西トレンチ 完掘状況（北西から）	207
図版 65 下	南西トレンチ 完掘状況（西から）	207
図版 66 上	南西トレンチ 完掘状況（北から）	208
図版 66 下	南西トレンチ 積引（北から）	208
図版 67 上	西トレンチ 完掘状況（北から）	209
図版 67 下	西トレンチ 完掘状況（東から）	209
図版 68 上	東トレンチ 完掘状況（北西から）	210
図版 68 下	東トレンチ中央 整地層・地山検出状況（北東から・右手前が地山）	210
図版 69 上	桶山古墳と桶山北古墳（南東から・右奥の高まりが北古墳）	211
図版 69 下	桶山北古墳全貌（南東から）	211
図版 70	古墳背面丘陵東半 柱列検出状況（南東から）	212
図版 71 上	古墳背面丘陵 柱列復元（東南東から）	213
図版 71 下	古墳背面丘陵東半 柱列復元（南から）	213
図版 72 上	古墳背面丘陵東半 柱列復元（北西から・奥の林の中が春日神社）	214
図版 72 下	2009年度調査区 柱列（新・旧）（北から）	214
図版 73 左一段目	2009年度調査区 013・034SP・018SK 断面（東から）	215
図版 73 右一段目	桶山北古墳周縁東側 土断面（北東から）	215
図版 73 左二段目	桶山北古墳周縁北側 遺物出土状況（北から）	215
図版 73 右二段目	桶山北古墳周縁北側 遺物出土状況（南東から）	215
図版 73 下	桶山北古墳と柱列（西から）	215
図版 74 上	2009年度調査区東半 テラス面検出状況（西から）	216
図版 74 下	2009年度調査区東半 テラス面検出状況（東から）	216
図版 75 上	2009年度調査区東半 テラス面検出状況（南西から）	217
図版 75 下	テラス面中央駐西面 土断面（南西から）	217

図版 76 上	テラス面 道構検出状況（西から）	218
図版 76 下	テラス面東半 跪柱建物検出状況（東から）	218
図版 77 左一段目	2009 年度調査区東半 スロープ地形（北北西から）	219
図版 77 右一段目	テラス面 側面観（北から）	219
図版 77 左二段目	テラス面 002SP 検出状況（北東から）	219
図版 77 右二段目	テラス面西半 柱列検出状況（北東から）	219
図版 77 左三段目	テラス面 002SP 断面（東北東から）	219
図版 77 右三段目	テラス面 037SP 断面（東から）	219
図版 77 左四段目	テラス面 035SP 断面（北東から）	219
図版 77 右四段目	テラス面 052SP 断面（北西から）	219
図版 78 上	八咫鳥神社 拝殿下の礎石に転用された砾石（北東から）	220
図版 78 下	柏山古墳埴丘盛土出土 阿蘇溶結凝灰岩	220
図版 79	東石室出土 歩留付飾金具	221
図版 80 上	東石室出土 三輪玉	222
図版 80 下	西石室出土 箍憑器	222
図版 81	周縁埋土出土遺物	223
図版 82	埴丘盛土・東石室出土遺物	224
図版 83	東石室出土 歩留付飾金具①	225
図版 84	東石室出土 歩留付飾金具②	226
図版 85	東石室出土 歩留付飾金具③（拡大写真）	227
図版 86	西石室出土遺物①	228
図版 87	西石室出土遺物②（竈山石）	229
図版 88	西石室出土遺物③	230
図版 89	埴丘南側平坦面出土遺物①	231
図版 90	埴丘南側平坦面出土遺物②	232
図版 91	南西トレンチ・西トレンチ出土遺物	233
図版 92	柏山古墳周辺出土遺物	234
図版 93	2009 年度調査区テラス面上出土遺物	235
図版 94	素盞鳴命神社踏み石（上）・春日神社踏み石（下）	236

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯と調査体制

植山古墳は奈良県橿原市五条野町に所在する古墳である。

植山古墳に関する知見は、野淵龍潛が明治 26（1893）年に編んだ『大和國古墳墓取調書・古墳墓見取図』や大正 12（1923）年に刊行された『奈良縣高市郡古墳誌』に記載されており、その存在は古くから知られていた。この段階では、横穴式石室は 1 基のみであると認識されていた。昭和 45（1970）年より奈良県教育委員会が実施した遺跡分布調査によって、既知の石室（本報告の西石室にあたる）の東側に石室石材の抜き取り穴と思われる埴地（同東石室）が存在することが確認され、2 基の古墳（円墳？）が並列して築かれていると報告された。その後、植山古墳の意義に着目した関川尚功氏は、開口する（西）石室の現況実測を実施するとともに、周辺の地形を詳細に観察した結果、「2 基の古墳が並列するのではなく、一つの古墳に 2 基の横穴式石室が營まれている双室墳である」との報告を行ったが、依然として詳細は不明なままであった。

そのような状況の中、橿原市五条野町の一帯において土地区画整理事業が平成 4（1992）年に計画された。橿原市の南東、高市郡明日香村との境界付近に位置する五条野町周辺は植山古墳の他にも古代史上重要な遺跡が多数存在する地域であり、土地区画整理事業に先立って調査が必要となった。平成 8（1996）年から橿原市教育委員会が区画整理事業に伴う発掘調査を実施しており、五条野向イ遺跡や、五条野内埴内遺跡、五条野城脇古墳、五条野宮ヶ原 1・2 号墳などの多くの貴重な成果が得られた。発掘調査が行われた範囲は、植山古墳が所在する丘陵および、その南方に広がる小丘陵地一帯である（図版 5・6 の航空写真に区画整理事業が進められている様子が映されている）。

植山古墳については区画整理事業地内に含まれていたものの、概ね保存を講ずる方向性の事業内容で計画が進められていた。より一層具体的な古墳の様相を明らかにするため、平成 12（2000）年 6 月から植山古墳周辺の発掘調査を実施することになった。この調査の結果、古墳本体に関する極めて重要な情報が得られただけでなく、古墳周辺の丘陵上や平地にも古墳に関連する遺構が広がっていることが明らかとなった。

植山古墳の恒久的な保存を計るべく史跡指定の認定を受けるため、平成 13（2001）年に未調査部分である埴丘南西の平坦面西側と埴丘南側の平坦面において国庫補助事業として範囲確認の発掘調査を実施し、この範囲にも遺構が存在することを確認した。

平成 12・13 年度の調査成果をもとに、平成 14（2002）年には埴丘および周辺一帯が国史跡として指定を受けた。

平成 13（2001）年からは橿原市が植山古墳の史跡公園整備事業を進めている。その整備計画の一環として、平成 21（2009）年には史跡指定地内で未調査であった埴丘背面丘陵上の東側および丘陵北側斜面上に位置するスロープ地形部分についての範囲確認調査を国庫補助事業として実施した。

石室開口部を含む埴丘前面および埴丘南側に広がる平坦面については、埴丘のすぐ南側に民家が存在するため調査を行っていなかった。この民家部分について橿原市が史跡公園整備に向けて用地買収を進め、買収がすべて終了した後の平成 24（2012）年に同地点の範囲確認調査を国庫補助事業とし

て実施した。

発掘調査は樋原市教育委員会が担当した。

調査後は、墳丘上については石室保護の覆屋を設置し、墳丘側面部および周壕部分についてはシート張付けによって、墳丘周辺については埋め戻しを行って、それぞれ遺構の保護を行っている。

平成 22（2010）年 5月 1・2日および 11月 13・14 日には一般への石室公開イベントを開催した。

本報告書は平成 12・13・21・24 年度の各調査成果をまとめたものであり、報告書の作成には平成 25（2013）年度を充てた。

## 第 2 節 各調査の目的と範囲

樋原市教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度一調査次数の形で示している。本報告書で成果報告を行う調査については、2000－4 次調査、2000－8 次調査、2001－3 次調査、2009－4 次調査、2012－3 次調査という調査次数番号をそれぞれに付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。なお、2000－4 次調査と 2000－8 次調査については、区画整理事業の都合上、二つの調査次数に分かれているが、実際の調査は一連のものとして行われている。そのため、調査の記録等について同一の調査として保管されている。本報告書の記述においても 2000 年度の調査として一括りにして扱うこととする。本報告書では、それぞれの調査について 2000 年度調査、2001 年度調査、2009 年調査、2012 年度調査と記述することとする。

以下に、各調査における調査の範囲について述べる（図 1）。

### ○ 2000 年度調査（2000－4 次調査・2000－8 次調査）

植山古墳に対する最初の発掘調査である。調査前の時点では墳丘および背面の丘陵上一帯は全体に竹木が繁茂しており、その伐採を行った後に調査を開始した。

調査範囲は墳丘および周壕、墳丘の西側から北側にかけての背面丘陵上、墳丘南西前に位置する平坦面の東半部分（2000－8 次調査 南西トレンチ）である。調査面積は約 4,300 m<sup>2</sup> である。

調査は古墳の周壕と思しき溝状の落ち込みが残る東側から掘削を着手し、順次東から北、さらに西へと周壕および墳頂から肩部の検出を進めた。溝状の落ち込みの東肩より東側は、調査地の南東隣に所在する墓地から北東へ抜ける里道であり、調査範囲は里道の西隣に接する位置までである。

周壕の検出によって墳丘の範囲が大枠で判明し始めた段階から、墳丘頂上部の検出を並行して行い、さらに両石室内部の調査へと移行した。なお、2000 年調査時点では墳丘のすぐ南隣の平坦地には民家が建った状態であり、安全及び遺跡保護のため、墳丘前面（南面）については発掘調査を行っていない。両石室の開口部分についても、入口石材から南に約 1.5～2.0 m の地点で便宜的に掘削を止め、本格的な調査は後に行うこととした。この地点の調査は 2012 年度に調査を実施した。

周壕部の掘削の後、周壕の西側から北側にかけての丘陵上部の掘削に移行し、墳丘および石室の調査と並行して背面丘陵の調査を行った。背面丘陵の北側については、調査前時点の標高で 110 m から上の範囲を調査対象としている。これより標高の低い北側については、傾斜のきつい斜面となっている。丘陵の西側については過去に削平が行われており、丘陵上部の平坦面が残る範囲を調査の西辺

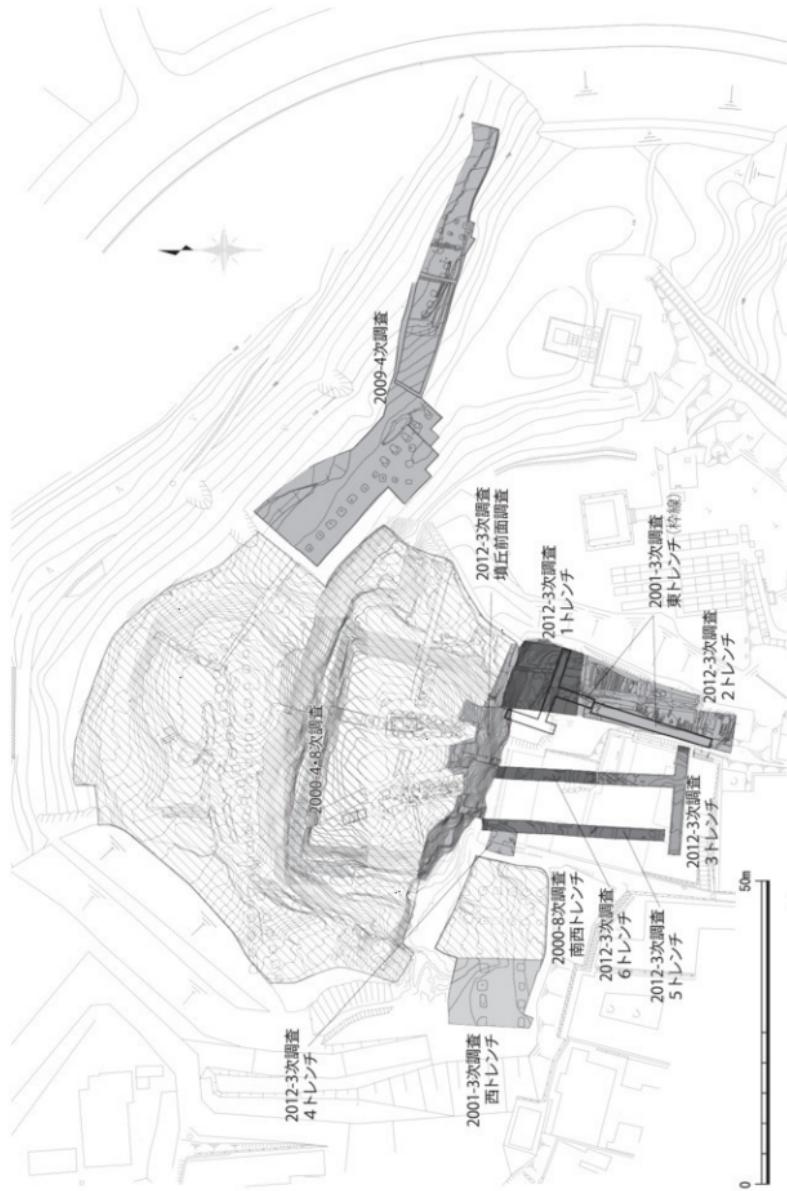


図1 各調査の範囲 ( $S = 1/800$ )

としている。

調査後半には、墳丘の南西前に位置する平坦面の東半部分の調査を行った。この調査区には南西トレンチという名称を付与している。西側周塙の南側延長部分にあたる地点である。南西トレンチの位置する平坦面付近は、墳丘南側の平坦面（当時民家地）よりも1～3m程度の高台になっている場所である。

#### ○ 2001－3次調査

調査点には西トレンチと東トレンチという名称を付与している。調査面積は合計257m<sup>2</sup>である。西トレンチは墳丘の南西前に位置する平坦面の西半部分にあたり、2000－8次調査南西トレンチの西辺に接する位置に設定した。西トレンチからすぐ西側および南側は急な斜面となっている。

東トレンチは墳丘前面平坦面の東部に設定した調査区である。墳丘南正面の宅地の東隣に位置する耕作地にあたる地点で、宅地面より1.5～2.5m程度の高台になっている。東トレンチは『樅原市教育委員会2002「樅原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成13年度（植山古墳）』で報告している東区第1～3トレンチに該当する。本報告書ではこれらを一括して東トレンチとして報告を行う。東トレンチは幅1～2mの細長い調査区であり、面的な調査を行った2012－3次調査の際に遺構面の再検出を行っている。

#### ○ 2009－4次調査

古墳背面の丘陵頂上部の東側（＝調査区西半）および、そのさらに東、春日神社北側の斜面上に存在する平坦地部分（＝調査区東半）に東西方向に長い調査区を設定した。調査区東半の斜面上の平坦地は、東から西に向かって高くなるスロープ地形を成しており、西端で緩やかに丘陵頂上部に接続する（図版77右上）。調査面積は約660m<sup>2</sup>である。

調査区は一連であるが、調査成果は調査区西半の丘陵頂部と調査区東半のスロープ地形部分との二つに大きく分かれる。前者は2000年度調査の丘陵頂部との関わりが深く、両調査を併せて第Ⅲ章第7節第2項で成果を詳述する。

#### ○ 2012－3次調査

調査範囲は石室開口部を含む墳丘前面（南側斜面）および、墳丘南側に広がる平坦面である。調査面積は合計約1,200m<sup>2</sup>である。

墳丘前面には、墳丘南西隅から東側周塙の東半までにあたる斜面部分の調査である。石室入口については当初、墓道が通路状に断面検出されることを予想していたが、両石室入口の前面に閉塞土（詳細は第3章）が存在することを確認したため、その時点で掘削を終了している。

墳丘南側平坦面には1～6トレンチの調査区を設定した。排土置場の都合上、1・2トレンチの埋め戻し後、3～6トレンチの調査に移った。墳丘前面の調査は後者と並行して行った。

1・2トレンチには2001－3次調査東トレンチの範囲を含んでいる。東トレンチ部分については過去に断面調査を行っており、遺構面下の状況はこの範囲を利用して確認を行い、1・2トレンチで新たに掘削した範囲については基本的に遺構面の検出に留めている。

調査をほぼ終了し、石室保護覆屋の設置作業を進めていた2013年1月15日に、西石室東壁玄門の石材1石が崩落するき損事故が発生した。崩落石は闕石南西隅に接触しており、闕石の表面に軽微な擦傷が生じている。同年1月25日付で文化庁長官にき損届を提出した。

## 第3節 調査の経過

各調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

### ◎ 2000-4・8 次調査

平成12年5月11日(木) 調査区周辺草刈。フェンス設置作業。重機による表土除去。

5.12(金) 調査区周辺草刈。伐根作業。調査区周囲安全フェンス設置。重機による表土除去。

5.13(土) 排水処理。

5.14(月) 調査区周辺草刈。重機による表土除去。道構面精査。

5.16(火) 調査区内の伐根作業。重機による表土除去。道構面精査。

5.17(水) 雨天対策。排水処理。

5.18(木)・5.19(金)・5.22(月) 重機による表土除去。道構精査。古墳東側の剥離部分の下調べ。

5.23(火) 重機による表土除去。東側周縁下げ。周縁内より鉄筋片が1点、結晶片多数出土。

5.24(水) 重機による表土除去。東側周縁重機下げ。重機崩落事故発生。

5.25(木) 重機による表土除去。東側周縁完掘。東側周縁上層より藤原京期の陶衣被出土。

5.26(金)・5.29(月)～6.1(木) 重機による表土除去。道構精査。東側周縁遺構表面精査。

6.2(金) 重機による表土除去。東側周縁完掘。填丘部精査。

6.5(月) 植山古墳東側周縁精査。北東部背面丘陵のカット面精査。東側周縁部にて土師器皿が遺なって出土。記録作成。

6.6(火) 塡丘北側部及び周縁部精査。北側背面カット面精査。

6.7(水) 塃丘北側部及び周縁精査。北側背面カット面遺構精査。重機による表土除去。

6.8(木) 周縁道構精査。塃丘北側背面カット面精査。塃丘東南部表土除去。伐根作業。

6.12(月) 重機による表土除去。塃丘北側部及び周縁精査。塃丘南側伐根作業。西石室の残存状況調査に入る。

6.13(火) 重機による表土除去。塃丘北側部及び周縁精査。完掘。塃丘部伐根作業。周縁北側部底部で貼石の隠れ片甃を確認。

6.14(水) 重機による表土除去。塃丘北東から東部表土及び周縁精査。

6.15(木) 重機による表土除去。塃丘北側部及び周縁精査。

6.16(金) 重機による表土除去。塃丘北側部及び周縁精査。東側周縁部精査。西側塃丘底部及び周縁精査。塃丘西側周縁底は東側ほど下がらない。北側周縁底の貼石も延長部で検出。西へ続く。

6.19(月) 重機による表土除去。残土配送。塃丘東部部精査。塃丘西側部精査。

6.20(火) 植山古墳頂部精査。北側塃丘底部及び周縁精査。背面丘陵重機による表土除去。

6.21(水) 北側塃丘底部及び周縁精査。重機による表土除去。残土配送。

6.23(金) 植山古墳頂部精査。塃丘北側部精査。

び周縁底精査。塃丘西側部精査。塃丘北側部精査。背面丘陵部重機による表土除去。残土配送。

塃丘西側の隠れ片岩検出。盛土と考えていた土層面を塃丘内へと潜っていく。

6.26(月) 植山古墳塃丘西側部及び周縁精査。塃丘北西側及び塃丘北側部。周縁底精査。背面丘陵部重機による表土除去。

6.28(水) 植山古墳塃丘西側部精査。北側周縁部(塩の窓)精査。背面丘陵重機による削剝。塃丘底には粘土が貼付されている。

6.29(木) 北側塃丘根及び周縁底精査。西北部周縁内鉄石検出。西側塃丘頭部精査。南西トレンチ重機削剥。背面丘陵部古墳状跡起部分重機による表土除去。

6.30(金) 西側・北側周縁内鉄石検出。北側丘陵背面カット部及び塃丘底部精査。塃頂部精査。南西トレンチトレンチ重機削剥。背面丘陵上古墳状跡起。重機による表土除去。作業用スロープ作成。

7.4(火) 北側塃丘根及び周縁底精査。石散検出。

7.3(木) 西側周縁内敷石精査。南西トレンチトレンチ重機削剥。背面丘陵上古墳状跡起。重機による表土除去。作業用スロープ作成。

7.4(火) 北側周縁内敷石精査。塃頂部精査。南西トレンチトレンチ重機削剥。背面丘陵上古墳(植山古墳)重要による表土除去。西側周縁南の複乱部で敷石の厚みのみ 0.6 m 程度確認。

7.5(水) 北側周縁内敷石精査。東側石室内下調べ。古墳背面丘陵斜面重機削剥。東側石室北側壁、石材が残る様子。13～14号柱頭、瓦砾石も落石。植山古墳周縁地盤を削り出しで造られている。また塃丘は盛土を施していると思われる。

7.6(木) 周縁内敷石精査。東側石室下部精査。

西石室室内下部作業。植山古墳周縁地盤精査。

7.7(火) 北側周縁内敷石検出。東側石室精査。

7.8(水) 重機周縁地盤精査。玄室から家形石棺出土。植土には織機突起あり。植土はずされた状態。

西側石室周縁地盤精査。植山古墳周縁地盤精査。

7.10(月) 北側周縁内敷石検出。東側石室精査。

石材検出。玄室から家形石棺出土。植土には織機突起あり。植土はずされた状態。

西側石室周縁地盤精査。植山古墳周縁地盤精査。

7.11(火) 植山古墳東側石室精査。石材検出。

西側石室精査。石材検出。背面丘陵西側面精査。

7.12(水) 東側石室精査。石材検出。西側石室精査。石材検出。北古墳周縁地盤精査。東側石室。

家形石棺蓋は半分に割れている(織機突起含む)。

舟棺約 2.2 × 1.4 m。南にやや左かる(須佐南の可能性?)

7.13(木) 植山古墳東側石室構造精査。石材検出。

西側石室道構精査。石材検出。背面丘陵、北古墳精査。

7.14(金) 東側石室構造精査。石材検出。西側石室構造精査。石材検出。背面丘陵北古墳表面精査。

植山古墳北斜面。北側アゼ付近にて須佐南

TK10型式)出土。石室型式から東石室は 6世紀末、西石室は 7世紀前半。

7.17(月) 東石室遺構精査。石材検出。西石室遺構精査、石材検出。北古墳では埋葬主体部検出できず。

7.18(火) 植山古墳東石室遺構精査。石材検出。

西石室遺構精査。石材検出。北古墳及び東側周縁

状遺構精査。調査区測量。西石室玄門部にて植石(闕石材)を検出。軸受穴(直径 20cm 程度)もあり。

奥壁より向かって右側に存在。

7.19(水) 植山古墳東石室遺構精査。石材検出。

西石室遺構精査。石材検出。北古墳道構精査。調査区測量。

7.21(金) 東石室遺構精査。石材検出。西石室遺構精査、石材検出。北古墳表面精査。

7.24(月) 東石室遺構精査。石材検出。西石室遺構精査。石材検出。背面丘陵斜面精査。

7.26(水) 東石室遺構精査。石材検出。西石室遺構精査。石材検出。背面丘陵斜面精査。

7.27(木) 東石室遺構精査。石材検出。東石室床面及び排水溝検査。西石室遺構精査。石材検出。東石室排水溝石材上に金属製品出土(金メキッキ)。

7.28(金) 東石室床面遺構精査。排水溝石材検出。

床面遺物出土状況写真撮影。西石室床面粘膜の止作業。北古墳斜面及び東側周縁精査。

7.31(月) 西石室遺構精査。石材検出。東石室、植奥床面遺物出土状況写真撮影。断面平面圖作成。

8.1(火) 西石室遺構精査。石材検出。西石室、アゼ断面精査。東石室遺構精査。石材検出。排水溝石材検出。植石遺物出土状況写真撮影。

8.2(水) 東石室床面遺構精査。排水溝石材検出。

床面遺物出土状況写真撮影。西石室表面精査。

8.3(木) 背面丘陵、測量及び平面圖作成。植山古墳植木部、空隙前清掃。

東石室床面及び排水溝検出状況写真撮影。

8.4(金) 植木部及び周縁部、表衣。西石室東西及び南北アゼ断面写真撮影及び断面圖作成。東石室石室表衣。玄室石室、奥壁排水溝付近遺物出土状況写真撮影。出土平面圖正位及び遺物取上げ。

8.7(月) 植山古墳周縁部及び背面丘陵カット下面前清掃。

8.8(火) 植木部及び周縁部、表衣。西石室表面精査。

8.9(水) 植山古墳周縁部及び背面丘陵底面精査。

8.10(木) 東石室石室洗浄及び石室表衣。

西石室表面洗浄及び周縁底石散去。

8.11(金) 東石室表衣。石室検出状況写真撮影。

- 西石室平面図作成。記者事前撮影。
- 8.12(土) 東石室写真撮影。
- 8.14(月) 東石室査定写真撮影。石組調整版写真撮影。南西トレント空調用表紙。
- 8.15(火) 東石室平面図削付、平面図作成。間塗及び敷石、柱等写真撮影。背面丘陵、南西トレント空調用表紙。
- 8.16(水) 東石室平面図実測。植山北古墳周辺空調用表紙。植山古墳及び植山北古墳空調写真撮影。
- 8.17(木) 東石室平面実測。遺物写真(馬具)撮影。西石室洗浄作業。背面丘陵古墳等空調用表紙。航測。南西トレント上出状況写真撮影。地元明会(15:00~)約150人参加。
- 8.18(金) 植山古墳西石室洗浄..、石棺本作成。規範準備。
- 8.21(月) 東石室実測削付。東石室見通し断面作成。西石室洗浄及び表紙。西石室写真撮影。現地説明会準備(及び草刈)。
- 8.22(火) 東石室東西側壁見透見。西石室写真撮影(隣石出土状況等)。現地準備。
- 8.23(水) 現地説明会準備。石室実測。
- 8.24(木) 東石室前面、側壁見通し断面図。奥壁見通し断面図。西石室、石室用机設定。現調に向かての足場、廊路の整備。
- 8.25(金) 東石室侧面図。西石室東側断面図。写真撮影(東石室正面から)。
- 8.26(土)・8.27(日) 現地説明会。
- 8.28(月) 東石室侧面図。現設置片付。埋理準備。
- 8.29(火) 東石室南端開口部より見通し断面、実測。西石室側面削付用机設定。東側壁実測。
- 8.30(水) 西石室壁面実測。立面図。埋理準備。
- 8.31(木) 東石室平面作成。西石室南端開口部、奥壁見通し断面図。全景、壁面実測。埋設しのための土のう作成→東石室底面に土のう、玄室シート養生。玄室底面小。6年生見学。
- 9.4(月) 東石室平面作成。西石室南端開口部、奥壁見通し断面図。現設置時道路解体。埋め戻し用意。
- 9.5(水) 西石室南端断面図。東西壁(隣石東側)土剥断面図。現設置時見残道路解体。背面カットのシート養生。
- 9.6(水) 東石室、家形石棺見通し断面図。
- 9.7(木) 東石室、家形石棺見通し断面図。埋戻しのための土のう作成。覆屋作成の資材運搬。
- 9.8(金) 東石室、家形石棺復元平面図。埋戻し作業。
- 9.13(水) 隣石神社にて石材の撮影。春日神社、菖蒲石・結晶片岩実測。東石室、覆屋作成。
- 9.14(木) 八咫烏神社、亀山石撮影。八咫鳥、スサノヲ神社、亀山石実測。各神社の祭名年月日調査。東石室、覆屋作成。
- 9.18(月) 東石室南端屋作成。資材搬入。
- 9.19(火) 西石室南端屋作成。東石室南端屋作成。資材搬入。調査区内整理。
- 9.20(水) 西石室南端屋作成。資材搬入。覆屋のシートによる排水構造の再検討。
- 9.21(木) 調査を一時中断し、収録。調査(フェンス、点検及び補修)。
- 10.10(火) 調査再開。植山北古墳精査。前面用の机設定。西側周囲石数実測。テント設置。草刈。

- 10.14(水) 植山北古墳、道構平面図。南西トレント道構模様。トレント南西部、北東部に柱穴。西側周囲石数実測。
- 10.12(木) 道構周囲石数実測。土坑、半抜、柱穴、1段下げ。道構周囲。西側周囲石数実測。
- 10.13(金) 西側周囲石数実測。南西トレント道構配列図、道構断面図。トレント東壁中層から阿蘇ピンク石出土。“世界ふしぎ発見”取材。
- 10.16(月) 西側周囲石数実測。南西トレント、道構被出。石組道構、銅鋳出土状況。土器出土状況写真撮影。道構配列図。
- 10.17(火) 西側周囲石数実測図。南西トレント道構精査。南北に並ぶ一辺1.2~1.3m四方の柱穴→縦柱か横柱。土坑から阿蘇ピンク石出土。
- 10.20(金) 10.23(月) 雨天のため作業中止。
- 10.24(火) 西側周囲石数実測。南西トレント道構配列図。南東部の柱穴、柱穴としてまとまる。
- 10.25(水) 北側周囲石数実測。南西トレント平面上面図。道構写真撮影。土坑道構断面。
- 10.26(木) 雨天のため現場中止。
- 10.27(金) 北側周囲石数実測。
- 10.29(日) 雨天のため作業中止。
- 10.30(月) 北側周囲石数実測。南西トレント、道構平面図。
- 10.31(火) 北側周囲石数実測。北古墳辺界で柱穴複数出土。今の時点で8分間。縦柱か横柱。
11. 6(月) 北側周囲石数実測。南西トレント、道構平面図。写真撮影に向けて清掃。
11. 7(火) 北側周囲石数実測。南西トレント、写真撮影(全景、部分、壁面)。道構平面図。北古墳道構被出。
11. 8(水) 北側周囲石数実測。南西トレント、レンジ東壁、兩側断面。古北周囲鏡。柱の検出。
11. 9(木) 北側周囲石数実測。南西トレント、南壁立断面図、道構平面図。丘底部、道構精査。
- 11.10(金) 南西トレント道構下げ。
- 11.13(月) 北側周囲石数実測。丘底部、道構精査。柱穴はさらには西にのびている。縦柱か?
- 11.14(火) 北側周囲石数実測。南西トレント、柱穴被出。柱穴割り及び写真撮影。北古墳、道構精査。2列の柱列は一部で並び合ひながら西にのびる。並びではなくズレが見られる。
- 11.15(水) 雨天のため現場中止。
- 11.16(木) 北側周囲石数実測。南西トレント、平面図。柱穴割引写真撮影。丘底部は西端まで伸びております。縦柱は不明。
- 11.17(金)・11.20(月)・11.21(火) 雨天のため現設置作業中止。
- 11.22(水) 北側周囲石数実測。南西トレント、道構平面図。丘底部、道構精査。
- 11.24(金) 北側周囲石数実測。南西トレント、鏡面作成。北古墳、道構精査。
- 11.27(月) 南西トレント、道構平面図。断筋剖面写真撮影。丘底部部、柱穴を検出。
- 11.28(火)・11.29(水) 北側周囲石数実測。南西トレント、鏡面作成。西端部。柱穴断面記。
- 11.30(木) 北側周囲石数実測。南西トレント、土層断面図。北古墳。北斜面肩から鉄鉄出土。
12. 1(金) 北側周囲石数実測終了。南西トレント、西壁土層断面写真撮影。西端部。
12. 4(月) 植山北古墳、平面図。南西トレント、西壁土層断面図。埴丘断剣準備。
12. 5(火) 植山北古墳、平面図。南西トレント、西壁土層断面図。埴丘断剣準備。スロープ作成。
12. 6(水) 周囲内石敷断面。埴丘断剣。西側周囲東西軸、西石室内側。北古墳、道構精査。
12. 7(木) 周囲内石敷断面。埴丘断剣。西壁東西軸、西石室西側中央部分。北古墳、道構平面図。
12. 8(金) 周囲内石敷断面。埴丘断剣。西壁東西軸、西石室西側の中央部。丘底部道構平面図。東西軸、西石室内側。
- 12.11(月) 塔丘断剣。西壁東西軸、西石室玄室西側中央部分。周囲内石敷。石の種類別色分け。
- 12.12(火) 塔丘断剣。西壁東西軸、西石室玄室西側中央部分。北古墳、道構平面図。
- 12.13(水) 塔丘写真撮影。西壁東西軸西側断面、西石室玄室西側断面。北古墳、道構平面図。
- 12.14(木) 塔丘断剣。西壁東西軸北西コーナー部分。埴丘断剣。北古墳、道構平面図。
- 12.15(金) 塔丘断剣周囲北西コーナー部分。断剣部土層断面図。西壁東西軸、西石室玄室西側部分。北古墳、道構平面図。
- 12.18(月) 周囲内石敷実測。北西コーナー鞋印。埴丘断剣北石室北側部分。北古墳、道構平面図。
- 12.19(火) 塔丘断剣。断剣部写真撮影。
- 12.21(木) 塔丘断剣。東石室北側部分。埴丘断剣部分。丘底、道構平面図。
- 12.22(金) 塔丘断剣、断剣部平面図。塔底用片付け。平成13年1.5(木) 塔丘断剣。東石室北側、写真撮影。北古墳、道構平面図。
1. 9(火) 植山古墳。埴丘断剣。東石室東側、東西軸延長。東石室北側削部分、土層断面図。丘底部、道構平面図。
- 1.10(水) 塔丘断剣。東石室東側、東西軸延長。東石室北側削部分、土層断面図。丘底部、道構平面図。
- 1.11(木) 塔丘断剣。東石室東側、東西軸延長。東石室北側削部分。丘底部、道構平面図。
- 1.12(金) 東石室東側削部分、写真撮影。北側削剣土層断面図。
- 1.15(月) 北側周囲東西軸を除去。削剣を一部埋め戻す。東石室、北側削剣部分と分離し断面図。
- 1.16(火) 東石室東側削剣部分、写真撮影。土層断面図。東石室、北側削剣部分と分離し断面図。
- 1.17(水) 西側周囲東西軸を除去。土層断面図。西石室、北側削剣上部削除。
- 1.18(木) 西側周囲東西軸の除去。柱下から石敷きが出土。西石室、西側削剣部分埋戻し。東石室、北側削剣部分被出柱穴写真撮影。
- 1.19(金) 東石室東側削剣削部分、土層断面図。柱被出柱穴写真撮影。土層断面図。埴丘断剣埋戻し。北西コーナー部分柱を除去。
- 1.22(月) 塔丘断剣部分埋戻し。北西コーナー、東石室北側の柱を除去。東石室東側削剣部分被出柱穴、写真撮影。
- 1.23(火) 東石室北側の柱を除去。埴丘断剣部分

- 埋戻し。周囲内石敷断面削り戻し。丘陵部、道構平面図。
- 1.24(水) 東石室北側の粧を除去。東側断面削り戻し。丘陵部、道構平面図。
- 1.25(木) 雨天のため現場中止。
- 1.26(金) 塗丘断面削り戻し作業。天気不良のため午前中に作業終了。
- 1.29(月) 植山古墳、塗丘断面削り。排水除去。丘陵部、道構平面図。
- 1.30(火) 東側周囲東西粧を除去。丘陵部、道構平面図。
- 1.31(水) 土おろし。東側周囲東西粧を除去。
- 2.1(木) 雨天のため現場中止。
- 2.2(金) 東側周囲東西粧を除去。西石室北側断面削除部分柱穴、検出状況写真撮影。
- 2.5(月) 東石室石室内の土を掘削、遺物なし。東石室、西石室間の塗丘断面削り。西石室の石室掘方を開拓。丘陵部、道構平面図。
- 2.6(火) シート作業(午前中のみ)。
- 2.8(木) 植山古墳、石室間塗丘断面削り。東石室、石室内断面調査。約70cmの深さで底になる。西石室北側周囲塗丘断面削除部分。桃山柱穴掘状況写真撮影。丘陵部、道構平面図。
- 2.9(金) 石室間塗丘断面削り。東石室内石柱内断削完削。遺物なし。塗丘東斜面精査。丘陵部、道構平面図。
- 2.13(火) 塗丘東斜面道構精査。東側周囲内精査。石室間断面削り写真撮影。石柱埋土平成状況図。
- 2.14(水) 塗丘東斜面道構精査。石室間塗丘断面削。石柱埋土平成状況図。
- 2.15(木) 石室間塗丘断面削り。塗丘東側斜面精査。石柱埋土状況断面図。石柱内埋植土、残る部分を掘下げ。丘陵部、道構平面図。
- 2.16(金) 石室間断面削り表面掃除。東石室石柱内埋植土完削。丘陵部、道構平面図。
- 2.19(月) 石室間断面削り写真撮影。断面削除部分。石柱内埋植土のふるいかけ。鉢尾、陶器、鐵などが出土。
- 2.20(火) 石室間断面削り作業。東石室覆屋解体作業。西石室内の埋植土のふるいかけ。鉢頭削出。
- 2.21(水) 石室間断面削り部分(分離後)写真撮影。断面削除周囲。丘陵部、道構平面図。東石室覆屋解体。西石室の土ふるいかけ。
- 2.22(木) 石室埋植土、ふるいかけ。西石室間断面削除周囲。西石室覆屋解体。
- 2.23(金) 石室間断面削除周囲。丘陵部、柱列写真撮影。東石室東側の土ふるい。鉢頭削出。
- 2.26(月) 石室間断面削除周囲。東石室、玄門、石柱間排水溝蓋石出し。蓋石の遺物は、位置とレベルをわざえて取り上げ。蓋石は全て外す。排水溝全体は石頭ではなく素面り。西石室、圓石の延長部を削除。
- 2.27(火)・2.28(水) 雨天のため現場中止。
- 3.1(木) 東石室奥壁、石柱間の遺物精査。排水溝(東側)部分の石を外し排水溝内の精査。金銅製品出土。西石室、石室掘方精査。
- 3.2(金) 東石室排水溝蓋石出し。西石室、玄門部の塗丘断面削除、写真撮影。
- 3.5(月) 東石室排水溝蓋石出し。石室間塗丘断面削部分平面図。西石室床面断面削り。
- 3.6(火) 東石室奥壁、石柱間遺物出土状況実測。
- 西石室、石室床面断面削部分写真撮影。石室間塗丘断面削部分平面図。西石室内、ふるいかけ。
- 3.7(水) 東石室石柱、奥壁間排水溝内、遺物出土状況実測(5~1/1)終了。西石室、床面断面削面部分分離及び写真撮影(上軸線の羅断面のみ)。西石室床面、埋植土ふるいかけ。
- 3.8(木) 東石室遺物出土状況レベル入れ。東側排水溝内遺物写真撮影。遺物取り上げ。西石室、石室床面断面削除断面図。構造写真撮影。東石室、精査土ふるいかけ。
- 3.9(金) 東石室奥壁、石柱間排水溝内遺物、出土状況写真撮影。漏道、蓋石外し。排水溝内精査。西石室、石室内断面削除断面図。東石室、漏道排水溝は石柱の下に結晶片岩が存在。当初の排水溝か。赤っぽい粘土が床底か?
- 3.12(月) 東石室石柱、奥壁間排水溝内遺物出土状況写真撮影。西石室、床面断面削除、側壁手直し。
- 3.13(火) 東石室石柱、奥壁間排水溝内遺物出土状況写真撮影。漏道フタ石外し後、側石測定。西石室、圓石隙の部分を削除、断面実測。
- 3.14(水) 東石室石柱、奥壁間排水溝内、出土遺物取り上げ。石柱根足実測。
- 3.15(木) 塗植山北古墳、表面清掃。雨のため午後作業中止。
- 3.15(金) 東石室、石柱根足実測。石柱、奥壁間排水溝、石材外し、精査。北古墳、周塙北東部出土土表面写真撮影。
- 3.19(月) 植山古墳、東石室、玄室及び周塙床面断面削除部分位置調査。周塙東部部分、土層出土状況写真撮影。空欄表面清掃。
- 3.21(水) 東石室排水溝平面圖レベル記入。床面削除。空欄表面清掃。
- 3.22(木) 東石室、玄室及び周塙床面断面削除実測。空欄前清掃。
- 3.23(金) 空欄前清掃。復元柱を立てる。
- 3.26(月) 写真撮影。空欄。
- 3.27(火) 塗丘写真撮影。西石室写真撮影。復元柱の撤去。
- 3.28(水) 東石室、床面断面削り。
- 3.29(木) 周塙石敷柱上部分の平面実測。周塙柱付け。
- 3.30(金) 周塙石敷柱上部分の平面実測。東石室排水溝、蓋石復元。現場付け作業。作業終了。
- ◎ 2001-3次調査
- 平成13年4.23(月) 調査開始。西トレレンチ、塗機掘削。中期の柱穴、土坑、ビット等を確認。
- 4.24(火) 西トレレンチ、塗機掘削。表土下で地山。
- 4.25(水) 雨天中止。
- 4.26(木) 西トレレンチ、道構横出し写真撮影。東地盤、竹籠の伐倒。西トレレンチ、地坑打ち。
- 4.27(金)・5.1(火) 西トレレンチ、道構掘り。東石室樹木伐採。
- 5.2(水) 雨天中止。
- 5.7(月) 西トレレンチ、道構掘り。
- 5.8(火) 雨天中止。
- 5.9(水)~5.10(木) 西トレレンチ、道構掘り。柱穴断面実測。東石室作業準備。
- 5.11(金) 西トレレンチ、道構掘り。南西面掘削。
- 東トレレンチ、縫削開始。
- 5.14(月) 西トレレンチ、道構完掘写真。東区、西南面地トレンチ表土除去。
- 5.15(火)~5.17(木) 西トレレンチ、平面実測。東区、表土除去。
- 5.18(金) 西トレレンチ、縫削記録。東区、掘下げ。南北北トレレンチの積削は不確定。
- 5.21(月) 西トレレンチ、縫削記録。東区、掘下げ。1トレレンチの南端でビット換出。南部は整地がなされている。
- 5.22(火)~5.24(木) 雨天中止。
- 5.25(金) 東区3トレレンチ、掘下げ。トレレンチ中央部にて南北方向の近世以降の溝一条を検出。
- 5.28(月) 東区3トレレンチ、掘下げ。整地前のか堆積層なのか判断しきねる。
- 5.29(火) 東区3トレレンチ、掘下げ。古墳前面の段(築ち)を検出。(埴割より高11mの地点)。それより以南はかなり深くまだ底は未確認。
- 5.30(水) 東区3トレレンチ、掘下げ。壁の崩壊予防の矢板をあてる。
- 5.31(木) 雨天中止。
- 6.1(金) 東区3トレレンチ、掘下げ。塙1/3の堆積は埋め堆積ではなく水平式である。整地した。
- 6.4(月) 東区3トレレンチ、掘下げ。南半部、断削、トレレンチ南端で地山を確認。
- 6.5(火) 東区3トレレンチ、南及び北端部掘下げ。南端落ちで柱穴確認。北端の土層はまだ未解説。
- 6.6(水) 雨天中止。
- 6.7(木) 東区、縫削前の掃除。
- 6.8(金)・6.11(月) 西トレレンチ、柱穴等断削。
- 東トレレンチ、完掘写真撮影。
- 6.12(火) 西トレレンチ、柱穴断削。
- 6.13(水) 東区、トレレンチ断面写真撮影。
- 6.14(木)・6.15(金) 雨天中止。
- 6.18(月) 東区、平面実測。西トレレンチ、水取り。
- 6.19(火) 東区3トレレンチ、西壁断面実測。周塙箇所断面写真撮影。
- 6.20(水) 雨天中止。
- 6.21(木) 東区3トレレンチ、南壁実測。
- 6.22(金) 雨天中止。
- 6.25(月) 東区3トレレンチ、南壁実測。
- 6.26(火) 東区3トレレンチ、西壁実測。埋め戻し。
- 6.27(水) 東区、3トレレンチ埋め戻し。1トレレンチ西、南壁実測。
- 6.28(木)・6.29(金) 東区3トレレンチ、埋め戻し。1トレレンチ西壁実測。2トレレンチ南壁実測。
- 6.29(金) 東区2トレレンチ埋め戻し。2トレレンチ南壁実測。1トレレンチ柱穴断削、実測。
- 7.2(月) 東区、埋め戻し。西トレレンチ、柱穴断面実測。
- 7.3(火)~7.6(金) 西トレレンチ、柱穴断削、断面実測。
- 7.9(月) 西トレレンチ、柱穴断削、断面実測。西壁断面実測。東石室、假覆屋解体。
- 7.10(火)・7.11(水) 西トレレンチ、南壁断面実測。東石室、道路設置。周塙、土のうによる養生。
- 7.12(木) 西トレレンチ、南・西壁断面実測。東石室及び塙東斜面道路確保。
- 7.13(金) 周塙東斜面道路確保。

- 7.16(月)・7.17(火) シート剥ぎ。安全通路確保。  
 7.18(木)・7.19(木) 現地踏査準備。  
 7.22(日) 現地説明会。  
 7.23(月)～7.30(月) 石室魔羅造り。シート養生。  
 7.31(火) 備収。
- ◎ 2009 - 4 次調査
- 平成21年6.26(金) 水準点移動、竹林伐採開始。竹林伐採開始。6.29(月) 調査前地形測量。  
 6.30(火) 雨天中止。  
 7.1(水)～7.10(金) 調査前地形測量。  
 7.13(月)～7.15(水) 撤離前の準備作業。  
 7.16(木) 撤離前の準備作業。伐倒終了。植山北垣隕頭面の畦を再調査。土削確認のため南北莊を設定。  
 7.17(金)・7.21(火) 雨天中止。  
 7.22(水) 石丘隕頭上部から重機撤退開始。柱列を撤出。頂部に斜面で調査区東端から重機撤退。斜面中央付近は整地土と想し粗粒粘質土が構造面となる。土削確認のため南北莊を設定。  
 7.23(木) スロープ西半の重機撤退。スロープの中心付近は切土及び整地によりテラス状の平坦面が形成されている。西端部は地山を大幅に地山を削り込み、平坦面南側の際は溝(0015D)が形成される。7世紀後半の土器が出土する。  
 7.24(金) 調査区中央部の重機撤退。柱列(旧)は春日神社北址へ戻る。東本に土器抜き取り済。  
 7.27(月)・7.28(火) 雨天のため現地作業なし。  
 7.29(水) 重機撤退終了。遺構面積査定。柱列(新)はL字に折れ曲がる。  
 7.30(木) 石丘隕頭面及びテラス面の構造精査。  
 テラス面面積・土坑確認のためトレーシング査定。  
 7.31(金) テラス中央庄以西の精査。北斜面部分の現代造成土を撤去。  
 8.3(月) 梁出し現地撮影に向けて清掃。  
 8.4(火) 遺構抽出写真撮影。  
 8.5(水) テラス抽出写真撮影。昨日の降雨のため湯治場のやうに直しから開始。  
 8.6(木) 午前、雨天復。午後は作業なし。  
 8.7(金) 重機撤退開始。石壁上の柱穴は一段下に留める。テラス面遺構精査。メッシュ杭打設。  
 8.11(火) 重機撤退。植山北垣隕頭面の再調査。  
 8.12(水) 石丘隕頭全面作業。2000年度調査地点の養生シートを剥し、写真撮影の準備。  
 8.13(木)・8.14(金) 収容休、現地作業なし。  
 8.17(月) 石丘隕頭調査区。柱列(新)の広がりを確認するため一部剥落。植山北垣隕頭現地の清掃、柱断面の写真撮影。  
 8.18(火) 石丘隕頭低張部の遺構検出作業。柱列(新)は南北に続かない。  
 8.19(水) 石丘隕頭東部の拡張(4)、梁出し現地撮影。テラス大堀の側面を断面調査。  
 8.20(木) テラス大堀西側断面。  
 8.21(金) 植山北古墳以西の清掃。スロープ部分のコンター回作成。午後2時、櫻原考古学研究所現地検討会(計30名)現地来訪。  
 8.24(月) テラス大堀壁厚写真撮影。柱列復元形状の写真撮影のため遺構面清掃。  
 8.25(火) 写真撮影のための清掃。  
 8.26(水)～8.28(金) 石丘隕頭部完掘写真撮影。
- 8.31(月) 柱列(新)の南側に調査区拡張。  
 9.1(火) テラス面剥落後、上層構成物写真撮影。  
 9.2(水) テラス写真撮影。  
 9.3(木) テラス整地層の遺構剥落下げ。テラス面剥落下げ。テラス写真撮影。  
 9.4(金) 柱列(新)写真撮影。テラス整地層の剥り下げ。  
 9.7(月) テラス面遺構精査、柱穴を検出。  
 9.8(火) テラス面遺構精査。面記録作成。  
 9.9(水) テラス整地層の遺構剥落下げ。面記録は土削物であるが、ここで撮影。  
 9.10(木) テラス面遺構剥落下げ。  
 9.11(金) 遺構断面記録。  
 9.14(火) テラス西半の遺構剥落下げ。  
 9.15(火) 雨天のため現地作業なし。  
 9.16(水) 9.17(木) 制作発表・地元説明会に向け、足場等整備。面記録作成。  
 9.18(金) 11時から調査規面に報道発表。新聞・TV等取材約30人。13時半～現地説明会(地元・五条野町約300戸対象)、約90人参加。  
 9.24(木) 重機による埋め戻し作業。柱列(新)は土削層の上に現地保全を行。植山北垣隕頭から向て、足場等整備。面記録作成。  
 9.28(月) 球根園所が多く、東西軸が彫れる場所あり。  
 9.31(金) 2トレンチ南端遺構剥落下げ写真撮影。  
 9.31(月) 2001年東区西端終了。調査区中央、植出写真撮影。004・005SKを検出。  
 9.4(火) 2トレンチ南端耕作層調査開始。1トレンチ高～2トレンチ北西一帯は瓦器を含む盛土上で剥削を止めていることが判明。人力剥削を行う。柱列(旧)の側面を2基確認。  
 9.5(水) 2トレンチ南端の遺構剥落。004・005SKはいずれも近世以降の遺構と明。  
 9.6(木) 2トレンチ南端。完掘写真撮影。南側では地山(岩盤)を検出。整地層は北に持ち込む。  
 9.7(金) 1トレンチ北西壁記録作成。植山隕頭の部分解体開始。  
 9.10(月) 2トレンチ北半耕作剥削。  
 9.11(火) 雨天のため現地作業なし。  
 9.12(水) 2トレンチ北半耕作剥削。写真撮影。全体で整地層を検出。整地層上面に明確な遺構はない。断面削除面写真撮影。  
 9.13(木) 断面削除面写真撮影準備。1・2トレンチ全体の整地層剥出写真撮影準備。  
 9.14(金) 1・2トレンチ全貌、完掘写真。石室隕頭前面部分の解体。ほぼ終了。週明けに台風接近の可能性があるため、台風発生を行う。  
 9.18(火) 雨天のため、現地作業なし。  
 9.19(水) 植山前面斜面、石室上部の土軸より東側の削除開始。表土を重機削除後、人力で搬出業。斜面中斷より下は赤色赤土。上方は黄褐色土、後世の堆積土か。石室上部延長部分で石材検出、排水溝の覗きか。石室表面より1m低い位置。  
 9.20(木) 東石室内、高まりより南側の壁面精査。南面で構造遺構の断面を確認。遺道?  
 9.21(金) 石室上部と清流遺構の主軸にずれ有り。埴丘前面の後世の堆積土を除去しての確認が必要。安全確保の為、2トレンチ削除の部分埋戻し。  
 9.24(月) 植山前面東石室東面、表土除去後写真撮影。前面および石室入口部断面で後世の堆積土の範囲を確認。  
 9.25(火) 植山前面精査。床面より上に赤色・褐色・黄褐色土が埴丘盛土であるのか、流土であるのか検討が必要。  
 9.26(水) 植山南東部、2000年調査範囲の上部に残されていた土を除去。埴丘前面調査に先行して、西石室入口の壁面土の精査を開始。

- 9.27(木) 東石室～西石室間の足場用土のう除去。西石室入口壁面土刷精査。石材抜取り後の堆積と考えられる赤色質土は壁面よりも西側へ広がる。西石室より上の堆積土は後世のもの。
- 9.28(金) 塙丘前面上部、足場の作業用盛土、土のう除去。台帳復旧中、対策を行う。
- 10.11(月) 塙丘前面、東石室西半から西側、重機掘削。上半は現地表面から遺構面まで0.5～1.0mの堆積、下部は表土下0.2～0.3mで岩盤もしくは盛土層が検出される。
- 10.21(火) 塙丘前面重機掘削。西石室排水溝の延長線上で排水溝の一部と思われる石材を検出。高さは石室内表面の石材より0.5mより低い。西石室構築方ラインを前面でも検出。
- 10.31(木) 塙丘前面、表土除去後写真。西石室入口部の壁面写真撮影準備。
- 10.41(木) 西石室入口側の壁面写真撮影。
- 10.51(金) 石室入口壁面の断面図作成。塙丘前面の人力掘削作業用の足場組み。
- 10.9(火) 2トレンチ東西断面写真。塙丘前面作業用の足場組み。西石室入口壁面の断面記録。
- 10.10(水) 2トレンチ南面作成。
- 10.11(木) 午前、櫛原市史跡等調査保存整備検討委員会（以下、検討委員会）、菅谷氏・杉山氏による現地確認。
- 10.12(金) 2トレンチ南半、斷面写真・平面図作成。東石室前面精査。東石室排水溝設置方を確認。排水溝方は二時期に分かれれる。
- 10.15(月) 東石室前面の堆積土除去。床面より上の盛土層はかなり上まで存在する。検討委員、木下氏・白石氏による現地検討。
- 10.16(火) 塙丘前面、両石室の中間部分の精査。
- 10.17(水) 西石室前面の堆積土除去作業。降雨のため、鋼製シートで仮設テントを設置しての作業。午前で撤去作業終了。午後、古墳整備設計のため、発掘地図作成。発掘研究室による現地検討。
- 10.18(木) 両天。塙丘前面に組んだ仮設覆屋内での作業。西石室、堆積土除去。石室内の床面保護土のう移動。
- 10.19(金) 東石室主軸延長上の柱、断面写真撮影。西石室前面、堆積土除去。
- 10.20(月) 西石室前面、後世の石材抜取層の検出。写真撮影。東石室、唯断面記録。
- 10.23(火) 両天のため現場作業なし。
- 10.24(水) 検討委員・菅谷氏、現場確認。東石室主軸上の柱を除去。
- 10.25(木) 塙丘前面、土解精査。東石室前面を覆う赤色・褐色の互層状土の範囲確認。石室前面を広く覆っている。南面のための盛土か？
- 10.26(金) 塙丘前面精査。石材取り去り坑の範囲確認。
- 10.29(月) 塙丘前面立面開作成。急斜面のため5人掛けの作業となる。石室入口部の壁面精査。
- 10.30(火) 東石室東半の石材取り去り後の堆積土の除去。断面記録作成。東石室横段1段目のさらに下に壁面石材が存在すること新たに確認。東、西両方に存在する。
- 10.31(水) 検討委員会・石野委員長、現場確認。東石室西半～西石室東半、石材取り去り後の堆積土の除去。
- 11.1(木) 塙丘前面、精査。櫛原市教育委員会の現地説明会。今回の調査方針確認。
- 11.2(金) 西石室主軸壁面断面記録作成。同断面より西側2.5mを調査区拡張する準備作業。
- 11.5(月) 西石室西側調査区拡張。表土除去。
- 11.6(火) 午前、検討委員会、石野氏・木下氏、白石氏・杉山氏、現場確認。
- 11.7(水) 西石室前面、西側へ拡張後の検出写真撮影。拡張部分は埴込盛土の遺存状況が相対的に良好。西石室側方の西への上りを確認。
- 11.8(木) 東石室前面の排水溝石材の箇所を現地写真撮影。南側平坦面の西半部の調査に向けて、梯子の移動。
- 11.9(金) 重機による耕土移動。塙丘前面、両石室の土壁精査。
- 11.12(月) 3トレンチ重機掘削開始。南東では現況より0.2～0.6mの深さで埴込地層を検出。南西側では現況～1.8m以上。中近世の盛土層が厚く残される。遺構面は東から西に傾斜する。
- 11.13(火) 3トレンチ重機掘削。調査区南西端では現況～2.2mにて古墳整地層を検出。
- 11.14(水) 3トレンチ重機掘削。3トレンチ南半中央部は中世盛土で中世遺構の把握を行う。
- 11.15(木) 両天のため。発掘作業なし。午後、現地にて3D測量（測具類）の打ち合わせ。
- 11.16(金) 3トレンチ、検出写真撮影。北半に素掘面開闢。南に土坑、溝が存在。いずれも中世遺構。記録後、解剖下開始。
- 11.19(月) 3トレンチ、耕土溝及び中近世遺構の掘下げ、記録作成。塙丘前面のさらに広範囲の調査について石室覆屋の解体開始。
- 11.20(火) 3トレンチ、中世盛土を除去し、全面で古墳整地層を検出。覆屋解体。
- 11.21(水) 3トレンチ、古墳時代整地層を検出。約1.3トレンチの3D測量。覆屋部分解剖。
- 11.22(木) 3トレンチ、北半東側ひいて解剖調査。北端にて整地層下の地山を検出。地山は南に向かって落ち込む。覆屋解体。
- 11.23(金) 両天のため。解剖作業なし。石室覆屋解体、資料搬出作業のみ行う。
- 11.27(火) 3トレンチ尚壁柱ひいて解剖。北半部東側の石室断面作成。覆屋解体。
- 11.28(水) 3トレンチ尚壁、土壁断面記録。覆屋解体。今後の作業用に塙丘前面に重機で盛土による足場を作成。
- 11.29(木) 西石室上の作業用足場下の表土、後半の堆積土を除去。陰窓土の範囲確認。西石室前面にもむずかに陰窓土と思しき粘質土が残る。覆屋解体終了。塙丘のシート除去。
- 11.30(金) 塙丘前面西側、重機掘削。厚さ0.3～1.0mの表土直下で遺構（埴込）面だが、表面に粗粒による複数も多い。石材取り去り坑、石室側方の落ち込みを検出。石材取り去り後の堆積土について、除去を行うと西石室西壁の保持に影響が出る可能性があるため、除去は行わない。
- 12.3(月) 塙丘前面西側作業。
- 12.4(火) 東石室前面、完掘写真撮影。4トレンチ。すべて人力で剥削。
- 12.5(水) 西石室前面～塙丘西側、写真撮影。塙丘および石室内の3D測量。
- 12.6(木) 東石室前面、溝状遺構の部分掘下げ。現地説明会準備。塙丘上に足場設置。塙丘の3D測量。
- 12.7(金) 西石室前面、写真撮影。東石室前面の溝状遺構部分掘下げ。土師器罐1点出土。現地説明会準備。
- 12.10(月) 塙丘西側、土壁断面写真撮影。現地説明会準備。
- 12.11(火) 報道発表・現地説明会準備。塙丘、石室清掃および足場設置。
- 12.12(水) 10時から現地にて報道発表。
- 12.13(木) 現地説明会準備。足下に潛り止め用のプラスチック板を数枚。塙丘前面岡面作成。
- 12.14(金) 現地説明会準備。塙丘前面岡面作成。
- 10:00～アバック、藤山の現地説明会準備。
- 12.15(土) 早朝まで少雨。朝7時頃止む。現地説明会開始。日中は曇り。夕方6時頃から雨び。開闢時間は9:00～15:00、以後、片付け。来場者数は955人。ケガ人もなく、無事終了。
- 12.17(月) 現地説明会付け付。塙丘前面立派な石室。
- 12.18(火) 塙丘前面立派な石室作成。5・6トレンチ調査に向けて、梯子移動。3トレンチ埋戻し。午後、検討委員・白石氏、現地確認。
- 12.19(水) 塙丘前面立派な石室。2トレンチ埋戻し。
- 12.20(木) 5トレンチ重機掘削。調査区中央より南で古墳整地層検出。南端では現況～2.0mで整地層面。北に向かってゆるやかに上がる斜面を形成。北側は削平を受けおり、堆山を検出。
- 12.21(金) 両石室前面を土のうで保護。5トレンチ、横出し写真撮影。検討委員・木下氏、現地確認。
- 12.25(火) 3トレンチ北側を北側に延伸。6トレンチとする。重機掘削。6トレンチ南端から約1m北の範囲にのみ整地層が形成。
- 12.26(水)・12.27(木) 5・6トレンチ南面作成。石室、塙丘保護作業。
- 平成25年1月7(月) 5・6トレンチ、3D測量。終了後、重機による理戻し。塙丘覆屋作成開始。
- 1.8(火) 5・6トレンチ南面作成、現地の記録、掘削作業は終了。重機理戻し。覆屋設置。
- 1.9(水)～1.11(金) 重機理戻し。竹木・鉛鉄処理。覆屋設置工。
- 1.15(火) 覆屋設置工。西石室東壁玄門部の1石が崩落するき損事故が発生。崩落時の目撃者はいないが、この日の午前8時15～35分の間に崩落したと考えられる。怪我人は無し。
- 1.16(水) 覆屋設置工を先に進める。
- 1.17(木) 覆屋設置工。
- 1.18(金) 覆屋設置工。午前、検討委員会、石野氏・木下氏・菅谷氏による崩落原因の確認。崩落石は周辺の遺構保護を行った上で、石室内の安全な位置に移動させる方針を決定。他の石材については補強材を追加。
- 1.21(月) 重機によって崩落石を転落地点から南東に1mの地点に移動させる。移動先については周辺を土のうにより厳密に保護。
- 2.12(火) 櫛原記者クラブにて石室き損事故についての報道発表。
- 1.22(火)～2.28(木) 覆屋設置工。2月後半からは順次、現場復旧作業を並行して進める。2月28日で全作業終了。

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

植山古墳は奈良県橿原市五条野町に所在する。五条野町は橿原市の南東部に位置する。橿原市の南部には、大きくな龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、全体として北に向かって緩やかに下降する斜面地形を形成している。五条野町はこの低丘陵地に位置する。

五条野町および東隣に位置する菖蒲町の一带には、高市郡明日香村の甘樺丘から西に八つ手状に派生する丘陵が広がっている。植山古墳の築かれた丘陵は、その西端部に位置する。近年、植山古墳の調査契機となった区画整理事業を始めとして、調査地周辺の開発が進んでいる。そのため、植山古墳の位置する丘陵は、現在では東側の丘陵地とは分断された状態となっており、一見すると独立した小高い丘のように見られるが、本来は東から伸びる細長い丘陵の先端に位置していたのである。丘陵頂部の標高は115m程度で、北側の谷部とは25m程度の比高差がある。

植山古墳の墳丘は丘陵の南側斜面に築かれている。墳丘前面を基準とすると、南側および西側に向かって視界が開けた状態である。植山古墳から西側に目を向けると、奈良県最大の前方後円墳である丸山古墳がその威容を誇る。植山古墳から西に約450m、一筋の谷を隔てた地点に丸山古墳は所在し、植山古墳からは丸山古墳の側面観(後円部を南、前方部を北に向けた状態)を美しく望むことができる。

植山古墳背面の丘陵頂部に立てば、さらに北西方向にも視界が開け(国版70・71他)、大和三山の一つ・畝傍山、遠方には二上山、葛城・金剛山地、生駒山地、視界が良好な日には六甲山地を望むことが可能である。

植山古墳の南側および西側の丘陵地には、古くから五条野町の集落が形成されている。

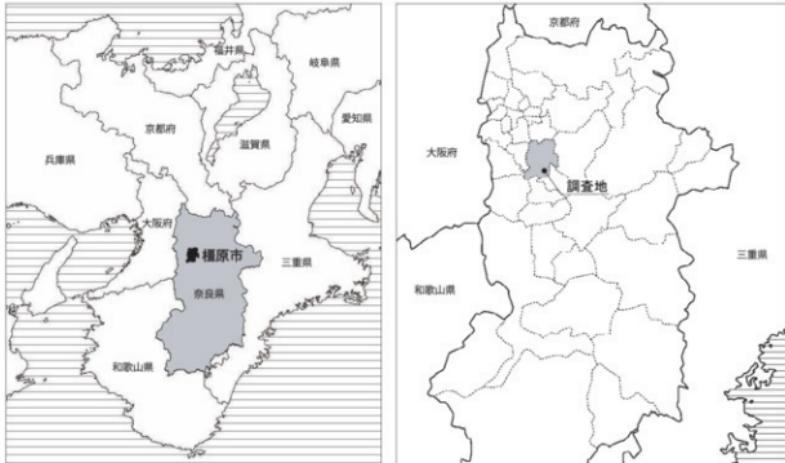


図2 調査地の位置

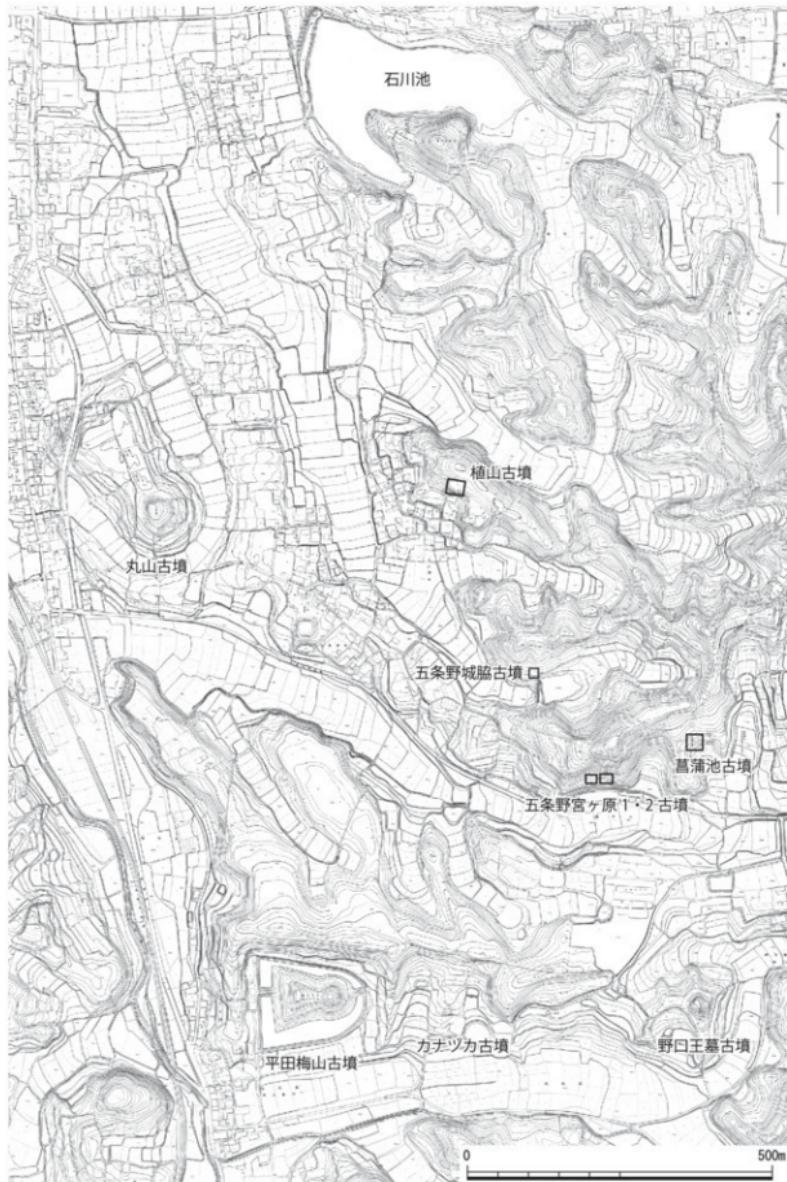


図3 調査地周辺の地形 (S = 1/8,000。地形図は昭和37年航空写真撮影、昭和44年現地調査)

## 第2節 歴史的環境

権原は『古事記』『日本書紀』において神武天皇が「歎火の白樺原宮に坐しまして天の下治しめきし」とこの地に宮を置いて以後、7代天皇までが近辺に宮を営み治世にあたった地である。歴代天皇の陵墓も歎傍山周辺に築かれたと記されているように、我が国発祥の地としての伝承をもつ。

このような伝承に彩られた権原人々の足跡を明瞭に示す遺跡の嚆矢として、縄文時代晚期、歎傍山東南麓の平地に広がる微高地に居住空間を形成した権原遺が挙げられる。権原遺跡からは土器、土偶、土製品、石器、獸骨類等多彩な遺物が出土している。土器には遠く東北地方との交流を示す亀ヶ岡式土器等も含まれる。器表面の口縁部から胴部にかけて刻線により七宝形文を施す浅鉢形土器が出土しており、この浅鉢形土器は近畿縄文晚期の標識の一つとして「権原式土器」と名称される。その広がりは瀬戸内海東部から関東地方と広範囲に及ぶ。近年では、曲川遺跡や観音寺本馬遺跡など同じく縄文時代の遺跡の様相が明らかになっている。

弥生時代には、時代を通じて連綿と居住域を持続させる集落が出現する。周辺には小規模で短期的な居住域、また生産域や方形周溝墓群等で構成される墓域が展開する。これらの集落は拠点集落として発展し、立地は権原の主要河川に接することで共通する。縄文時代晚期の曲川遺跡の北方約1.8km、曾我川右岸の沖積地上に立地する中曾司遺跡、耳成山の東北東約1km、寺川と米川に挟まれた複合扇状地上に立地する坪井・大福遺跡、後に藤原宮が置かれた香貝山と歎傍山のほぼ中間、飛鳥川の右岸の河岸台地上に立地する四分遺跡である。これらの集落は、拠点集落に相応しい環濠を備える。この他、短期的な集落も各地に展開するなど居住空間が伸長する。

古墳時代には、前代からの拠点集落は規模を縮小しながら継続し、前期又は中期に終焉を迎える。一方、権原の北郊、寺川と飛鳥川の合流付近の沖積台地上には全長約62mの前方後円墳・弁天塚古墳、歎傍山西北麓の全長約70mの前方後円墳・スイセン塚古墳といった前期古墳が築かれる。

5世紀代の集落には曾我遺跡、下明寺遺跡、藤原宮跡下層遺跡、新堂遺跡、四条遺跡、内膳・北八木遺跡などがある。これらの遺跡からは甕・鍋・甑・移動式竈などの韓式系土器や陶質土器等の渡来系遺物が出土する点で共通する。中には鍛冶関係遺物が出土する遺跡も含まれる。中期の集落は渡来人と深い繋がりが見て取られる。集落の周辺には奥津城として中小規模の古墳も築かれ、群を構成した。下明寺古墳群、藤原宮跡下層古墳群、四条古墳群、曲川古墳群、内膳古墳群、南山古墳群等がそれに該当する。さらに、一集落に留まらず共同の奥津城として350基を超える古墳が築かれた新沢千塚古墳群である。新沢千塚には渡来系文物を副葬する古墳も含まれる。

古墳時代中期、権原の地は中小豪族に加え渡来人の世界が形成されていた。そして彼らの手により土地利用・開発が大きく伸長した。『日本書紀』応神十一年冬十月条「作劍池、輕池、鹿垣池、厩坂池」の記録は、その一例証である。

5世紀以降、渡来人集団の集住とその開拓が進行する。天皇家の進出と天皇家の外戚として確固たる地位を確立する蘇我氏により、権原の地は先進地へと転換を果たした。この間、仏教が伝来する。仏教の受容期は国論が二分する状況を呈し、紆余曲折を経て仏教は我が国における精神的支柱として揺るぎない地位を確立してゆく。ここに律令国家形成への条件が順次整ってゆく。

570年蘇我稻目が薨去、571年欽明天皇が崩去する。欽明天皇の御陵は檜隈大内陵で、丸山古墳

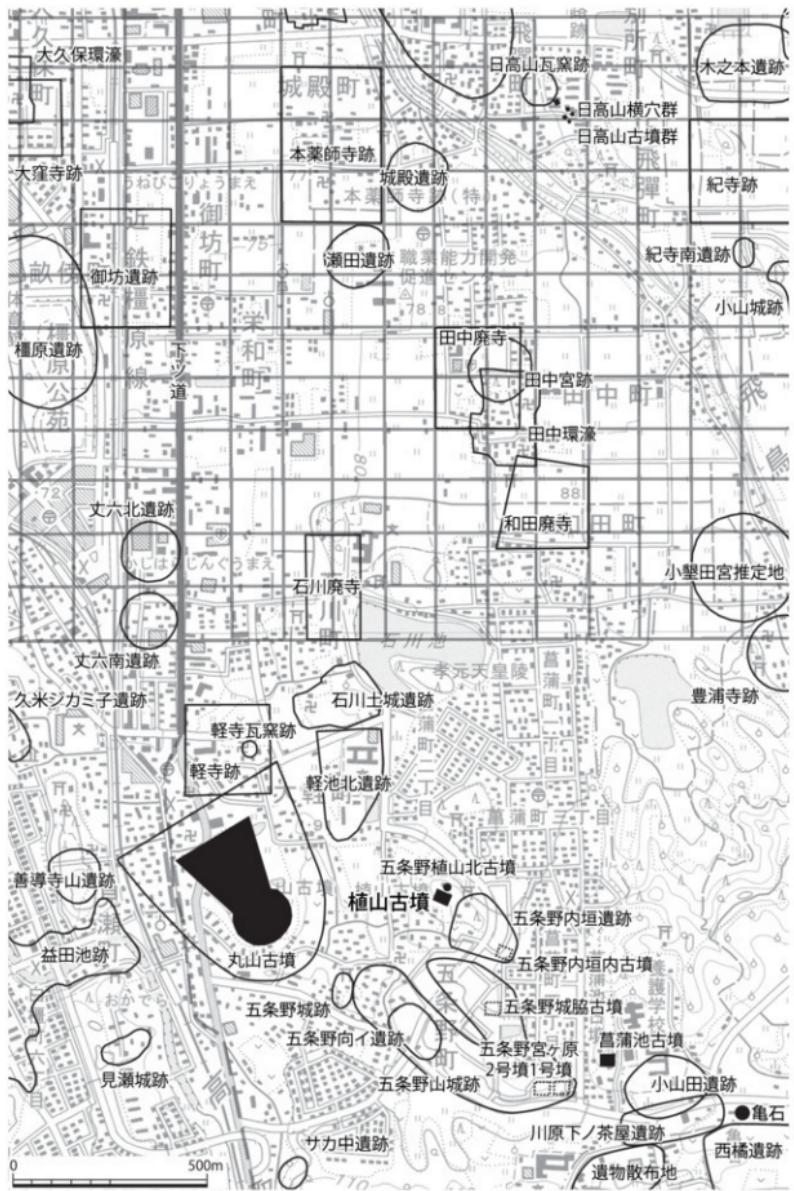


図4 調査地周辺の遺跡 (S = 1/12,500。格子目は藤原京復元条坊)

又は梅山古墳（欽明天皇陵）が陵墓として、また蘇我稻目の墓は確定に至っていないが、丸山古墳がそれぞれ候補に挙がっている。いずれにしても候補となる古墳は前方後円墳であった。しかしその後、前方後円墳は築造されなくなり、墳丘は方形、あるいは円形へと変化する。まさに、二人の死は古墳時代の終焉を象徴するものであった。

欽明天皇の崩去以降、敏達天皇・用命天皇・崇峻天皇を経て推古天皇が飛鳥の豊浦宮において即位する。ここに律令国家形成期としての飛鳥時代が幕をあける。飛鳥時代は明日香村を中心に政治文化が花開くが、その周辺に位置する橿原も一翼を担う。蘇我氏の邸宅は飛鳥に多く見られる。丸山古墳の近傍に經曲殿、剣池の近傍に石川宅、敵傍山の麓に敵傍の家を構え、皇極三年（645）乙巳の変で蘇我綱本家が滅亡するまで存続する。崇峻天皇元年（588）蘇我氏により飛鳥寺の造営が始まり、推古天皇十七年（609）の飛鳥大仏完成と飛鳥寺の竣工を見ることで名実ともに仏教の受容が確立をみる。飛鳥寺建立以降、豪族達による氏寺の建立が活発化する。大王家の吉備池廃寺をはじめ、蘇我氏系の田中廃寺、和田廃寺、日向寺、渡来系豪族の輕寺、大窟寺、その他の豪族の久米寺、八木廃寺、膳夫寺、香山寺である。

道路の整備も始まる。『日本書紀』推古二十一年（613）十一月条に「掖上池、敵傍池、和珥池作る。又難波より京に至るまで大道を置く。」と記録されている。敵傍池は、敵傍山の南麓現在の橿原神宮内にある深田池が該当し、併記される大道は、地形に規制されず東西に直線に延びる最初の官道・横大路を指す。築造時期は確定に至っていないが、やや時代が下る天武元年（672）壬申条中に中ツ道、下ツ道の敷設も記録されている。これら直線道路は、後の藤原京造営の基準となる道となった。

672年、大津宮で崩御した天智天皇の後繼争いが起こる。壬申の乱である。壬申の乱に勝利した大海人皇子は後飛鳥岡本宮で即位する。天武天皇である。天武天皇は飛鳥淨御原宮にて政を執り行うが、その一方で新都の造営を計画する。その造営先は、まさに橿原の地であった。新都の計画は『日本書紀』天武五年（676）の条に「是年。新城に都つくるむとす。限りの内の田園は、公私を問わず、皆耕さずして、ことごとくに荒れぬ。しかれども、ついに都をつくらず。」と記される。一度は中断されるが、後に再開され、同十三年「京師に巡行きたまいひて、宮室之地を定めたまふ。」に見られるように造営は着実に進む。天武天皇の崩御による再度の中斷を挟みながらも、次の持統天皇の御世、持統八年（694）「藤原宮に遷り居します。」とする遷都記事、さらに文武天皇慶雲元年（704）「はじめて藤原宮の地を定め、宅宮中に入る百姓一千五百五戸に布を賜ふこと、差あり。」にみられる如く新都・藤原京が完成する。ここにわが国において街区を作ら壮大な宮都がはじめて建造された。藤原京は東西 5.3 km・南北 4.8 km の規模をもつ。京内の街区は東西・南北方向の大路・小路によって整然と区画され中央に宮を置くその平面形態は、中国都城を直接反映したものではなく、中国の古典『周礼』考工記匠人營國条が記す都城の理想形を採用している。街区には薬師寺（本薬師寺）、大官大寺に加え、すでに建立された豪族の氏寺をその寺域が区画に収まるよう再配置される。貴族に班給する宅地も藤原宮を中心位階に応じた規模と位置が決められている等、身分秩序を明確に表示した計画的配置をとる。まさに天皇を中心とした身分秩序体系を具現した都である。

しかしながら、慶雲四年（707）には早くも遷都について議論され、和銅三年（710）、都は藤原京から平城京に遷された。遷都に際しては、藤原宮の主だった殿堂も解体され平城宮へ移設された。和銅四年（711）大官大寺が焼失し、また養老元年（718）薬師寺も移建される。加えて一帯には条例制が施工なされ、急速に水田景観へと変貌し、現在へとその景観は受け継がれてゆく。

## 第Ⅲ章 調査の成果

本報告書では 2000・2001・2009・2012 年度の発掘調査の成果について報告する。報告内容については項目ごとに各年度の調査をひとつにまとめて記述を行うこととする。例えば、墳丘についての報告は 2000 年度および 2012 年度の調査内容が中心となっている。

調査成果は墳丘・周壕、東石室、西石室、石室閉塞上、墳丘南側平坦面、墳丘南西側平坦面、古墳背面の丘陵、の項目に分けて報告を行う。なお、前半の古墳本体に関わる部分については特に相互の関連性が強いため、報告内容が若干前後したり重複する場合がある。また、後半部分は墳丘より外側についての報告であり、植山古墳本体よりも前、あるいは後の時代についての内容を一定量含むが、いずれも植山古墳の歴史を述べるために重要な要素であるため、本報告書で報告を行うこととする。

### 第 1 節 墳丘・周壕の調査

#### 第 1 項 墳丘

##### 調査前の状況

発掘調査開始前の植山古墳周辺は多量の竹木が林立した状態であり、当初は現地に立っても過去の報告通り西石室玄室石材の一部が露呈していることが確認できるに過ぎず、東石室にあたる窪地確認することも困難な状態であった。そのような状況であったため各調査開始にあたっては、まず竹木の伐開を行ふことから調査を始めた。丘陵上部や墳丘前面など、現地表面から遺構面までの深度が 0.3 m 未満と浅い地点も多く、これらの竹木の根による遺構面の攪乱が存在する地点も多い。

図 5 は植山古墳周辺の調査前地形測量図である。中央の墳丘部および西～北の丘陵部分は 2000 年度、丘陵東側は 2009 年度調査、墳丘南側平坦面および墳丘南東の斜面・墓地周辺は 2012 年度調査を開始するにあたってそれぞれ測量を行ったものである。さらに周辺の現地形については付図 1 を参照されたい。

墳丘周辺の調査前の状況で目立つのは、過去にも報告が行われている二つの石室の窪みである。西側の石室（以下、「西石室」とする）については、奥壁 3 段分の石材（最上部のやや小さめの石材は当初の位置ではないと考えられるので除く）が露出した状態であった（図版 8）。露出しているのは玄室部分のみで、この時点では羨道については不明である。東側の窪み（以下、「東石室」とする）については石材は確認できず、東西幅約 8 m、南北長約 14 m、深さ約 3 m、断面形 U 字状の窪みが確認できるだけであった（図版 7）。この時点では、東石室については石材はすでに全て取り去られた後である可能性も想定された。二つの石室の関係性については、両者の距離関係が近いことや周辺の墳丘状の高まりが一体となっていることを踏まえると、同一の墳丘に対して設けられた石室である可能性が最も高いと考えられた。ただし、両者が別の古墳に属する可能性も捨てきれないため、確定には墳丘の発掘調査を待つこととなった。両石室の窪みの南端部には南北幅約 2 m、標高 108 ～ 109 m 付近の細い平坦地がテラス状に存在する。一見すると石室入口から前に伸びる墓道の痕跡で

Y=17920.0

Y=17940.0

Y=17960.0

Y=17980.0

Y=18000.0

Y=18020.0

Y=18040.0

Y=18060.0

Y=18080.0

X=169000.0

X=169020.0

X=169040.0

X=169060.0

X=169080.0

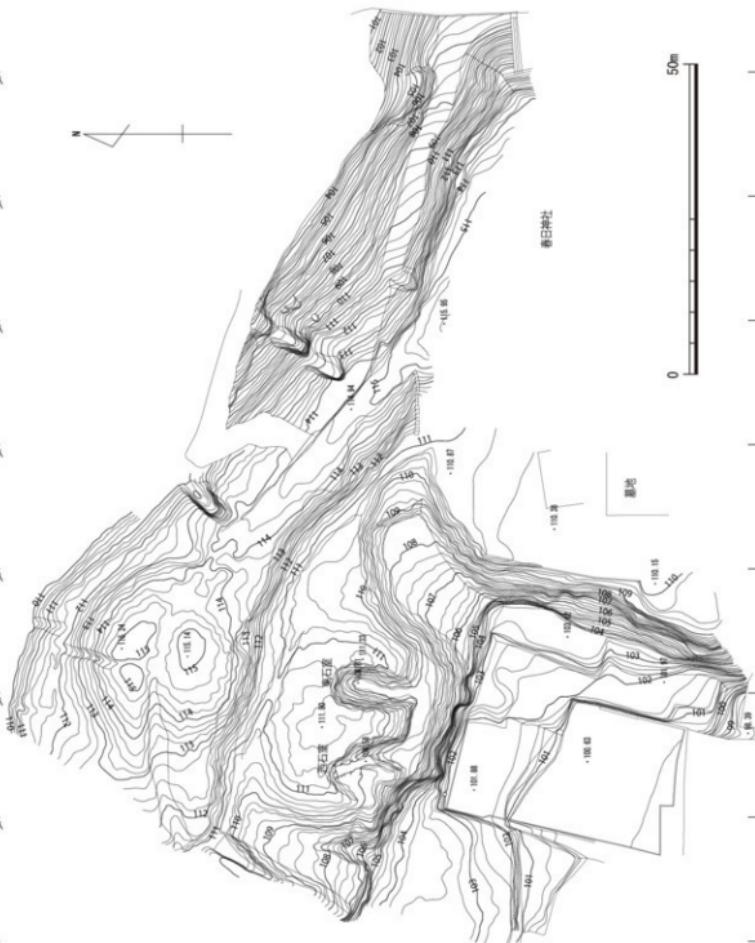


图 5 填丘周边调查前测量图 ( $S = 1/800$ )

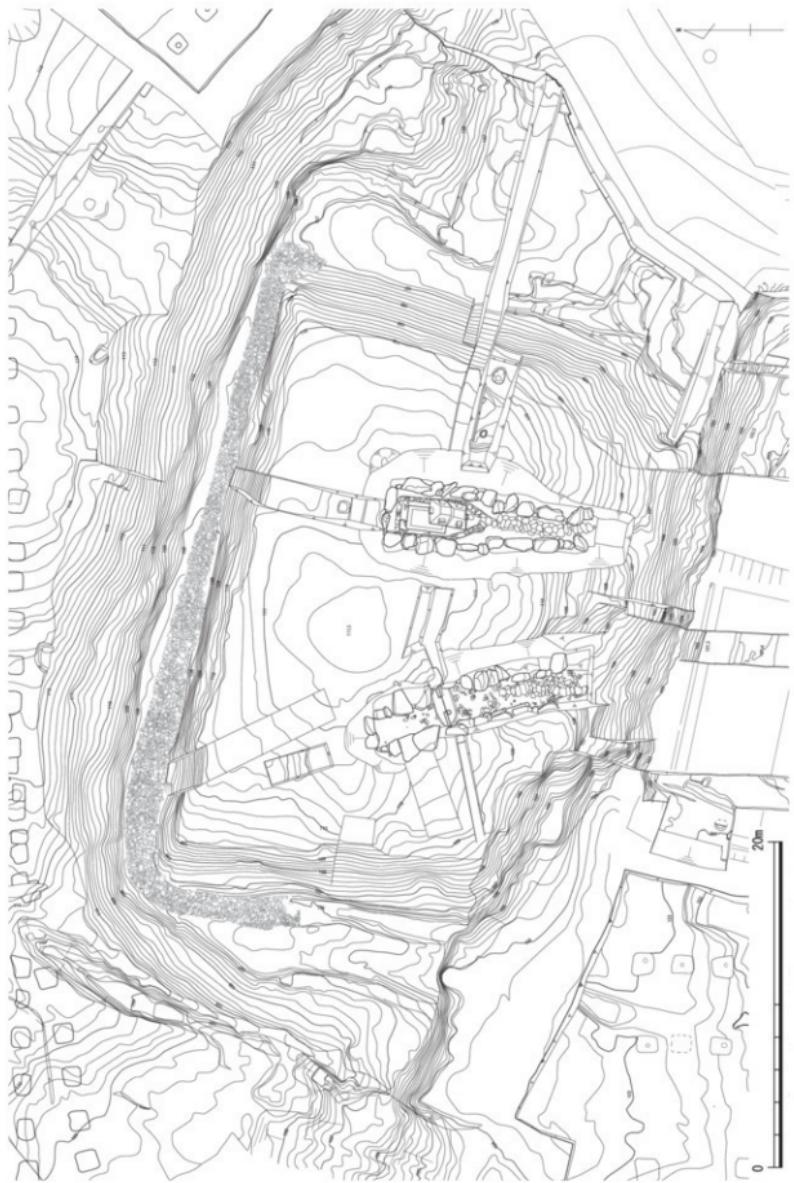


图 6 填丘平面图 ( $S = 1/300$ )

あるかのように見えるが、実際はこの面の標高は両石室の羨道の天井石が存在したと推定される付近にあたる。おそらく後世の石室石材の取り去り時に形成された面であると考えられる。

墳丘については、両石室の周辺に不整形な高まりが見て取られるが、正式な形状については判別が困難な状態である。周塚については、墳丘状の高まりの西側・東側にその痕跡と考えられる溝の存在が確認でき、北側についても背面の丘陵との落差とその底面にわずかに溝状の窪みを確認できる。ただし、これらの部分には後世に形成された里道と思しき痕跡も見られ、当初の形状を正確に反映しているわけではない。東側についても、東石室の東側一帯が大きく南西—北東方向に抉れており、これも周塚の正確な範囲の想定を困難にさせた。

北側の丘陵の最上部、東石室の真北あたりの地点にはこの時点で円形を呈する高まりが見て取られる。これは第Ⅲ章第7節で詳述する植山北古墳の墳丘である。この他、北側の丘陵頂部や斜面上には里道であると考えられる浅い溝状の窪みや土取り穴と考えられる深い溝が存在した。図5東端の斜面中腹に存在する幅約3~4mのスロープ状の地形が、2009年度調査でテラス面を検出した地点である。

#### 墳丘・周塚の検出作業

墳丘と周塚の検出作業は、まず東側の周塚想定部分で先行して掘削を行い、墳丘面と周塚底の把握に努めた。作業はまず図12・22に示す後世の堆積層部分の除去を行った。墳丘の断面調査は基本的に墳丘全体の検出を終えた後に行った。

東側での墳丘・周塚の検出を終えた後、順次、北側、西側へと同様の作業を進めていった。その際、墳丘の東側（図8~11）、東石室の北側（図13~15）、墳丘北西隅（西石室主軸の北西側の延長ラインを兼ねる。図19~21）、墳丘の西側（図23~25）に土層確認の為の畦を残した。調査後半には、これらの断面ライン上で墳丘の断面調査も行った。墳丘東側の畦以外については、後世の堆積土部分を記録後に除去した。なお、2012年度調査で確認した墳丘前面の状況については後の項で詳しく述べることとする。

墳丘・周塚上における後世の堆積状況は、大きく墳丘の東側・北側・西側で異なる。以下に、それらに言及しつつ墳丘と周塚の検出について述べる。

墳頂平坦面は、墳丘盛土が大幅に削平された、あるいは流出した状態であり、築造当初の形状からは大きく改変された状態である。検出された墳頂平坦面は改変後の見せかけの平坦面であるが、これ以降も便宜上、墳頂平坦面と呼ぶこととする。墳頂部では厚さ約0.2~0.3m程度の表土を除去した直下で墳丘盛土が検出される。墳頂部での遺構面の認識は比較的容易であった。墳頂平坦面でも石室奥壁よりも北側の範囲では、墳丘盛土が残っておらず表土直下で地山面が検出される部分が存在している。

その一方、墳丘斜面には貼石等の外表施設が無く、墳丘盛土とその直上に堆積する盛土の流出層も土質が非常に近いため、墳丘の認識には困難が伴い、一部先行して掘り下げを行った地点の土層断面で確認を行いつつ墳丘斜面の検出作業を進めた。

東側の周塚底については石敷等の施設が無く、こちらも主として土質の差異で周塚面の検出を行う必要があった。植山古墳の構築に用いられた盛土は、大部分が古墳周辺の地山を掘削することによって確保されたものであるため、古墳盛土と墳丘の流出土、周辺地山からの流出土の土質が近似してお

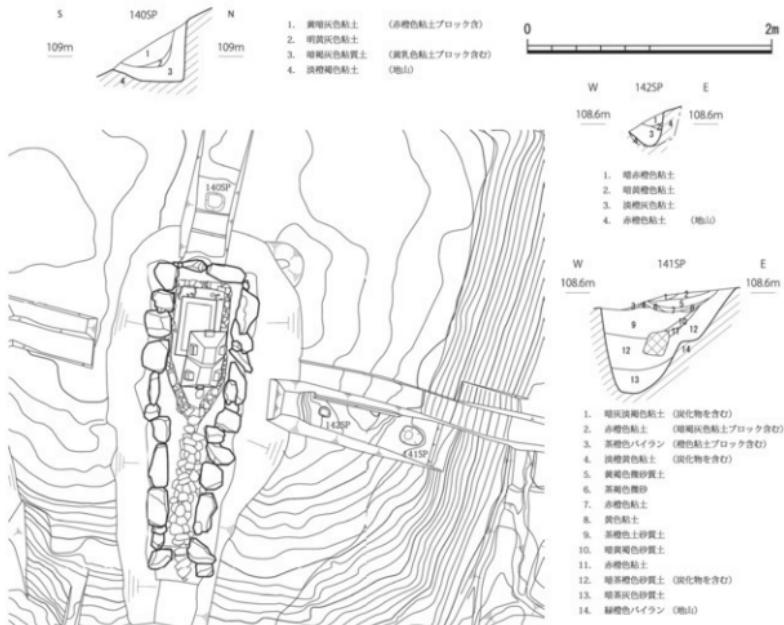


図7 墳丘断面部 遺構平面・断面図（断面：S = 1/40。平面 S = 1/200）

り、これらの峻別に困難を伴う場合がしばしばあった。東側の周塙面の認定は、周塙底に盛られた炭化物を含む粘質土層と、その直上に広い範囲で堆積する砂質土層との境界部分の検出によって進めた。いずれも土色は橙色混じりの黄褐色～灰褐色を呈する。周塙東側部分については部分的に塙底面よりも掘り込んでしまっている可能性を含む。

東側の墳丘～周塙部分では、表上から遺構面までの深度は約0.5～1.5mである。古墳より後の堆積層は概して墳据部が薄く、墳丘斜面と塙の中央から東側が厚い傾向にある。墳丘東斜面に厚く堆積層が見られるのは、後世の石室石材取り去り時に墳丘盛土上部が掻き出されたためである可能性が考えられる。

周塙の北側では、塙の底面に幅約1mの石敷が存在する。そのため、遺構面の認識は比較的容易であった。ただし、土層断面での確認では北辺塙底の墳丘側裾（南側）には石敷き上にも部分的に若干の盛土が施されている状況を確認しており（図14・21）、この盛土についても石敷きの検出作業において大部分を除去してしまっている。

北側の周塙は、調査前の上面高が墳頂平坦面とほぼ同一レベルになるまで完全に埋まった状態であった。石敷きまでの深度は約2.2～3.2mである。北側の周塙では東側を中心、人為的に塙を埋めたような堆積が下層部分に見られる（図14の100～131層）。時期は不明であり、墳丘築造時を含めて、どの段階に埋められたかは不明である。

周塙の西側でも北側と同様の石敷きが塙の底面に存在するため、周塙の検出は比較的容易であった。

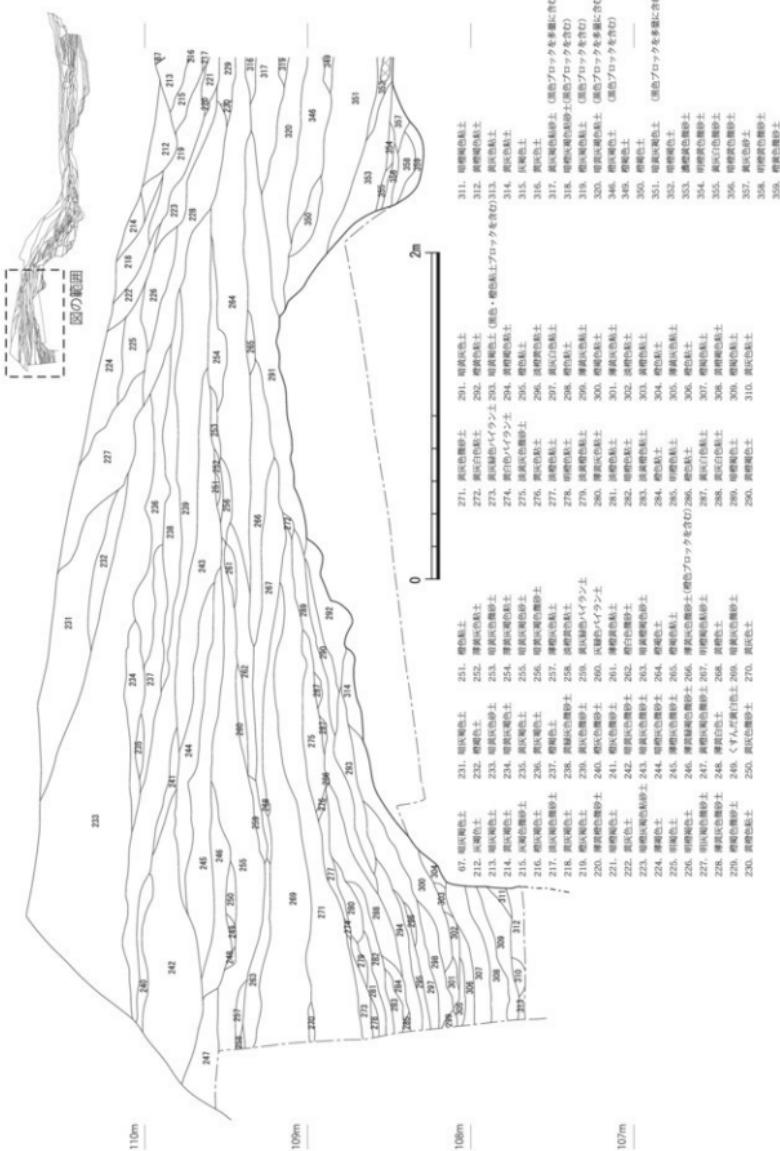


図 8 東石室東側 塗丘一周壌断削土層断面図① (S = 1/30)

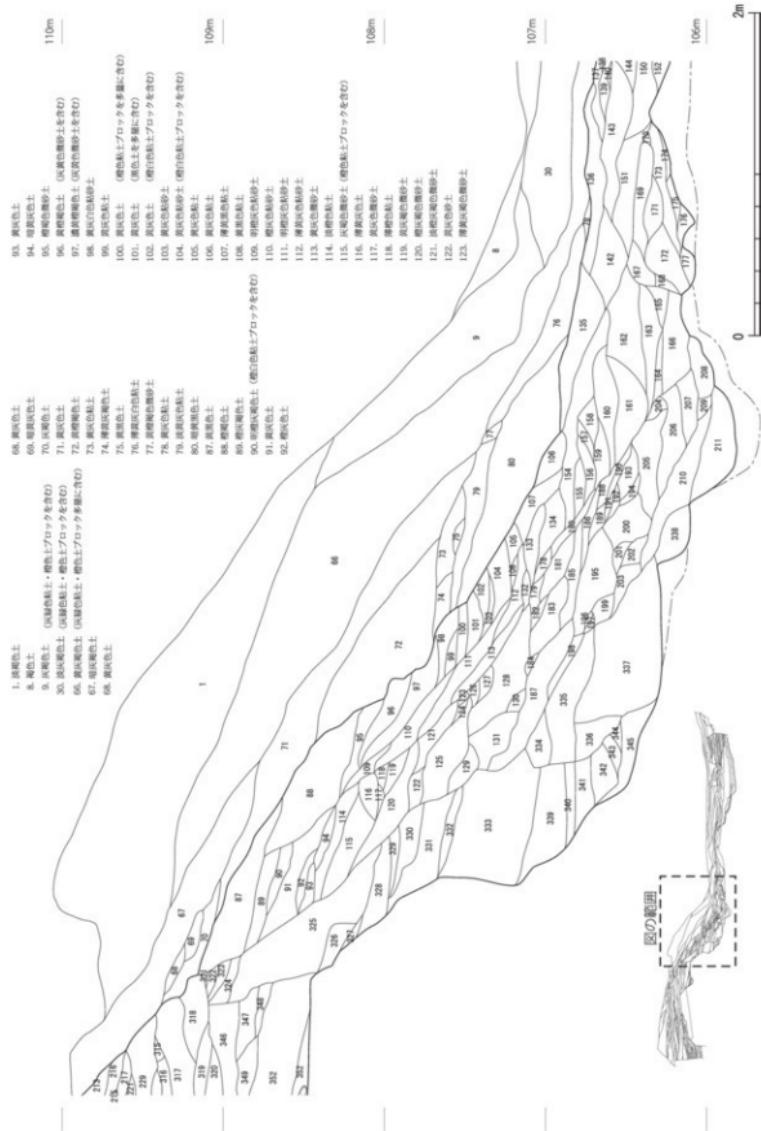


図9 東石室東側 填丘一周壙断面図② (S = 1/30)

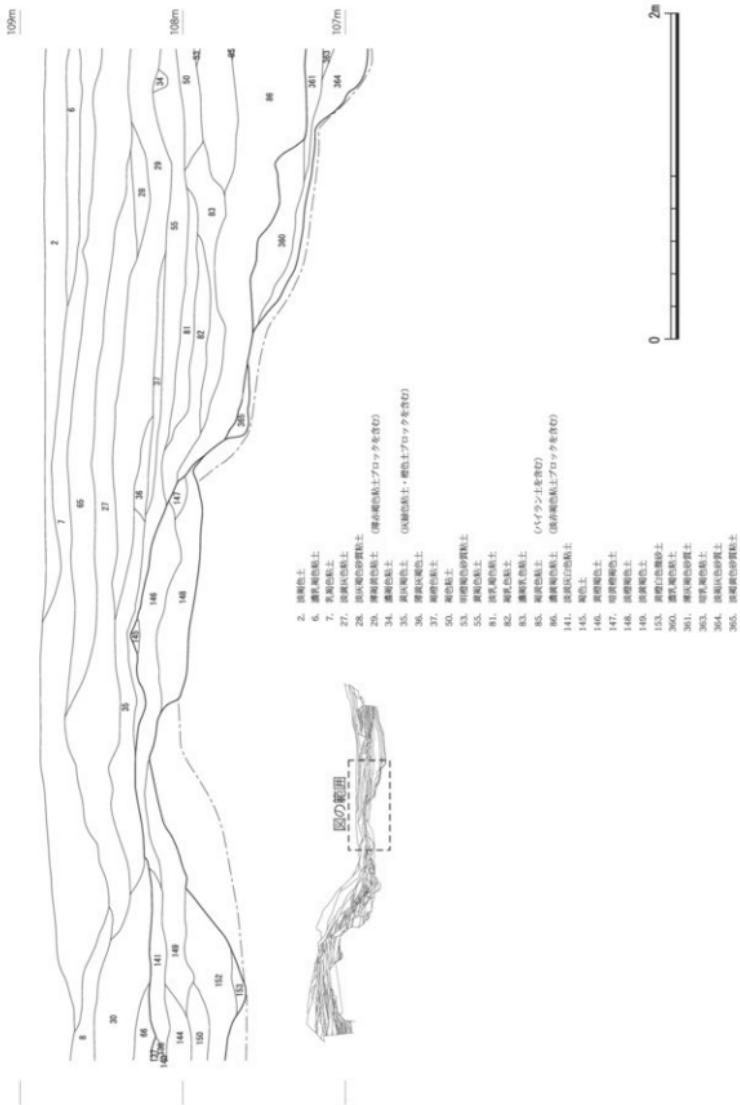
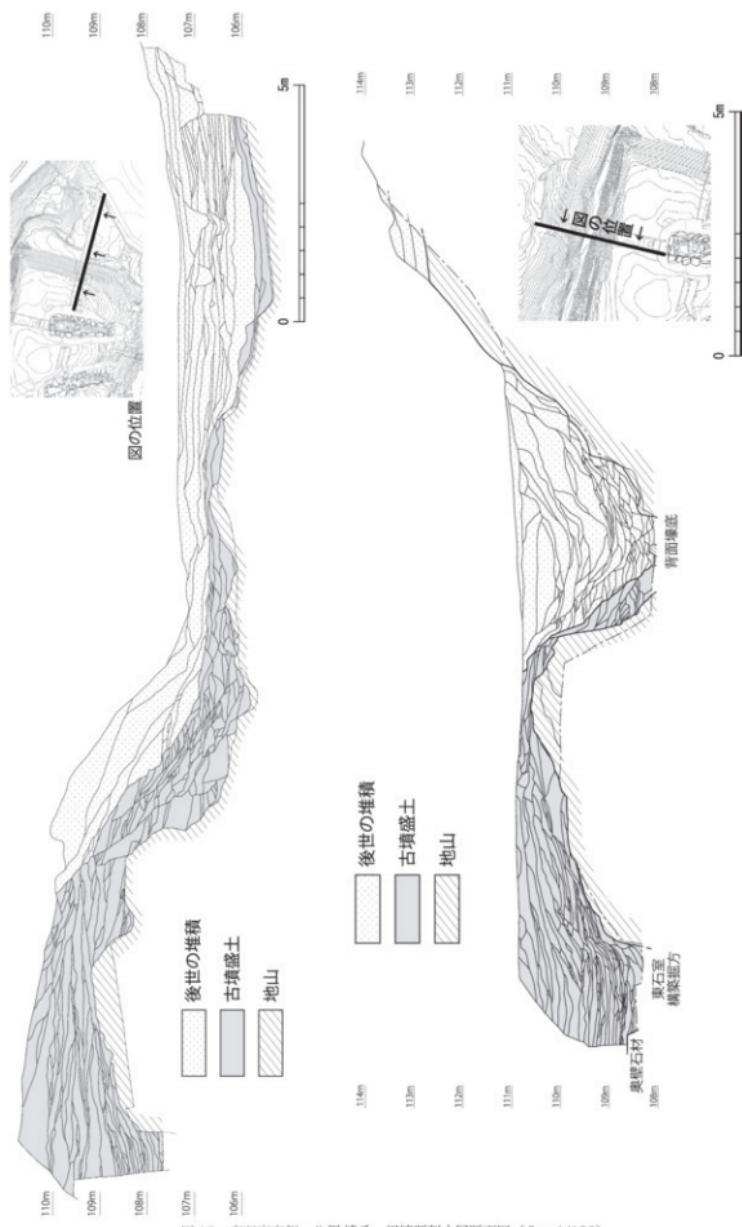


図 10 東石室東側 墓丘一周壕断面土層断面図③ (S = 1/30)



図 11 東石室東側 墳丘一周塙断面図④ (S = 1/30)

ただし、西側では石敷きは北半にしか残存していない。西辺の南半には石敷きが存在していた部分を踏襲している可能性がある後世の溝状の掘り込みが存在するのみである。また、北側周塙は塙底の幅が狭く、底面全体に石敷きが存在するが、西側では塙底の幅が西に広がっているため、見掛け上は塙底と石敷きの幅は一致しない。石敷きよりも西側の塙底面は、削り出した地山となっている。西側周塙は特に後世の改変度合いが強く、この底面石敷きの状況が当初のものであるのか、改変によるものであるのかの判断は難しい。いずれにしても、西側の塙底から西の丘陵へと上がっていく斜面は、北



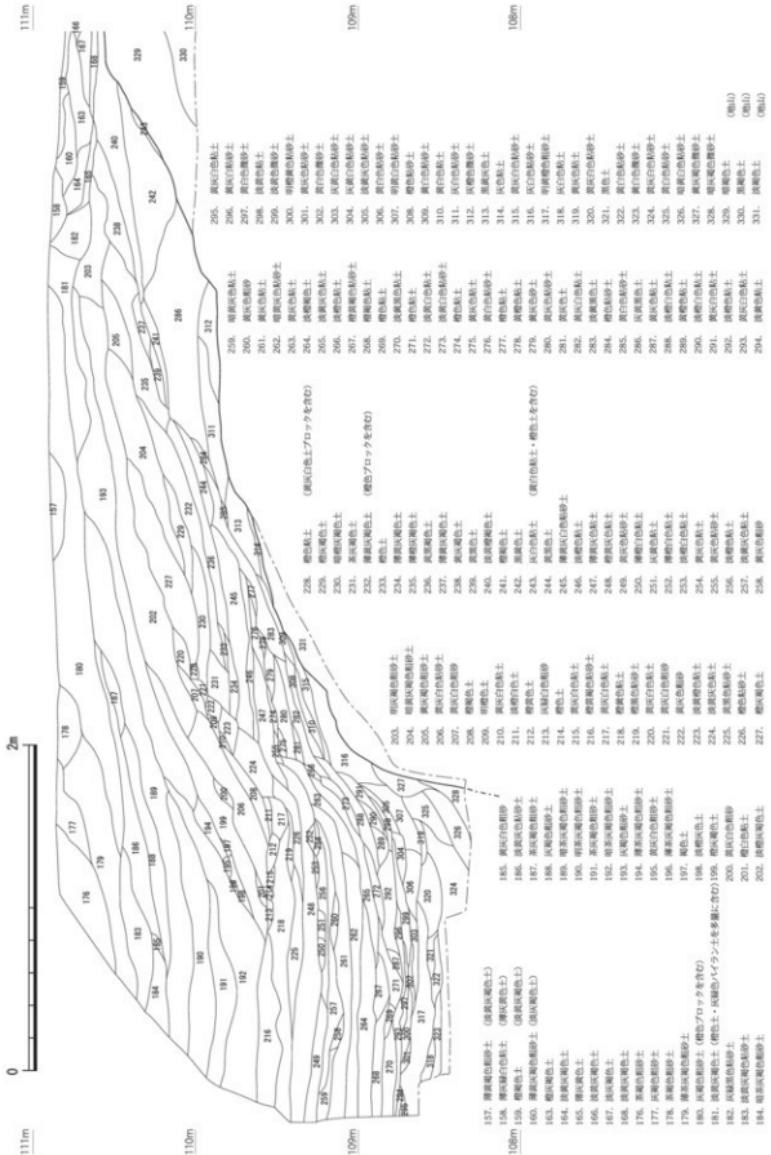


図13 東石室北側 墳丘-周壕断面土層断面図① (S = 1/30)

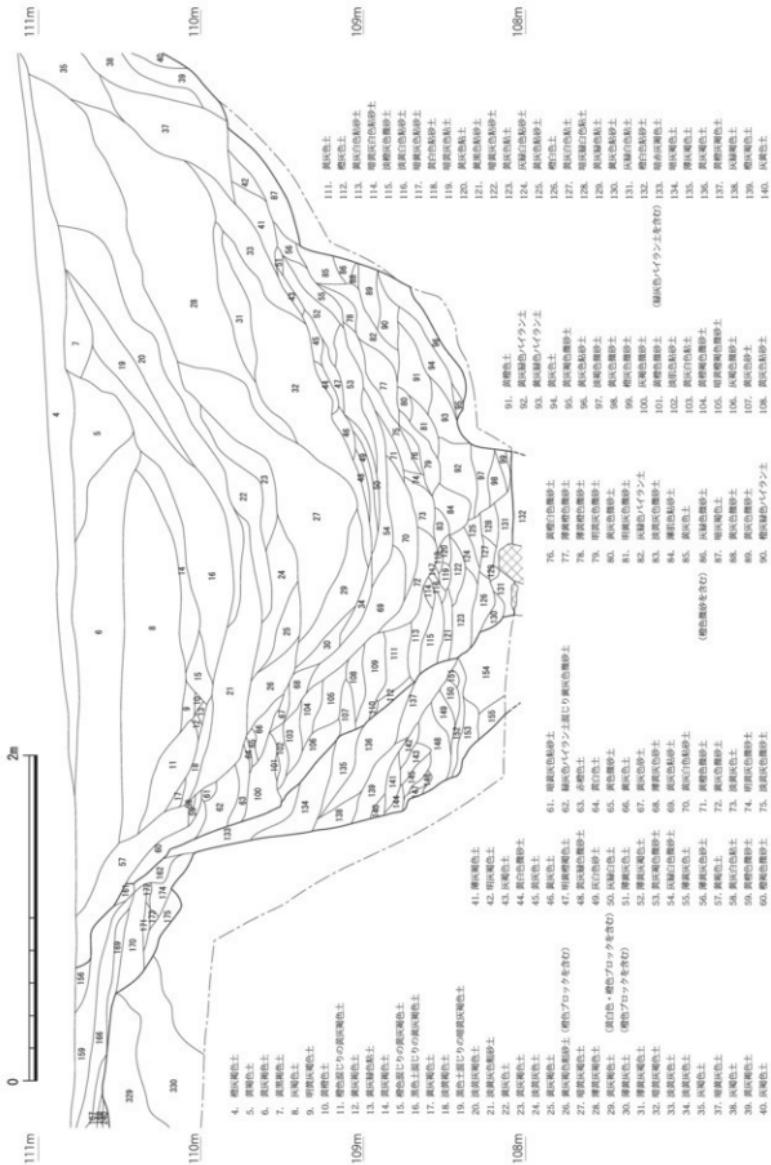


図 14 東石室北側 墓丘一周壕断面図② (S = 1/30)

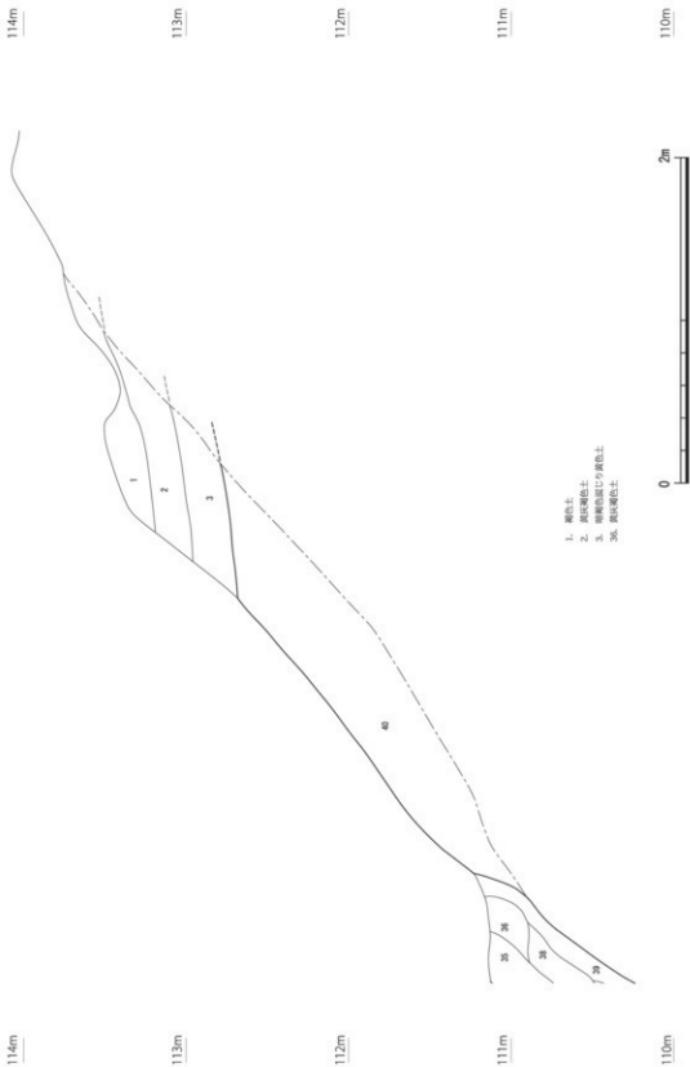
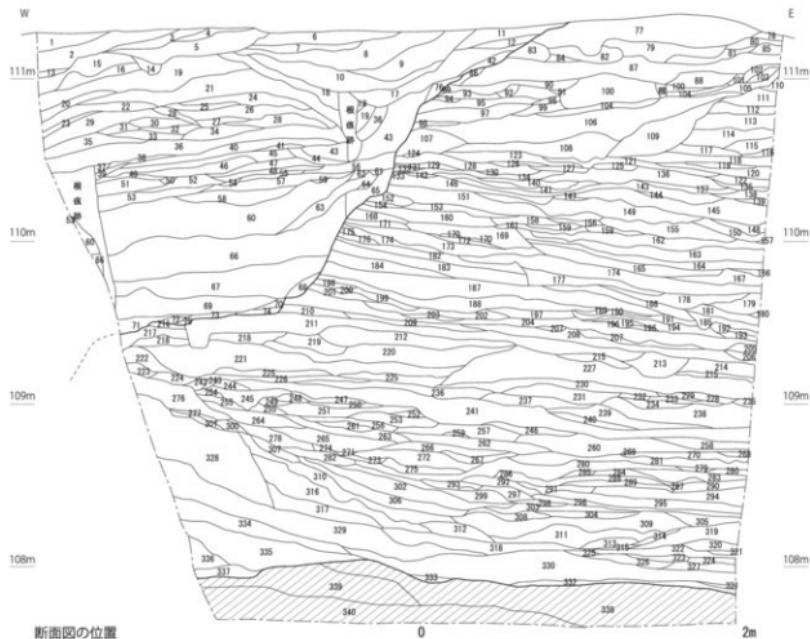
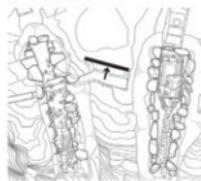


圖 15 東石室北側 墓丘一周壕斷剖面圖③ ( $S = 1/30$ )



断面図の位置



1 ~ 76 : 西石室構築掘方埋土	78 ~ 337 : 墓丘盛土	338 ~ 340 : 地山
1. 植生地	25. 植生地	73. 植生地
2. 植生地	26. 植生地	74. 明暗植生地
3. 植生地	27. 黄褐植生地	75. 黄褐植生地
4. 植生地	28. 明黄植生地	76. 墓床植生地
5. 植生地	29. 黄灰植生地	77. 沼泥植生地
6. 植生地	30. 植生地	78. 黄灰植生地
7. 植生地	31. 植生地	79. 黄灰地
8. 植生地	32. 植生地	80. 明黄地
9. 植生地	33. 植生地	81. 沼泥地
10. 植生地	34. 植生地	82. 植生地
11. 墓床地	35. 植生地	83. 沼泥地
12. 墓床地	36. 植生地	84. 黄灰地
13. 墓床地	37. 植生地	85. 沼泥地
14. 墓床地	38. 植生地	86. 黄灰地
15. 墓床地	39. 植生地	87. 沼泥地
16. 植生地	40. 沼泥地	88. 沼泥地
17. 植生地	41. 植生地	89. 沼泥地
18. 植生地	42. 植生地	90. 沼泥地
19. 植生地	43. 植生地	91. 沼泥地
20. 墓床地	44. 墓床地	92. 墓床地
21. 墓床地	45. 墓床地	93. 墓床地
22. 墓床地	46. 墓床地	94. 墓床地
23. 墓床地	47. 墓床地	95. 墓床地
24. 墓床地	48. 墓床地	96. 墓床地
	49. 黄泥地	97. 黄泥地
	50. 淡黄地	98. 淡黄地
	51. 黄褐地	99. 黄地
	52. 明黄褐地	100. 淡黄地
	53. 黄灰地	101. 沼泥地
	54. 黄泥地	102. 沼泥地
	55. 淡黄泥地	103. 黄白色
	56. 淡黄地	104. 明黄色
	57. 沼泥地	105. 明黄褐色
	58. 沼泥地	106. 植生褐色
	59. 沼泥地	107. 泥炭灰褐色
	60. 沼泥地	108. 泥炭灰褐色
	61. 沼泥地	109. 泥炭褐色
	62. 沼泥地	110. 明褐色
	63. 淡明黄地	111. 泥炭褐色
	64. 淡明黄地	112. 泥炭褐色
	65. 淡明黄地	113. 泥炭褐色
	66. 淡明黄地	114. 泥炭褐色
	67. 淡明黄地	115. 泥炭褐色
	68. 淡明黄地	116. 泥炭褐色
	69. 淡明黄地	117. 泥炭褐色
	70. 淡明黄地	118. 泥炭褐色
	71. 淡明黄地	119. 植生地
	72. 淡明黄地	120. 泥炭灰褐色
	73. 淡明黄地	121. 泥炭灰褐色
	74. 淡明黄地	122. 泥炭灰褐色
	75. 淡明黄地	123. 泥炭灰褐色
	76. 淡明黄地	124. 黄褐色
	77. 沼泥地	125. 黄灰地
	78. 沼泥地	126. 植生地
	79. 沼泥地	127. 泥炭灰褐色
	80. 沼泥地	128. 泥炭褐色
	81. 沼泥地	129. 植生地
	82. 沼泥地	130. 黄褐色
	83. 沼泥地	131. 黄褐色
	84. 沼泥地	132. 泥炭灰褐色
	85. 沼泥地	133. 泥炭褐色
	86. 沼泥地	134. 泥炭褐色
	87. 沼泥地	135. 植生地
	88. 沼泥地	136. 泥炭褐色
	89. 沼泥地	137. 泥炭褐色
	90. 沼泥地	138. 黄泥地

図 16 両石室間 墓丘断削剂層断面図① (S = 1/30)

205. 黄灰褐色粘土	229. 淡黄灰色粘土	253. 暗黄灰色粘土	277. 黄灰色粘土	301. 黄灰色粘土	325. 黄灰色粘土
206. 黄灰褐色粘土	230. 黄褐色粘土砂土	254. 明黄色粘土	278. 黄灰褐色粘土	302. 明黄灰色粘土	326. 黄灰白色粘土
207. 乳黄褐色粘土	231. 淡黄褐色粘土	255. 明黄色粘土	279. 黄褐色粘土砂土	303. 黄褐色粘土砂土	327. 黄色粘土
208. 乳黄褐色粘土	232. 淡黄褐色粘土砂土	256. 暗黄褐色粘土	280. 棕灰褐色粘土	304. 棕褐色粘土砂土	328. 棕褐色粘土
209. 黄灰褐色粘土	233. 淡黄褐色粘土	257. 暗黄白色粘土	281. 淡黄褐色粘土	305. 黄褐色粘土	329. 黄色粘土
210. 乳黄褐色粘土	234. 明黄色粘土砂土	258. 黄灰白色粘土	282. 黄灰褐色粘土	306. 棕灰褐色粘土	330. 棕红色粘土
211. 乳黄褐色粘土	235. 明黄白色粘土砂土	259. 黄灰褐色粘土	283. 淡黄褐色粘土	307. 棕褐色粘土	331. 黄灰褐色粘土
212. 黄灰褐色粘土	236. 黄灰白色粘土	260. 棕灰白色粘土	284. 淡黄褐色粘土砂土	308. 淡黄褐色粘土砂土	332. 淡黄褐色粘土
213. 黄灰褐色粘土	237. 淡黄褐色粘土	261. 棕褐色粘土	285. 淡黄褐色粘土砂土	309. 棕褐色粘土	333. 黄灰褐色粘土
214. 黄褐暗褐色粘土	238. 淡黄褐色粘土	262. 棕灰白色粘土	286. 淡黄褐色粘土	310. 淡黄褐色粘土	334. 黄色粘土
215. 暗褐暗褐色粘土	239. 黄灰褐色粘土	263. 淡黄褐色粘土	287. 淡黄褐色粘土	311. 黄灰褐色粘土	335. 淡黄褐色粘土
216. 棕褐暗褐色粘土	240. 明黄色粘土	264. 淡黄褐色粘土	288. 淡黄褐色粘土	312. 黄褐色粘土	336. 黑色粘土
217. 黄褐暗褐色粘土	241. 明黄白色粘土砂土	265. 明黄色粘土砂土	289. 淡黄褐色粘土	313. 明黄色粘土	337. 黄灰白色粘土
218. 棕褐暗褐色粘土	242. 淡黄褐色粘土	266. 黄褐色粘土	290. 黄灰白色粘土	314. 黄白色粘土	338. 淡黄褐色粘土
219. 黄褐暗褐色粘土	243. 黄灰白色粘土	267. 黄灰褐色粘土	291. 黄灰褐色粘土	315. 黄灰褐色粘土	339. 乳白色土
220. 淡黄褐色粘土砂土	244. 淡黄褐色粘土	268. 黄褐色粘土	292. 淡黄褐色粘土	316. 黄褐色粘土	340. 淡褐色土
221. 黄灰褐色粘土	245. 淡黄褐色粘土	269. 黄褐色粘土	293. 黄灰褐色粘土	317. 淡黄褐色粘土	
222. 黄灰褐色粘土	246. 淡黄褐色粘土	270. 淡黄褐色粘土	294. 淡黄褐色粘土	318. 黄灰白色粘土	
223. 黄灰褐色粘土	247. 黄灰白色粘土	271. 黄灰白色粘土砂土	295. 明黄色粘土	319. 淡黄褐色粘土砂土	
224. 黄灰褐色粘土	248. 黄灰白色粘土	272. 棕灰白色粘土	296. 黄灰褐色粘土	320. 淡黄褐色粘土	
225. 淡黄褐色粘土	249. 黄灰白色粘土	273. 淡黄褐色粘土	297. 淡黄褐色粘土	321. 淡黄褐色粘土砂土	
226. 乳黄褐色粘土	250. 黄灰褐色粘土	274. 黄灰白色粘土	298. 黄灰白色粘土	322. 黄灰褐色粘土	
227. 棕褐暗褐色粘土砂土	251. 淡黄褐色粘土	275. 黄灰白色粘土	299. 淡黄褐色粘土	323. 黄色粘土	
228. 淡黄褐色粘土	252. 淡黄褐色粘土	276. 淡黄褐色粘土	300. 淡黄褐色粘土	324. 黄灰白色粘土	

図 17 両石室間 墳丘断削面層面図② (S = 1/30)

側の周塙から背面の丘陵への上りと比較して、傾斜がかなり緩やかだったと考えられる。周塙西側における調査前地表面から周塙底までの深度は約 1.5 ~ 2.0 m である。

### 墳丘の形状

検出した墳丘の規模は東西（長辺）約 40 m、南北（短辺）約 30 m である。この数値は確認できる範囲で最大となる部分を計測したものである。墳丘北辺・西辺では塙底面石敷きと墳丘の接する点、墳丘東辺では墳丘が立ち上がる傾斜変換点を埴堀として認識している。墳丘前面（南辺）については当初の形状から削平を受けているため、相対的に削平の程度が小さい東石室前付近において墳丘が立ち上がる傾斜変換点を前面の埴堀としている。

墳丘側面にあたる西辺と東辺はともに、埴堀のラインが手前（南側）ほどわずかに内側に寄る形状となっている。塙底高は手前ほど低くなっていることと併せて、正面から見た場合の墳丘の美観を整えるためのものである可能性などが考えられる。上述の墳丘の東西長は、埴堀が最も広がる墳丘北辺での数値を取っている。

墳形については、東西方向に長い長方形墳であると言えるが、正確な復元は困難である。特に墳丘の前面については、高さ約 7 m の斜面の中段付近に石室の床面が位置するほど大幅に削平を受けており（図 68 模式図）、現況よりもさらに南側に伸びていたと考えられる当初の墳丘および前庭部に関する情報が失われてしまっている。現況は両石室の羨門から南に約 3 m の地点までが遺存している状態である。ただし、墳形を正方形と考え南北長も 40 m と仮定した場合、両石室の石室入口石材から墳丘前面幅までの距離が 17 m 程度になってしまうため、これは現実的ではない。正確な数値は不明ではあるが、墳丘自体は東西方向のほうが長い長方形であったと考えられる。

なお、詳細は後述するが植山古墳は当初の築造以降、西石室の造り足し、石室閉塞土の追加など、墳丘の外観が変化する改変が、埋葬行為が継続する中で数回行われている。その都度、墳丘の正面観や平面プランが変化していく可能性がある点は注意が必要である。

墳丘前面以外では、墳丘東辺南半に墳丘上部が崩れたかのような乱れが見られる。東石室入口から東に進むルート付近に位置することから、2012 年度の調査時には墓道がこの周辺に存在した痕跡で

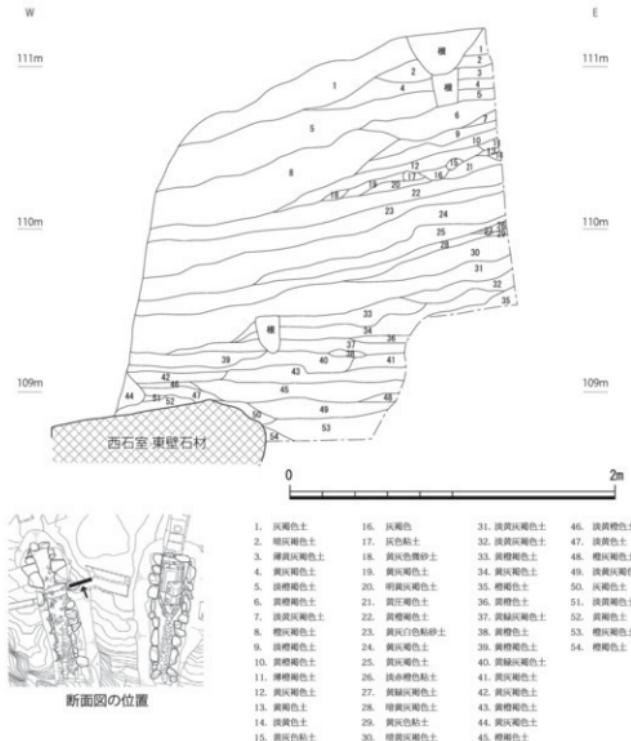


図 18 西石室東側 墳丘断面図 (S = 1/30)

ある可能性を検討したが、明確な痕跡は確認されなかった。

墳丘の主軸は、北から約 13 度 30 分東へ振れるが、ほぼ正方位を志向していると言える。正方位からの若干のズレは、古墳南東の高台部分などの旧地形に左右された結果であると考えられる。

現存する墳丘の最高所は両石室奥壁の中間付近にあたり、標高は 111.5 m である。墳丘の残存高は、西・北・東の周塙底を基準とすると約 3 ~ 6 m である。削平された墳丘前面裾（地山面）を基準とした場合、約 10 m となる。確認できた墳丘盛土の最も低い地点の標高は 102.8 m であり（図 28・29）、最高所とは 8.7 m の比高差がある。ただし、この標高差分が全て盛土で構成されているわけではなく、西側および北側ほど地山面が高くなっている、その分盛土量は減ることとなる。なお、古墳背面の丘陵の最高所は東石室の北側、植山北古墳後円部中央付近にあたり、その標高は約 114.8 m である。

先述の通り、墳丘の上面も盛土の流失や石室石材の抜き取り時等の変更によって、当初の形状よりも大幅に低くなっていると考えられる。両石室とも天井石はすべて失われている。西石室の玄室は天

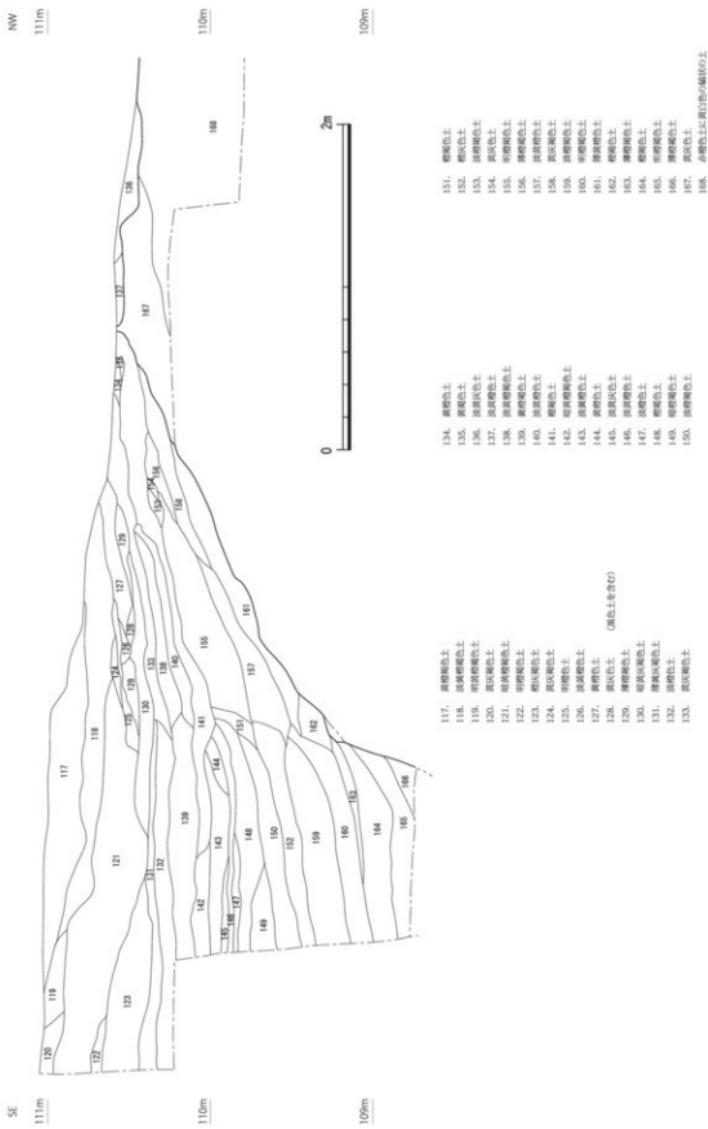


图 19 西石室北侧 填丘—周壕断剖面图① (S = 1/30)

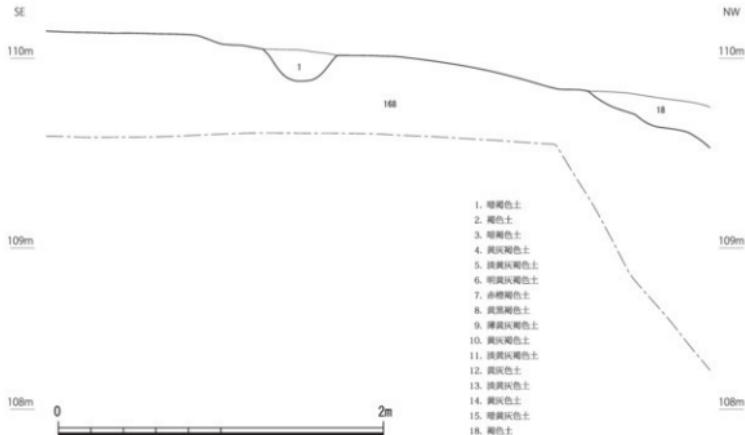


図20 西石室北側 墳丘・周塙断削土層断面図② (S = 1/30)

井石以外の石材はほぼ残存していると考えられ、その上面高は標高約110.3mである。この上にさらに天井石が架けられ、さらに天井石を覆い隠す分だけの盛上が必要となるはずである。東石室については玄室上半の石材も失われているが、牧野古墳等の類似した石室規模をもとに推測した場合、天井の標高値は西石室の天井と概ね同じになると推測される。これらを踏まえると、当初の墳丘高は標高約113m前後であったと想定される。現状よりも約1.5m高かったこととなる。

墳丘の段築については現在のところ二段目の存在は確認できない。現在の墳丘の上に二段目の墳丘が存在していたことも想定は可能であるが、現墳丘の外縁や墳丘盛土には、その存在を確認できる痕跡は認められない。また、同じく削平を受けて当初の形状が不明となっている墳丘の前部部分についても、近接する時期の古墳の状況を踏まえると台状の段が存在していた可能性が考えられる。こちらも発掘調査で得られた成果からの正確な形状の復元は困難である。

#### 墳丘と石室の構築

これまでにも触れてきたように、植山古墳は東西方向に長い長方形の墳丘をもち、墳丘は西・北・東側に掘られた周塙によって周囲の丘陵から切り離されることで構築されている。詳細は第5節で述べるが、墳丘の南側の旧地形は谷になっており、そのさらに東側（現在、墓地となっている地点）はまた丘陵となっている。このように植山古墳は東南東-西北西方向に伸びる丘陵の西端近く、丘陵の南側斜面に築かれた古墳である。

丘陵南斜面の地山を不整な直方体に削り出し（墳丘となる部分の核を削り残す、とも表現できる）、主として周塙を掘削する際に生じた排土を用い、地山上に盛土を施して墳丘を造り上げている。墳丘側については地山上に盛土を施して構築しているが、周塙の外側の斜面については地山を削り出して構築されている。加えて、墳丘南側の平坦面においても以前からの谷地形を埋め立てる造成工事を行っている。詳細は第5節で述べる。

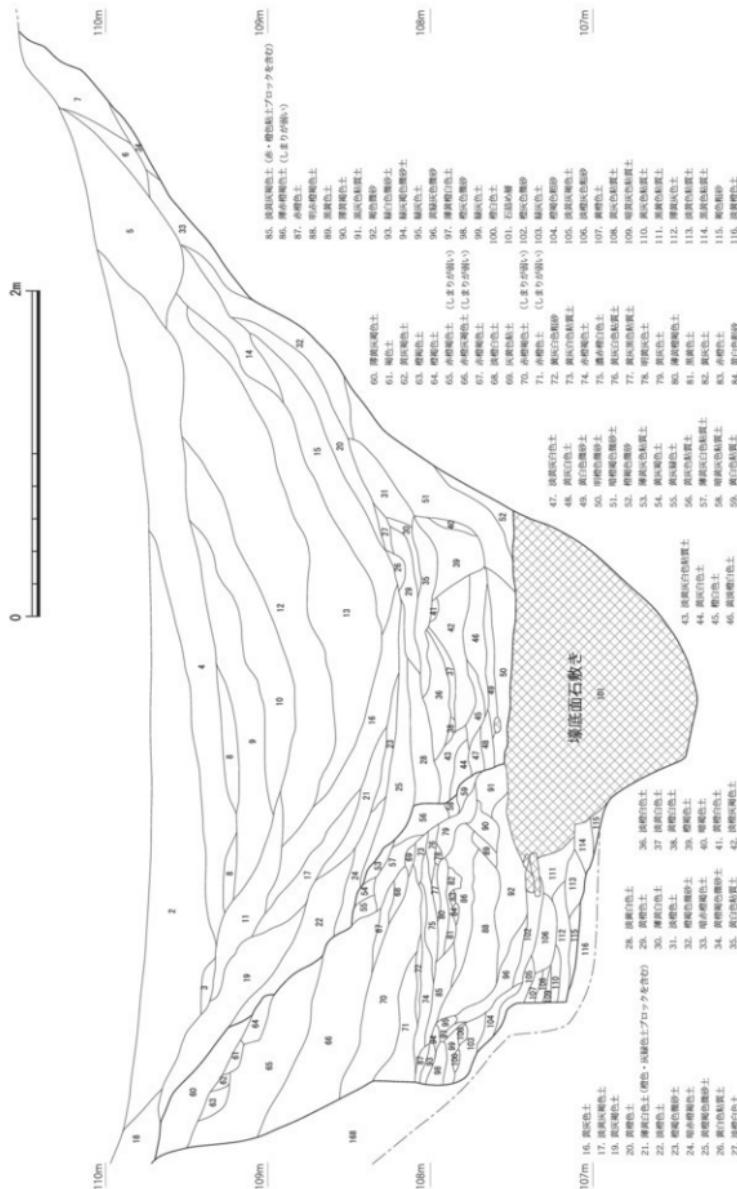


图 21 西石室北侧 墓丘一周壙断削土断面図③ (S = 1/30)

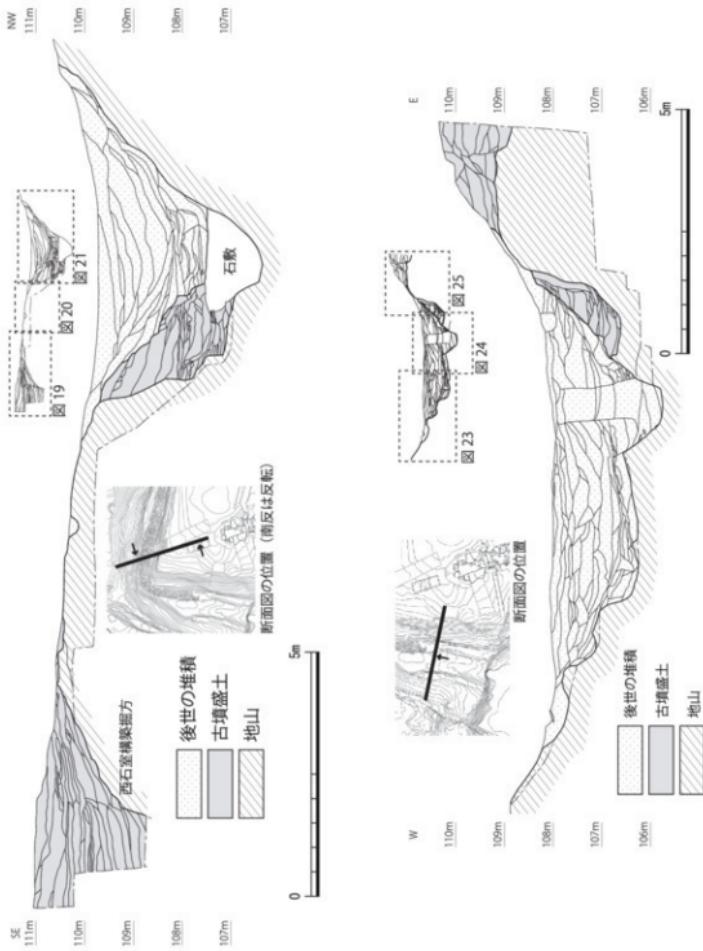


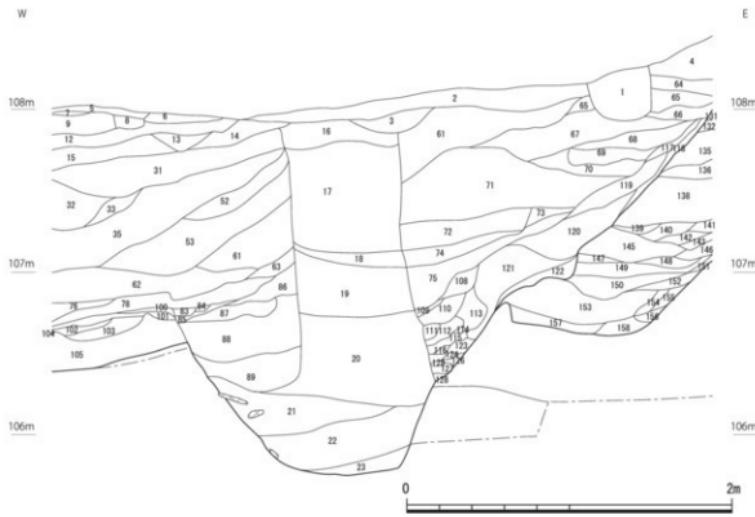
図22 西石室北側・西側 墳丘一周塙断面図 ( $S = 1/100$ )

墳丘の表面には葺石や貼石などの外表施設は施されていなかったと考えられる。検出した墳丘面にその痕跡は認められず、周塙埋土や周辺への流出土からも、外表施設に相当すると考えられる石材は出土していない。

墳丘には埋葬施設として南側に開口する2基の横穴式石室が設けられている。これまでにも触れてきた東石室と西石室である。いずれも全長約13mを測る大型の横穴式石室である。いわゆる「双室墓」「双室墳」と呼ばれる形式の古墳である。



图 23 西石室西侧 填丘—周壕断剖面图① (S = 1/30)



1. 黄色土	(しまりが弱い)	72. 喀褐色土	124. 喀灰褐色土
2. 黄色土		73. 明褐色土	125. 喀色土
3. 薄褐色砂土		74. 明褐色土	126. 黄褐色土
4. 喀褐色土		75. 喀褐色土	127. 喀褐色土
6. 喀褐色土		83. 黄灰褐色土	128. 黄灰褐色土
8. 喀褐色土		84. 喀灰褐色土	131. 喀色土
13. 喀褐色土		85. 喀灰褐色土	132. 明褐色土
14. 黄褐色土		86. 喀灰褐色土	135. 喀褐色土
16. 喀色土		87. 喀灰褐色土	136. 喀色褐色土
17. 喀褐色土		88. 喀灰褐色土	138. 喀褐色土
18. 喀色土		89. 明褐色土	139. 喀褐色土
19. 喀褐色土		100. 喀灰褐色土	140. 黄灰褐色土
20. 喀褐色土	(深緑色土のブロックを多く含む)	103. 黄灰褐色土	141. 黄灰褐色土
21. 黄褐色土	(深緑色土のブロックを含む)	108. 喀灰褐色土	142. 喀褐色土
22. 喀褐色土	(深緑色土のブロックを多く含む)	109. 黄灰褐色土	143. 黄灰褐色土
23. 喀灰褐色土		110. 喀灰褐色土	145. 喀灰褐色土
33. 喀色土		111. 喀灰褐色土	146. 喀灰褐色土
52. 喀褐色土		112. 喀灰褐色土	147. 喀灰褐色土
53. 喀褐色土		113. 喀褐色土	148. 喀灰褐色土
61. 喀褐色土		114. 黄灰褐色土	149. 黄灰褐色土
63. 黄褐色土		115. 喀灰褐色土	150. 黄灰褐色土
64. 黄褐色土		116. 喀色土	151. 喀灰褐色土
65. 明褐色土		117. 喀褐色土	152. 喀褐色土
66. 喀色土		118. 明褐色土	153. 喀灰褐色土
67. 喀褐色土		119. 明褐色土	154. 喀褐色土
68. 喀色土		120. 喀褐色土	155. 喀灰褐色土
69. 喀褐色土		121. 黄灰褐色土	156. 喀白色土
70. 喀褐色土		122. 明褐色土	157. 喀黄褐色土
71. 喀褐色土	(深緑色土のブロックを多く含む)	123. 黄灰褐色土	158. 喀灰褐色土

図 24 西石室西側 填丘一周壕断面図② (S = 1/30)

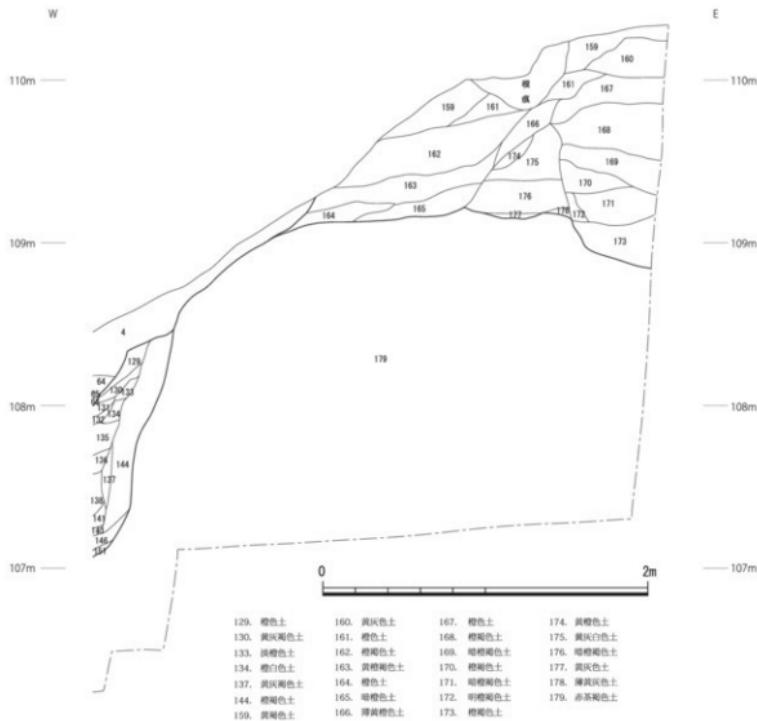
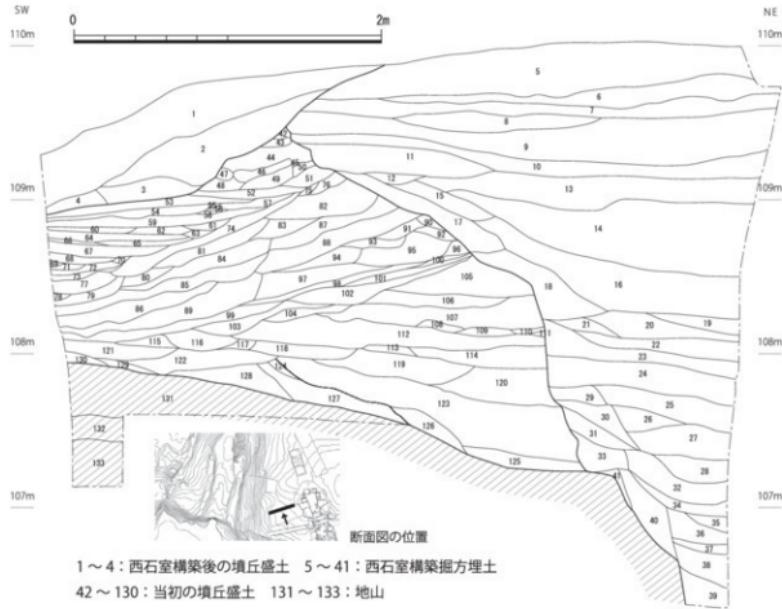


図25 西石室西側 墳丘一周壕断面土層断面図③ (S = 1/30)

2つの石室は墳丘主軸の東と西に分かれて築かれているが、その構築位置は東・西で様相が異なる。東石室は墳丘主軸を境にした墳丘東半部のやや西寄りに、石室主軸をほぼ墳丘主軸と揃えた形で構築されている。

一方、西石室は石室主軸が墳丘主軸と大きくずれており、墳丘主軸に対して北で約16度、西に振れしており、平面図上では南南東方向に開口するような形となっている。西石室の主軸は溝道と玄室などで若干の差異があるため、上記の数値は両者の平均を探っている。西石室は墳丘主軸を境とした墳丘西半に位置するが、石室開口部は墳丘主軸線に西接するような位置となる。西石室玄室は墳丘西半部中央付近に位置する。

このため、両石室の全長が近似し、羨門の位置も墳丘前面のほぼ同一ライン上に揃うにも関わらず<sup>2</sup>、墳丘中で奥壁は東石室の方がかなり奥に位置する結果となっている。



1 ~ 4 : 西石室構築後の填丘盛土 5 ~ 41 : 西石室構築掘方埋土

42 ~ 130 : 当初の填丘盛土 131 ~ 133 : 地山

1. 黄褐色土	36. 黄润褐色土	71. 黄润褐色土	106. 黄润灰黑色土 (黑色粘土を多く含む)
2. 植被褐色土	37. 植被褐色土	72. 黑黄褐色土	107. 黄润灰黑色土 (黑色粘土を多く含む)
3. 黄褐色土	38. 明褐褐色土	73. 潜褐色土	108. 黄褐色土
4. 暗褐褐色土	39. 明褐褐色土	74. 潜暗褐色土	109. 黄灰褐色土
5. 黄褐褐色土	40. 暗褐褐色土	75. 潜褐色土	110. 黄润灰黑色土 (黑色粘土を多く含む)
6. 明褐褐色土	41. 植被褐色土	76. 植被褐色土	111. 黄灰褐色土
7. 沼泽褐色土	42. 黄褐色土	77. 植被褐色土	112. 明润灰黑色土 (黑色粘土を多く含む)
8. 沼泽褐色土 (粘晶片岩を含む)	43. 黄润褐色土	78. 明褐色土	113. 潜褐色土
9. 植被黑褐色土	44. 黄褐色土	79. 潜暗褐色土	114. 黄灰褐色土 (黑色粘土を多く含む)
10. 黑褐色土	45. 植被褐色土	80. 潜褐色土	115. 潜褐色土
11. 暗褐褐色土	46. 明褐色土	81. 黄褐色土	116. 黄褐色土
12. 暗赤褐褐色土	47. 暗褐褐色土	82. 潜褐色土	117. 潜褐色土
13. 暗褐褐色土	48. 明褐色土	83. 潜暗褐色土	118. 黄灰褐色土 (暗色ブロックを含む)
14. 暗赤褐褐色土 (粘晶片岩を含む)	49. 暗褐褐色土	84. 潜暗褐色土	119. 潜褐色土
15. 暗褐褐色土	50. 棕色土	85. 黄褐色土	120. 植被褐色土
16. 沼泽褐色土	51. 黄褐褐色土	86. 植被褐色土	121. 黄灰褐色土
17. 沼泽褐色土	52. 植被褐色土	87. 植被褐色土	122. 潜暗褐色土
18. 暗褐褐色土	53. 黏岩より黄褐色土	88. 潜暗褐色土	123. 潜褐色土
19. 黄褐褐色土	54. 植被土	89. 植被褐色土	124. 明褐色土
20. 暗褐褐色土	55. 黄褐色土	90. 黄暗褐色土	125. 黄褐色砂砾土
21. 暗褐褐色土	56. 黑色土	91. 黄褐色土	126. 潜褐色土
22. 黄褐褐色土	57. 棕色土	92. 潜暗褐色土	127. 潜暗褐色土
23. 暗褐褐色土	58. 黄灰褐色土	93. 黄灰褐色土	128. 潜暗褐色土
24. 暗褐褐色土	59. 黄灰褐色土 (暗色ブロックを含む)	94. 明暗褐色土	129. 黑褐色土
25. 植被褐色土	60. 黄灰褐色土	95. 植被褐色土	130. 植被褐色土
26. 暗褐褐色土	61. 植被褐色土	96. 黄褐色土	131. 黑褐色土
27. 植被褐色土	62. 明暗褐色土	97. 植被褐色土	132. 黑褐色土
28. 黄褐褐色土	63. 潜褐色土	98. 黄褐色土	133. 黑褐色土
29. 黄褐褐色土	64. 潜褐色土	99. 黄褐色土	
30. 暗褐褐色土	65. 棕色土	100. 黄褐色土	
31. 黄褐褐色土	66. 黄褐色土	101. 黄灰褐色土 (暗色ブロックを多く含む)	
32. 潜褐色土	67. 潜褐色土	102. 黄褐色土	
33. 黑褐色土	68. 植被土	103. 潜暗褐色土	
34. 黑褐色土	69. 黑色土	104. 潜暗褐色土	
35. 潜褐色土	70. 黄褐色土	105. 黄灰褐色土 (黑色粘土を多く含む)	

図 26 西石室玄室西側 填丘断面土層断面図 (S = 1/30)

2つの石室には構築時期に差が存在することが発掘調査で明らかになっている。詳細はそれぞれの石室の項で述べるが、東石室が6世紀末、西石室が7世紀前半に構築されたと考えられる。

2つの石室には石室構造自体に時期的前後関係が見られる。加えて、墳丘内部の断面調査（図16・19・26）および墳丘前面における土層確認（28・29）によって、盛土による墳丘構築と東石室の構築、西石室の構築についての工程の情報が得られており、これも西石室が後に構築されたものであることを示している。すなわち、東石室の構築が当初の墳丘の築造と並行して進められているのに対し、西石室の構築は墳丘上部から再度、石室構築のための掘方（墓壙）を掘削して作業が行われているのである。

図12では東石室構築のための掘方への盛土と墳丘構築盛土が一体の作業として行われている様子が確認できる。また、図16・19では西石室構築掘方が現在の墳頂部、東石室の天井石高付近から掘り込まれていることが確認できる。より厳密には、当初の墳頂部が削平されてしまっているため、この掘方が当初の墳丘完成後、その頂部から掘り込まれたものであるかは確実ではない。しかし、両石室の形態や出土遺物、構築方法の差異を合せて考えた場合、両石室の構築に時期差があると考えても差し支えは無いと言えるだろう。

墳丘・石室の構築についての工程をまとめると、①当初の墳丘・東石室の構築（当初の墳丘の完成）→②しばらく後に西石室構築・墳丘再構築（2度目の墳丘の完成）となる。図26の1～4層は西石室構築後に墳丘外面を再度整えるための盛土であると考えられる。

西石室主軸が墳丘主軸に対してズレが大きい点は、西石室が後に造り足されたものであることに起因する可能性が考えられる。ことによると、石室を構築するための作業空間の問題であったのかもしれない。

東石室北側および東側の墳丘断面調査の際には、石室構築盛土下で3基の柱穴を検出している（図7の140・141・142SP）。いずれも地山上に掘り込まれている。140SPは東石室奥壁の北側、142SPは東石室玄室の東側、141SPは墳丘東辺寄りに位置する。これらの柱穴がどのような用途に用いられたのか正確には不明であるが、検出地点から石室および墳丘の構築の中段階に用いられたものと考えられる。同様な柱穴が周辺に他にも存在する可能性は高いと考えられる。

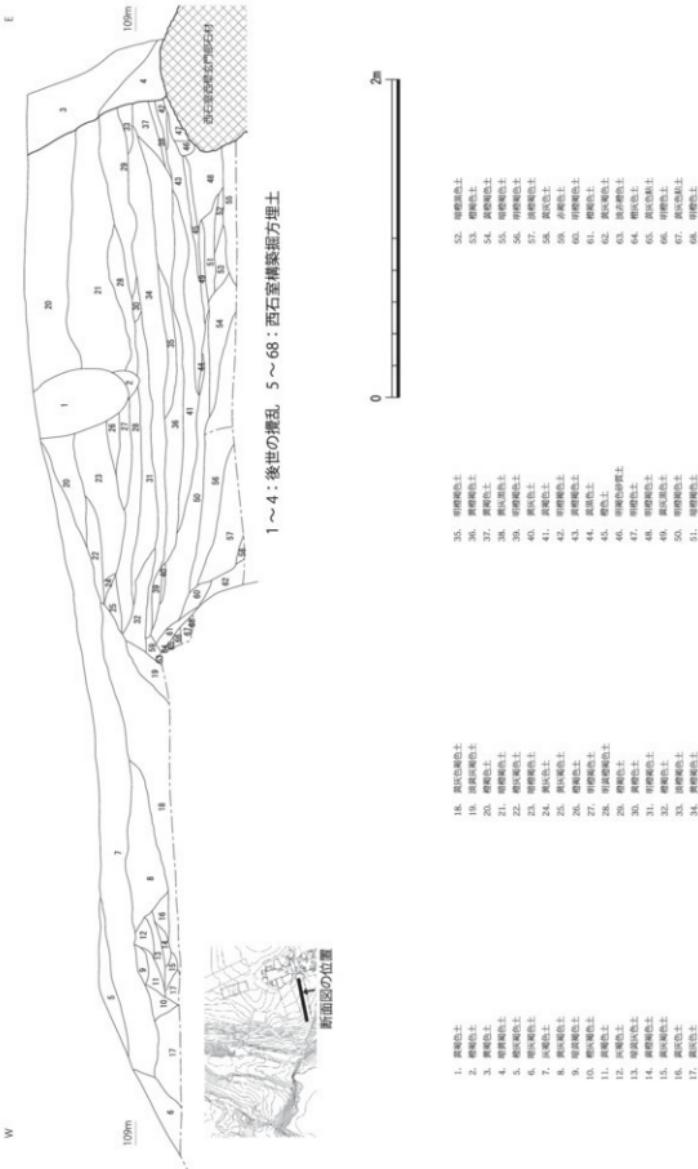
#### 地山と墳丘盛土

植山古墳は丘陵南斜面（地山）を削り出して墳丘の核とし、その上に盛土を施して墳丘を構築している。ここでは地山と盛土についての詳細を述べる。なお、図28・29は2012年度調査で墳丘前面の斜面の土層を見通し立面化したものである。他の断面調査区の土層図のような断面図とは性質が異なるので注意されたい。

植山古墳周辺の地山は、しまりの強い褐灰色土・黄灰色土や、赤色・橙色・黄橙色・黄色の花崗岩風化土である。古墳築造時や後世における地山への掘削度合いが強い地点では、花崗岩風化土が検出される傾向にある。また、丘陵上では表土直下で花崗岩風化土が検出される場合が多い。

古墳築造以前の旧地形は、概して北から南に向かって低くなる斜面であったと考えられる。墳頂平坦面の北端付近では標高110.5mで地山を検出しており（図19）、一方、墳丘前面のもっとも低い地点（図28 西石室前付近）では標高102.8mで地山を検出している。また、東西方向では墳丘から西側の丘陵部分に向かって地山が高くなる様子が確認できる（図28）。おそらくは東側の丘陵に向かっ

E

图 27 西石室玄門部西側 墳丘断面図 ( $S = 1/30$ )

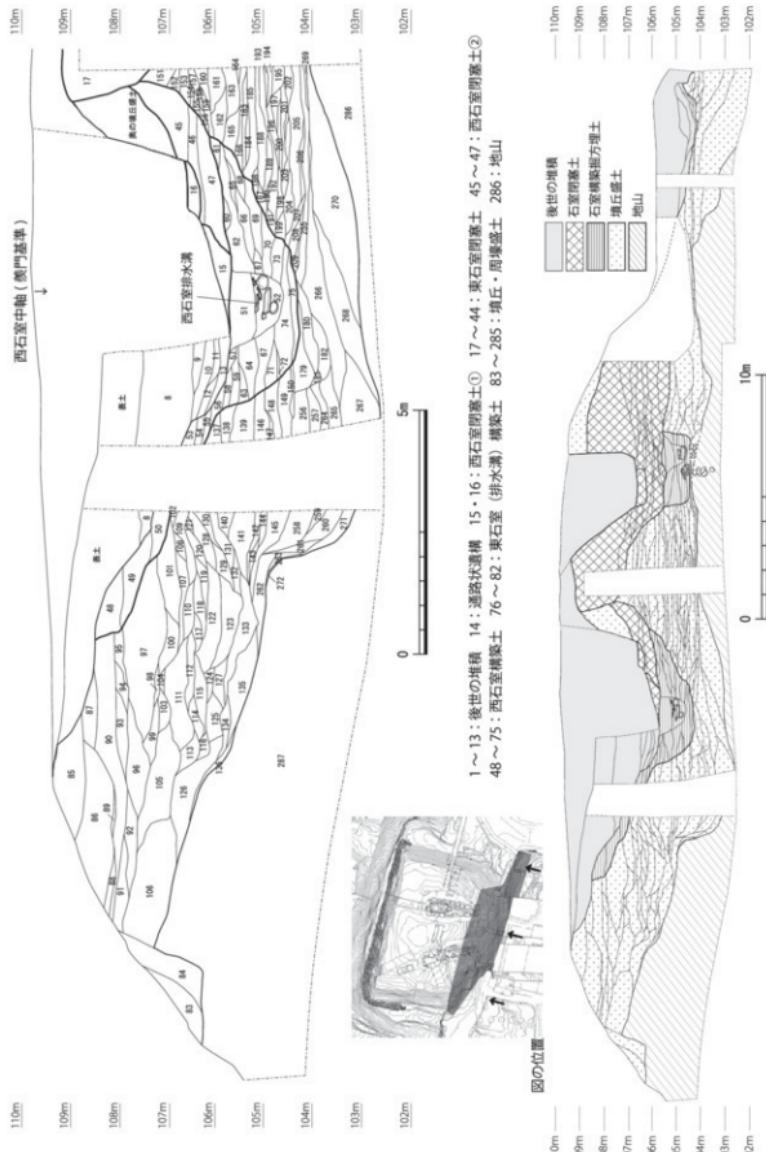


図 28 塩丘前面 土層図① (S = 1/100 連結図: S = 200)

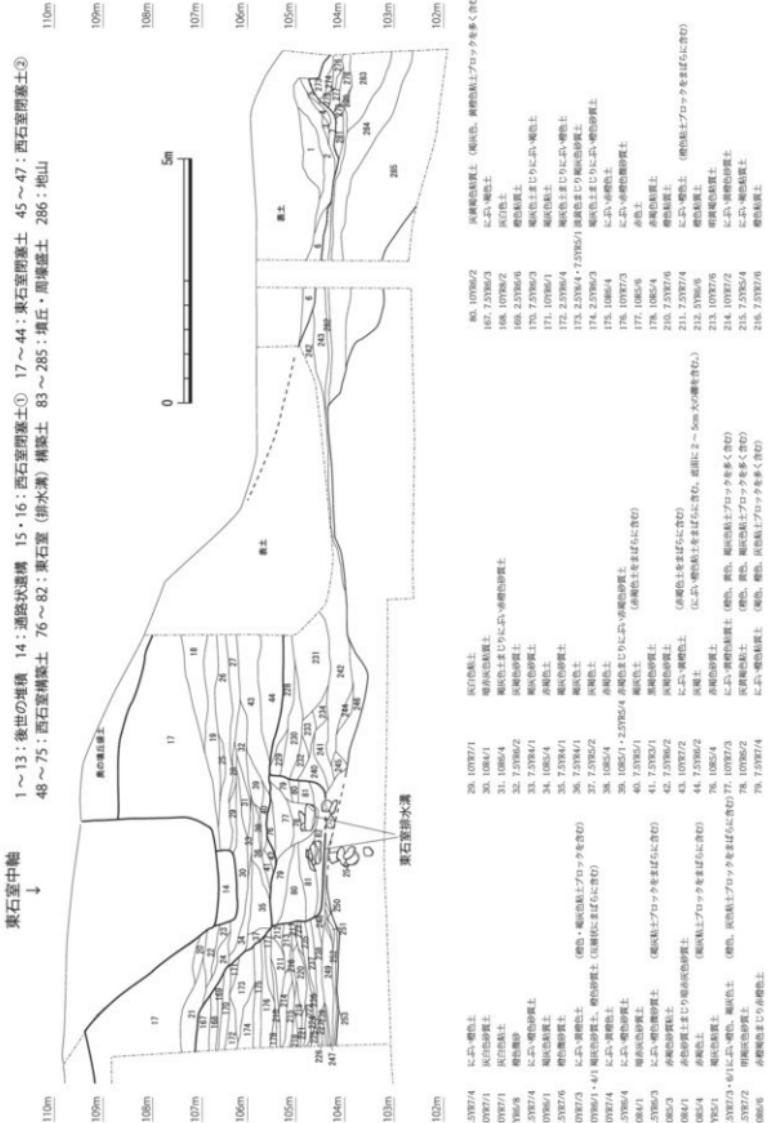


図29 塗丘前面 土層図② (S = 1/100)

8. 10YR5/6	赤色土 (褐色・褐色粘土ブロックを含む)	121. 2.5YR5/6	明赤褐色土
9. 10YR8/4	浅黄褐色粘土(褐色、褐色、褐灰色、褐灰粘土ブロックを含む)	122. 10YR8/6・5/1	黄褐色まじり褐灰色粘土
10. 10YR8/2	褐色土(米白色粘土)	123. 10YR8/6・5/1	黄褐色まじり褐灰色粘土
11. 10Y5/3	赤褐色土	124. 10YR7/2	ふじ・赤褐色土
12. 10Y8/3	浅黄褐色粘土質(褐色粘土ブロックを含む)	125. 2.5Y5/2	灰褐色粘土
13. 10Y7/1	米白色土	126. 10R5/6	赤色土 (褐色粘土ブロックをわざかに含む)
15. 10YR8/4・5/1	浅黄褐色粘土(褐色粘土)	127. 5Y7/4	浅黄褐色土 (褐色粘土ブロックを少含む)
16. 10YR8/3	浅黄褐色粘土 (米白色粘土ブロックを含む)	128. 2.5YR6/4	ふじ・褐色土 (褐灰色・黄褐色粘土ブロックを多く含む)
45. 2.5YR7/4	赤褐色粘土質(褐色土)	129. 2.5YR8/4	ふじ・赤褐色粘土質 (褐灰色・黄褐色粘土ブロックを多く含む)
46. 2.5YR6/6	褐色土 (黄褐色粘土ブロックをまばらに含む)	130. 10R5/6	赤色土 (黄色粘土質)
47. 10R6/6	赤褐色粘土質 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)	131. 2.5Y5/1	黄灰褐色粘土質
48. 2.5Y9/4	ふじ・褐色土(褐色、褐灰粘土ブロックを含む)	132. 10YR8/4	浅黄褐色粘土
49. 2.5YR6/4	ふじ・褐色粘土(褐色粘土ブロックを含む)	133. 2.5YR5/4・5/1	浅黄褐色まじり褐灰色粘土
50. 10Y7/4	ふじ・褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)	134. 10R5/4	赤褐色粘土質
51. 10YR5/2・4/1	褐黄褐色土 (褐色粘土)	135. 2.5YR5/4	ふじ・赤褐色粘土質 (褐色・褐灰色粘土ブロックをまばらに含む)
52. 10Y7/3	ふじ・褐色粘土質	136. 2.5YR6/4	浅黄褐色土 (褐色砂質)
53. 2.5YR5/4	ふじ・褐色砂質	137. 2.5Y5/1	灰褐色粘土
54. 2.5Y7/2	褐黄色土	138. 10YR5/1・7/3	褐灰まじり褐灰色粘土
55. 2.5YR6/4	ふじ・褐色土 (褐灰色粘土ブロックを含む)	139. 7.5YR7/4	ふじ・褐色粘土質 (褐灰色粘土ブロックを含む)
56. 10YR6/2	褐黄褐色土	140. 2.5YR6/6	褐色土 (褐色・褐灰色粘土ブロックを含む)
57. 10YR7/2	ふじ・褐黄色土	141. 10YR7/4	ふじ・黄褐色土 (褐灰色粘土ブロックを多く含む)
58. 7.5YR6/2	褐灰色土	142. 10YR7/4	褐色砂質 まじり褐灰色粘土質
59. 10Y5/1	褐灰色粘土質	143. 2.5Y7/4	浅黄褐色粘土 (褐灰色粘土ブロックを含む)
60. 10YR8/4	褐灰色粘土 (褐色砂質)	144. 2.5Y7/4	浅黄褐色土 (褐色粘土)
61. 10YR6/6・10YR8/6	赤褐色砂質 まじり褐灰色粘土	145. 10YR5/1	褐灰褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
62. 10YR5/1・7/3	褐灰色土 まじり・褐黄色土	146. 5YR5/1	褐灰褐色粘土 (褐色粘土)
63. 2.5YR6/3	ふじ・褐色土	147. 7.5YR7/3	褐色粘土
64. 10YR8/6・6/1	黄褐色 まじり褐灰色粘土	148. 10YR5/1	褐灰色粘土
65. 5YR7/1	褐灰褐色粘土	149. 7.5YR8/1	褐綠土 まじり褐灰色土
66. 10YH6/1	褐灰色土	150. 7.5YR8/1	褐灰褐色砂質
67. 7.5YR4/1	褐灰色土	151. 5YR6/6	褐綠土 まじり褐色土
68. 5YR4/1	黄褐色 まじり褐灰色土	152. 2.5YR6/6	褐色粘土質 (褐灰色粘土ブロックを含む)
69. 5YR5/1	褐灰色粘土質	153. 10YR7/4	ふじ・黄褐色土
70. 7.5YR7/4	ふじ・褐色土 (褐灰色粘土ブロックを含む)	154. 2.5Y7/3	浅黄褐色土
71. 7.5YR5/1	褐灰色土	155. 2.5YR5/4	ふじ・褐褐色砂質
72. 7.5YR7/6	褐黄色砂質	156. 2.5YR6/2	灰赤色粘土
73. 5YR4/1	褐灰色粘土質	157. 2.5YR6/6	褐色土 (褐灰色粘土ブロックをまばらに含む)
74. 7.5YR5/1	褐灰色粘土質	158. 5YR5/3	ふじ・褐色砂質
75. 7.5YR6/4	ふじ・褐色粘土質	159. 7.5YR5/1	褐灰褐色粘土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
75. 7.5YR6/3	ふじ・褐色粘土質	160. 7.5YR6/4	ふじ・褐色粘土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
84. 7.5YR6/3・2.5YR6/4	褐灰色土 まじり・褐色土 (褐色粘土)	161. 2.5YR6/6	褐色土
85. 2.5YR6/4	褐色粘土質	162. 10YR7/4	褐灰土 まじり・黄褐色粘土
86. 5YR6/3	ふじ・褐色土 (ビンク石片をわざかに含む)	163. 2.5YR6/4	ふじ・褐色土 まじり・黄褐色粘土
87. 10Y5/4	褐色粘土質	164. 10YR6/4	褐色土 (褐色粘土)
88. 10YR7/3	ふじ・褐黄色土	165. 10YR7/4・5/1	ふじ・黄褐色 まじり褐灰色土
89. 2.5Y8/1	淡黄褐色土	166. 10YR7/7	ふじ・黄褐色粘土 まじり褐色粘土 (褐灰色・褐色粘土ブロックを含む)
90. 10R5/6	赤色土 (黄色粘土ブロックをまばらに含む)	178. 10R6/8	赤褐色粘土 (褐色粘土)
91. 10R5/3	赤褐色粘土	180. 2.5YR4/1	赤褐色粘土 (褐灰色)
92. 5Y7/3	浅黄褐色土	181. 10YR6/2	褐黃褐色粘土
93. 5Y7/2	灰白色土	182. 10YR5/1・8/6	褐灰まじり褐褐色土 (3cm 大の礫を含む)
94. 7.5Y8/3	褐黄色土	183. 10R6/6	赤褐色粘土
95. 10R5/6	赤色土	184. 5YR5/1	ふじ・褐色砂質
96. 10R5/6	赤色土 (褐色粘土ブロックを含む)	185. 10YR8/6	褐褐色土
97. 10R5/3	褐色土 まじり赤褐色粘土	186. 10YR7/3	ふじ・褐色粘土
98. 2.5YR4/4	褐色土	187. 10YR6/6	褐褐色土
99. 7.5YR7/4	ふじ・褐色土	188. 10YR7/4	ふじ・黄褐色粘土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
100. 7.5YR5/1	褐灰褐色粘土 (褐色・褐色粘土ブロックを含む)	189. 2.5YR7/6	褐色砂質
101. 7.5YR6/4	褐灰色土 まじり・褐色土 (褐色・褐色粘土ブロックを含む)	190. 2.5Y5/6	黄色土
102. 10R5/8	赤色砂質	191. 5YR5/1	褐褐色粘土
103. 10YR7/2	ふじ・褐黄色土	192. 10YR7/4	ふじ・黄褐色土
104. 10R5/6	赤褐色	193. 2.5Y7/2	灰黃褐色土
105. 2.5Y7/4	浅黄褐色粘土 (褐灰色粘土ブロックをまばらに含む)	194. 10R6/6	赤褐色粘土
106. 2.5YR6/6	浅黄褐色土	195. 2.5Y7/4	浅黄褐色砂質
107. 2.5Y7/4	浅黄褐色土	196. 2.5Y7/2	灰黃褐色粘土
108. 10R5/6	赤色の土	197. 10YR6/1	褐灰褐色粘土
109. 5YR5/1	褐灰褐色土 (黄色粘土ブロックを含む)	198. 7.5YR7/4	ふじ・褐色土
110. 2.5YR6/6	褐色土 (褐色粘土ブロックを含む)	199. 2.5Y5/6	黄色土
111. 2.5YR5/4	ふじ・褐色粘土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)	200. 10YR8/3	浅黄褐色土
112. 10Y5/1	褐灰色土	201. 7.5YR5/3	ふじ・褐色土
113. 10YR7/3	ふじ・黄褐色粘土	202. 10YR8/4	浅黄褐色砂質
114. 10R6/6	赤褐色土	203. 10YR7/2	ふじ・黄褐色土
115. 10R6/6	赤褐色土 (黄色粘土ブロックを含む)	204. 2.5Y5/2	灰黃褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
116. 2.5Y7/4	浅黄褐色土	205. 10YR7/2	ふじ・黄褐色粘土 (褐色粘土ブロックをわざかに含む)
117. 10R5/6	赤色粘土	206. 2.5Y5/2	灰黃褐色粘土 (褐色粘土)
118. 10YR7/4・5/1	ふじ・黄褐色 まじり褐褐色粘土	207. 7.5YR6/2	灰褐色粘土
119. 10YR6/1	褐灰色粘土	208. 10YR7/3	ふじ・褐褐色土
120. 10R5/6	赤色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)	209. 5YR4/1	褐褐色粘土

図 30 塗丘前面 土層図③

217. 7SYR5/1	褐灰色土
218. SYR7/6	褐色粘土質土
219. 7SYR5/3	にぶい褐色細砂質土
220. SYR5/3	にひい褐色粘土
221. 10YR7/1	灰褐色土
222. 7SYR6/3	にひい褐色粘土質土
223. SYR8/1	褐灰色土
224. 7SYR5/6	褐色粘土
225. 7SYR8/6	浅黃褐色細砂土
226. SYR5/1	褐灰色土
227. SYR7/1	明褐色粘土
228. 2SYR6/6	褐色粘土質土
229. SYR6/6	灰褐色土
230. 10R8/6	赤褐色粘土質土 (褐粘土ブロックを含む)
231. 10YR6/2	灰褐色土 (1~3cmの礫を含む)
232. 2SYR5/6	明褐色粘土質土
233. 2SYT7/3	浅黄色じり褐色砂色粘土
234. 5YR6/4	にひい褐色細砂じり土
235. 10YR7/2	にひい褐色粘土質土
236. SYR5/6	明褐色粘土
237. SYR5/4	にひい褐色粘土質土
238. 7SYR5/2	灰褐色砂質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
239. SYR6/6	褐色粘土
240. 2SYR5/1	赤褐色じりにひい褐色土
241. 7SYR7/3	にひい褐色細砂質土
242. 5YR6/4	にひい褐色土
243. 7SYR6/6	褐色砂質土 (赤色・黄色・灰色粘土ブロックを含む)
244. 7SYR7/3	褐色砂質土
245. 2SYR7/6	褐色砂質土
246. SYR7/4	褐色粘土じりにひい褐色砂質土
247. 7SYR7/2	明褐色粘土
248. 7SYR6/2	灰褐色粘土質土
249. 10YR6/1	褐褐色粘土質土
250. 2SYT7/4	浅褐色粘土質土
251. 2SYR4/1	赤灰褐色土
252. 2SYR7/2	灰褐色粘土
253. 10R5/4	赤褐色粘土 (被熱解)
254. 10R5/6	赤色粘土質土 (被熱解、炭化物を含む)
255. 5YR6/1	褐灰色粘土質土 (炭化物をまばらに含む)
256. 10YR8/4	浅黃褐色粘土質土 (褐灰色・褐色粘土ブロックを多く含む)
257. 2SY3/1	灰褐色土
258. 10YR8/4	浅黃褐色粘土質土 (褐灰色・褐色粘土ブロックを多く含む)
259. 10YR5/1	褐灰色粘土 (黄色粘土ブロックをまばらに含む)
260. 10YR7/3	にひい黄褐色粘土質土 (褐粘土ブロックを含む)
261. 5YR6/4	にひい褐色細砂じり褐色粘土質土
262. 10R6/6	赤褐色土 (黄色粘土ブロックを含む)
263. 10R5/6	赤色土 (黄色粘土ブロックを含む)
264. 1.3YR5/1	褐灰色粘土質土
265. 10YR7/2	にひい黄褐色土
266. 10YR5/1	褐灰色土 (黄色粘土ブロックを含む)
267. 10YR6/2	灰褐色粘土質土
268. 7SYR5/2	灰褐色土 (黄色粘土ブロックをまばらに含む)
269. 2.2YR5/1	赤褐色土 (炭化物を含む)
270. 2SYT7/4	浅黃褐色粘土質土 (炭化物と官能切土の混合)
271. 2SYT7/4	浅黃褐色土 (褐灰色・褐色粘土ブロックを含む)
272. 2SYT7/2	灰褐色土
273. 10R5/6	赤褐色土
274. 2.5YR7/2	灰褐色粘土
275. 10YR7/3	黄褐色粘土質土
276. 10YR8/2	灰白色砂質土
277. 7SYR6/2	灰褐色土
278. 2.5YR4/2	にひい黄褐色土
279. 3YR6/6	黄褐色砂質じり褐色粘土質土
280. 2.5YR4/4	にひい褐色土
281. 1.5YR7/6	褐色砂質土 (炭化物を多量に含む)
282. 2SYR6/6	褐色底じり褐色土
283. 2.5YR6/8	褐色粘土
284. 5YR6/6	褐色粘土
285. 10YR5/1	褐灰色粘土質土 (地山) (田表土層、下層はご黄味土を含む)
286. 10YR5/6	赤色粘土土
287. 地山 (上層の褐灰色土 (田表土) から下層の灰褐色～褐灰色の岩層に漸移的に変化)	

図 31 墳丘前面 土層図④

ても同様に地山は高くなっていたと考えられるが、調査範囲内では明確にできていない。西側の丘陵と比較して東側の丘陵は墳丘からの距離が離れており、西側の地山の傾斜よりも東側は緩やかな斜面であったと考えられる。ことによると、東側周壁が西側よりも広くなっていることは、この旧地形の影響であるかもしれない。

周壁の掘削を行って墳丘の土台となる地山の高まりを丘陵から切り離した後は、墳丘内の範囲について地山の削り込みは最小限に抑えているようで、墳丘内部で盛土の直下が花崗岩風化層まで削られていることが確認できる地点は少ない。石室を構築するために地山を掘り込む必要のある石室掘方部分はその例外である。

墳丘前面（図 29）と墳丘南東隅断面（図 33）では、地山の直上に焼土や炭化物を多く含む粘土質の盛土層が薄く堆積していることを確認している。範囲は東西方向が西石室前面付近から東側の一帯（東側周壁を含む）である。墳丘中央へ北側（奥側）では同様の状況は確認されていない。少なくとも墳丘の南側においては地山上に大規模な盛土を施し始める段階に火を用いるような整地作業が行われたものと考えられる。なお、この作業に先立って西石室前面の地山の谷最深部は、周辺の地山を掘削した土で埋められており（図 28 の 256 ~ 270 層）、ある程度の平場を確保して整地・盛土作業を進めていったようである。

墳丘盛土は主として橙色・黄橙色・黄灰色系の粘土質土・砂質土からなり、厚さ約 0.05 ~ 0.25 m 程度の単位で水平に施していく。墳丘の核にあたる墳丘主軸付近の盛土は厚さ約 0.05 ~ 0.10 m を単位とする非常に細かな盛土を施している。その一方、墳丘の外側、とくに西側は主軸付近よりも粗い単位の盛土を施す傾向にある。

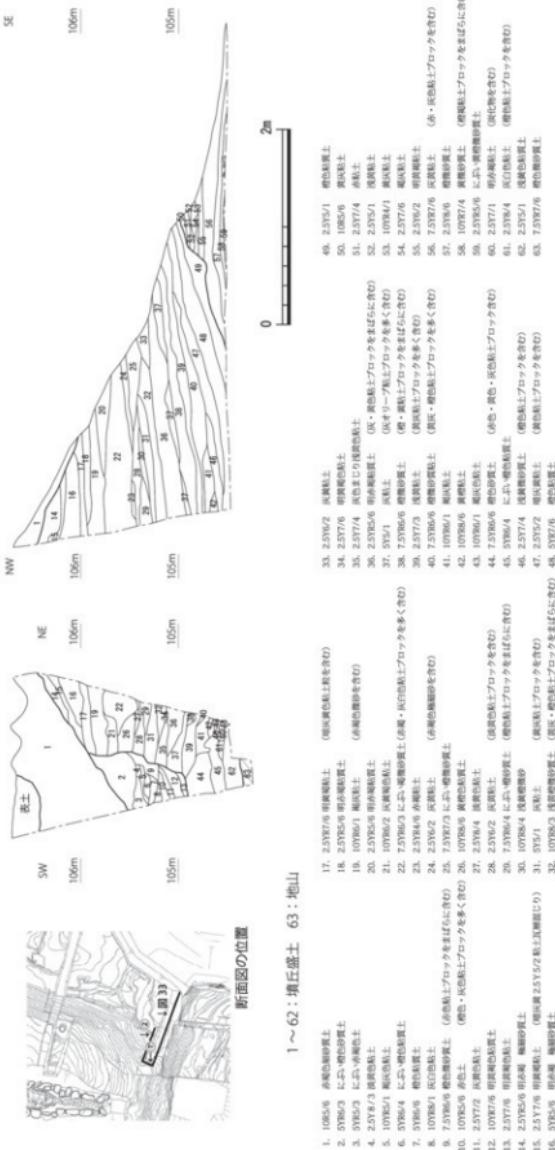


図 32 塡丘南東隅 断割土層断面図① (S = 1/50)

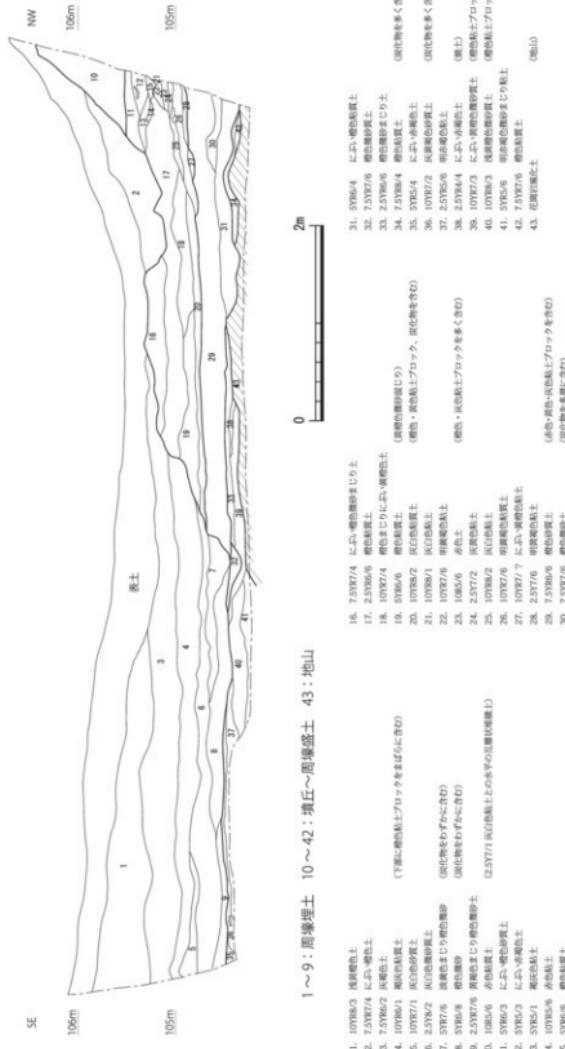


図 33 塗丘南東隅 断割土層断面図② (S = 1/50)

## 第2項 周壕

墳丘の西・北・東には『匁』字形に周壕が巡る。

壕の規模は上幅約7～10m、底幅約1.6～3.0mを測る。この数値は主に周壕の形状が安定している西側および北側で計測したものである。東側では最大幅約10mを超えるが、調査範囲の制約もあり、壕の東肩を始めとする全体像は不明である。墳丘東側断面（図12）と墳丘前面（図29）では、調査範囲の東端付近で地山ないし盛土が東に向かって緩やかに上がりを見せており、調査範囲のやや東に壕の東肩が存在する可能性は考えられる。

壕の基本的な断面形は逆台形を呈している。断面形は北側周壕では全体にほぼ同じ形状を呈し、西側周壕では北から南に向かって底面および上面がともに広がる。ただし、西側周壕の南半は後世の改変を受けている。

周壕の外側への斜面は、北側では約45～50度ときつい直線的な傾斜である。一方、西側は南に向かうほど緩やかになり、南半では約30度前後の傾斜となる。

北側および西側の壕底には、飛鳥川上流域の花崗岩と吉野川流域の結晶片岩を用いた、幅約1.0～1.2mの石敷きが施されている。石敷きは、人頭大の花崗岩を下位に厚く積み重ね、上部に15～25cm大の扁平な結晶片岩を敷き詰める構造をしている（図版12）。断面確認を行った墳丘北西隅での石敷きの厚さは約1.2mを測る（図21）。

後世の改変を受けているが、当初は西側周壕の南半にも石敷きは存在していたと考えられ、溝状の痕跡が残されている。この地点は後世に里道として用いられている。石材を抜き取った後に、そのような利用が行われ始めたと想定される。植山古墳周辺の堆積土には結晶片岩の破片がしばしば紛れている。また、墳丘盛土や墳丘前面の整地層からも少量ながら破片が出土することがある。

第1節で述べたとおり、断面観察によって石敷きの墳丘側には盛土が部分的に載っていたと考えられ、石敷きの構築後、墳裾の最終的な化粧土が施されたと想定される。

石敷きの東端は、墳丘の北東コーナー裾にあたる地点である（図版13上）。石敷きの上面高はこの地点が最も高く、西・南に向かって次第に低くなる。北東端と南西端では上面高で約2mの比高差がある。

丘陵南斜面に位置する植山古墳は、絶えず西・北・東の丘陵上からの雨水の流入に晒されることとなる。石敷きは西・南へ向かう流水をその内部に取り込むことによって、墳丘裾や周壕底の損傷を軽減する機能をもたせて設計・施工されたと考えられる。当然、古墳の外観を整える意味も同時にあつたと考えられる。

周囲からの雨水等の流入に晒されている点は現在も同様である。調査中における現地での観察では、石敷き部分に流れ込んだ雨水は周壕の南西端へ流れ出るのではなく、大部分がそのまま地中へと取り込まれているようであり、墳丘裾の保護の役割は実際に果たされているようである。

西側周壕および東側周壕の南端からさらに南、前庭部に向かって周壕がどのように接続していたかについては後世の削平により、正確なことは不明である。西側周壕の南端は遺構面である地山が削られ約1.4mの段差が出来てしまっている。その南側にあたる南西トレンチでは石敷きの延長部分で2列の柱列が見つかっている。その周辺に壕状の落ち崖みが見られないことを踏まえると、西側では墳

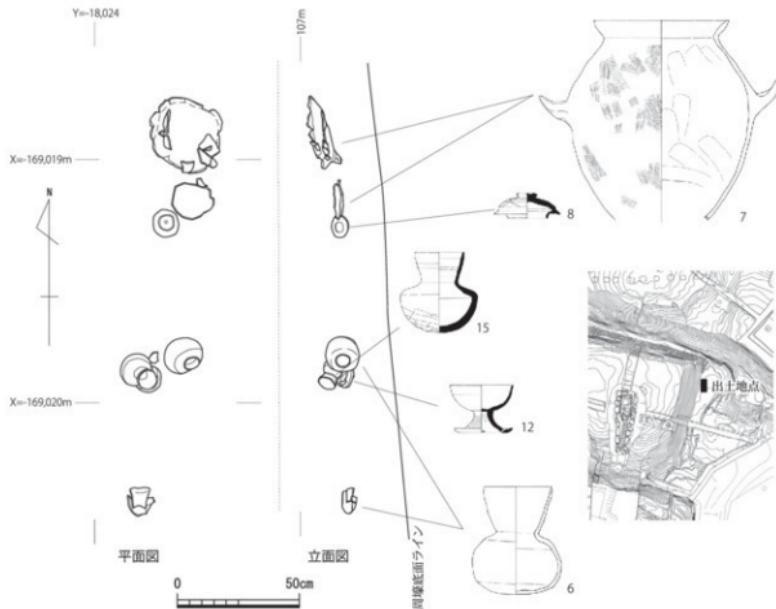


図34 東側周塙 遺物出土状況図 (S = 1/20)

丘前面付近から南では、西側の丘陵の切れ目とともに塙が自然に消失する形であったことが推測される。東側周塙の延長部にあたる1トレンチでは調査区北壁(図29東端)で塙底を断面確認できるが、1トレンチ平面ではその塙底高さから約2m下まで後世の改変が及んでおり、前庭部への接続の復元は困難である。塙底の断面形は西側より緩やかな弧を描いており、こちらも前庭部になだらかに繋がって溝としての形状を自然に消失させていた可能性を考えておきたい。

周塙からは古墳時代以降の遺物が出土している。東側周塙北半、墳丘北東コーナーからやや南の地点、周塙底面のやや上から墳丘裾ラインに沿うような形で土器が並んで出土している(図34・図版13)。

### 第3項 出土遺物

墳丘盛土内および周壕埋土からの出土遺物について述べる。

墳丘盛土からは土器の小片などが出土しているが、図化できるものは1点のみである。1は墳丘盛土内から出土した須恵器の高环で、全体の約5割が遺存する。当初の墳丘盛土、西石室構築掘方埋土のどちらからの出土であるかは不明である。その他、墳丘盛土からは阿蘇溶結凝灰岩の小片が多数出土している(図版78下はその一部)。出土した石材の大きさは最大約0.15mである。平滑に加工された面をもつものは無い。墳丘盛土内から出土した阿蘇溶結凝灰岩の総重量は約2.5kgである。阿蘇溶結凝灰岩は古墳の周辺を含む調査の各地点から出土しており、その総出土重量は約9.7kgを測る。墳丘盛土以外では、古墳前面の整地層からの出土量が最も多い。



図35 墳丘盛土出土土器 (S = 1/4)

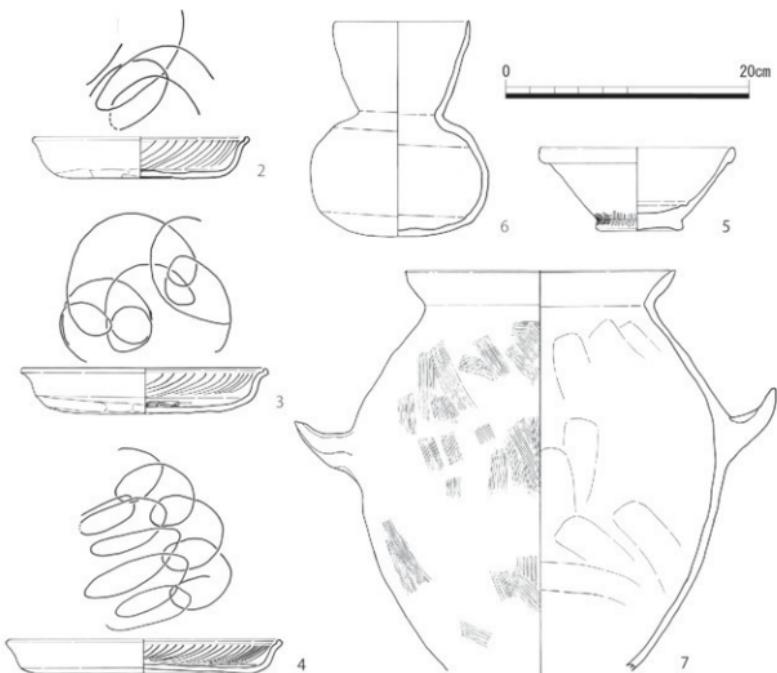


図36 周壕出土土器① (S = 1/4)

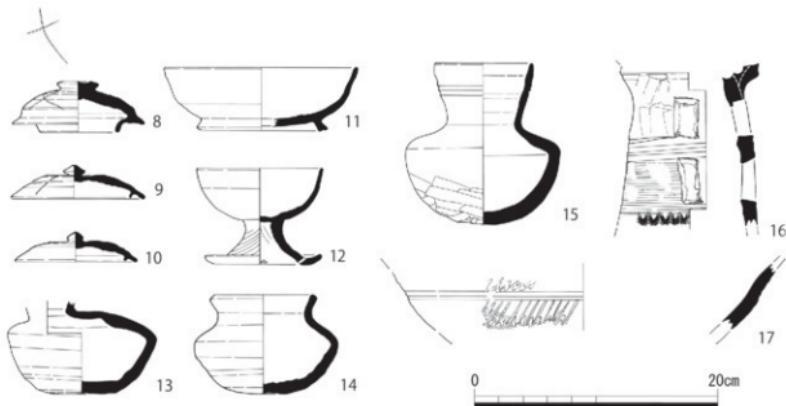


図37 周壕出土土器② ( $S = 1/4$ )

2～17は周壕は周壕埋土の出土遺物である。埋土の上層からは中世～近世の遺物も出土している。6・7・8・12・15は東側周壕の北半、壕底面付近からの出土である(図34)。

2～4は東側埴丘肩の上部から折り重なって出土した土師器の皿である。2は遺存状況が悪い。5は白磁碗の完形品である。舶来品であると考えられる。6は土師器の長頸壺である。7は土師器の把手付壺で、底部を欠く。

8～17は須恵器である。8は壺の蓋である。近くから出土している15の長頸壺とは噛み合わない。9・10は東側の周壕から出土した蓋である。11は高台付の壺である。高台の裾部は丸みをもつ。12は半球形の壺部をもつ高壺であり、6・15と同じ地点から出土した。13は頸部を欠く平壺である。体部は完存しており、全体に丸みを帯びる。14は小型の壺で、作りは全体に粗い。15は長頸壺である。外面上半には軸が付着するが、内面には見られない。16は器台の体部上半である。三方向に透かしを穿つ。17は器台の鉢部である。

18は東側周壕の上層から出土した鉄斧である。下半は中実である。上半は折り返して、断面五角形の袋部を作り出している。外面には木質が付着している。



図38 周壕出土鉄器 ( $S = 1/4$ )

## 第2節 東石室の調査

### 第1項 石室構造

東石室は、植山古墳に存在する2基の埋葬施設の一つで、墳丘の東側に築かれた横穴式石室である（図39）。厳密には、墳丘東半のわずかに墳丘主軸（西）寄りの位置に存在する。ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室で、石室主軸は墳丘主軸に沿う。

発掘調査前の東石室は現存する石材が全て地中に埋まっており、東西幅約8m、南北長約14m、深さ約3m、断面形がU字状を呈する大きな窟みとして存在する状態であった。調査前は石室の痕跡であるという認識はあったものの、石材はほぼ取り去られており、遺存していても基底石程度ではないかという予測をしていた。しかし、実際に掘削を進めるにあたり窟みの底面直下から石材が現れ始め、天井石と玄室上部の石材が失われているだけで羨道側壁についてはほぼ全てが揃っており、石室全体としては比較的良好に石材が遺存していることが明らかとなった。

東石室の石材には、植山古墳から南西の方向に位置する貝吹山周辺で産出される花崗岩が用いられている。貝吹山は福原市と高市郡高取町との境界に位置する標高210mの山である。

石室の規模は全長約13.7m、玄室長約6.5m、同幅約3.0～3.2m、同残存高約2.9m、羨道長約7.2m、同幅最大約1.9m、同残存高約2.2mを測る。全長は奥壁から羨道部南端の石材までの距離を計測している。なお、2012年度の調査において両側壁の羨道部最下段南端にさらに1石が存在することを確認したため、既往の報告よりも羨道長および全長が長くなっている。

石室床面の標高は約105.9mである。

石室表面の構成は奥壁が基底部2石で現状2～3段（2段目西側は1石、東側は2石となっている）、玄室両側壁は基底部4石で現状3段、袖石（玄門）は1石1段、羨道側壁は基底部が4石で3～4段となっている。

このうち羨道はその最上段のラインが平滑で袖石の上面と同じ高さとなる。したがって、羨道の遺存する最上段に天井石が構架されていたと考えられ、当初の羨道高は先述の残存高約2.2mとほぼ差異は無いと考えられる。袖石の石材は東西ともに高さ約2.2mの大型の石材を用い、稜を90度に加工して美しい袖を造り出している。袖幅はわずかに西側が長い。

玄室の本来の高さは不明であるが、石室構造が近いと想定される牧野古墳等を参考にすると、本来の玄室高は4m強であったと推測される。

石室入口石材の前端部ラインは、東壁側では下部が手前に伸び上部が奥に引っ込む綺麗な斜線を描いている。角度は約50度である。西壁側も基本的には同様に下段が手前に伸びているが、最上段の石材が東壁側よりも手前に出る形となっている。石室構築当初、これらの羨道部の石材が正面から見た場合にどの程度露出していたかについては不明である。と言うのも、石室の前面には広く石室閉塞土（詳細は第4節で述べる）が盛られており、羨道部が埋められてしまい、当初の状況が判別できなくなっているためである。2000年度調査の段階では石室閉塞土の存在を認識できていなかったため、閉塞土を含む羨道部周辺の土を除去してしまっている。2012年度の調査では羨道部周辺の再調査を行い、先述の羨道部最下段の石材を東・西壁双方で新たに発見している。この2石については、

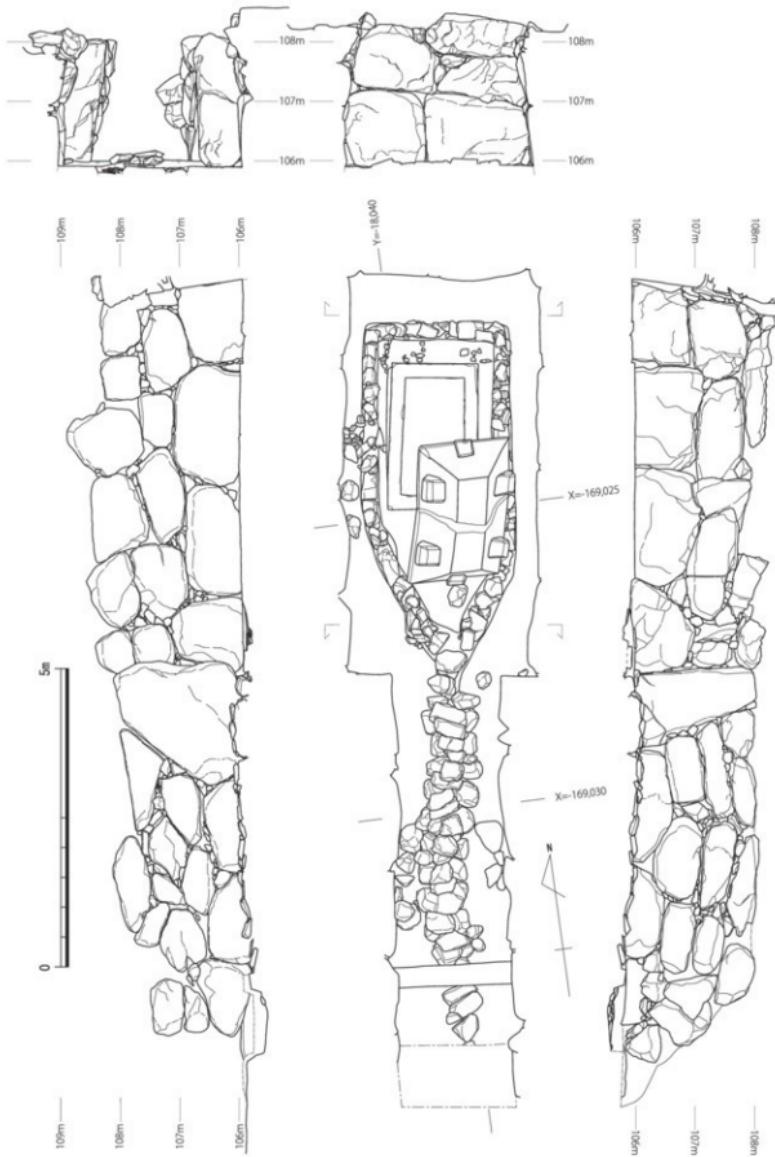


图39 東石室 平面・立面図 ( $S = 1/80$ )

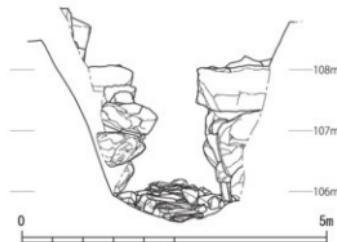


図 40 東石室入口 正面見通し図 ( $S = 1/80$ )

ほぼ全体が石室閉塞土と石室構築土に覆われた状態であったため、これらの土の除去は行わず、部分的な検出に留めている。

東石室において失われた石室石材は、天井石全体および玄室側壁の上部である。石室石材は他所で使用するために取り去られたと考えられる。遺存する玄室東側壁の最上段の石材には、石材を割った際の矢穴痕も残されている(図版 24)。石材の取り去りは組織的に行われたと想定され、調査前に存在した両石室の窪みはその際の痕跡であると考えられる。石材の取り去りが行われた時期は、近世以降であると考えられる。これは周辺での出土遺物や遺存する石材に残された矢穴の形状などからの推測である。石室上や石室内の堆積土からも取り去り時に破碎された石材の破片が出土している。また、当初の位置から動かされてはいるものの最終的に置き去られた比較的大型の石材も出土している(玄室西壁玄門側上部の石材など。図 39 ではこの石材は図化していない)。東石室では、石室閉塞土の下半が残されることや調査前の窪みの状況等から、石材の取り去りに際しては石室入口側からと言うよりは石室上部からアプローチが行われている。

石室内の堆積土には、石材取り去り前後の近世の遺物の他、中世の瓦器の細片なども出土しており、取り去り以前から石室内への侵入が行われていた可能性は高い。

側壁にはわずかな持ち送りが見られ、玄室上部は内側への傾斜がきつくなり始める様子が見て取れる。奥壁の内側への傾斜は側壁よりもきつい。羨道側壁の奥壁側は玄室側壁と同様の緩やかな傾斜であるが、羨門部を構成する入口付近の 2 石は上部が内側にかなり傾斜しており(図 39 左上・図 40)、上端での幅は約 0.8 m と非常に狭くなっている。

玄室には阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が納められている。石棺の位置は玄室中央のやや奥壁寄りである。石棺は蓋が身から外され、

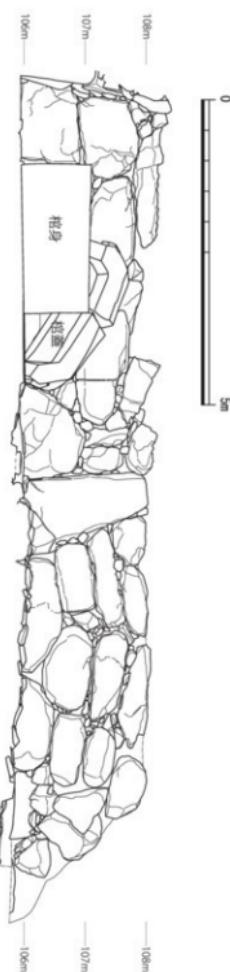


図 41 東石室主軸から東側  
見通し立面図 ( $S = 1/80$ )

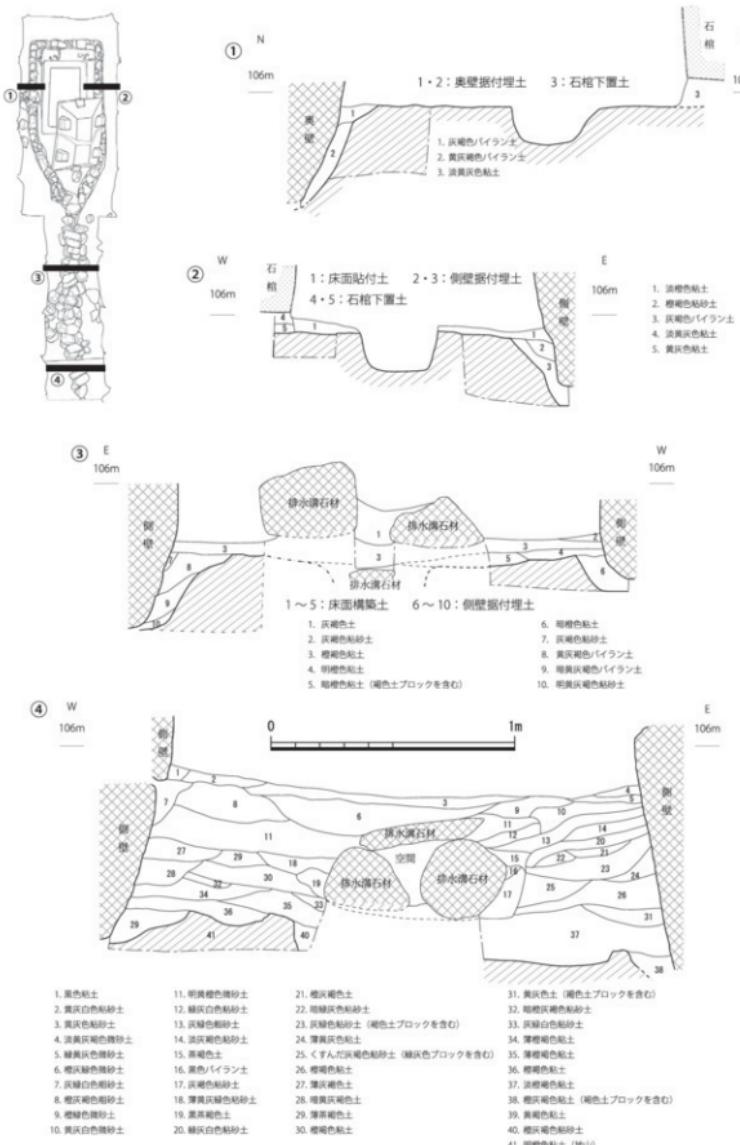


図 42 東石室床面下 断割土層断面図 (S = 1/20)

蓋が割れた状態で出土している。蓋は、身を基準にして南東方向（石室入口から見て手前右側）に動かされており、蓋の南東隅が床面下にまでめり込んだ状態である。身については周囲の排水溝との位置関係から、当初の位置を保っていると考えられる。石棺については第3節で詳しく述べる。

石室の床面に石敷きは見られない。床面は削り出した地山の上に薄い貼土を施して成形されている（図42）。平面的には床面検出時に大部分で地山面まで掘り下げを行ってしまっている。

石棺の下にも地山の上に盛土を施している。石棺下の盛土は床面の貼土に先行して行われており、石棺下の盛土→石棺据付→床面の貼土、の手順で作業が行われている。床面の貼土は側壁最下段の石材の据付後に行われたようであるが、以降の石室構築のどの段階に成されたかは不明である。

石室の床面には排水溝が設けられている。排水溝の詳細については第2節で述べる。排水溝に用いていた、あるいは用いる予定であった石材が少量ながら排水溝の外側の床面に散らばって出土している。

石室には、横穴式石室においてしばしば見られる閉塞石に該当するような石材の集積は見られず、また、その種の石材も出土していない。

床面下の断面調査によって、石室側での石材最下段の据付掘方の存在を確認している（図42）。石材の積上げは、おおよそ水平方向の目地を通しつつ行われている。目地は玄門の立石を境に玄室と羨道で分かれている。

第1節第1項で述べたように東石室の構築は、最初の墳丘構築と並行して行われている。石室を構築するための掘方を地山面ないし墳丘盛土の上から掘り込む。墳丘前面では排水溝を構築するための掘方を、先行して盛られている墳丘盛土上から掘り込んでいる様子が確認できる（図29）。概して墳丘背側では地山面から、前面側では盛土上から掘方を掘り込んでいると考えられる。少なくとも玄門の東側付近では地山上から掘方が掘り込まれていることが確認できる（図8）。

東石室の東・北・西側では標高約108mに地山が存在し、そこから石室側に向かって掘方が掘られている。この標高は石室壁面の2段目上端付近にある。2段目までは掘方内に石材を運び込み、3段目以降はその下段の上面を作業道として石材の据付を行い、その背面に盛土を施していく。この工程を繰り返して天井石まで石材を積み上げていったと考えられる。東石室の東側および北側では石室・墳丘構築に関わると考えられる柱穴が3基存在している。これらの詳細については第1節第1項で述べている。

東石室および墳丘が構築された時期は、出土遺物や石室形態などから6世紀末頃であると考えられる。

## 第2項 排水溝

東石室の床面には排水溝が構築されている。排水溝の平面形態は、「羽子板状」を呈する。玄室では、玄門付近で二股に分かれ、東・西壁沿いを通って奥壁から約0.8m南で合流する。玄門から南へはほぼ直線で羨道、石室入口部、さらに前庭部へと伸びていく。玄室の排水溝は中央に安置された家形石棺を取り囲む形となっている。

排水溝に用いられた石材は大きくは結晶片岩と花崗岩の二種類である。結晶片岩は奈良県五條市周

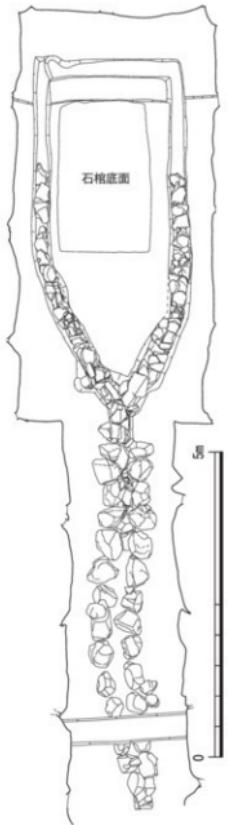


図 43 東石室排水溝蓋石除去後平面図  
(S = 1/80)

辺で産出される石材で、植山古墳では周壕底面の石敷きにも用いられている。花崗岩は櫛原市内を流れる寺川流域で採取されたと推測される。

玄室内的排水溝は幅約 0.25 ~ 0.30 m の溝を掘削し、底面に扁平な結晶片岩を敷いて構築されている。

一方、玄門より南側では、拳大～人頭大的花崗岩を 2 列に並べることで溝の側面を形成し、その上面に扁平な結晶片岩を蓋石として載せる構造となっている。さらに、この下部には玄室内と同様の結晶片岩を敷く構造の排水溝が存在することを断割調査で確認している（図 42、図版 30）。

玄室内的排水溝は床面の薄い貼土の上から掘り込まれており、底面は地山に達する。少なくとも貼土による床面成形が一度行われた後に排水溝が構築されたようである。玄門より南側、少なくとも羨道南半においては、上部の花崗岩側石と結晶片岩蓋石を組み合わせる段階には、石材の周囲に盛土を施すことで排水溝を構築しており（図 42 ④）、床面に溝を掘削することで排水溝の枠組みを形成する玄室とは様相が異なっている。下部の結晶片岩を敷く溝については、玄室の排水溝と同様の構造をしていると考えられる。

調査時には石室全体で排水溝の石材が露出するまで掘削を行っているが、羨道部、特に入口側に関しては排水溝が暗渠になっていた可能性がある。羨道南半では石材の上面高も入口側に向かって低く沈み込んでいる。

墳丘前面の調査では東石室正面下の地点で排水溝の延長部分を検出している（図 29・45）。検出地点は羨門から南に約 7 m の地点である。一番奥からの全長は約 19 m となる。本来はさらに南側へ伸びていたようである。墳丘前面で検出した排水溝は明確に 2 つに分かれており、構築掘方の差異によって時

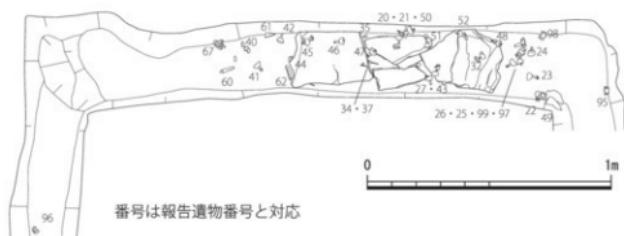


図 44 東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況図 (S = 1/20)

期的前後関係も確認することが出来る。図45で排水溝（古）としているものが羨道部排水溝の下部に、排水溝（新）としているものが同上部に、それぞれ対応している。排水溝（新）の上面標高は約104.8mであり、玄門部での上面高約106.1mよりも1m以上低くなっている。墳丘前面では排水溝は新古ともに暗渠であったことも窺える。羨道内では上・下でひとつの排水溝を構築するかのような状態となっていたが、墳丘前面では両者の位置関係にズレが生じており、完全に別個に存在している。

排水溝は少なくとも玄門より南側では二つの段階が認められ、石室構築後のいずれかの時期に排水溝の造り替え（造り足しか？）が行われたようである。この際に石室床面に対して貼土を行うなどの再整形も行われた可能性がある。

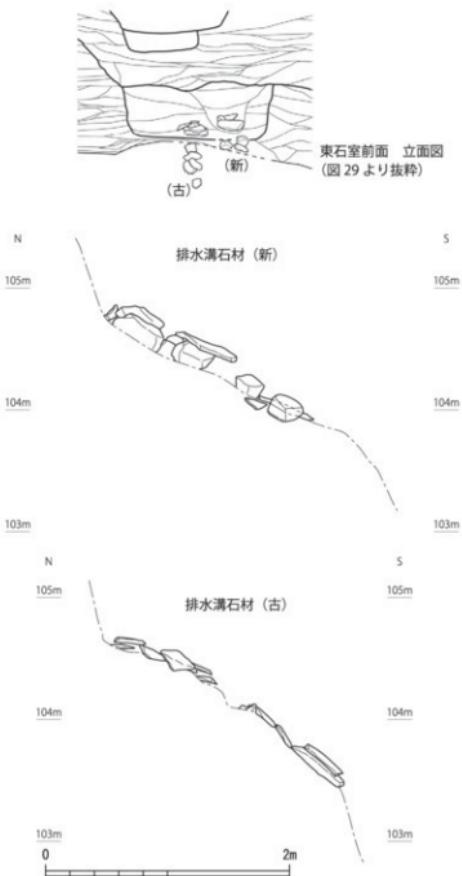


図45 墳丘前面 排水溝立面図 (S = 1/40)

玄室の排水溝については構造の共通性から羨道以降の古い段階の排水溝と対応する可能性が高いが、こちらも当初の構築時よりも後に手が加えられている可能性がある。地点によっては底面の結晶片岩の上に蓋石として結晶片岩が重ねられており、その蓋石の下から遺物が出土しているのである。

図44は奥壁側（石棺よりさらに奥）排水溝からの遺物出土状況図である。結晶片岩の蓋石下から水晶製三輪玉や歩搖付飾金具、鉄器がまとまった状態で出土している。排水溝中央から東にかけての範囲に歩搖付飾金具が13cm前後の間隔で横に並び、東端付近に残りが集中して出土している。これは金具が革帯に装着された状態であったことを示唆する。また、三輪玉も4点がまとった状態で出土している。これらの遺物は意図的に排水溝に入れられたものとみて間違いない。

排水溝の造り替えや遺物の出土状況は、正確な時期は不明ながら、東石室築造より後の段階に石室内に手が加えられていることを示していると言える。

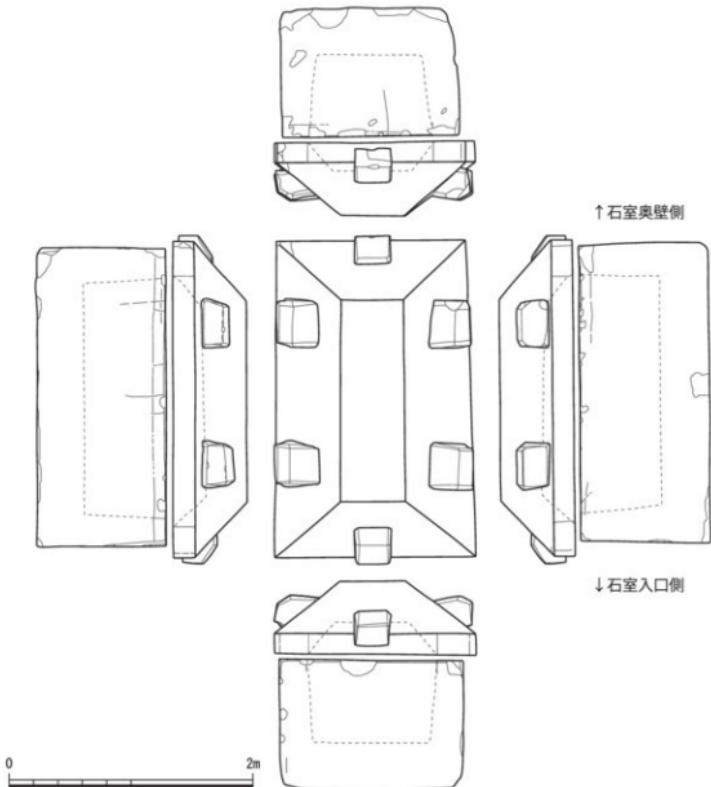


図 46 家形石棺 (S = 1/40)

### 第3項 石棺

東石室の玄室中央には家形石棺が1基、据えられている。石棺の向きは石室主軸に合わされている。石材は熊本県宇土半島で産出する阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇ピンク石、馬門石と呼ばれることが多い）を使用している。宇土半島から植山古墳まで石材を輸送するのには約800kmの行程を要する。阿蘇溶結凝灰岩は石棺の石材として著名であるが、畿内周辺で石棺材として盛んに用いられるのは植山古墳よりもやや古い時期のことである。

棺の蓋は身から南東方向に外され、蓋の中央付近で二つに割れた状態で出土している。蓋は割れではいるものの、完存している。図46は完形状態に復元した図である。蓋の割れた際に重みによって南東隅が石室床面に食い込んだ状態となっている。

石棺は例り抜き式で、蓋・身ともに内面が外形を縮小した形状に例り抜かれている。また、各所の

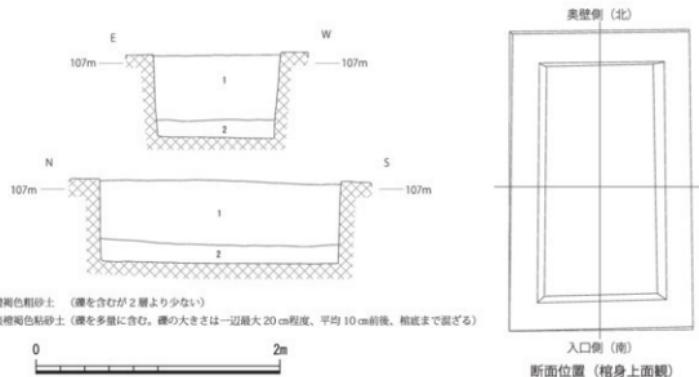


図47 家形石棺内土刷断面図 (S = 1/40)

稜は非常にシャープに削り出されている。石棺表面には、主として盤もしくは手斧による細かな加工痕が全体に残されている（図版34・35）。また、蓋の下側面や身の上半部には加工を行う際の割り付け線と推測される縦線が数ヶ所に残されている。

規模は蓋が全長2.70m（縄掛け突起を含む値）、南木口（石室入口側）の幅約1.58m、北木口（奥壁側）の幅約1.53m、高さ約0.62m。身が全長2.43m、南木口の幅約1.50m、北木口約1.40m、高さ約1.10mである。外形は身より蓋のほうが若干大きい。例り抜き後の各部の厚さは、蓋の天井部が約0.35m、斜面部が約0.28m、身の底部が約0.38m、側面部が約0.22～0.28mである。

蓋・身ともに南木口の幅が広い。通常、木口が広い側が被葬者の枕位置であったとされる。これに従えば、東石室の被葬者は石室入口側に頭を向ける南枕であったことになる。

棺の幅は漢道幅（漢門部付近では幅1m未満となる）よりも広くなっている。そのため、石棺は石室完成より前の段階、おそらくは石室基底石を据え付ける前後の段階に現在の位置に運びこまれていたと推測される。

蓋には長辺に2個ずつ、短辺に1個ずつ、合計6個の縄掛け突起が付いている。突起の位置は長辺では蓋の中段、短辺では中段よりやや下となる。それぞれの突起には細かな面取り加工がなされているが、それぞれの形状には若干のばらつきが認められる。

出土時、石棺内は完全に土で埋まっていた状態であった。土には下層を中心に花崗岩や結晶片岩の破片が含まれていたが、遺物は1点も出土しなかった（図47・図版24）。

発掘調査では、石棺石材と同じ阿蘇溶結凝灰岩の破片が墳丘周辺を始めとして各所から出土している。石棺を加工した際に生じた破片である可能性が考えられる。墳丘周辺の流出土以外にも、墳丘盛土内や墳丘南側平坦面の整地層（前庭部）内からも出土している。墳丘や前庭部の盛土は、東石室の構築より先行して、あるいは同時期に行われた可能性がある。これらの盛土に破片が含まれることは、古墳築造の早い段階に、古墳のすぐ近くで石棺の加工を行っていた可能性があることを示している。なお、出土した破片はほとんどが5cm未満の小片であり、大型の破片は見つかっていない。

## 第4項 出土遺物

東石室からの出土遺物には土器、金属器、三輪玉がある。排水溝内からは奥壁側を中心に、金属器と三輪玉が出土している(図44)。これらの遺物は出土状況から、意図的に排水溝に入れられたと考えられ、改葬時の片付け行為等が想起される。排水溝出土遺物以外には、埋葬時あるいはその後の追葬や改葬時の状況を保っていると考えられる状態で出土した遺物は無い。なお、石棺内から遺物は出土していない。図示した遺物以外にも石材の取り去りに伴うと考えられる近世の土器等、後世の遺物が出土している。

出土した金属器は歩搖付飾金具を始めとして脆弱なものが多く、破片が散乱している可能性があったため、周囲の土ごと取り上げを行って持ち帰った。奈良文化財研究所の協力を得て、X線ラジオグラフィにより土中の遺物状況を把握した上で、遺物のクリーニング作業を進めた。クリーニングが終了した遺物については、記録を取った上で保存処理を行った。

19は漢道に堆積した石材取り去り時の搬入土から出土した須恵器の壺蓋である。口径8.2cm、器高2.2cmを測る。

排水溝内からは歩搖付飾金具が33個体分出土している(図49)。各個体には図示した部分の他にも、歩搖や台座などの細片が伴うものが含まれる。全体の形状がある程度推測可能な破片について図化を行っている。

歩搖付飾金具は、芯棒・歩搖・筒金・台座・台座内の有機物・有機物を留める蓋・円形座金という部品によって構成されている(図50)。材質は芯棒・歩搖・筒金・台座が金銅製で、部品ごとに鍍金が行われている。鍍金層の厚みは非常に薄く、3~5μm程度であると見られる。基本的には金アマルガム法による鍍金が行われていると考えられる。表面の発色は、金色を呈するタイプと銀色に近い発色をするタイプがある。ただし、明確に二分されるわけではなく、中間的な個体も存在する。台座内に充填された有機物は、素材が不明である(図版85のNo.49は内面頂部に漆状の膜が残る)。有機物を留める蓋(図版85のNo.28)は革製である。円形座金(図版85のNo.23・45)は金属製であるが、詳細な材質は不明である。構造上、金銅製部分、とくに上半部は比較的遺存状況が良好であるが、下半の有機質製の部品や円形座金は一部の個体にわずかに残るのみである。飾金具が装着されていた革帶は残されていなかったが、飾金具の構造から、厚さ約0.6cm程度であったと考えられる。二枚の革帶を重ねていたと想定される。

芯棒は3ないし4本を糸によって繋結し、筒金を巻き付ける。糸は遺存状態が良く、一部の個体で筒金の隙間から状態を確認できる(図版85のNo.44)。材質は麻の一種、苧麻を用いている。S燃りに強く燃らされている。織物に使用する一般的な糸よりも太めである。

製作工程は図50に示したとおり復元される。手順は、①各部品を完成に近い状態まで個別に仕上げる、②芯棒の上端を環状に折り曲げ歩搖を垂下する、③芯棒を糸で束ねる、④筒金に芯棒を通す、⑤台座上端の穴に芯棒を通し、台座の中に有機物を充填して芯棒を固定する、⑥台座の下端に革製の蓋をする、



図48 東石室出土土器 (S = 1/4)

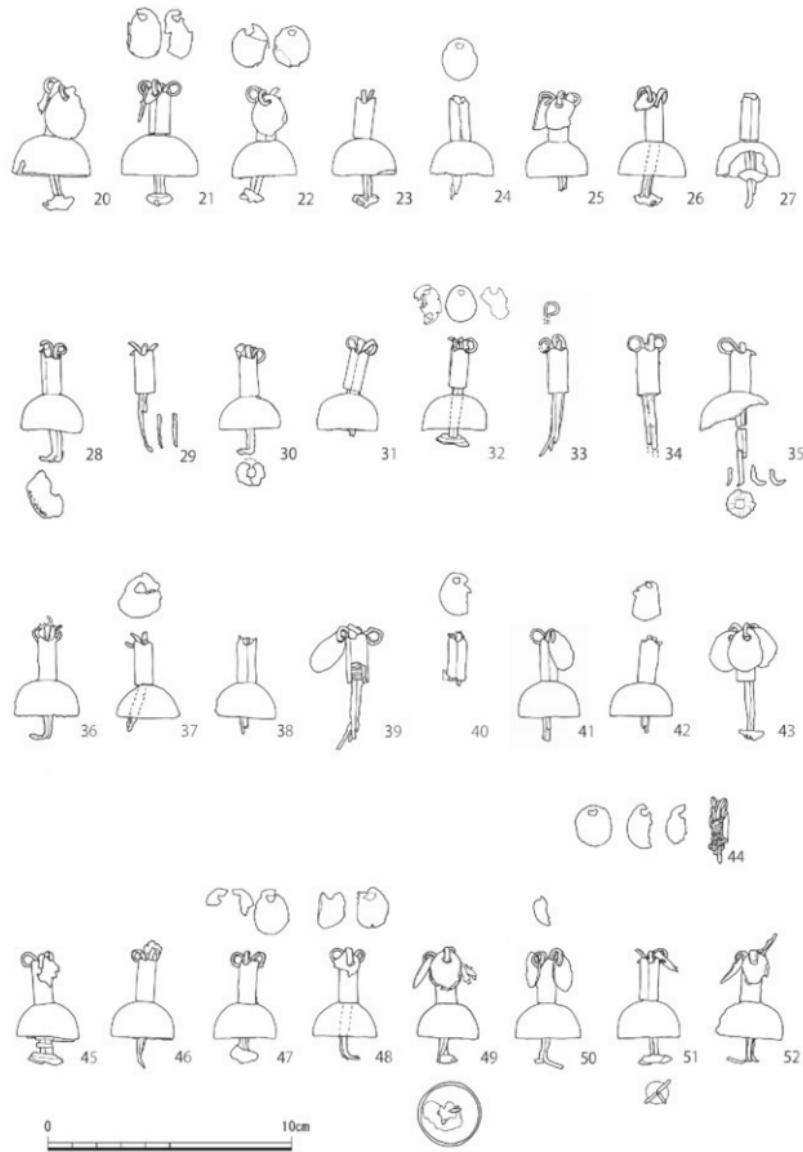


图 49 東石室出土步摇付飾金具 (S = 1/2)

表1 歩搖付飾金具一覧表

遺物番号	芯棒本数	芯棒(cm)			筒金(cm)			台座(cm)			備考
		長	幅	厚	高	径	厚	高	径	厚	
20	4	5.5	0.25	0.15	1.90	0.90	0.05	1.6	3.2	0.1	歩搖あり
21	4	5.3	0.25	0.10	1.80	0.90	0.05	1.6	3.2	0.1	歩搖あり
22	3	4.9	上部 0.25 下部 0.20	0.15 ~ 0.18	1.85	0.80	0.08	1.4	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
23	3	4.7	上部 0.20 下部 0.15	0.15	1.70	0.80	0.08	1.4	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
24	3	4.3	上部 0.20 下部 0.15	0.10 ~ 0.15	1.75	0.80	0.05	1.3	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
25	3	4.0	上部 0.25 下部 0.20	0.10 ~ 0.15	1.85	0.80	0.10	1.4	2.5	0.1	歩搖あり
26	3	4.9	上部 0.25 下部 0.20	0.10 ~ 0.20	1.75	0.75	0.08	1.4	2.7	0.1	孔径 0.5 歩搖あり 鉄製円盤あり
27	3	4.7	上部 0.25 下部 0.15	0.10	1.70	0.75	0.10	1.5	2.5	0.1	歩搖金箔のみ 鉄製円盤あり
28	3	5.0	上部 0.30 下部 0.20	0.15	1.80	0.80	0.10	1.3	2.3 ~ 2.8	0.1	
29	3	4.5	上部 0.20 下部 0.25	0.12	1.70	0.75	0.10	—	—	—	
30	3	4.5	上部 0.20 下部 0.15	0.10 ~ 0.15	1.70	0.80	0.10	1.3	2.5	0.1	鉄製円盤あり
31	3	4.0	上部 0.25 下部 0.15	0.10	1.80	0.75	0.08	1.4	2.5	0.1	歩搖あり
32	3	4.6	上部 0.20 下部 0.15	0.10 ~ 0.15	1.70	0.75	0.08	1.5	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
33	4	4.8	0.25	0.10	1.80	0.85	0.08	—	—	—	歩搖あり
34	4	4.6	上部 0.25 下部 0.20	0.10 ~ 0.15	1.80	0.90	0.08	—	—	—	歩搖あり
35	4	5.5 (復元値)	上部 0.25 下部 0.20	0.15 ~ 0.20	1.75	0.90	0.08	1.6	3.1 (復元値)	0.1	鉄製円盤あり
36	3	4.7	上部 0.20 下部 0.15	0.10 ~ 0.15	1.80	0.80	0.08	1.5	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
37	3	4.3	上部 0.20 下部 0.20	0.10 ~ 0.20	1.75	0.80	0.08	1.4	2.6	0.1	鉄製円盤あり 孔径 0.45
38	3	4.1	上部 0.20 下部 0.20	0.10 ~ 0.20	1.90	0.80	0.08	1.4	2.5	0.08	歩搖あり
39	4	5.1	上部 0.20 下部 0.10	0.10	1.85	0.90	0.05	—	—	—	歩搖あり
40	3	—	—	—	1.80	0.80	0.10	—	—	—	歩搖あり
41	3	4.7	0.25	0.10	1.80	0.70 ~ 0.80	0.05	1.3	2.6 ~ 2.5	0.1	歩搖あり
42	3	3.9	上部 0.15 下部 0.10	0.10	1.80	0.75	0.05	1.4	2.5	0.1	孔径 0.5 歩搖あり
43	3	4.8	0.20	0.10	1.80	0.75 ~ 0.80	0.05	—	—	—	歩搖あり 鉄製円盤あり
44	3	—	0.20	0.10	—	—	—	—	—	—	歩搖金箔のみ
45	3	4.7	上部 0.20 下部 0.10	0.10	1.80	0.80	0.05	1.4	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
46	3	5.0	上部 0.20 下部 0.10 ~ 0.15	0.10 ~ 0.05	1.70	0.80	0.05	1.6	2.6	0.1	孔径 0.5
47	3	4.4	0.20	0.10	1.75	0.80	0.05	1.4	2.5	0.1	歩搖あり
48	3	4.7	上部 0.15 0.20 下部 0.10 ~ 0.15	0.10 ~ 0.15	1.75	0.75	0.05	1.4	2.6	0.1	孔径 0.5 振動の方向は不定 歩搖あり
49	3	4.7	上部 0.20 下部 0.15	0.10	1.80	0.80	0.05	1.3	2.6	0.1	歩搖あり 鉄製円盤あり
50	3	5.0	上部 0.20 下部 0.15	0.15	1.75	0.75	0.05	1.3	2.6	0.1	歩搖あり
51	3	4.7	上部 0.25 下部 0.15	0.10	1.75	0.80	0.10	1.5	2.5	0.1	鉄製円盤あり 歩搖あり
52	3	4.7	上部 0.25 下部 0.15	0.15	1.80	0.80	0.10	1.4	2.7	0.15	歩搖あり

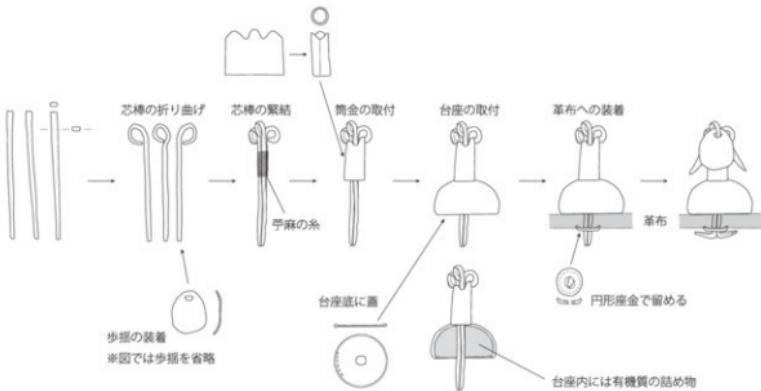


図 50 歩搖付飾金具 製作工程模式図

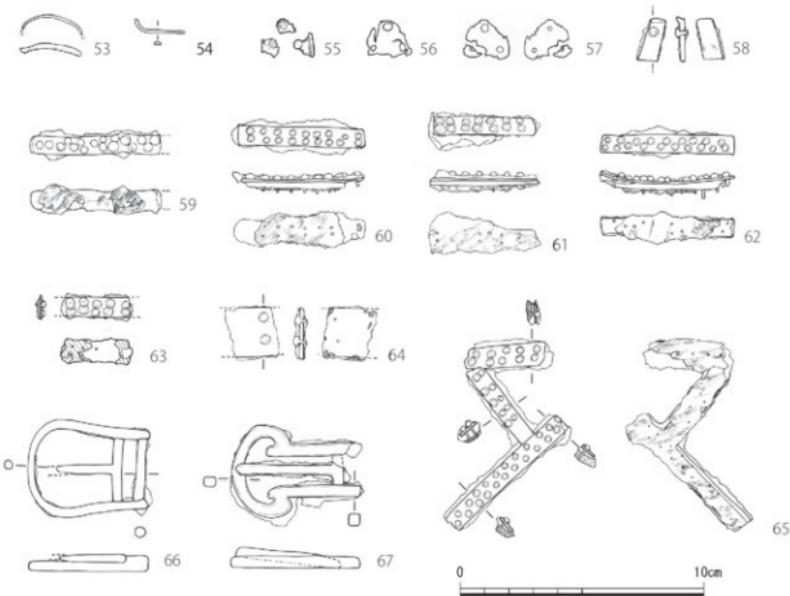


図 51 東石室玄室排水溝出土金属器① (S = 1/2)

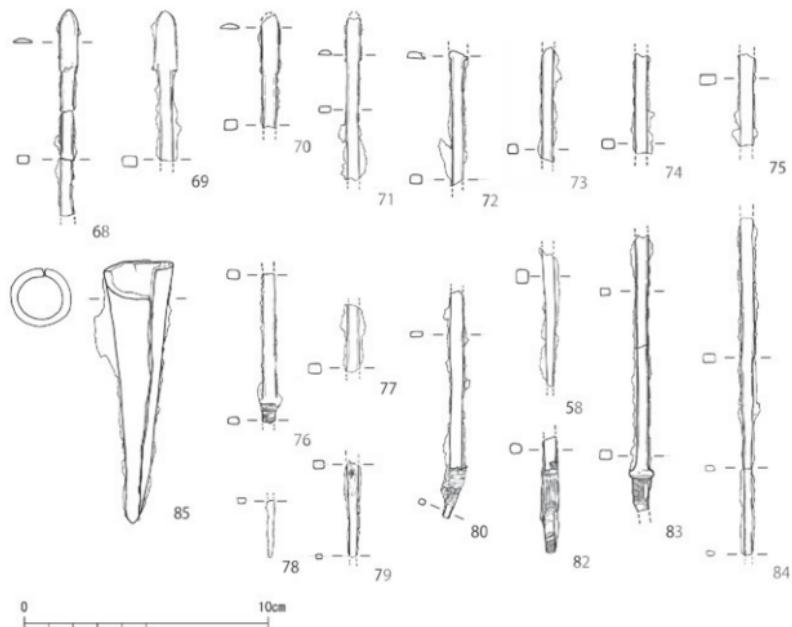


図 52 東石室玄室排水溝出土金属器② (S = 1/2)

⑦革帯に芯棒を通して、裏側から円形座金で挟み込む、⑧芯棒の下端を折り返してかしめ、革帯に固定する、となる。

歩幅付飾金具は排水溝の方位に沿う形で一列に並び、東端付近で数点まとまった状態で出土しており、革帯に装着された状態で排水溝内に置かれた可能性が高い。20・21は他の個体よりも台座が一回り大きく、35も同様である可能性がある。これらはいずれも飾金具が一列に並ぶ中心付近から出土している。この他、67の金具も歩幅付飾金具の列の西側延長上から出土しており、帯の端部に装着されていた可能性が考えられる。

53～85は玄室排水溝から出土した金属器である。53・54は責金具である。どちらも金銅製で、表面にはわずかに金箔が残る。55～57は金銅製の帯先金具である。55は金箔と鉄のみが遺存している。全体形は爪形であると考えられる。56・57は金箔のみが遺存している。金箔の表面には擦痕が存在する。58は金具で、上辺が頭側へ折り曲げられている。

59～65は鉄地金・銀張りの縁金具である。いずれも排水溝の蓋石下から出土している。幅約0.7～0.9cmの鉄板に鉄が二個一組ずつ打たれている。裏面には木質が残り、木質と鉄板の間に白黄色の有機物が挟み込まれている。64は鉄製の金具で、裏面には漆・布の痕跡が残る。66は鉄地金銅張りの鉗具である。刺金部分の先端が欠失している。各部の断面形は円形である。67は鉄製の鉗具である。各部の断面形はやや隅丸の正方形である。

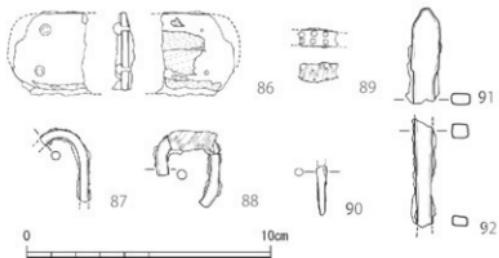


図 53 東石室玄室堆積土出土金属器 (S = 1/2)

68～84は鉄鎌である。いずれも長頭鎌である。奥壁側排水溝内からの出土であり、蓋石下から出土したものと蓋石上から出土したものがある。個別に番号を付与しているものの中に同一個体が存在する可能性はある。残存長は84が最長で13.9cmを測る。刃部が遺存する個体の長さは2.2～2.6cmである。頭

部の断面形は横長のものと正方形に近いものとがある。

85は鉄製の石突である。鉄板を三角錐状に丸めて作られており、上端の断面形はほぼ正円形である。

86～92は東石室玄室堆積土から出土した金属器のうち、排水溝出土遺物との関連が想定される遺物である。86は鉈尾であると考えられる鉢付金具である。内側には布の痕跡が認められる。87・88は吊金具である。断面形は円形である。88の上辺には有機物が付着している。89は縁金具であり、排水溝内出土の縁金具とほぼ同様の形態である。

90～92は鉄鎌である。長頭鎌であると考えられる。91の刃部は長さ1.9cmと、排水溝内出土鉄鎌よりやや短い。

93～99は水晶製の三輪玉である(図版80)。いずれもほぼ完形である。96のみ排水溝北西隅から南に約0.8mの地点から出土しているが、他はいずれも排水溝の北東隅付近から歩搖付飾金具等とともにまとまって出土している。表面は滑らかになるよう研磨されているが、溝状に窪む谷部と底面(表2模式図の下辺)は磨きが粗い。表面には所々、石材の粗割りを行った際に生じたと考えられる小さな窪みが見られる。93～98は幅3.3～3.6cmであるのに対し、99は幅4.2cmと他と比べて明らかに大きい。三輪玉は太刀の柄間につく護拳帯に飾られた玉であると考えられる。

表2 三輪玉一覧表

番号	重量(g)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	石材
93	17.7	3.4	2.1	1.7	水晶
94	16.4	3.4	1.9	1.8	水晶
95	16.9	3.3	2.1	1.6	水晶
96	22.6	3.4	2.4	2.4	水晶
97	21.1	3.4	2.3	1.8	水晶
98	25.7	3.6	2.4	2.0	水晶
99	31.5	4.2	2.4	2.1	水晶



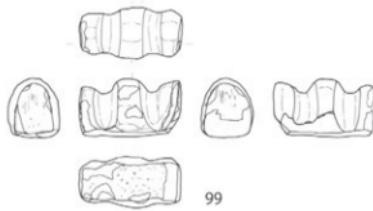
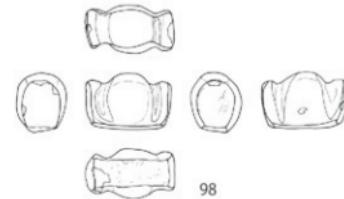
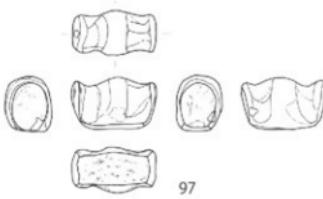
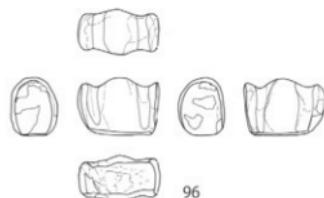
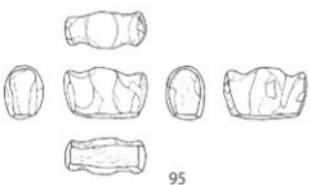
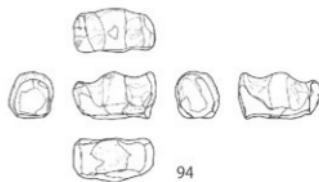
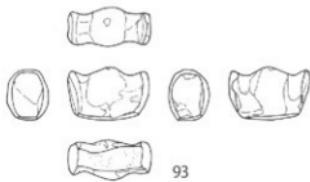


圖 54 東石室排水溝出土三輪玉 ( $S = 1/2$ )

## 第3節 西石室の調査

### 第1項 石室構造

西石室は、植山古墳に存在する2基の埋葬施設の一つで、墳丘の西側に築かれた横穴式石室である（図55）。南南東に開口する両袖式の横穴式石室だが、両袖が明瞭な東石室とは異なり、玄門袖石の突出は約0.15～0.20mしかない。ことによると、両袖式の範疇から外れる可能性もある。

玄門床面には非常に特徴的な闇石が据えられている。闇石は石製扉の底板であると考えられる。詳細は第3項にて述べることとする。

羨道の南側床面には結晶片岩を用いた排水溝が構築されている。排水溝については第2項で詳しく述べる。

西石室の主軸は墳丘主軸とずれており、墳丘主軸に対して北で約16度西に振れている。また、西石室は玄門を境として羨道と玄室とで主軸にずれが見られ、床面での平面形は玄室の主軸がわずかに西に傾いている。

西石室は調査前の時点で玄室の石材上半が露出していた。玄室床面から約1.5mの高さまでが埋まっていた状態である。調査地周辺の住民からは、過去に石室に入り込んだことがある、との話を聞くことがある。おそらくこの西石室のことであると推測される。

西石室に遺存している石室石材は奥壁、玄室側壁、羨道側壁下半である。天井石と羨道側壁上半部、玄門周辺の石材は失われている。玄室については遺存している側壁上面に天井石が構架されていたと考えられる。東石室と同様に、近世以降の時期に石室石材が取り去られたのだと考えられる。おそらくは東石室と近い時期に行われたものと推測される。西石室に対しては石室上部、南西側からのアプローチが行われたと考えられる。

西石室は羨道側壁に対する改変の度合いが強く、東壁側では残された最下段付近の石材についても上面がほぼ完全に露出した状態にされている。また、羨道西壁についてもほぼ同様であり、遺存している石材上には石材取り去り時に搔き出したと考えられる土層が厚く堆積しているが、こちらについては石室および墳丘保護のためにあえて除去を行わず、壁面として残している。

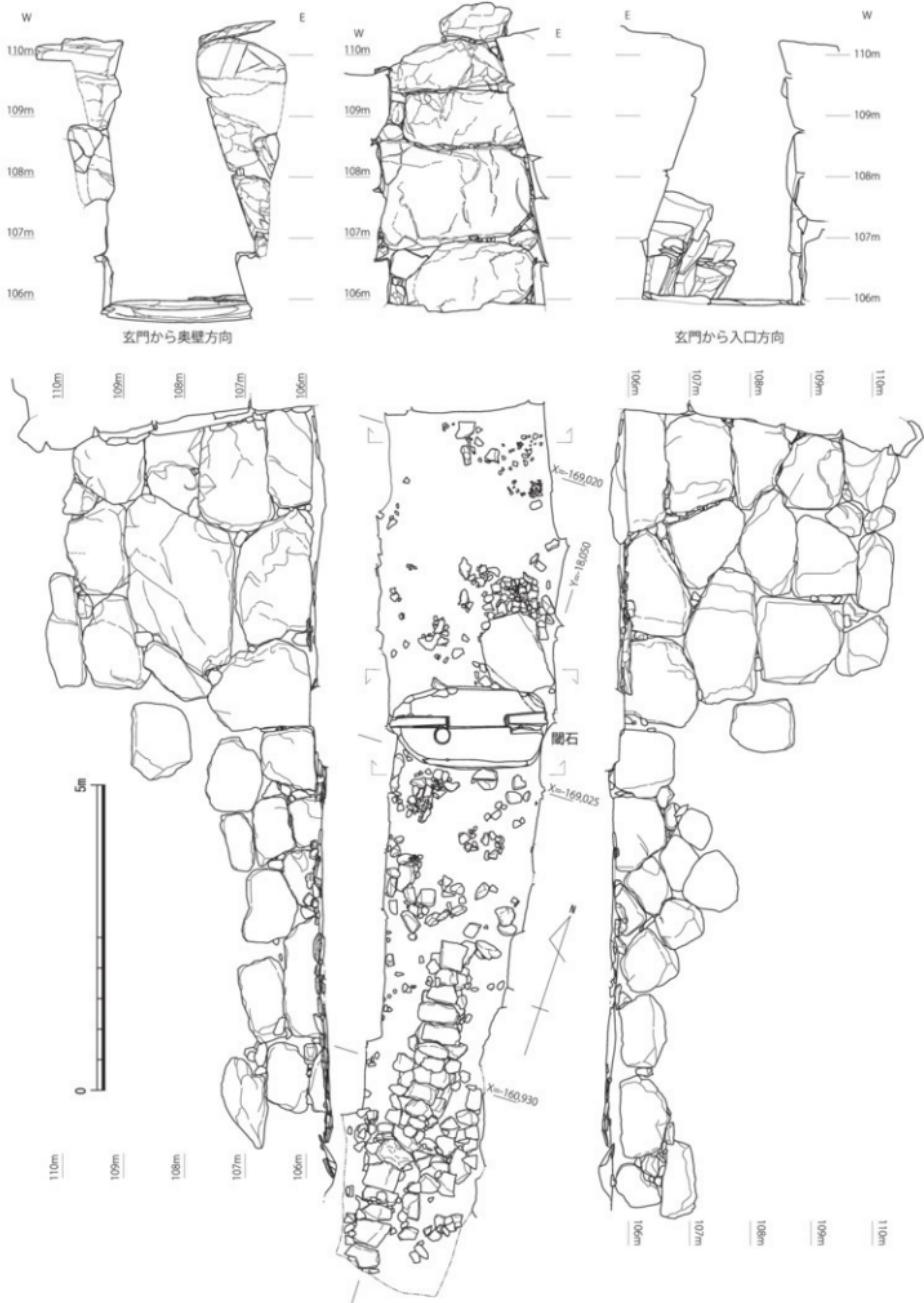
石室石材には飛鳥川上流域（細川谷周辺）および寺川流域の花崗岩、石英閃錐岩、川原石が使用されている。

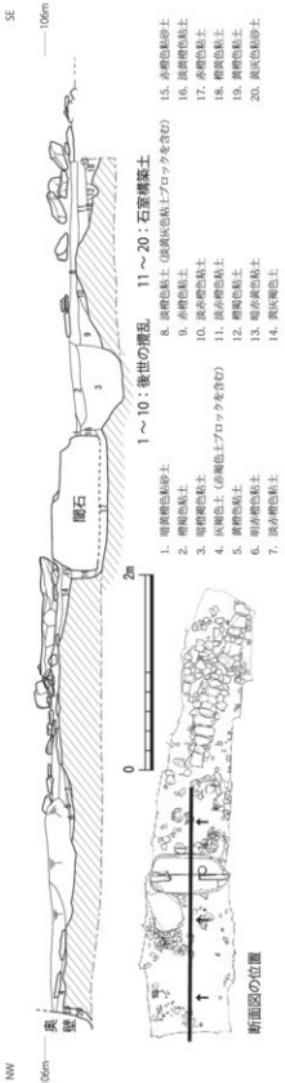
石室の規模は全長約13.0m、玄室長約5.2m、玄室幅約2.5m、玄室高約4.5m、羨道長約7.8m、羨道幅約2.0～2.3m、羨道残存高約2.0mを測る。全長は奥壁から羨道部南端の石材までの距離を計測している。

石室床面の標高は約105.9mである。この値は東石室の床面高とほぼ同一である。

石室壁面の構成は奥壁が1石4段、玄室側壁が3石3～5段である。玄室の西側壁中段中央に周囲より一回り大型の石材が使用されている点が特徴的である。一方、羨道については3段積みであったと推測される。ただし、東石室と比較して側壁の段積み構成が不安定であるため、4段以上になる部分も存在した可能性もある。

石室入口石材の前端部ラインは、石材の遺存状況が良くないので正確には不明だが、東石室のよう





な綺麗な斜面を形成しているわけではないようである。現状では、基底石よりもその上、あるいはさらに上の石材のほうが前面に張り出している様子が見て取れる。また、西石室では入口石材前面にも石室構築盛土が施されていることが確認でき（図 67、図版 53 上）、正面から見た際に羨門部の石が墳丘前面斜面に綺麗に露出するような形状ではなかったようである。

玄室側壁および奥壁には持ち送りが見られ、特に東側壁は内側への傾斜がきつくなっている。

石材の積み上げ方は東石室と比較して、全体にやや雑然としている。奥壁と玄室東側壁ではある程度、水平方向に目地を通して積み上げが行われているが、必ずしも正確に水平が保たれているわけではない。また、玄室西壁や羨道東壁北半などには斜方向に石材を積み上げているかのような部分も見られる。

羨門部の西壁および東壁、闕石の両側面にあたる壁面には、他の石室石材とは接点をもたずに盛土によって保持されている石材が各 1 点ずつ存在する（図版 42 上）。図 55 の両壁面に記している宙に浮いた状態の石材がそれにあたる。この石材については闕石と組み合う扉の鴨居を保持するような役割を果たしていたのではないかと推測される。

石室床面には偏りはあるものの、多数の扁平な結晶片岩の破片が散乱している。玄室南東隅、闕石に接する位置には、長辺約 1.3 m × 短辺約 1.0 m を測る大型の結晶片岩を中心にして、約 2 m 四方の範囲に結晶片岩が密集している。これらの存在から、石室築造時には床面に結晶片岩が敷かれていたのではないかと推測される。

西石室では玄室内や羨道北半を中心に、後世の擾乱が複数の地点で床面にまで及んでいる。床面上の擾乱からは中世の土器などが出土している。墳丘周辺の堆積土や周辺の神社境内や墓地などから、結晶片岩が一定量発見されており、床面に敷かれた石材も古くから持ち出されている可能性がある。

床面下の断面調査では、闕石の据付掘方や石室石

図 56 西石室主軸断面見通し図 (S = 1/50)

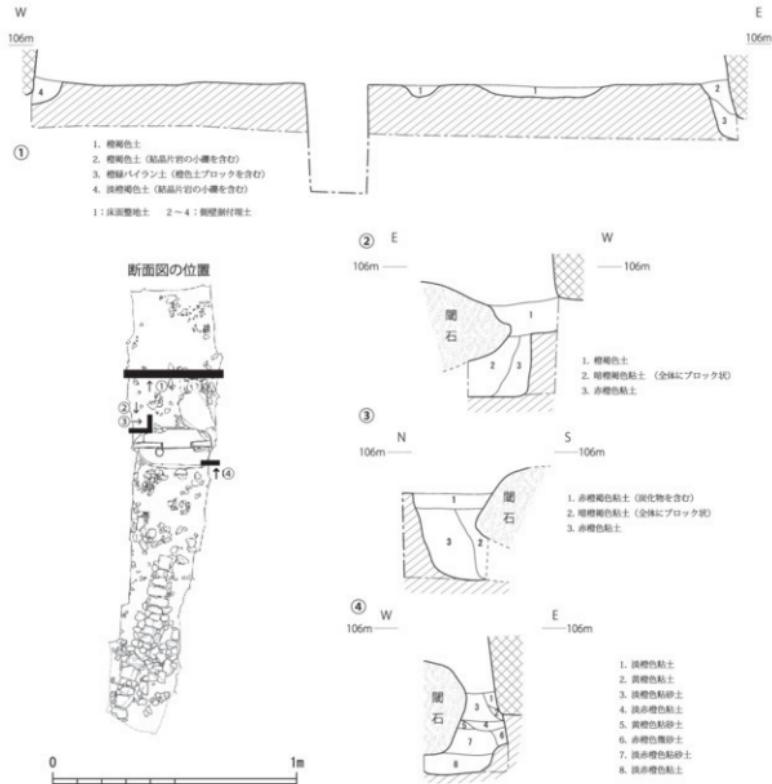


図 57 西石室床面下 断割土層断面図 ( $S = 1/20$ )

材の構築掘方の状況を確認している(図57)。その一方で東石室とは異なり、床面整形のための貼土と認識できるような盛土の存在は確認されていない。当然、後世の削平である可能性も考慮すべきだが、西石室では地山面の直上が床面となり、その直上に結晶片岩が敷かれていた可能性が高いようである。

西石室からは、石棺を始めとして棺は残されていなかった。玄室からは阿蘇溶結凝灰岩の破片が数点出土しており、東石室と同様にこの石材を用いた石棺が存在していた可能性もあるが、他の棺材であった可能性も十分に考えられる。

西石室の羨道床面上付近からは、須恵器が数点出土している(図58)。これらは元位置は保っていないと考えられるが、元々西石室に由来する遺物であると考えられる。

出土遺物や石室構造、石室構築掘方の状況(詳細は第1節第1項)等から、西石室の構築時期は7世紀前半であると考えられる。

## 第2項 排水溝

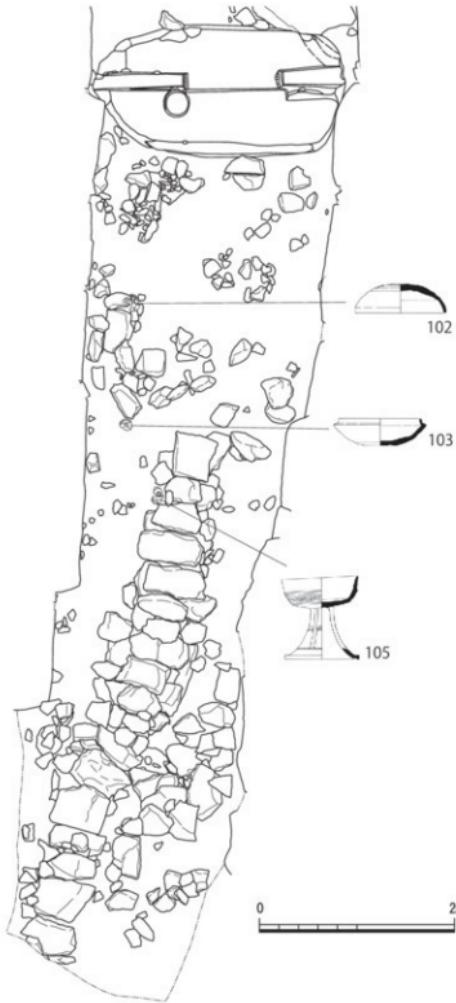


図 58 西石室漢道 遺物出土状況図 (S = 1/50)

を側壁とし、結晶片岩を蓋石とする構造になっている。これは東石室漢道の新段階の排水溝と同様の構造であり、西石室についても排水溝の造り替えが行われた可能性がある。ただし、石室内から前庭部に伸びる途中で排水溝の構造を変化させただけである可能性も残されている。

墳丘前面および石室入口部壁面では排水溝構築掘方を断面確認している(図 28・67)。床面を構

西石室では漢道の南半、玄門より南に約3.5mの地点から南方向に排水溝が構築されている。東石室と同様に、墳丘前面斜面の調査においても排水溝の延長部分が検出されており、前庭部まで伸びていたと考えられる。排水溝の残存長は約9mである。

排水溝の主軸は漢道の主軸とずれが見られ、北端は漢道中軸付近に位置するが、南端は西側壁の側に寄っている。

玄門付近および玄室内は床面が削り出された地山であるが、排水溝と考えられる痕跡の存在は確認されなかつた。

排水溝は扁平な結晶片岩を並べて構築されている。現況では東石室玄室の排水溝のような溝状の掘り込みは存在しないが、当初は石材の側辺(石室側壁との間の空間)に盛土を施すことで石材部分を水の通り道を形成する構造であった可能性を考えられる。排水溝の全体、あるいはその途中から南側については暗渠になっていたと考えられ、石室入口壁面の調査では、暗渠状の土層断面を確認することが出来る(図 67・図版 43 下)。

墳丘前面で検出した排水溝の構造は漢道内と異なり、人頭大の花崗岩

築する盛土を施し整形した後に、改めて排水溝構築用の掘方が掘り込まれている。

### 第3項 開石

西石室の玄門床面には、玄室と羨道を間仕切る開石が据えられている。西石室は玄室と羨道とで主軸にすれが見られるが、開石は玄室の向きに合わせる形で置かれている。

この開石は玄門部に立つ石製扉の底板であると考えられる。扉の復元については第IV章第2節で詳しく述べる。

開石の石材は、兵庫県高砂市所在の揖保山周辺で産出される凝灰岩（竜山石）であり、表面の色調は淡乳白色を呈する。

開石の平面形は小判形を呈する。規模は全長約2.5m、幅約1.3m、厚さ約0.5mを測る。短辺の曲線は西側の中央がやや尖る形となっている。

開石の表面は丁寧に加工が施されており、上面には穴と溝が彫られている。玄室に向かって中央やや左（西）には直径約0.21m、深さ約0.05mの円柱状の穴が彫られている。更に開石長軸上の左右にはそれぞれ方形の溝が彫られている。溝の規模は玄室に向かって左（西）が長さ約0.90m、幅約0.20m、深さ約0.10m、同じく右（東）が長さ約0.60m、幅約0.16～0.22m、深さ約0.6cmである。どちらの溝も底が外側に抜ける構造である。

西石室からは開石と同じ竜山石の破片が複数出土している。また、植山古墳周辺の神社の境内にも竜山石製の踏石が存在している。

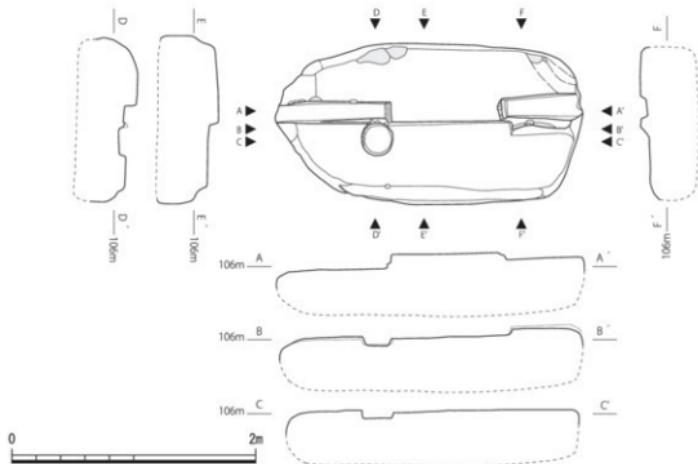


図59 開石 ( $S = 1/40$ )

#### 第4項 出土遺物

西石室からは土器、金属器、竜山石の扉材が出土している。埋葬行為が行われた際の原位置を保っていると考えられる遺物は無い。ここでは古墳に伴う可能性がある遺物について図化を行っている。この他にも、中世の瓦器や土師器、近世以降の瓦や陶器などが石室内の堆積土から出土している。義道北半から玄室にかけての範囲においては、部分的ながら床面下まで中世以降の掘り込みが及んでおり、床面となる地山直上から瓦器なども出土している。

100～106は須恵器である（図60・図版80）。100・101・106は玄室の床面付近から、102・103・105は漢道床面よりやや上から（102は床面の結晶片岩直上）、104は石室前面の石材抜き取り時の堆積土の最下層から、それぞれ出土している（図58、図版43）。

100は長頸壺の蓋である。口径8.0cm、器高3.1cmを測る。つまみの半分が欠失している他は完存している。つまみの頂部はわずかに窪む。101は脚付長頸壺である。脚部には方形透かしが穿たれている。肩部には2条の溝が巡る。102は环蓋である。口径14.6cm、器高4.6cmを測る。上面には「+」字状のヘラ記号を施す。焼成は甘く、色調は黄灰色を呈する部分が多い。103は环身である。口径13.3cm、器高4.4cmを測る。底部には102と同様の「+」字状のヘラ記号を施す。焼成は非常に甘く、黄灰色を呈する範囲は102よりさらに広い。形状や焼成具合、共通するヘラ記号の存在などから、102と103はセットであると考えられる。104は壺ないし瓶類の口縁部である。内外面ともに釉が付着する。105は無蓋の高杯である。透かしは長方形1段で、3方向に配する。口径12.3cm、器高13.6cm、脚部径12.0cmを測る。106は器台の鉢部である。復元口径27.4cmを測る。外面下半には格子目状のタタキが施される。

107～130は西石室の堆積土から出土した金具類である。金具類は、ある程度形状が分かるものや鉢が遺存するものを図化しており、他にも鐵器の小片が出土している。

107・108は鉈尾である。107は鉄地金張りで、内側には有機質が残る。鉈頭は最大のもので直径約0.7cmを測り、残る二つの鉈も本来はその大きさであったと考えられる。108は鉄地金銅張りで内

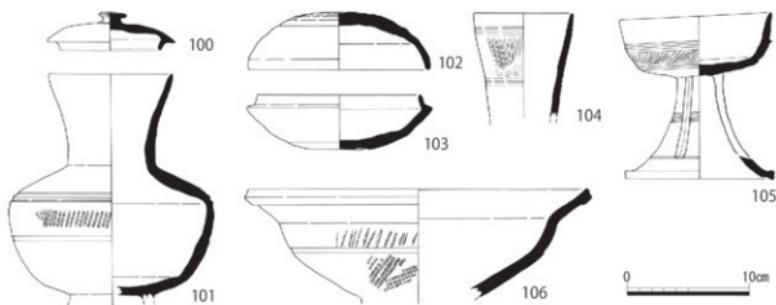


図60 西石室出土土器 (S = 1/4)

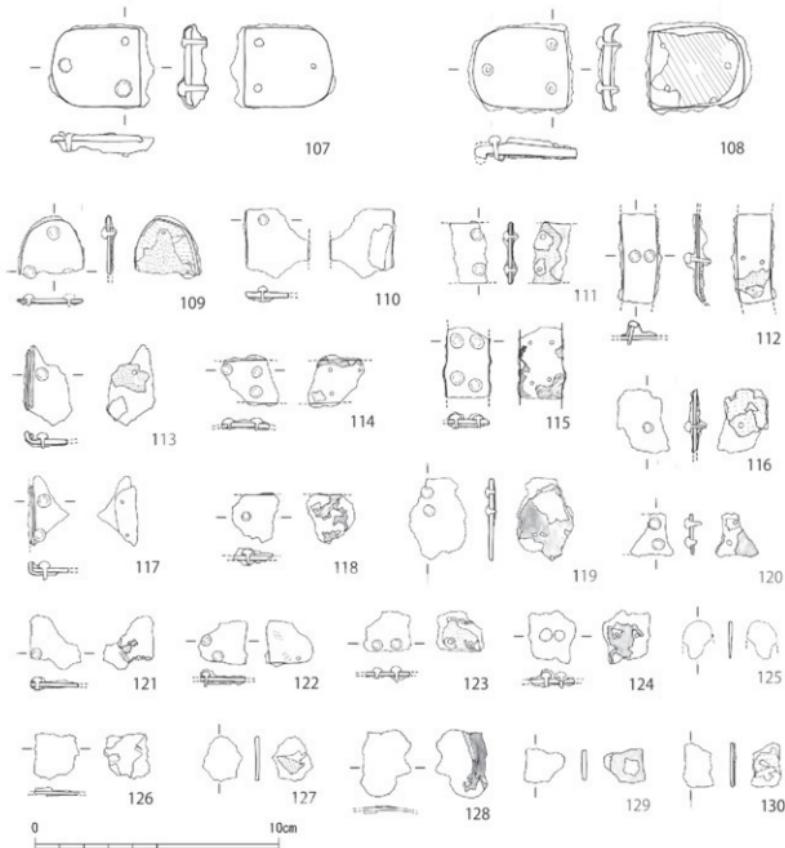


図 61 西石室出土鉄器① ( $S = 1/2$ )

面の有機質は布状である。

109～124 は鉢付金具である。109 は形状から鉈尾である可能性があるが、107・108 と比較して小形である。内側には布が付着している。110 は幅 2.7 cm を測るやや幅広の金具である。111 は鉢が二つ並び、鉢の間隔は他より広い。内側には布が付着する。112 は幅 1.8 cm を測り、平面的にわずかに湾曲する。鉈頭は本体より飛び出している。113・117 は縁が鉈頭側に折り返されている。113 の折り返し部分には組紐が付着する。114 は断面形がゆるやかに湾曲する。115 は幅 2.0 cm を測る。上下二組の鉢が打たれるが、鉢の位置関係は上下で微妙に異なる。116 の鉈は直径 0.4 cm の小形である。118～124 はいずれも内側に有機質が付着する。125～130 は内側に布が付着する鉄片である。128 は断面がわずかに湾曲する。

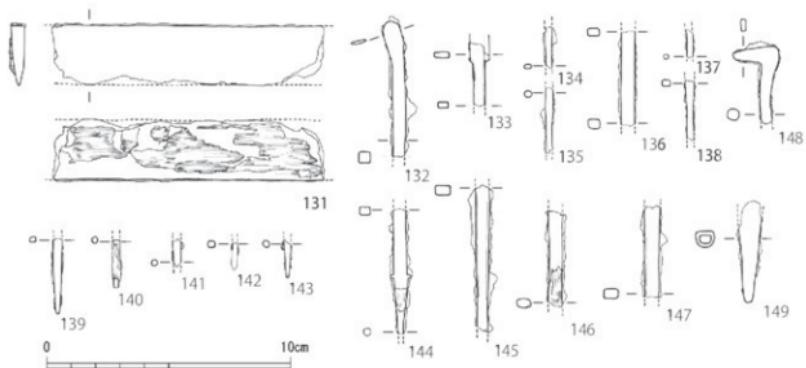


図 62 西石室出土鉄器② (S = 1/2)

131は羨道の堆積土から出土した鉄刀である。刃部の破片である。側面と棟には鞘であると考えられる木質が残る。

132～147は鉄鎌である。132は長さ1.2cmの刃部が曲がっている。148は鉄製の鎌である。屈曲部から先にかけては、先端に向かって徐々に薄く、細くなる。149は先端に向かって尖る中空の棒状鉄器である。断面形は片側が平坦な蒲鉾形を呈する。

150～154は闘石の南側の堆積土から出土した竜山石である(図版86～88)。圓化した石材はいずれも加工された平坦な面が認められる。150は長さ34.1cm、幅15.4cm、厚さ12.3cm、重量9.8kgを測る。厚手の板材の一部であると考えられる。151は長さ29.7cm、幅19.6cm、厚さ11.5cm、重量7.2kgを測る。152は内側に直角に屈折する三面の加工面をもつ破片である。板材の段の部分であると考えられる。長さ13.5cm、幅12.1cm、厚さ8.6cm、重量1.4kgを測る。153は加工面を二面もつ扁平な破片である。面同士は約100度の角度で屈折する。長さ45.6cm、幅25.6cm、厚さ7.6cm、重量6.8kgを測る。154は四面の加工面をもち、五つの破片の接合からなる(図版87では、うち二片は隠れる)。長さ51.0cm、幅18.5cm、厚さ20.0cm、重量16.6kgを測る。板材の角にあたると考えられる。

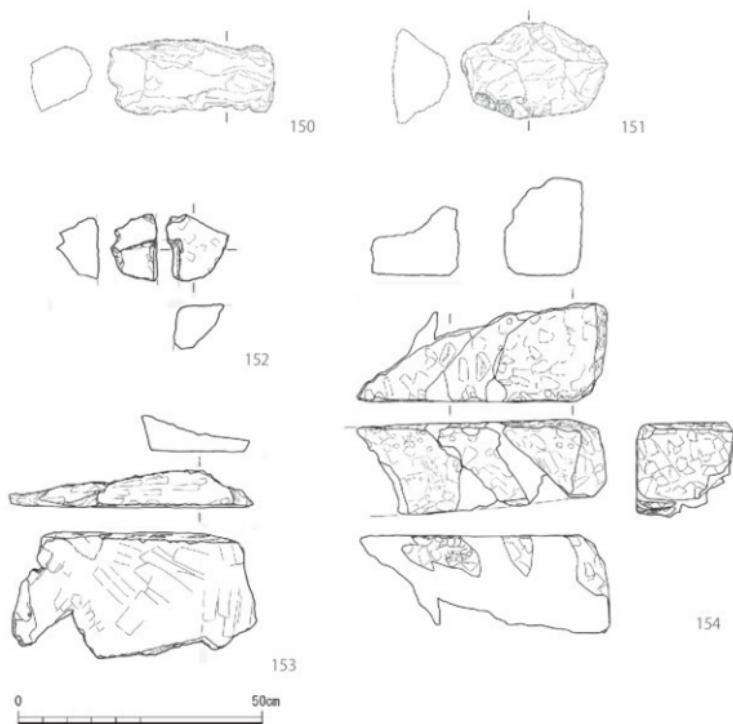


图 63 西石室出土龟山石 ( $S = 1/10$ )

## 第4節 石室閉塞土

この節では石室閉塞土を中心に、両石室の入口周辺の調査成果について述べる。2012年度調査で行った、墳丘前面斜面の発掘調査と石室入口周辺の土層再検討によって得られた情報が中心となっている。墳丘前面斜面の調査成果のうち石室・墳丘構築に関する内容は前節までに述べている。

植山古墳墳丘のすぐ南面は調査前から宅地となっており、墳丘のすぐ南隣に民家が建った状態であった。宅地に接する墳丘前面（南）は、高さ約5～8m、傾斜角度約45～75度という非常にきつい斜面であり、表面には竹木が多量に林立していた。2000年度調査の段階では墳丘前面の掘削を行った場合、遺跡と宅地双方に悪影響が出ると予想されたため、墳丘前面の調査は行わず、両石室の渢門部の掘削も前面斜面が崩壊しない範囲に留めた。この後、宅地の買収を進めて南側斜面の調査を行なう環境作りに努め、2012年度によく墳丘前面斜面の調査に取りかかった。

墳丘の南側は、かなりの削平を受けていることが調査前の地形や石室床面高（石室床面高は南側平坦面高より3～4m高い）などから予想されていた。そのため2012年度調査前には、後世の堆積層を除去した段階において両石室入口の南側延長部分に石室へつながる通路（所謂、墓道）の断面が斜面上に現れることを想定していた。

作業は表土および後世の堆積土を順次除去し、墳丘ないし地山の検出を行なった。概して斜面下半は

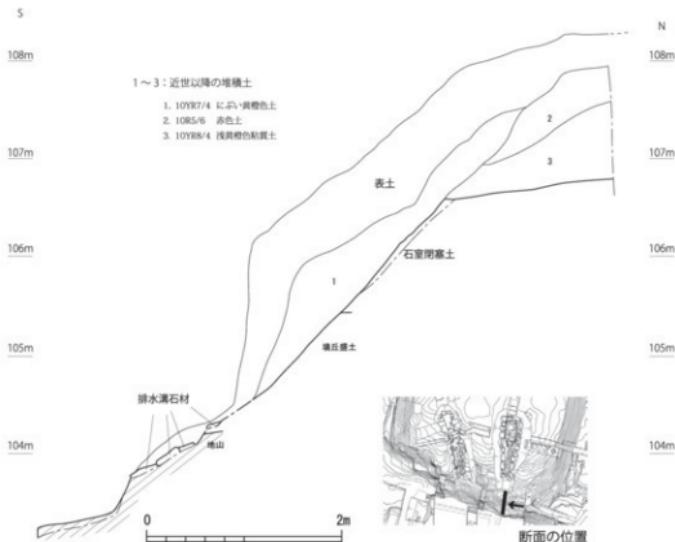


図64 墳丘前面 東石室主軸上土層断面図 (S = 1/50)



図 65 墳丘前面 西石室主軸上土層断面図 (S = 1/50)

表土が薄く、地点によっては厚さ 0.05 m 程度の表土の直下で遺構面が検出された。表土を除去した段階で斜面下半では埴丘ないし地山が、上半では石室石材取り去り時に排出され堆積したと考えられる土が、それぞれ検出された（図版 44・45）。続いて後世の堆積土の除去を進めようとする中で、東石室前に石室床面より高い位置にまで厚く盛土が施されていることが次第に明らかとなった。この段階から並行して、両石室入口部の壁面（図 66・67。2000 年度調査時に便宜的に掘削を止めた壁面）の再検討を行った。

その結果、東石室の羨門前面には石室構築のための盛土（埴丘盛土を兼ねる）の上から、それとは土質の異なる盛土が追加されていることが明らかとなった。この盛土は後世の削平を受けた状態でなお、石室床面より 1 m 上の高さまで遺存しており、通路を塞いでいる。東・西壁面の状況と併せると、削平前は羨門周辺を完全に覆い尽くす範囲に盛土がなされている。この盛土が石室閉塞土である。

なお、石室閉塞土という名称は、横穴式石室の閉塞方法として採用されることの多い閉塞石を下敷きにして命名したものである。ただし、閉塞が行われる地点や範囲、性質などは閉塞石とは大きく異なっており、単純に石を土に置き換えた方法ではないことは注意が必要である。

閉塞土の存在を認識した後は、範囲と性質の確認を行い、その現地保存に努めた。

先に東石室前面において閉塞土の存在を確認した後、西石室前面においても閉塞土の存在確認を進めた。西石室前面付近は石室石材抜き取り時の改変度合いが東石室側よりも激しく、遺構面の遺存状況は良くなかったが、わずかに石室閉塞土が残されていることが確認できた。

図 69 に両石室の閉塞土の検出範囲を示している。東石室閉塞土の検出範囲は高さ約 4 m、奥行（南

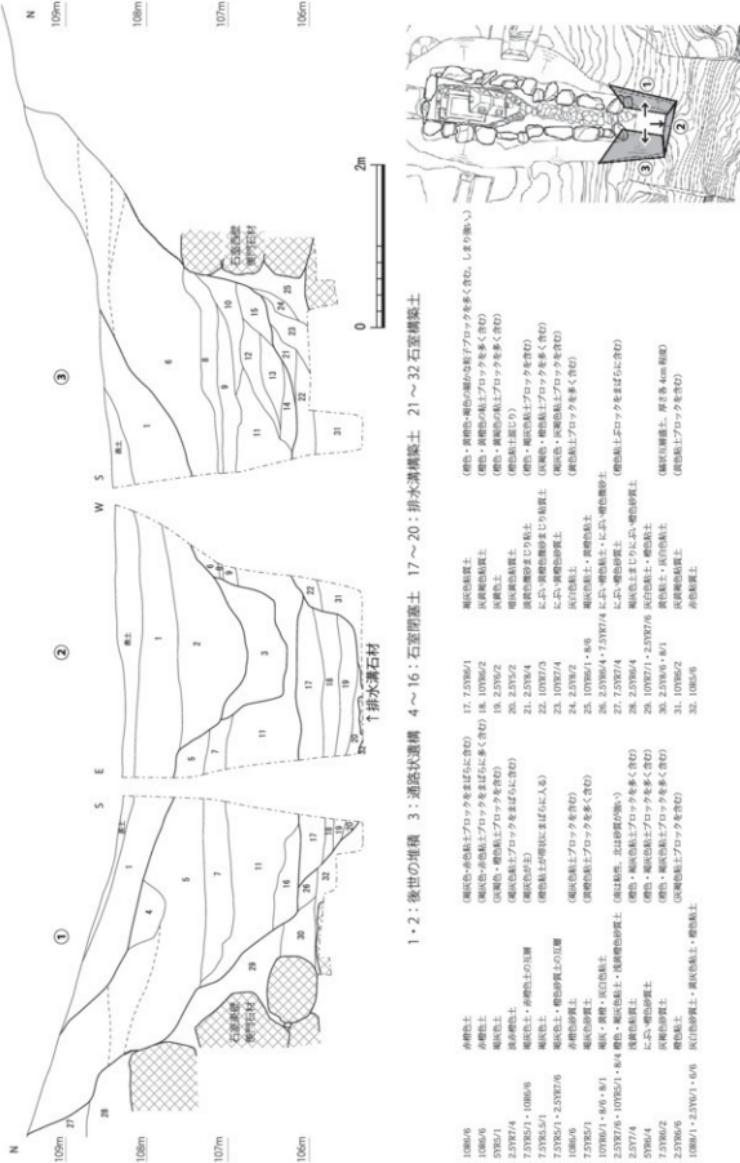
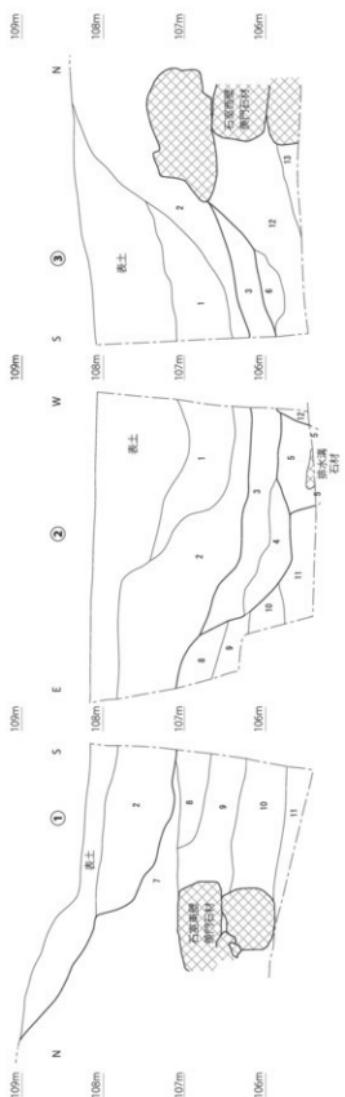
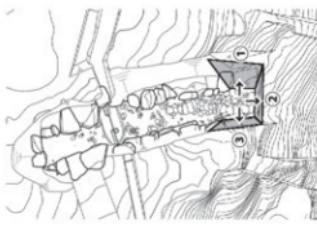


図 66 東石室 南門部壁面上層断面図 (S = 1/60)



1・2：後世の堆積 3・4：石室開窓土 5：排水溝構築土 6～13：石室構築土



- |                            |                    |
|----------------------------|--------------------|
| 1. IOY R7/4                | に伝る堆積土             |
| 2. 2.5Y R6/6               | 砂土                 |
| 3. 3.5Y T7/0               | 泥炭化土               |
| 4. 2.5Y R6/4               | 黄褐色砂土              |
| 5. 2.5Y T6/6               | 泥炭化粘土              |
| 6. 2.5Y T6/6               | 褐色の泥土              |
| 7. 2.5Y R6/4・10Y R7/1      | 褐色粘土・灰褐色粘土・褐色土     |
| 8. 2.5Y R6/6・7/2・4/1       | 褐色粘土・褐色砂土・に伝る堆積土   |
| 9. 2.5Y R6/4・10Y R7/2      | に伝る堆積土・に伝る堆積土・褐色粘土 |
| 10. 10Y R7/4・5/1・2.5Y R6/1 | 褐色粘土上<br>泥炭化土上     |
| 11. 10Y R4/1               | 泥炭化土上              |
| 12. 2.5Y G1・5Y R7/4        | 泥炭化土上に伝る堆積土        |
| 13. 2.5Y G1・2.5Y R6/4      | 泥炭化粘土・に伝る堆積土       |
- (褐色粘土をばらに伝る)  
(赤褐色・黒褐色・グリーン色)  
(褐色・灰褐色・レッド・オレンジ)  
(褐色・灰褐色・シルバーブラック色)  
(黒褐色・シルバーブラック色)  
(黒褐色・シルバーブラック色)  
(5～20cm厚の土層)  
(5～8cm厚の土層)

図 67 西石室 美門部壁面上層断面図 ( $S = 1/60$ )

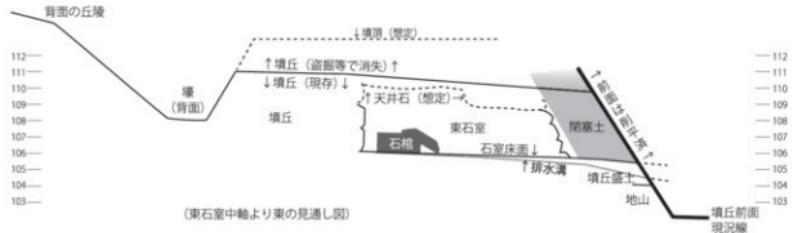


図 68 墳丘縦断面模式図

北) 約 4 m、幅(東西) 約 10 m に及ぶ。西石室の閉塞土は高さ約 2 m、奥行約 2 m、幅約 6 m である。ただし西石室閉塞土は上部がほぼ削られており、埴丘・石室盛土上にへばり付く様な形で薄く残っているだけであり、残存体積は東石室より大幅に少ない。閉塞直後は、羨門石材が盛土によって完全に覆い尽くされていたと推測される。

東石室閉塞土は主として褐色砂質土と橙色砂質土からなる。西石室閉塞土は橙色土と橙色・灰色粘土からなり、前者が先に盛られている。いずれも周囲の埴丘・石室盛土とは土質が明確に異なる。ただし、土自体は埴丘盛土と同様に、古墳の周辺の地山を掘削して採取されたと考えられる。盛土内にはわずかに土師器・須恵器の細片が含まれるが、時期を特定できる程度の資料は無い。

両石室の中間地点では、西石室閉塞土の上に東石室閉塞土が盛られていることを確認している(図 28 の 17・45 層の接觸部)。図 28 は立面見通し図であるため、17 層が 45 層の前面に上から張り付いている状況を示している)。閉塞土の時期はいずれも西石室築造より後、7 世紀前半以降であると言える。西石室閉塞土と東石室閉塞土の間に時期差があるのか、ほぼ同時の工程差であるのかは不明である。

6 世紀末の東石室築造から閉塞土が盛られるまでは数十年以上の時間が経過している。この間、何らかの形で東石室入口は閉塞されていたはずであるが、その痕跡は残されておらず、具体的な方法は不明である。閉塞土が盛られる際に、綺麗に除去された可能性もある。

東石室の羨道延長上では、閉塞土の上から掘り込まれた溝状遺構を検出している(図 66・図版 52)。溝状遺構は L 字形に掘り込まれ、上幅約 1.4 m、深さ約 0.5 m を測る。上部は石材抜き取り時に削平されている。人為的に埋め戻されており、埋土は非常にしまりが強い。断面形が通路状であり羨道の延長に位置することから、遺構の検出当初(この時点では石室閉塞土の評価も定まっていなかったこともあり)は墓道の痕跡である可能性を考えた。しかし、底面高が石室床面よりも 0.4 m 以上高く、幅もやや狭い。加えて、溝状遺構が掘り込んでいる閉塞土の時期も踏まえると、当初の墓道とは捉え難い。これらのことから、溝状遺構は閉塞土が施された後に掘削された石室への進入路であった可能性がある。それが埋葬行為に伴うものか、盗掘等によるものであるのかは判別が難しい。しかし、埋葬行為に伴う可能性も残されているため、掘削は一部に留め、遺構は現地に保存している。



図 69 石室閉塞土・填丘南側整地層検出範囲図 ( $S = 1/300$ )

## 第5節 南側平坦面の調査

### 第1項 遺構面の検出

墳丘の南側平坦面の発掘調査は2001年度と2012年度に実施した。所謂、古墳の前庭部にあたる地点である。現況の平坦面の広さは東西約30m、南北約35mである。調査前は平坦面の西半部が宅地、東半部が元耕作地の竹林であった。なお、本報告書では南側平坦面として一括りにしているが、実際は南北より北半が一段高く、さらに東半部の竹林部分が一段高い地形となっている。

まず2001年度に空閑地である東半部に細長い調査区を設け、遺跡の残存状況の把握を行った。その結果、古墳築造時に広範囲で整地作業が行われていることが確認でき、南側平坦面での面的な調査が必要であることが明らかとなった。西半部宅地の史跡用地買収が終了した後、2012年度に南側平坦面全体を対象とした調査を行った。高台である東半部は遺構の遺存状況が良好であると予想されたため、ほぼ全面の調査（1・2トレンチ）を行った。西半部については出土量の関係もあり、部分的な調査に留めた。2012年度調査区の範囲内には2001年度調査区を含んでいるが、これは成果の再検討をする目的と、すでに断割調査を行っている2001年度調査東トレンチを遺構面下の確認区として再利用する目的のためである。

検出した遺構面は、地山面もしくは古墳に伴う整地層面である。整地層の検出範囲は図69に示しており、その範囲外は地山である。南側平坦面で遺構面として検出している地山は、花崗岩風化層ないし岩盤であり、それらの範囲については大幅な削平を受けていることがうかがえる。墳丘に近接する平坦面北側（現在の墳裾から南に約6～14mまでの範囲）では地表面から約0.3m前後の深度で地山が検出されるほどの削平を受けており、墳丘前面裾については正確な位置を明らかにすることはできなかった。墳丘前面裾に関連する要素として、4トレンチ壁面で地山を削り込んで東西方向の溝を切った後に、盛土を施す様子を確認している（図81下）。壁面より東側は削平されてしまっており、壁面で確認できただけであるが、この地点周辺のラインが前庭部を構築する上で何らかの基準となつた可能性はある。

平坦面東側の高台（1～2トレンチ北半）は近世以降の盛土によって形成されていることが明らかとなった。その下層で整地層を検出している。この範囲では整地層上面で東西方向の耕作溝を検出している。平坦面東側での整地層の上面高は標高101.2～102.5mであり、概ね北から南、また東から西に向かって緩やかに低くなる。

平坦面西側での整地層上面高は、5トレンチでは北端で約100.6m、同南端で約98.5m、6トレンチでは北端で約100.5m、同南端で約99.0mである。東側と同じく、北から南、また東から西に向かって低くなる。

整地層上面は全体で見ると現況と同様に、東側が高台になっている。全体としては北から南へ、東から西へ低くなっている。特に平坦面西半では北から南に急速に低くなっている。現況では南半部上面はほぼ水平な面を形成しているが、これは中世および近世以降に大幅な盛土による宅地造成が行われたためであることが明らかとなった。3トレンチ西端では現況地面から整地層上面までは約2.1mもの比高差がある。後世の削平も考慮する必要はあるが、古墳築造当時、少なくとも調査対象地の南

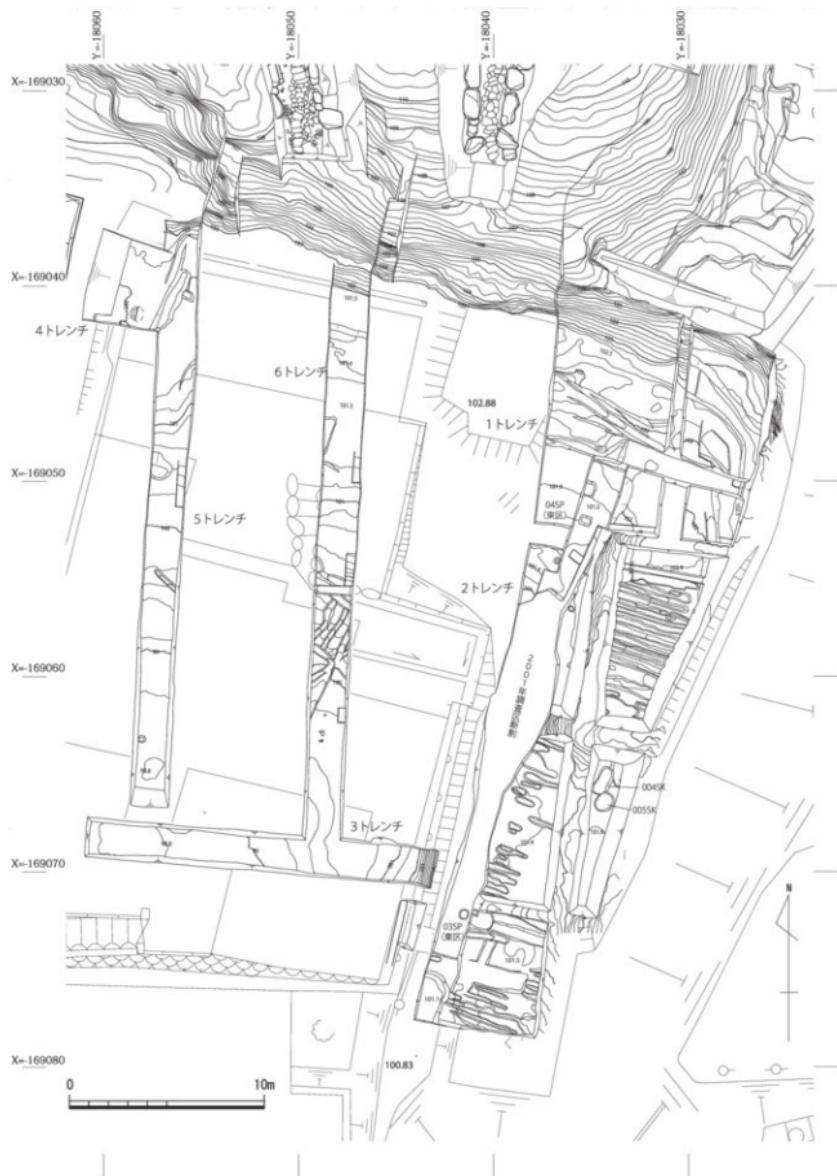


図 70 塗丘南側平坦面平面図 (S = 1/250)

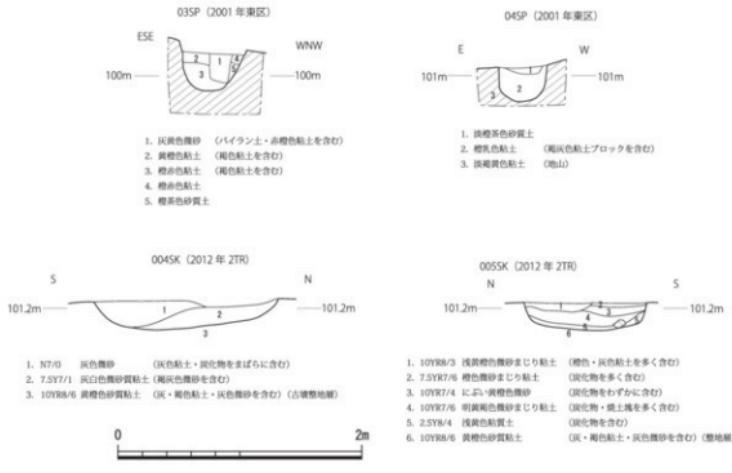


図 71 塗丘南側平坦面 遺構断面図 (S = 1/40)

半は斜面を形成していた可能性が高いと言える。整地層上面がもっと低くなる 3 トレンチ西端と現在の塗丘頂部とでは約 13 m もの比高差がある。

## 第 2 項 遺構

南側平坦面で確認できた遺構は、古墳時代と中世以降の二時期に大きく分かれる。

古墳時代の遺構としては、ピット 2 基が挙げられる（図 70・71）。03SP と 04SP はともに 2001 年度調査で確認した遺構で、東区の断割調査によって整地層下の地山面に掘られたピットである。どちらも整地層下の地山が谷に向かって落ち込む肩部付近に位置している。整地行為に伴って行われた何らかの作業に伴う遺構である可能性がある。整地層下の状況を確認した範囲は 2001 年度調査区部分のみであるため、周間に同様の遺構が存在する可能性は残されている。

整地層上面では明確な古墳時代の遺構は見つかっていない。整地層の上部の落ち窪みに少量の炭化物や遺物が含まれる部分も見られるが、整地行為の一工程との明確な差は見出し難い。

平坦面中央付近や東半部では整地層上面に中世の耕作溝が存在する。東半部の耕作溝は東西方向から方位にわずかな傾きが見られる。これは塗丘および東側丘陵裾の傾きと一致しており、地形に合わせて耕作を行ったものと考えられる。

2 トレンチ南東部では整地層上面に掘られた 2 基の土坑（004・005SK）を確認している。時期はいずれも近世以降である。平坦面東半では 2 基の土坑の埋没後、高さ約 0.5 ~ 1.5 m の盛土が行われている。

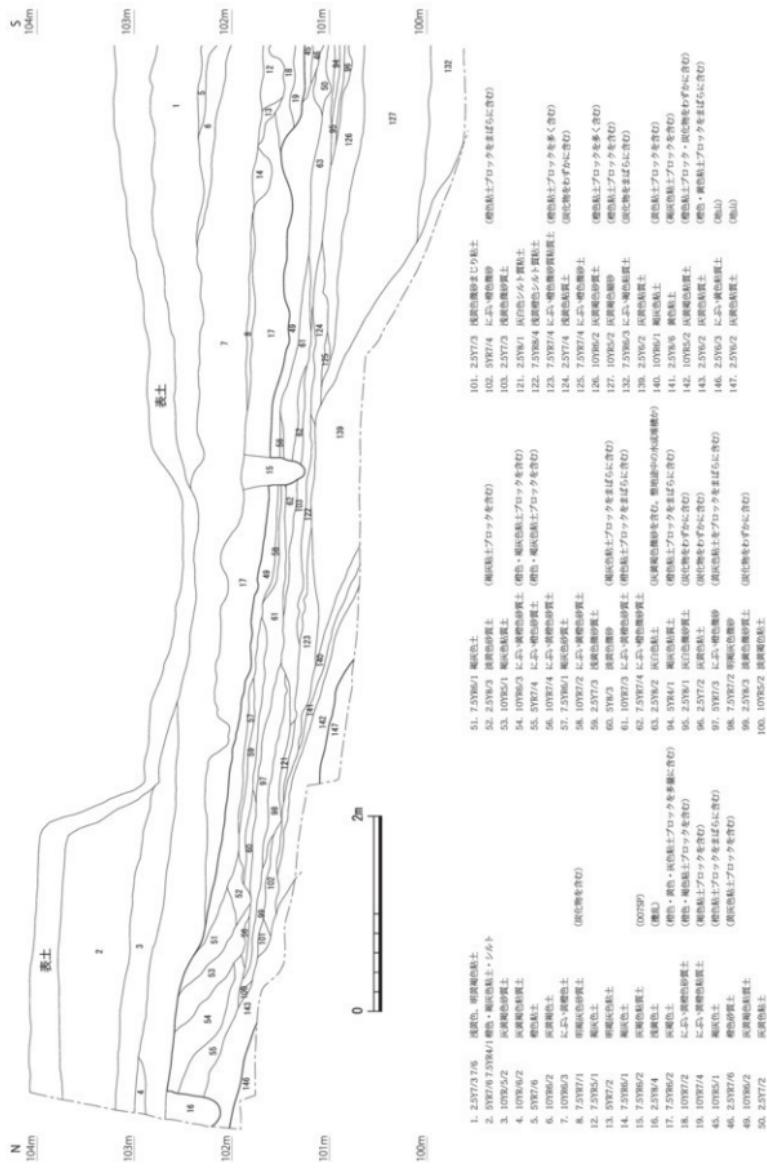


図 72 1・2 トレンチ 整地層断面図① (S = 1/50)

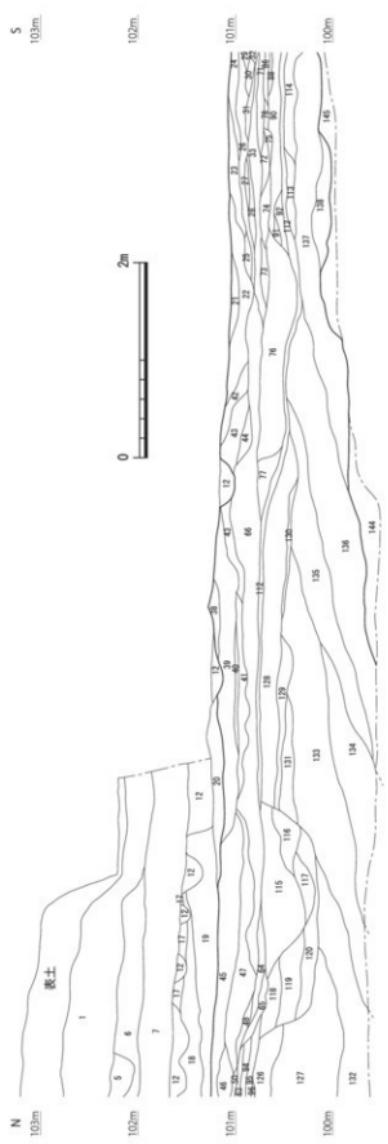
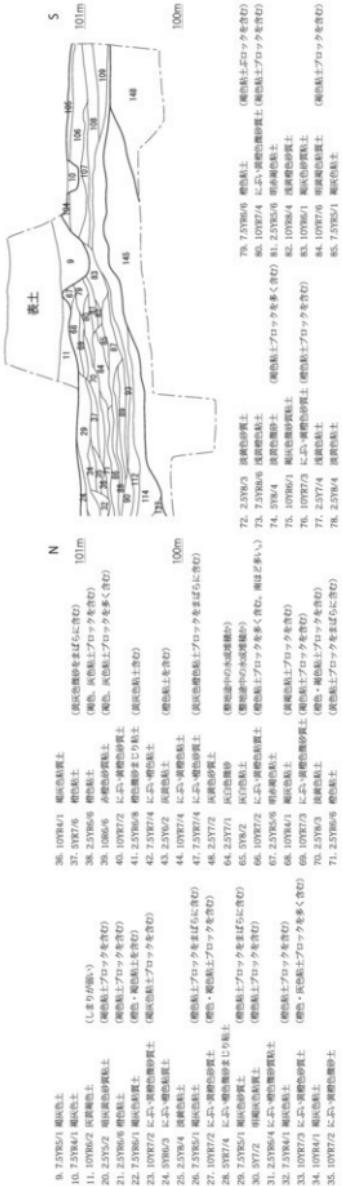


図 73 1・2 トレンチ 整地層断面図② (S = 1/50)



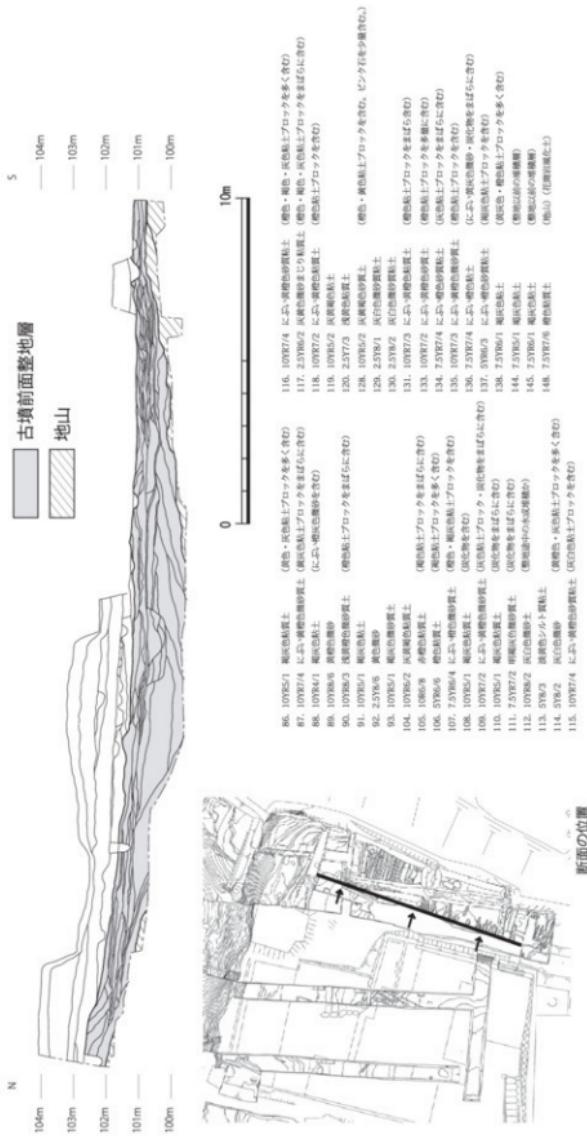


図 74 1+2 トレンチ 整地層断面図③ (S = 1/150)

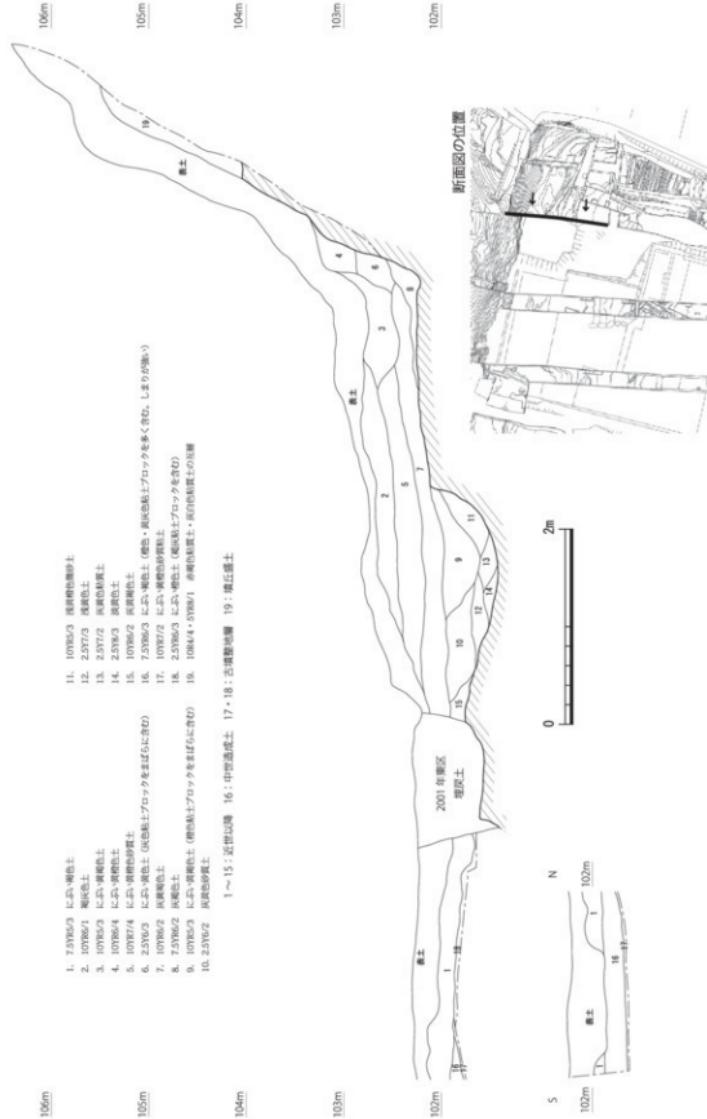


図 75 1トレンチ西壁 土層断面図 (S = 1/50)



図 76 1 トレンチ中央南北畦 西面上層断面図 ( $S = 1/50$ )

### 第3項 整地層

南側平坦面では広範囲で古墳築造に伴うと考えられる整地層を検出している（図69）。

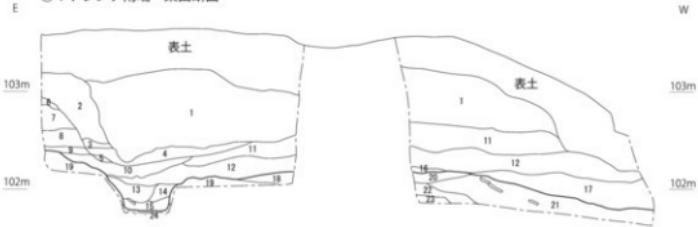
平坦面の北側および南東側では地山を検出しており、整地層はその間に存在する谷地形を埋め立てて古墳の前面（広義での前部にあたる）を造り出している。整地後の上面は平坦ではなく、大枠では北から南、また東から西へ向かって低く傾斜していたようである。ただし、削平を受けている部分も多く、当初は何らかの形で段築が存在していた可能性も高い。少なくとも現況の墳裾は石室床面よりも3 m以上低くなってしまっており、石室へ向かう通路（墓道）は失われてしまっている。

確認した範囲内では2トレンチ中央付近が谷の最も深くなる地点であり、この場所の整地層の厚さは約2.0 mに及ぶ。谷筋はこの地点から西南西～南西方向に伸びると考えられる。

整地に用いられた土は主として、東側では黄・橙・褐色の粘質土、西側では橙・赤色粘質土からなる。東側では厚さ約0.05～0.15 mの単位で互層に細かく盛土を施す地点も見られるが、厚さ0.2 m超の単位で広く盛土を施す地点も多く、盛土の状況は場所による差が大きい。谷が深い地点については黄灰褐色砂質土で大きく埋め立てた後に、上記の細かな盛土を施している。西側では整地層上部に用いる土の色調が全体で橙・赤色系で統一されており、外観を意識している可能性もある。

整地層内からは古墳時代の土器の他、阿蘇溶結凝灰岩の破片が出土している。図版59下・60上のように、破片がある程度まとめて出土する部分も見られる。

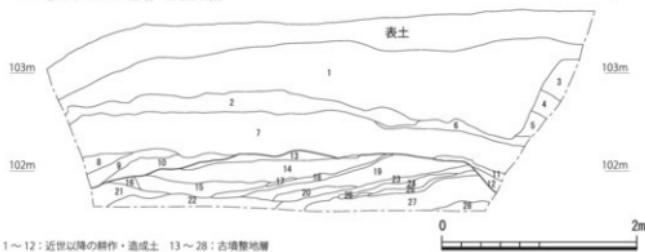
① 1 レンチ南端 東西断面



1 ~ 16 : 近世以降の耕作・造成土 17 : 中世の造成土 18 ~ 23 : 古墳整地層 24 : 地山

- |              |                           |              |                              |
|--------------|---------------------------|--------------|------------------------------|
| 1. SYR7/6    | 褐色・褐褐色・暗灰褐色粘土～シルト         | 13. SYR6/3   | にぶい褐色粘土質土                    |
| 2. 10YR7/4   | にぶい褐色粘土                   | 14. SYR6/4   | にぶい褐色粘土                      |
| 3. 10YR8/2   | 灰白色砂粘土                    | 15. SYR7/1   | 明神浜色砂粘土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)    |
| 4. 7.5YR8/2  | 灰白色砂粘土                    | 16. 7.5YR8/2 | 灰褐色粘土質土                      |
| 5. SYR8/4    | 褐色粘土                      | 17. 10YR9/2  | 灰黃褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む。しまりが悪い)  |
| 6. 10YR8/3   | 浅灰褐色粘土                    | 18. 7.5YR8/6 | 褐色砂粘土 (褐色粘土ブロックを含む)          |
| 7. 10YR7/2   | にぶい黃褐色砂粘土                 | 19. SYR7/6   | 褐色微細まじり粘土 (褐色粘土ブロックを含む)      |
| 8. 10YR8/3   | 浅灰褐色粘土質土                  | 20. 10YR7/3  | にぶい黄褐色砂粘土 (褐色・黄色粘土ブロックを含む)   |
| 9. SYR8/1    | 灰白色砂粘土質土                  | 21. 7.5YR5/2 | 灰褐色粘土質土 (褐色・褐色・灰白色粘土ブロックを含む) |
| 10. 7.5YR7/3 | にぶい褐色土 (灰白色粘土ブロックをまばらに含む) | 22. 7.5YR4/4 | にぶい褐色微砂土                     |
| 11. 10YR6/3  | にぶい褐色粘土                   | 23. SYR6/6   | 淡褐色微細まじり褐色粘土質土               |
| 12. 10YR5/2  | 灰褐色砂質土                    | 24. 10YR3/1  | 黒褐色粘土質土 (地山)                 |

W ② 2 レンチ北端 東西断面

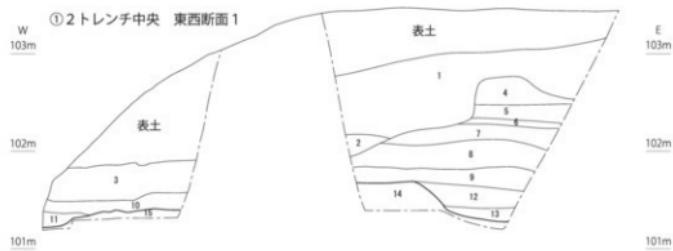


1 ~ 12 : 近世以降の耕作・造成土 13 ~ 28 : 古墳整地層

- |              |                             |              |                            |
|--------------|-----------------------------|--------------|----------------------------|
| 1. SYR7/6    | 褐色・褐灰色・暗灰褐色粘土～シルト           | 20. 10YR8/6  | 黄褐色粘土質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)  |
| 2. 2.5YR6/2  | 褐色微細まじり粘土                   | 21. 7.5YR6/1 | 褐色粘土質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)   |
| 3. 10YR7/4   | にぶい褐色粘土                     | 22. 7.5YR7/2 | 明神浜色粘土質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む) |
| 4. 10YR8/2   | 灰白色粘土                       | 23. 10YR8/1  | 灰白色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)        |
| 5. 2.5YR7/2  | 灰褐色粘土                       | 24. 2.5YR6/6 | 褐色微細まじり粘土                  |
| 6. 7.5YR8/2  | 灰褐色粘土質土                     | 25. 10YR8/2  | 灰褐色粘土                      |
| 7. 10YR5/2   | 灰褐色砂粘土                      | 26. 2.5YR4/4 | 黄褐色シルト (褐色粘土ブロックを含む)       |
| 8. 10YR6/2   | 灰褐色砂土                       | 27. 2.5YR5/6 | 明神浜色微砂じり粘土質土               |
| 9. 10YR7/7   | にぶい黄褐色粘土質土                  | 28. 7.5YR7/4 | にぶい褐色粘土質土                  |
| 10. 7.5YR8/2 | 灰褐色粘土質土                     |              |                            |
| 11. 7.5YR8/1 | 灰白色粘土質土                     |              |                            |
| 12. 2.5YR6/3 | にぶい褐色粘土                     |              |                            |
| 13. 7.5YR5/3 | にぶい褐色土 (褐色粘土ブロックを含む)        |              |                            |
| 14. 10YR6/2  | 灰褐色砂質土 (褐色・褐色粘土ブロックを含む)     |              |                            |
| 15. 10YR7/2  | にぶい黄褐色粘土質土 (褐色・褐色粘土ブロックを含む) |              |                            |
| 16. SYR6/4   | にぶい褐色粘土                     |              |                            |
| 17. 10YR8/6  | 黄褐色粘土                       |              |                            |
| 18. 2.5YR7/2 | 灰褐色粘土 (褐色粘土を含む)             |              |                            |
| 19. 10YR7/2  | にぶい黄褐色粘土質土 (褐色・褐色粘土を多く含む)   |              |                            |

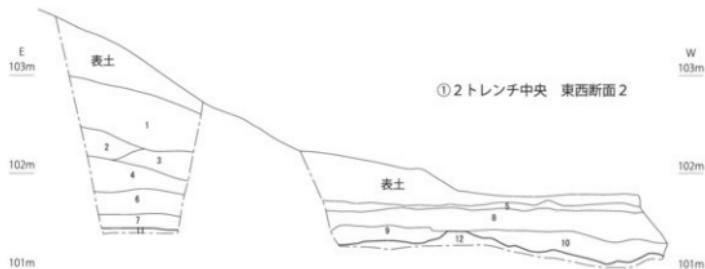


図 77 1 レンチ南端・2 レンチ北端東西壁 土層断面図 (S = 1/50)



1 ~ 13 : 近世以降の耕作・造成土 14・15 : 古墳整地層

- |                                    |                                    |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 2SYR5/2 明灰黄色土                   | 9. 10YR6/1 細灰色粘質土                  |
| 2. 7SYR6/1 周灰色砂質土                  | 10. 10YR6/2 灰黃褐色粘質土                |
| 3. 10YR7/3 にぶ~黄褐色砂質土               | 11. 10YR6/3 にぶ~黃褐色土 (褐色粘土ブロックを含む)  |
| 4. 10YR7/4 にぶ~褐色砂質土                | 12. 10Y6/1 灰色シルト質粘土                |
| 5. 7SYR6/4 にぶ~褐色陶沙質土 (周灰粘土ブロックを含む) | 13. 7SY7/1 灰白色粘質土 (褐化物をまばらに含む)     |
| 6. 7SYR6/1 周灰色シルト                  | 14. 7SYR7/6・7SYR5/1 橙色粘質土・周灰粘質土の互層 |
| 7. 7SYR8/4 浅黃褐色粘質土                 | 15. 2SYR6/6 橙色粘土                   |
| 8. 10YR6/2 灰黃褐色土                   |                                    |



1 ~ 10 : 近世以降の耕作・造成土 11・12 : 古墳整地層

- |                                       |
|---------------------------------------|
| 1. 2SY5/2 明灰黄色土                       |
| 2. 2SY6/3 にぶ~黃褐色砂質土 (周灰土まじり)          |
| 3. 2SY6/2 灰褐色砂質土 (周灰土まじり)             |
| 4. 10YR6/1 周灰色粘質土 (黄褐色粘土ブロックをまばらに含む)  |
| 5. 10YR6/1 周灰色粘質土                     |
| 6. 7SYR4/1 細灰色砂質土 (黄褐色粘土ブロックをまばらに含む)  |
| 7. 10YR5/1 周灰色砂質土                     |
| 8. 10YR7/1 にぶ~黃褐色陶沙質土                 |
| 9. 10YR6/2 灰黃褐色粘質土                    |
| 10. 10YR6/2 灰黃褐色砂質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む) |
| 11. 10YR7/4 にぶ~黃褐色砂質土                 |
| 12. 2SYR6/6 橙色粘土                      |

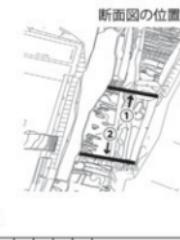


図 78 2 トレンチ中央東西壁 土層断面図 (S = 1/50)

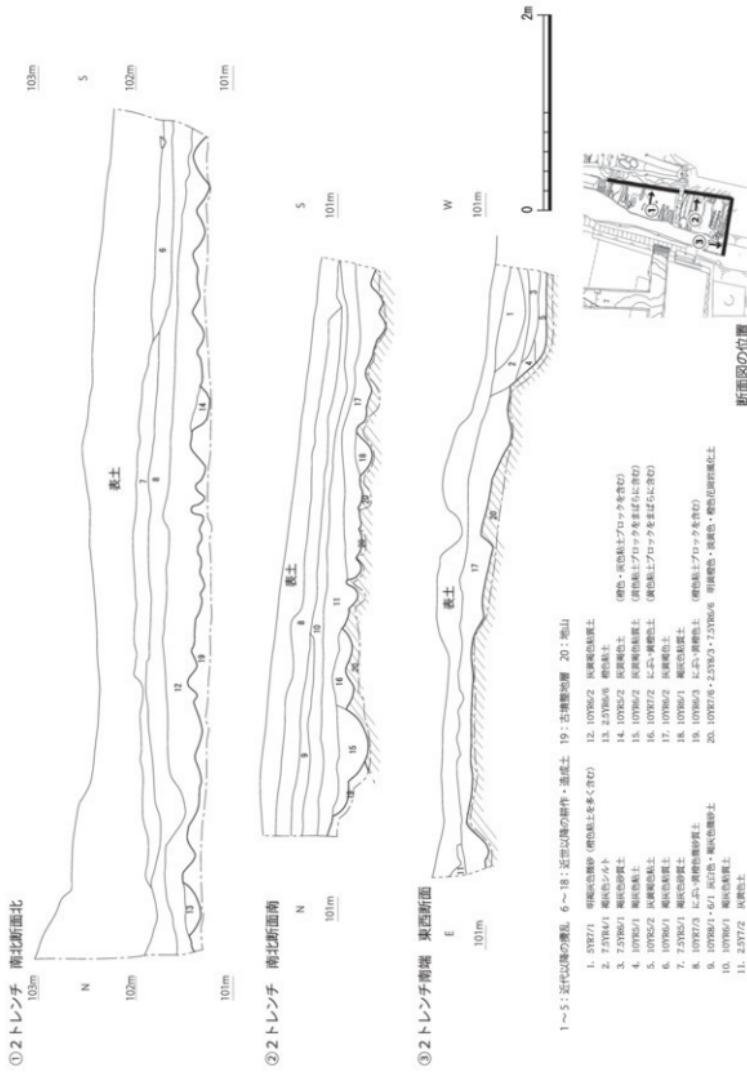


図 79 2 レンチ南半壁面 土層断面図 (S = 1/50)

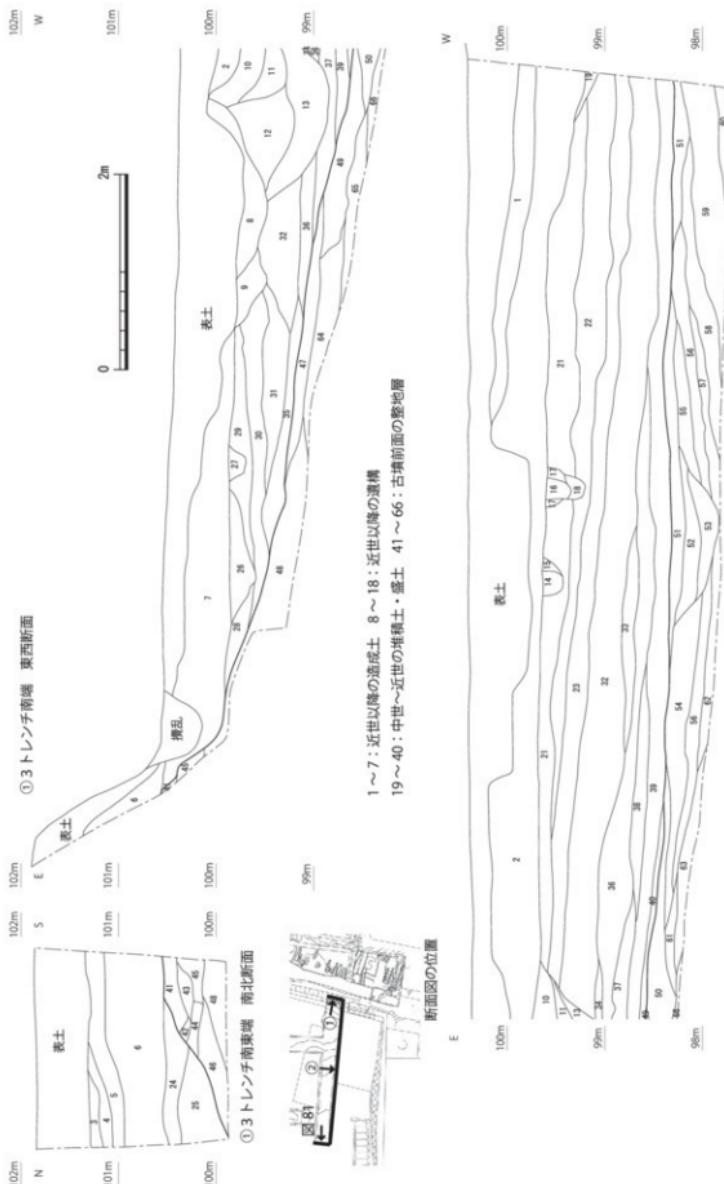
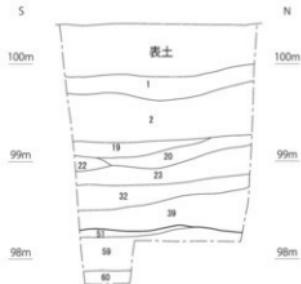
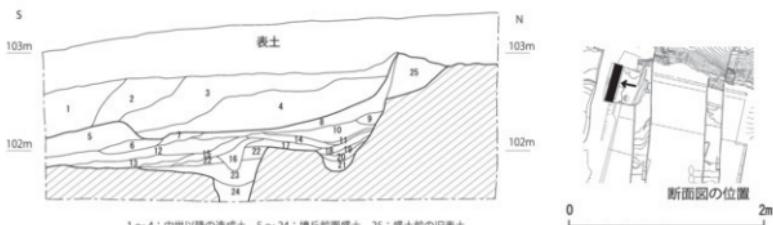


図 80 3 ドレンチ南半壁面 土層断面図① (S = 1/50)



3 トレチ南西端 南北断面

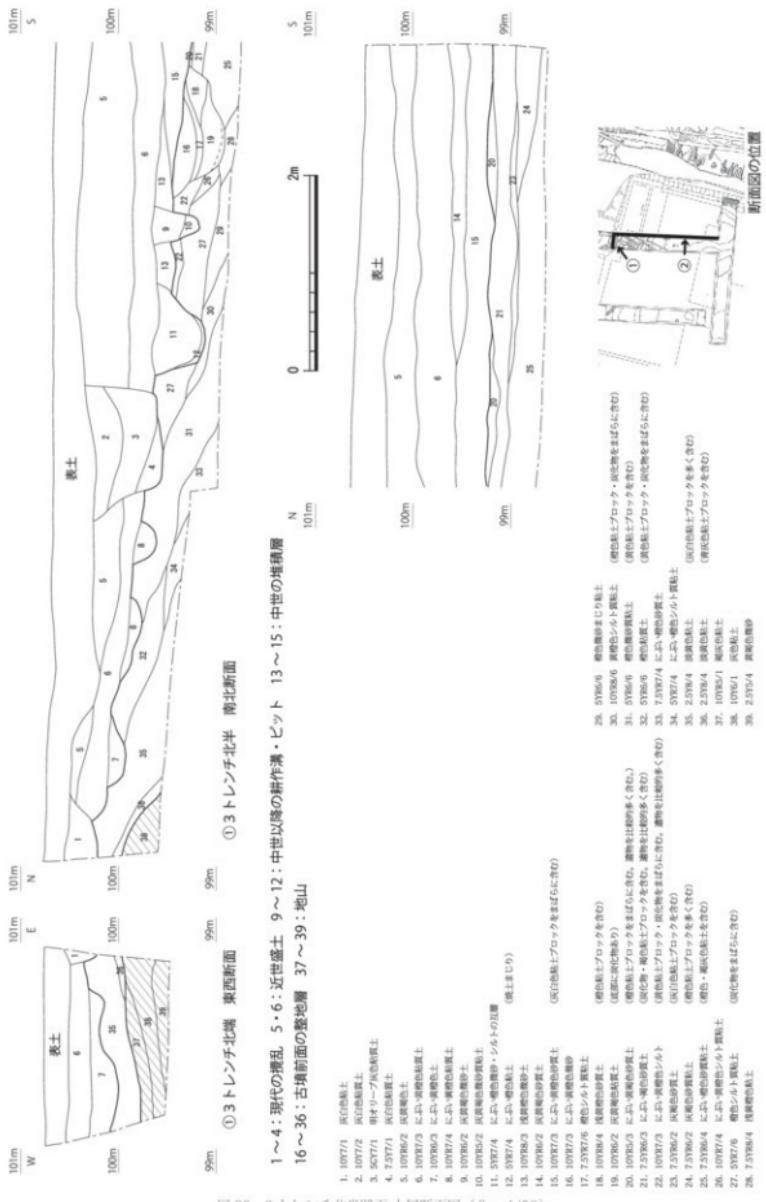
1.	10YR7/2	にぶい・黄褐色粘質土
2.	2.5Y6/2	灰褐色土
3.	7.5YR6/4	灰褐色粘質土
4.	7.5YR8/1	褐色粘土
5.	10YR5/1	褐色粘土
6.	10YR5/2	灰褐色土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
7.	10YR7/3	にぶい・黄褐色粘質土
8.	5Y7/1	灰褐色粘土
9.	2.5Y8/1	灰褐色土
10.	10YR6/2	褐色粘土
11.	10YR7/2	にぶい・黄褐色粘質土
12.	10YR7/1	灰褐色粘土
13.	10Y7/1	灰褐色粘土・シルトのラミナ層
14.	10Y7/1	灰褐色粘土
15.	2.5Y8/4	淡褐色粘土
16.	10Y7/2	灰褐色粘土
17.	2.5Y5/2	灰褐色黄土
18.	N6/0	粘土
19.	10YR6/2	灰褐色砂質土
20.	2.5Y7/1	灰褐色粘土 (3~5cm 大の礫を含む)
21.	10YR7/3	にぶい・黄褐色土 (炭化物をまばらに含む)
22.	10YR6/3	にぶい・黄褐色粘質土
23.	10YR6/2	灰褐色土
24.	10YR7/2	にぶい・黄褐色粘質土
25.	10YR5/2	灰褐色砂質土
26.	10YR7/4	にぶい・黄褐色粘質土
27.	10YR6/2	灰褐色砂質土
28.	10YR6/2	灰褐色砂質土
29.	7.5YR7/4	にぶい・褐色粘質土
30.	7.5YR6/3	にぶい・褐色粘土
31.	7.5YR6/2	灰褐色粘土 (褐色粘土ブロックを多く含む)
32.	10YR6/3	にぶい・黄褐色砂質土
33.	7.5YR7/4	にぶい・褐色粘土
34.	7.5YR6/4	にぶい・褐色砂
35.	7.5YR5/2	灰褐色砂質土
36.	7.5YR7/3	にぶい・褐色シルト (炭化物をまばらに含む)
37.	2.5Y7/2	灰褐色シルト
38.	10YR7/3	にぶい・灰褐色砂質土
39.	10YR6/3	にぶい・黄褐色微砂質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
40.	7.5YR6/2	灰褐色砂質土
41.	5Y8/4	にぶい・褐色粘土
42.	7.5YR6/2	灰褐色粘土
43.	5Y8/4	にぶい・褐色粘土
44.	5Y8/3	にぶい・褐色粘土
45.	5Y8/4	にぶい・褐色粘土
46.	5Y8/1	褐灰色粘土 (灰褐色・褐色粘土ブロックを含む)
47.	10YR6/2	灰褐色砂質土
48.	5Y8/5-1/6	褐灰色じりじり褐色粘土 (灰褐色・褐色粘土ブロックを含む)
49.	2.5Y7/3	浅褐色砂質土
50.	2.5Y7/2	褐色・黄褐色じりじり灰褐色粘土
51.	10YR8/6	黄褐色砂質土じりじり土
52.	10YR7/4	にぶい・黄褐色シルト・シルト (黄褐色粘土ブロック、炭化物をまばらに含む)
53.	10YR7/2	にぶい・黄褐色微砂質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
54.	10YR6/1-1/4	褐灰色じりじり・黄褐色微砂質土 (炭化物をまばらに含む)
55.	10YR7/2	にぶい・黄褐色微砂質土 (炭化物を含む)
56.	10YR6/2	灰褐色砂質土 (炭化物、黄褐色粘土を含む)
57.	10YR8/6	褐褐色シルト・黄褐色粘土 (炭化物を含む)
58.	10YR7/3	にぶい・黄褐色微砂質まじり粘土 (黄褐色粘土ブロック、炭化物をまばらに含む)
59.	5Y8/6	褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
60.	10YR5/1	褐灰色粘土
61.	10YR7/1	灰白色シルト・黄褐色粘土 (炭化物を多く含む)
62.	2.5Y8/6	黄色微砂土
63.	10YR7/6	明黄色微砂質まじり粘土 (褐色・白色粘土を含む)
64.	5Y8/7	褐色微砂質まじり粘土 (白色粘土ブロックをまばらに含む)
65.	5Y8/6	褐色粘土 (黄色・褐灰色粘土ブロックを多く含む)
66.	10YR6/1	褐灰色砂質土



1 ~ 4: 中世以降の造成土 5 ~ 24: 塡土前面盛土 25: 盛土前の旧表土

1.	10R6/5	赤褐色粘土 (褐灰色粘土ブロックを含む)
2.	2.5YR4/1	赤褐色粘土
3.	2.5YR5/4	にぶい・赤褐色粘土 (褐灰色粘土ブロックを含む)
4.	5Y8/1	褐灰色粘土 (褐灰色粘土ブロックを含む) 褐色・黄褐色粘土ブロックを多く含む
5.	7.5YR4/1	褐灰色粘土 (黄褐色粘土ブロックを多く含む)
6.	7.5YR5/1	褐灰色粘土 (黄褐色粘土ブロックをまばらに含む)
7.	7.5YR6/3	にぶい・褐色粘土
8.	7.5YR6/6	褐褐色粘土 (褐灰色粘土ブロックをまばらに含む)
9.	7.5YR6/4	にぶい・褐褐色粘土
10.	10YR6/4	浅褐色砂質土
11.	10YR7/6	明黄色粘土
12.	7.5YR5/1	褐灰色粘土 (黄褐色粘土ブロックを含む)
13.	10YR7/2	にぶい・黄褐色粘土 (黄褐色粘土ブロックを含む)
14.	2.5Y8/4	淡黃褐色砂質土 (褐色粘土ブロックをまばらに含む)
15.	5Y8/4/1	褐灰色粘土 (黄褐色粘土ブロックをまばらに含む)
16.	10YR7/7	にぶい・黄褐色砂質まじり粘土
17.	2.5Y7/3	浅褐色砂質粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
18.	7.5YR7/1	褐灰色粘土 (黄褐色粘土ブロックを含む)
19.	7.5YR7/6	褐色粘土
20.	10YR7/4	にぶい・黄褐色砂質土
21.	10YR8/4	浅黃褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
22.	10YR8/5	浅褐褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
23.	7.5YR7/4	にぶい・褐褐色粘土 (褐色粘土ブロックを含む)
24.	7.5YR7/3	にぶい・褐褐色粘土 (褐色粘土ブロックを多く含む)
25.	5Y8/5/2	灰褐色粘土

図 81 3 トレチ南半壁面②・4 トレチ西壁 土層断面図 (S = 1/50)



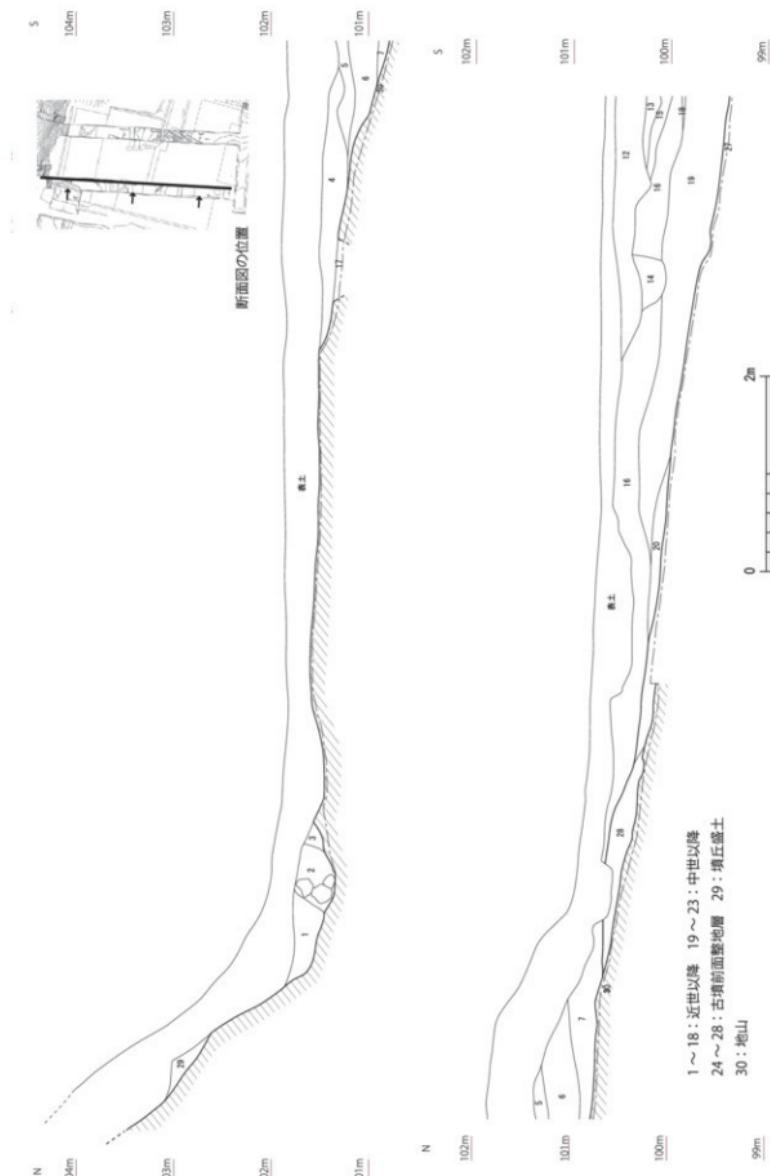
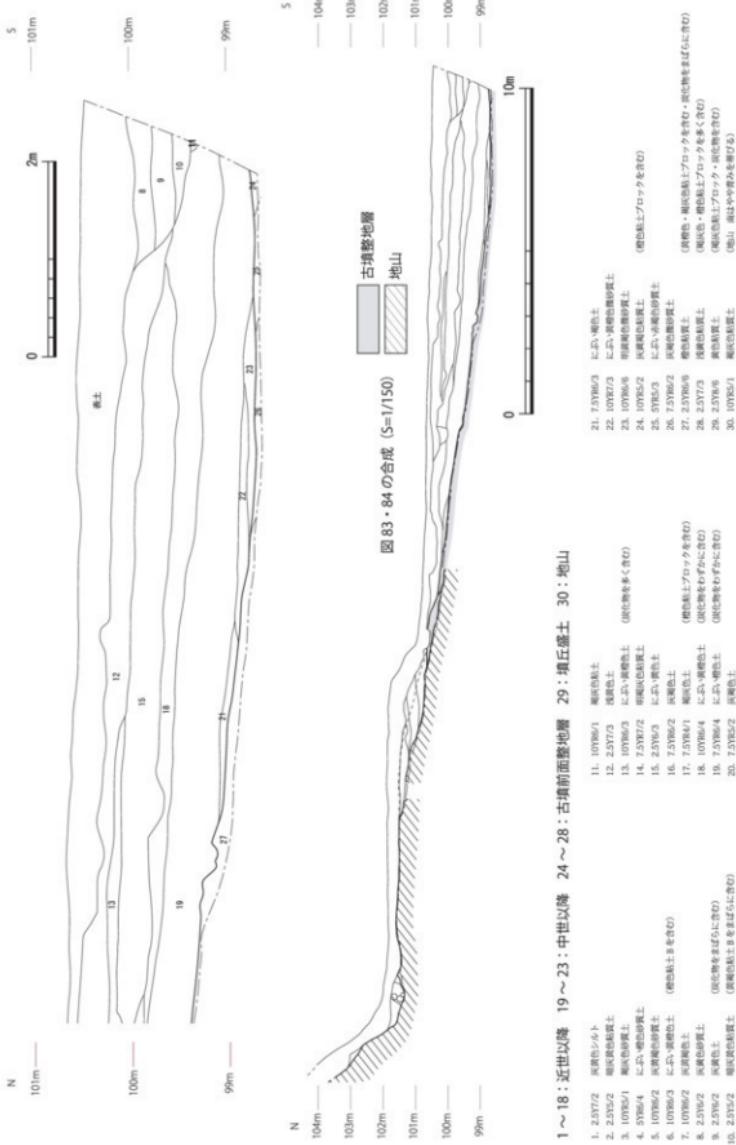


図 83-5 トレンチ東壁 土層断面図① (S = 1/50)



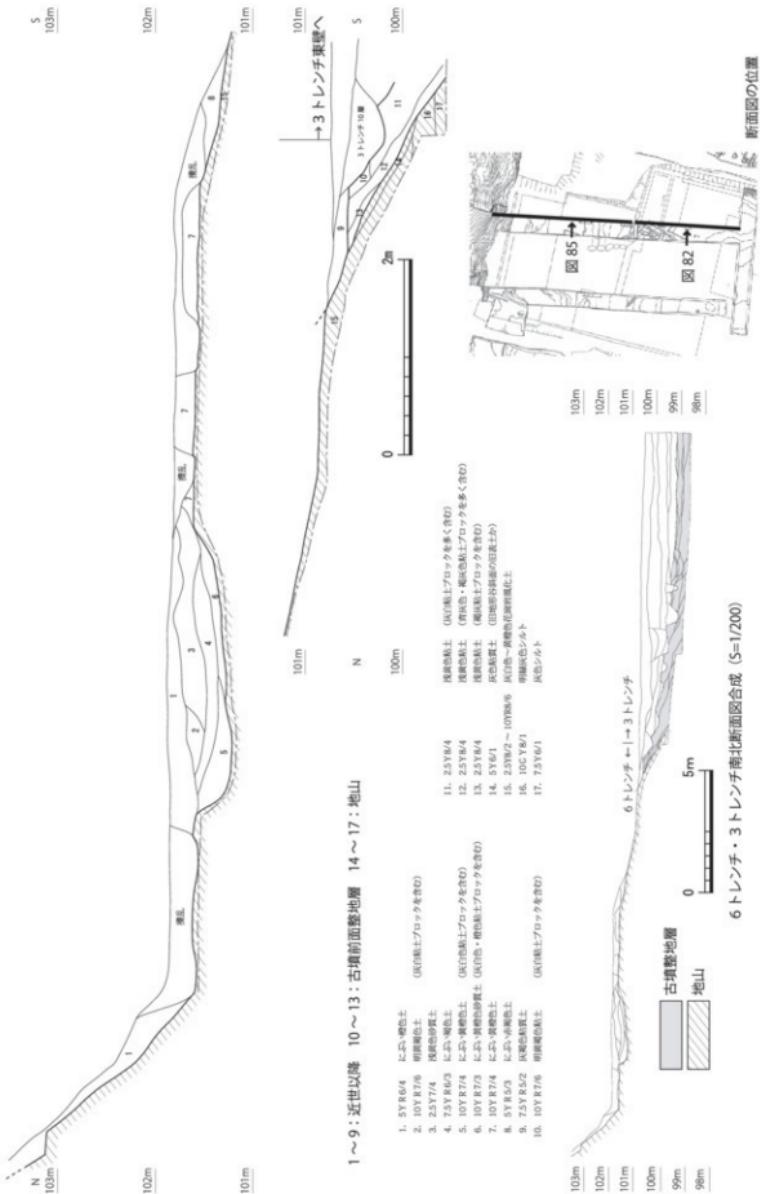


図 85 6トレンチ東壁 土層断面図 (S = 1/50)

## 第4項 出土遺物

南側平坦面の出土遺物は、出土層位の点からは後世の堆積層出土遺物と、整地層直上ないし整地層内の出土遺物に分けられる。前者は図86、後者は図87に示している。

図86の遺物は、古墳よりも後の時代であることが明確な中世以降の土層から出土した遺物である。これらの上層から出土した遺物は、とくに近世以降の資料に関して他にも破片資料が多く存在するが、ここでは全体像がある程度推測できる資料を選んで図化している。後世の堆積層出土遺物でも古墳時代から古代に属すと考えられる破片は、図化できる資料について出来る限り掲載している。

155～164は須恵器である。155・156は壺蓋である。ともに肩部に明瞭な稜は無く、全体に丸みを帯びる。156は上面の削りが粗い。157～161は壺身の破片である。157と160は全体が復元可能である。159は肩部下に窪みができるほど非常に強い回転ナデ調整が、複数段にわたって施されている。158は復元口径14.1cmを測る。162は壺ないし瓶類の底部である。台は内側裾が突出しており、外側裾は接地しない。163は高杯の脚部で、幅1mm未満の細い縦長の透かしが上下二段、二方向に穿たれている。164は甕の体部下半である。

165・166・168は2トレンチ005SKから出土している。165は土師質の小皿である。166は陶器の擂鉢の破片である。表面は明るい赤褐色を呈する。168は磁器の碗である。外面には淡く雲梅文様が染付られている。167は平坦面東側の近世盛土から出土しており、168とほぼ同様の碗である。

169～187は埴丘南側の平坦面に広く施されている整地層周辺からの出土土器であり、古墳築造時もしくはその直後の土器であると考えられる。調査区西半(3・5・6トレンチ)の整地層の直上には整地層と土質が近い砂質土が堆積している。171・181・182・186はその直上層からの出土であるが、層位の問題によって整地層内の遺物が含まれている可能性がある。他の遺物は整地層内からの出土である。

169～184は須恵器である。169～171は壺蓋である。169・170は頂部が比較的平坦である。いずれも肩部の稜は不明瞭である。172～178は壺身である。立ち上がりはゆるやかに外反しつつ、

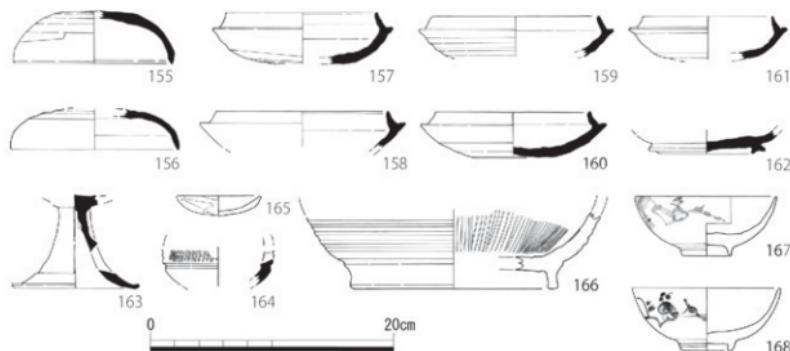


図86 南側平坦面 堆積土出土土器 (S = 1/4)

あるいは直線的に斜めに立ち上がる。173のみはほぼ垂直に立ち上がる。175は全体の約7割が遺存しており、回転ケズリ・回転ナデ調整とともに比較的丁寧に施されている。176は残存する範囲について内外面ともに丁寧な回転ナデ調整が施される。177は内面に少量ながら漆が付着している。178は約5割が遺存する。色調は灰白色を呈し、胎土には炭化物をまばらに含む。

179は甕の口縁部である。焼成がやや甘く、外面は赤みを帯びた色調である。180は装飾付（子持）器台の破片である。口縁端部に腹形の子器が付く。周全の約13分の1しか遺存していないため、子器の数量は不明で、別の形状のものが付いていた可能性もある。181は器台の脚部中央付近である。182も181と同様の破片であるが、径の復元が困難であったため、破片としての作図を行っている。183・184は壺ないし瓶類の破片であると考えられる。器壁は厚さ約2～4mmと薄い。184は短頸壺の体部であると考えられる。183は下端に小さな段が付き、器種が不明である。

185～187は土師器の高坏の脚部である。いずれも外面は磨滅している。筒部上半は中実である。186の筒部はほぼ垂直に立ち上がる。

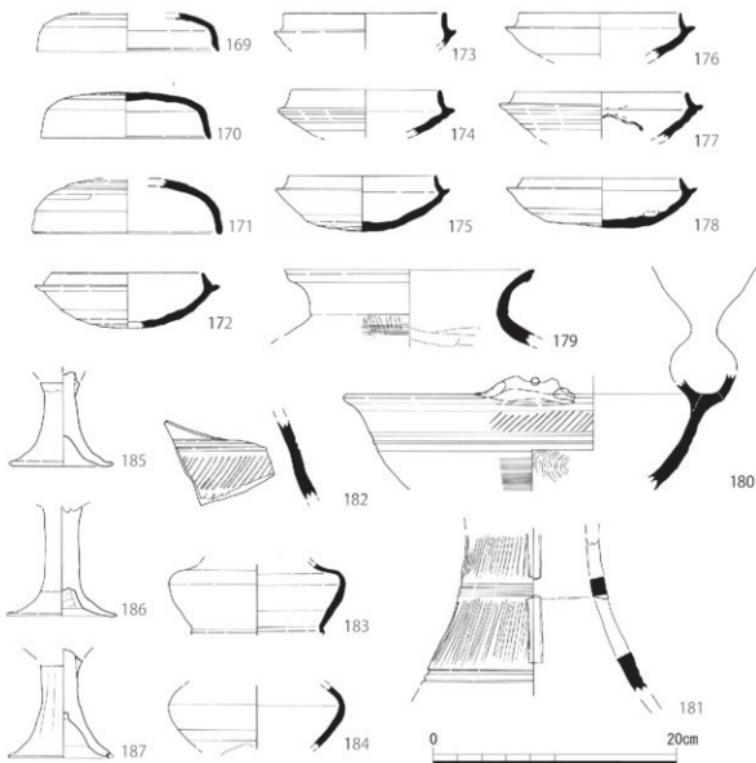


図87 南側平坦面 整地層出土土器 (S = 1/4)



図88 南西トレーニチ 平面図 ( $S = 1/150$ )

## 第6節 南西側平坦面の調査

植山古墳の墳丘から南西方向の位置には平坦面が存在する。平坦面の規模は、東西約30m、南北約15~23mである。平坦面の東側（墳丘側）がやや北に広くなっているが、これは墳丘の南西隅から西側周壕の南端付近が後後に抉り取られるような形で削られているためである。南側平坦面では、南西トレーニチと西トレーニチの計2ヶ所で発掘調査を実施しており、以下にその成果を述べる。

### 第1項 南西トレーニチの調査

南西トレーニチは西側周壕の南側延長部分の様相を把握するために、2000年度に調査を行った（図88）。墳丘南西隅一帯の削平によって、西側周壕は羨門部ライン付近を南端として断ち切られ、南の

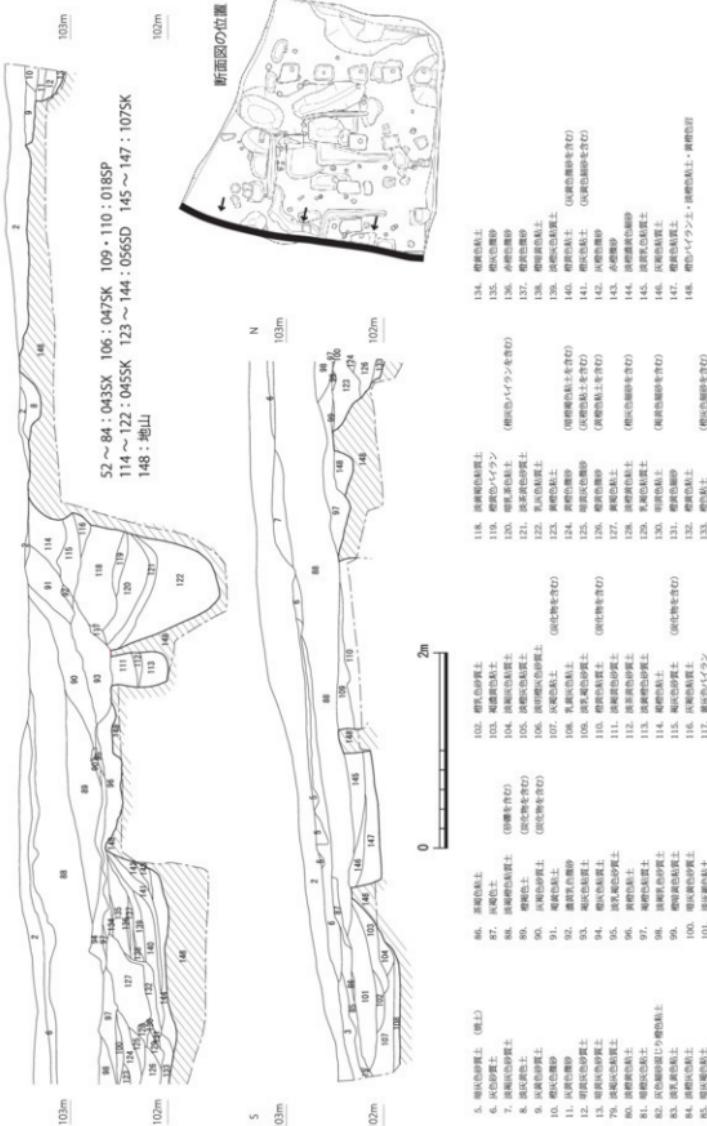


図89 南西トレンチ西壁 土層断面図 (S = 1/50)

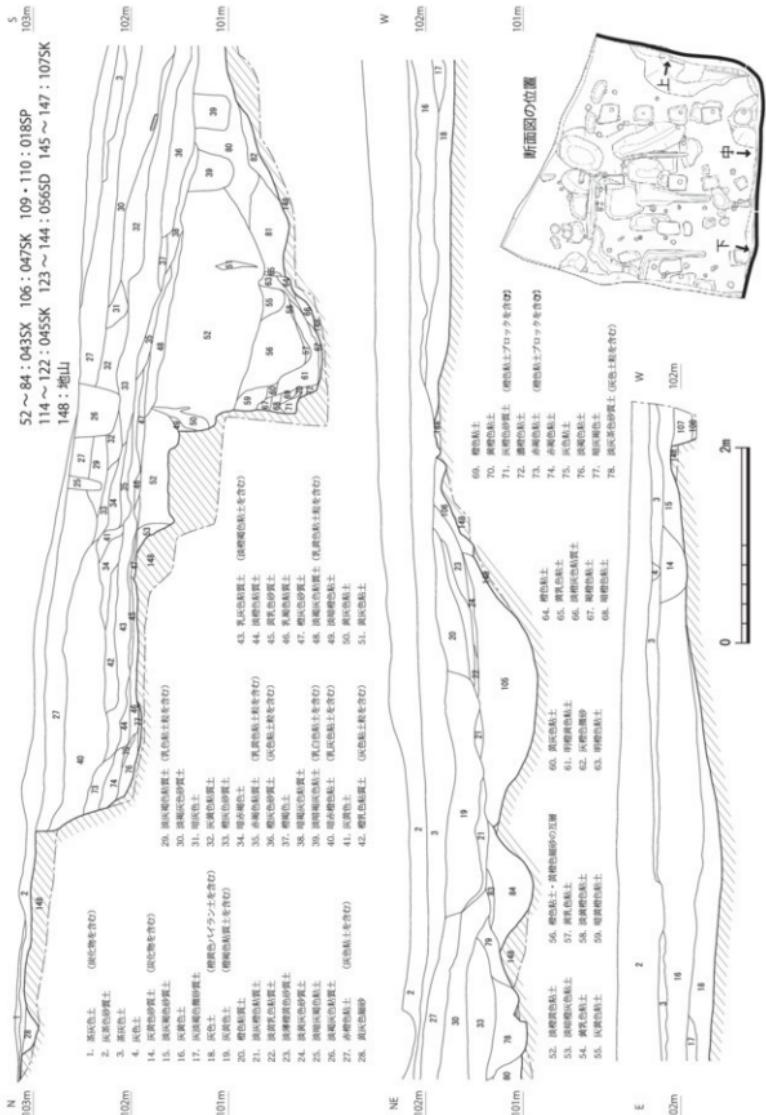


図 90 南西トレンチ東・南壁 土層断面図 (S = 1/50)

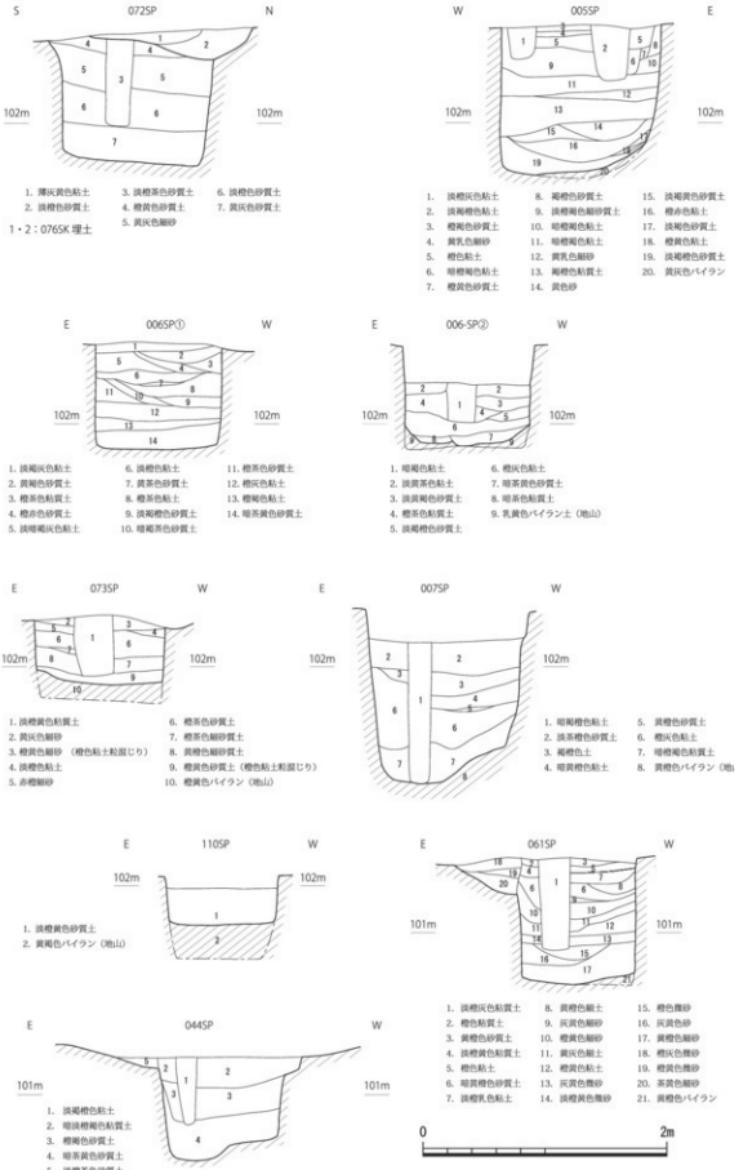


図91 南西トレンチ 遺構断面図① (S = 1/40)

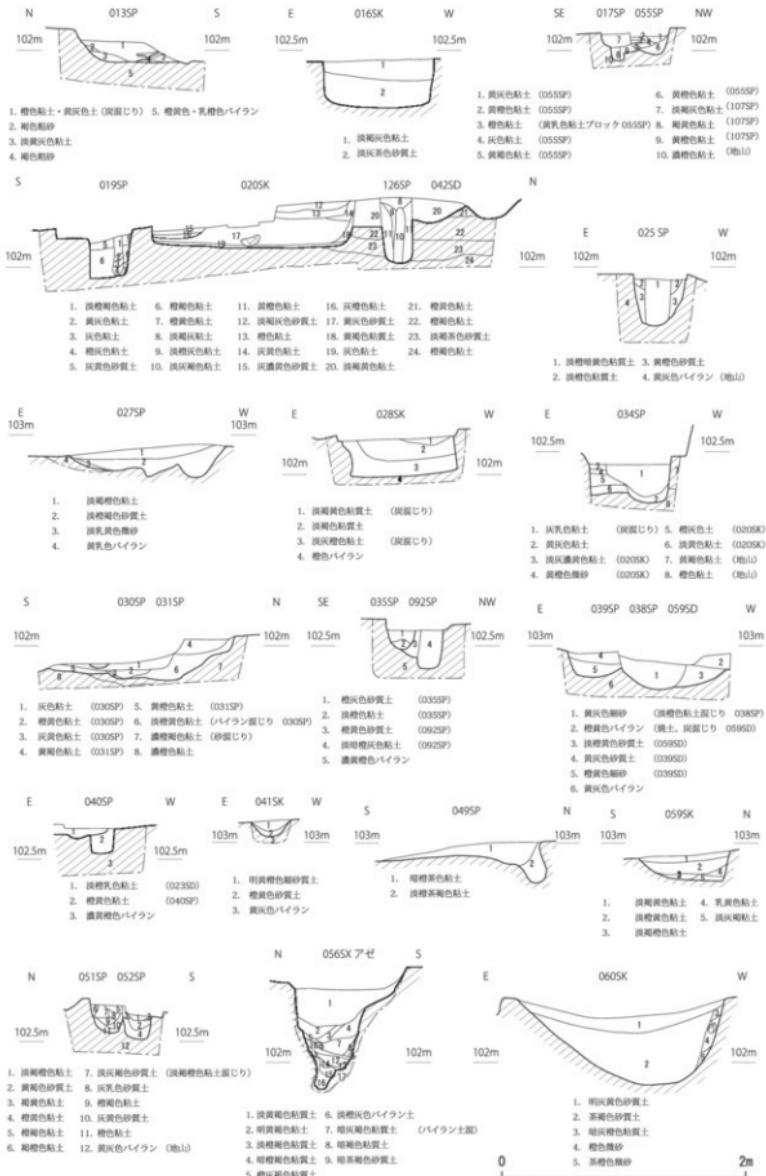


图 92 南西トレンチ断構造断面図② (S = 1/40)

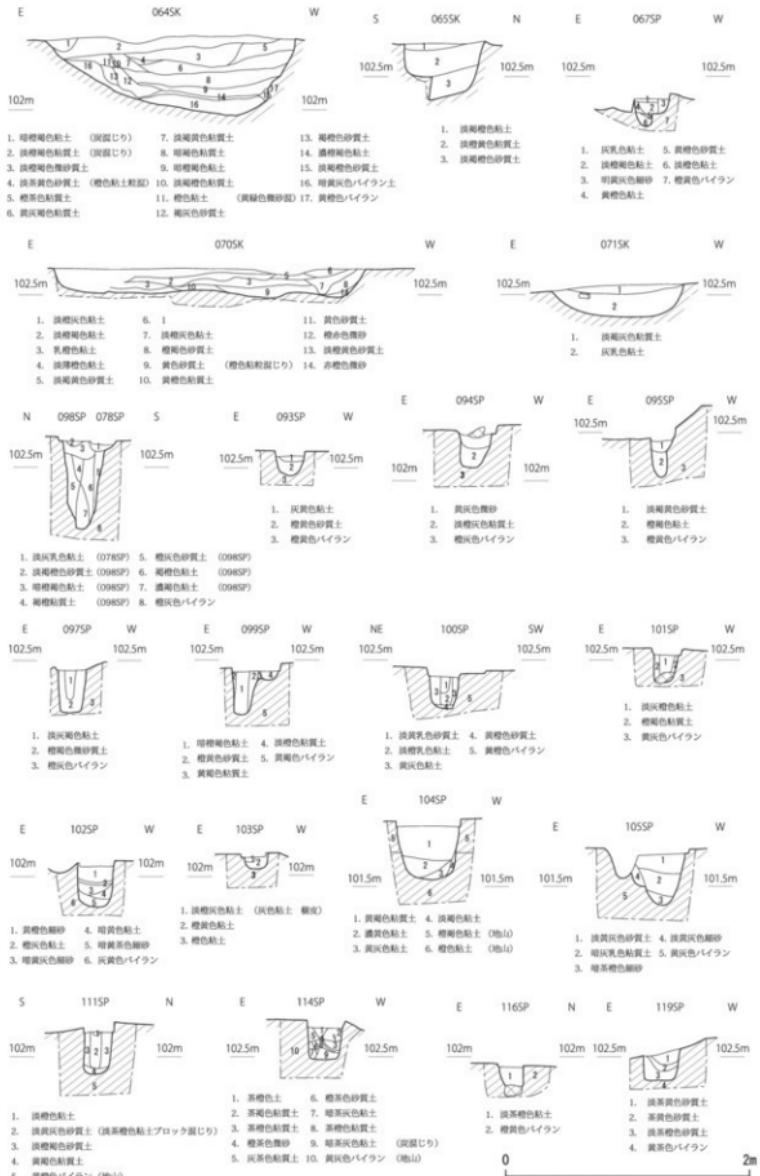


図93 南西トレンチ構造断面図③ (S = 1/40)

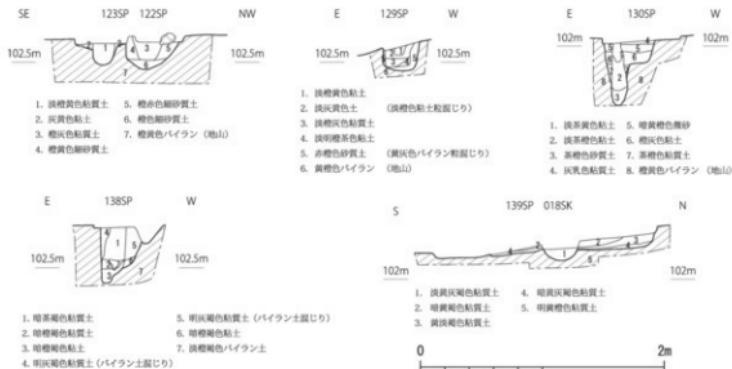


図94 南西トレンチ 遺構断面図④ (S = 1/40)

地表面とでは約1.4mの段差が存在する状態となっている。南西トレンチの範囲に周塙の南側延長部分の痕跡が検出されることを期待したが、塙に相当するような明瞭な溝状の遺構は確認されなかった。

替わりに、西側周塙の南側延長部分で南北方向の柱列2列の存在を確認した(図96の東半)。柱列はほぼ正方位に並び、東・西の列がおおむね対応する位置関係にある。墳丘背面の丘陵上では同様にほぼ正方位に並ぶ柱列(詳細は第7節第2項で述べる。柱列(新)にあたる)を確認しており、この柱列と同じく藤原京期前後の遺構ではないかと考えられる。出土遺物は土器の細片が少量あるのみであるが、この年代観とは矛盾しない。両柱列は掘方平面の形状も共通している。

南西トレンチの柱列は東・西それぞれ5基の柱穴で構成されていたと考えられるが、西側の柱列については後の時代の遺構による削平の度合いが大きく、北から2番目に相当する柱穴は完全に消失している。東側の柱列は005・006・007・061・044SPからなる。西側の柱列は072・073・110・009SPからなる。柱列の遺構断面図は図91にまとめている。柱穴の掘方平面規模は約0.9～1.4mであり、全体にやや南北方向に長い傾向にある。一部では直径約0.2～0.35mの柱痕跡も確認できた。掘方の深さは最大約1.3mであり、掘方壁面はほぼ垂直に近い傾斜で掘り込まれている。東西の柱列間の距離は、柱中心間で約4.8mを測る。

南西トレンチでは、この他にも多数の土坑、溝、ピット等の遺構を確認している(図92～94)。瓦器や土師皿を中心とする遺物が多く出土しており、これらの遺構の大半は中世に属すと考えられる。一部には近世以降の遺構・遺物も含まれる。

南西平坦面は中世の遺構・遺物がもっと多く確認された地点である。この他では、少量ながら石室内から瓦器が出土している。また、墳丘南側平坦面の南半では、出土遺物こそ少なかったものの中世に盛土による大規模な造成工事が行われていることを確認している。

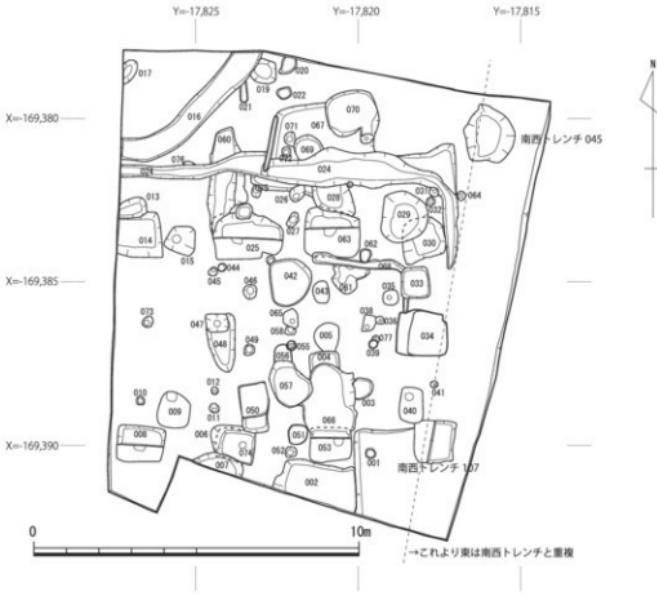


図 95 西トレンチ 平面図 ( $S = 1/150$ )

## 第2節 西トレンチの調査

西トレンチの調査は2001年度に実施した(図95)。南西トレンチの調査によって、南側平坦面に古墳に関連する可能性のある遺構(柱列)や中世の遺構が存在することが明らかとなり、残る平坦面西側にも同様の遺構が広がっている可能性が考えられたため、調査を実施することとなった。

西トレンチの東辺は、南西トレンチの西端部と一部重複している。図96は両トレンチの平面図を合成し、古墳に関連する可能性のある遺構を図化したものである。

西トレンチは表土及び耕作層の直下で検出される花崗岩風化層上が遺構面である。地表面から遺構面までの深度は約0.05~0.35mと非常に浅く、とくに北側が浅くなっている。遺構面は後世の開墾等によってかなり削平されていると考えられる。

西トレンチでは、正方位に沿った東西方向の柱列2列を確認した。北側の柱列は014・025・063・030SPの4基の柱穴、南側の柱列は008・074・053・107SPの4基の柱穴からなる(断面は図98)。南側柱列の東端にあたる107SPは、南西トレンチの調査時に確認していた遺構である。西トレンチの調査時に柱列を構成する一部であることが明らかとなった。

柱列を構成する柱穴の掘方は一辺約1.1~1.4mの方形、東西方向に長い傾向にある。深さは約0.7~1.4mを測り、壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。直径約0.3mの柱痕跡を土層断面で確認して



図 96 南西トレンチ・西トレンチ 古墳柱列平面図 (S = 1/200)

いる。現在、西トレンチのすぐ西側は崖面になっており、柱列が西側にどこまで続いているかについては不明である。南・北の柱列間の距離は、柱中心間で約 6.2 ~ 6.5 m を測り、南西トレンチの柱列間よりかなり広い。

南西トレンチの南北柱列 2 列と西トレンチの東西柱列 2 列の柱穴は、掘方の規模や構造、埋土の様相が非常に類似している。配置も東西柱列の北列と南北柱列の北端の柱通りはほぼ揃っている。両者は同時に建て並べられた可能性が高い。

東西柱列の間はほぼ平坦地であるのに対し、南北柱列の間は傾斜地となっている。南北柱列は検出面で南端と北端で約 1.2 m の比高差がある。南側平坦面の遺構面は擾乱を受けているものの、概して北から南に向かって下がる斜面地形となっている。南西トレンチの西半、南北柱列の西隣付近では等高線がほぼ等間隔で東西に並んでおり、これが当初の周塙の南側の状況を反映しているのかもしれない。

西トレンチでは南西トレンチと同様に、調査地全体で近世以降の溝やピット、中世の土坑等も確認している（図 99・100）。

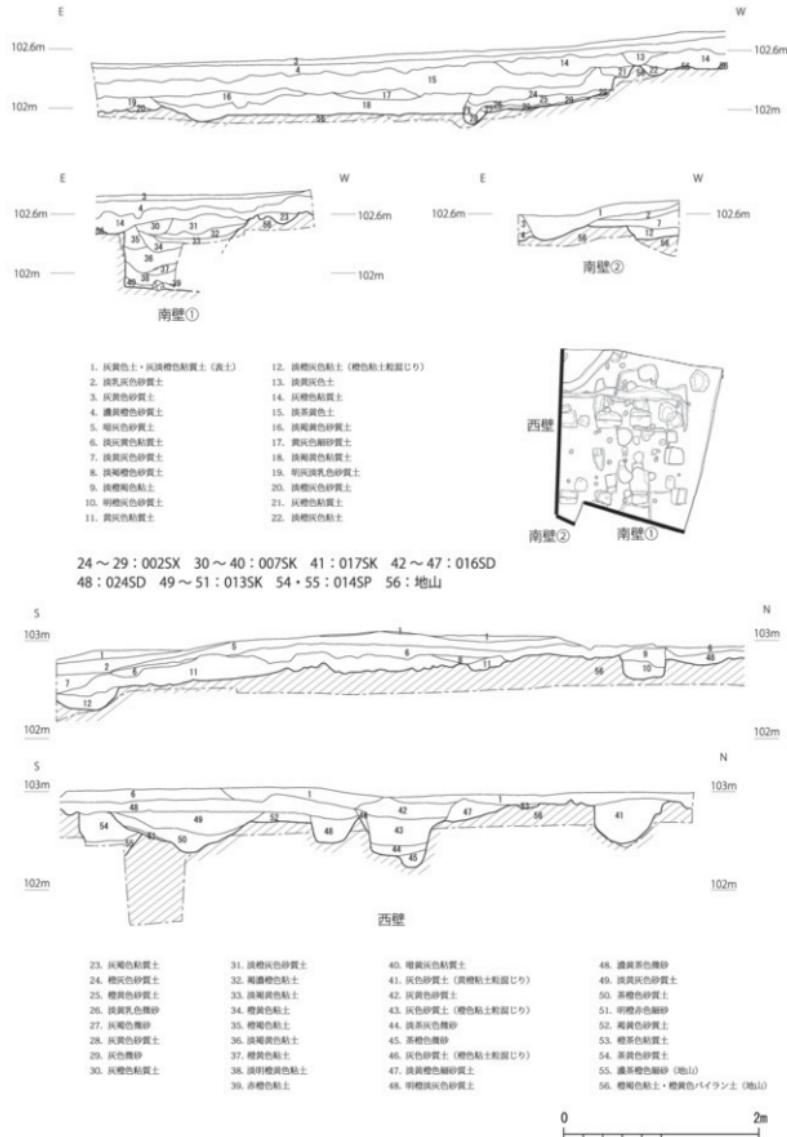


图 97 西トレンチ西・南壁 土層断面図 (S = 1/50)

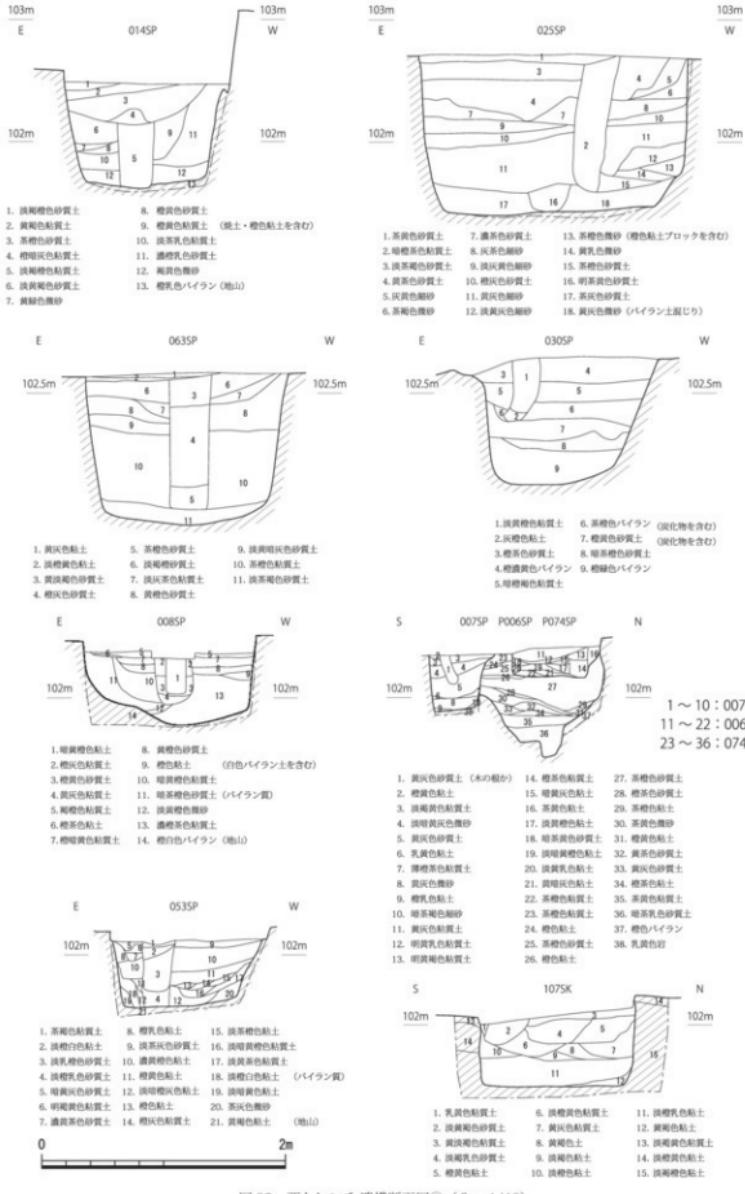


図 98 西トレンチ 遺構断面図① (S = 1/40)

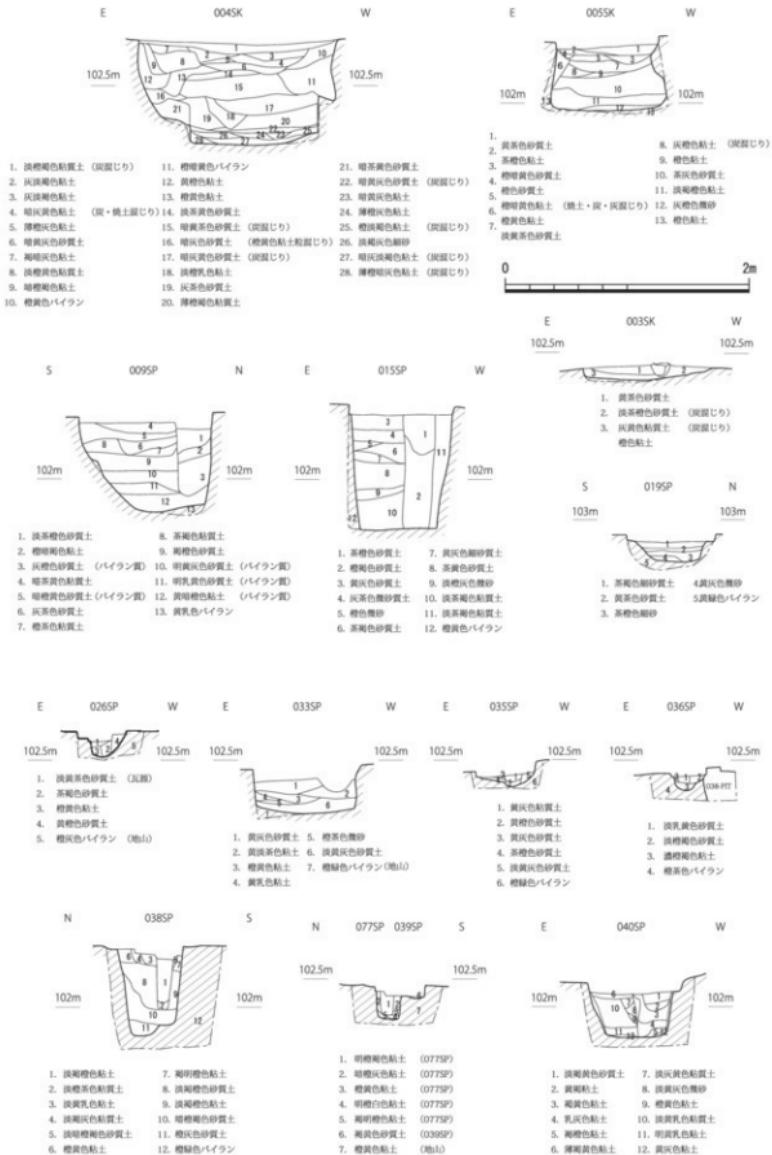


図 99 西トレンチ 遺構断面図② (S = 1/40)

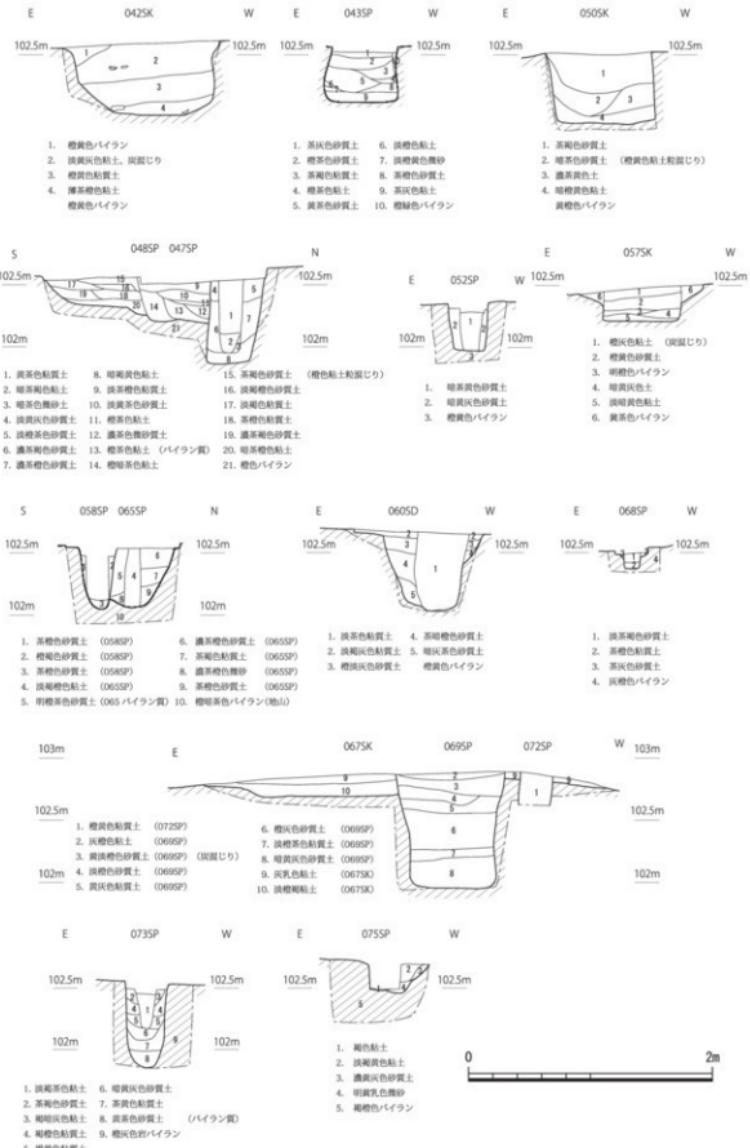


図 100 西トレンチ 遺構断面図③ (S = 1/40)

### 第3項 出土遺物

南西トレーナチおよび西トレーナチから出土した遺物は、大部分が中世と近世に属す時期のものである。古墳時代から古代にかけての時期と考えられる土器も少量存在するが、図化しうるものは無い。中世の遺物、とくに瓦器碗と土師皿については破片が多数出土している。ここでは全体像の復元が可能な土器を中心に報告を行う（図 101・図版 91）。

西トレーナチ中央やや南に位置する 004SK からは多くの遺物が出土している。188～192・196・197・199・200 は 004SK からの出土遺物である。188～192 は土師器の皿である。直径約 8.9～12.0 cm を測る。内外面ともナデ調整を施すが、189 は底部が未調整である。196・197・199・200 は瓦器碗である。外面には暗文が認められず、高台もかなり退化している。外面には指頭圧痕が残り、199 にはヘラナデ調整が施されている。植山古墳周辺で出土している瓦器碗の中では最も新しい時期の部類である。

193・194・204 は西トレーナチ中央に位置する 042SK から出土した瓦器である。193 と 194 は形状や調整がほぼ同様の瓦器皿である。底部内面のみに暗文が施される。底部外面には指頭圧痕が残る。204 は瓦器碗で、外面にはわずかに暗文が施される。

195 は南西トレーナチ 038SP から出土した瓦器碗である。全体の器形はやや歪である。198 は南西トレーナチ 021SK から出土した瓦器碗で、見込みには圓錐の上からやや乱雑に輪状の暗文を施す。やや大型の個体である。201 は南西トレーナチ 059SK から出土した瓦器碗である。202 は西トレーナチ 030SP から出土した瓦器碗である。外面の上端からやや下がった位置に暗文を施す。203 は西トレーナチ 071SK から出土した瓦器碗である。

南西トレーナチ・西トレーナチから出土した瓦器碗は所謂、大和型である。時期は 12 世紀後半から 13 世紀であると考えられる。

205 は南西トレーナチ 013SP から出土した瓦質の片口鉢である。全体の約 6 割が遺存する。口径 31.4 cm、底径 11.0 cm、器高 12.6 cm、器厚 1.1 cm を測る。内外面とも轆轤ナデによって整形されている。平底の底面には糸切痕が残る。

206 は西トレーナチ 004SK から出土した滑石製の石鍋の底部であると考えられる。底面は平底である。外面は幅約 0.5 cm の鑿状工具で加工されている。外面には全体に炭化物が薄く付着している。内面には全体に非常に細かな引っ掻き痕が残る。

207 は南西トレーナチ 010SK から出土した棟原石製の磚である。長さ 29.8 cm、幅 18.3 cm、厚さ 5.7 cm、重量約 6.2 kg を測る。表面は被熱しており、隅はわずかに欠損している。植山古墳には棟原石を用いた部分は確認されておらず、磚の来歴は不明である。

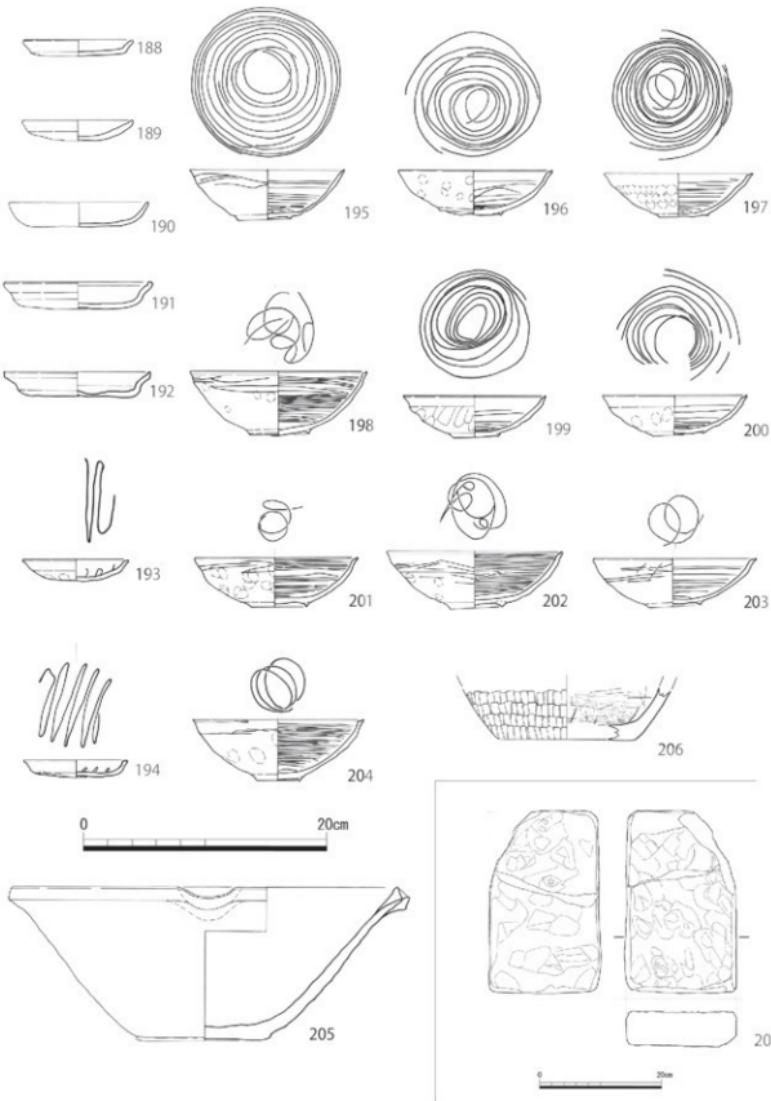


図101 南西トレンチ・西トレンチ出土遺物 (S = 1/4。207のみ 1/8)

## 第7節 背面丘陵の調査

ここでは墳丘の西側から北側を経て東側へと広がる丘陵部分で行った調査の成果について述べる。丘陵自体はさらに南東（墳丘を基準にすると東南東から南東方向）にも広がっているが、現在、神社や墓地として利用されているため、発掘調査は実施していない。調査を行った丘陵部分について、墳丘との位置関係をもとに便宜上、背面丘陵と呼ぶこととする。

背面丘陵の調査は2000年度と2009年度に行った。2000年度には墳丘の西側から北側にかけての範囲で調査を行った。この段階では周壕の大部分が埋没していたため、その外側の肩を確定するとともに、周壕のさらに外側の様相を確認することを目的とした調査である。調査の結果、周壕より外側の丘陵上に古墳に関連する柱列等の重要な遺構が存在することが確認された。柱列は調査区のさらに南東へと続いており、2009年度の調査は柱列の延長部分の確認を主な目的とした。また、墳丘から東の方向、丘陵の北側斜面には東から西に向かって高くなるスロープ地形が存在する。このスロープ地形の実態把握も2009年度調査の目的である。

背面丘陵の調査成果は、植山北古墳の検出、丘陵頂部に築かれた柱列の検出、北側斜面に築かれたテラス面の検出、の三つに大きく分かれる。以下に、それぞれの詳細を述べる。

### 第1項 植山北古墳

植山北古墳は2000年度の調査において、植山古墳墳丘の北側の丘陵上で新たに発見された古墳である（図102）。植山古墳の築造以前から存在していた古墳であり、墳丘の南側が植山古墳の北側周塙を構築する際に削り取られている。丘陵の頂上部に築かれた古墳である。

調査前測量の段階（図5）から、植山古墳の墳丘の北側に円形の高まりが存在することを認識しており、植山古墳とは別の古墳が存在する可能性を念頭に置いて表土から掘削を行った。結果、地表面下約0.2～1.2mの深度で、古墳の墳丘面を検出することとなった。検出した墳丘面は、東半では地山上、中央から西側および北側については墳丘盛土上である。墳丘上面については、かなり削平を受けていると考えられる。

植山北古墳は、低平な前方部を西に向けた帆立貝形古墳である。造り出しを持つ円墳である可能性もあるが、墳丘北側のくびれ部周辺の曲線から考えると、帆立貝形古墳である可能性のほうが高いと考えられる。墳丘の主軸はほぼ東西方向か、あるいは西でやや北に振れると考えられる。前方部の南半が大きく削られていることもあり、正確には不明である。

古墳の規模は全長約35m、後円部径約27m、後円部高約2.5m（壕底から現墳頂までの高さ）、前方部高約1.0mである。

墳丘の南東側は壕によって東の丘陵から切り離されている。明確な壕が存在するのは墳丘の南東側のみである。壕の断面形は弧を描いており、南側は底面が平坦になる（図104・105）。

壕は植山古墳の築造時、あるいはそのしばらく後に人为的に埋められている。後述する柱列はその埋土上に構築されている。

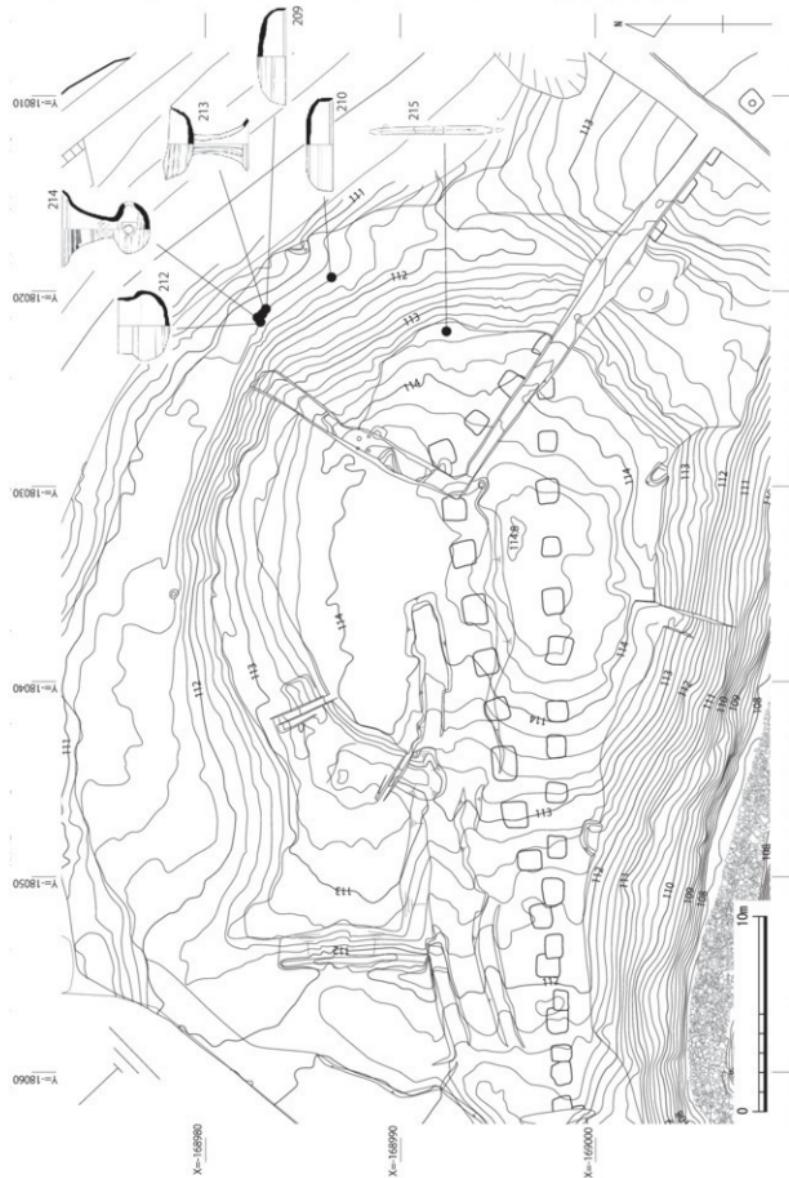


图 102 植山北古填 平面图 (S = 1/250)



図 103 植山山古墳 土層断面図① (S = 1/50)



図 103 ~ 105 断面位置

1：4・5：後世の耕翻 2：柱列(新) 3：柱列(旧) 墓土 6～13：北古墳堆丘盛土

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1. 10707/8 明治時代の耕土 | 8. 3/30/5/3 に於く耕翻地土 |
| 2. 7.5/75/6 明治土    | 9. 2.3/75/1 耕作地土    |
| 3. 2.5/76/4 に於く耕地土 | 10. 2.3/77/6 明治地土   |
| 4. 10707/4 に於く耕地土  | 11. 2.3/77/2 明治地土   |
| 5. 7.5/77/2 明治地土   | 12. 2.3/78/1 耕作地土   |
| 6. 2.5/76/4 に於く耕地土 | 13. 2.3/78/4 に於く耕地土 |
| 7. 7.5/78/3 亂耕地土   |                     |



図 104 植山山古墳 土層断面図② (S = 1/50)

1・2：後世の堆積 3～6：柱列(旧)埋土 7～20：北古墳周縁埋土 21～26：北古墳周縁耕種土 27・28：北古墳周縁耕種土 29・30：地山

1. 明褐色粘性土
2. 明褐色粘性土 (黒色粘土ブロックを含む)
3. 黄褐色粘性土
4. 黄褐色粘性土 (ハイラン土を含む)
5. 明褐色粘性土 (じり乳白色)
6. 僧帽形の乳白色土
7. 明褐色粘性土 (黒色粘土ブロック・ハイラン土を含む)
8. 黄褐色粘性土
9. 明褐色粘性土 (黒色粘土ブロックを含む)
10. 黄褐色粘性土
11. 黄褐色粘性土 (黒色粘土ブロックを含む)
12. 黄褐色粘性土 (黒色粘土ブロックを含む)
13. 黄褐色粘性土 (ハイラン土を含む)
14. 黄褐色粘性土
15. 浅黄色粘性土 (じり乳白色)
16. 僧帽形の乳白色土
17. 黄褐色粘性土 (黒色粘土ブロック・ハイラン土を含む)
18. 黄褐色粘性土
19. 黄褐色粘性土 (黒色粘土ブロックを含む)
20. 黄褐色粘性土
21. 黄褐色粘性土 (黒色粘土を多く含む)
22. 黄褐色粘性土
23. 黄褐色粘性土
24. 黄褐色粘性土
25. 黄褐色粘性土 (ハイラン土を含む)
26. 黄褐色粘性土
27. 黄褐色粘性土
28. 黄褐色粘性土
29. 黄褐色粘性土
30. 黄褐色粘性土

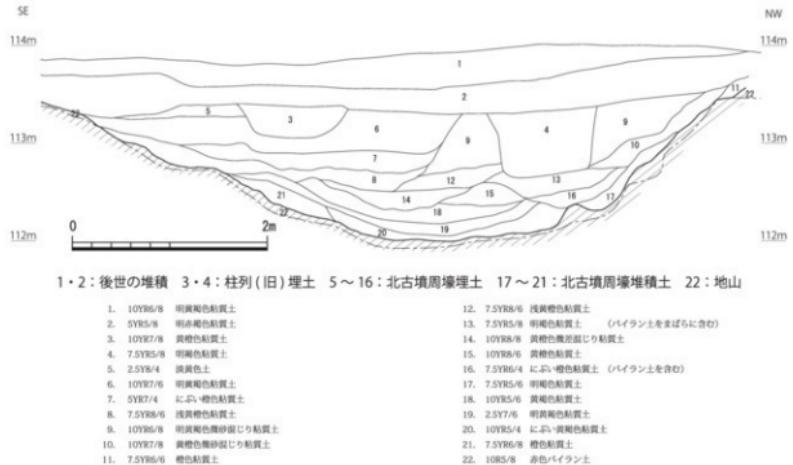


図 105 植山北古墳 土層断面図③ (S = 1/50)

北古墳周辺からは須恵器と鉄剣が出土している。墳丘の北東裾付近からは、完形に近い須恵器がまとめて出土している(図版 73 中段)。鉄剣は墳丘頂部東肩付近からの出土であるが、墳丘上部は削平を受けており、当初の位置からはかなり動いていると考えられる。

植山北古墳の築造時期は、周辺からの出土遺物から、6世紀前半頃であると考えられる。

## 第2項 柱列

背面丘陵の頂上部では、時期的に前後関係のある柱列を2列、確認している。柱列と植山古墳、および周辺地形の位置関係については図107に記している。

丘陵頂上部では、植山北古墳および柱列以外の遺構は確認されていない。遺物も、前項で触れた植山北古墳周辺からの出土遺物以外は、ごく少量の土器細片があるのみで、非常に少ない。

丘陵頂上部の大部分の範囲では、地表面下約0.2～0.4mにて地山(花崗岩風化層)が検出され、柱列はその上面に構築されている。ただし、植山北古墳南東の塙部分や丘陵西端付近等の一部範囲では、柱列を構築する前に盛土を施していることを確認している(図104～106)。遺構の上面については、ある程度、削平された状態であると考えられる。

2列の柱列は遺構の重複関係から、新・旧二時期に分かれることが確認できる。本報告書では、それぞれ柱列(新)、柱列(旧)と呼ぶこととする。

柱列は植山古墳の周塙北肩から北に約2～10mの地点を通り、周塙の北西隅付近で両者はもっとも近接する。柱列は西側周塙の西で折れ曲がることはなく、そのまま西へ直線的に伸びており、墳丘・周塙の形状と柱列のラインがきれいに対応するわけではない。

柱列(旧)は背面丘陵の稜線方向に沿う形で構築されており、ラインは丘陵の頂上部で約 135 度（埴丘側の角度）屈折する。屈折点は、植山古墳埴丘北東隅の真北よりやや西の地点である。柱列は屈折点を境に、ほぼ南東方向に伸びていき、2012 年度調査区南端よりさらに南東にまで続いている。検出した南東端付近では、丘陵の北肩付近を通るようになる。これを南東方向に直線で延長させた場合、春日神社境内裏付近を通る。柱列(旧)の西端は後世に削平されたと考えられる崖面によって断ち切られている。

柱列(旧)の総検出長は約 114 m である。柱穴の掘方は平面形が方形で、一辺約 1.0 ~ 1.4 m である。柱間は 2.7 ~ 3.0 m である。直径約 0.2 ~ 0.3 m の柱痕跡が確認できるものが含まれる。柱穴の検出面高は、屈折点付近で約 114.4 m、西端部で約 109.7 m、東端部で約 114.4 m である。屈折点より

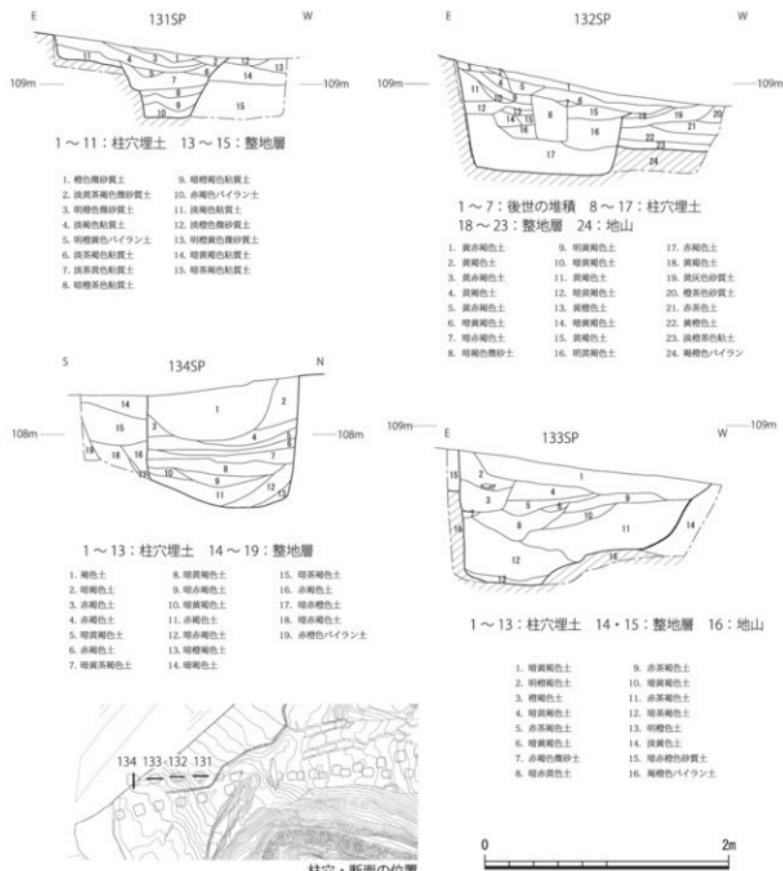


図 106 背面丘陵上柱列土層断面図 (S = 1/40)

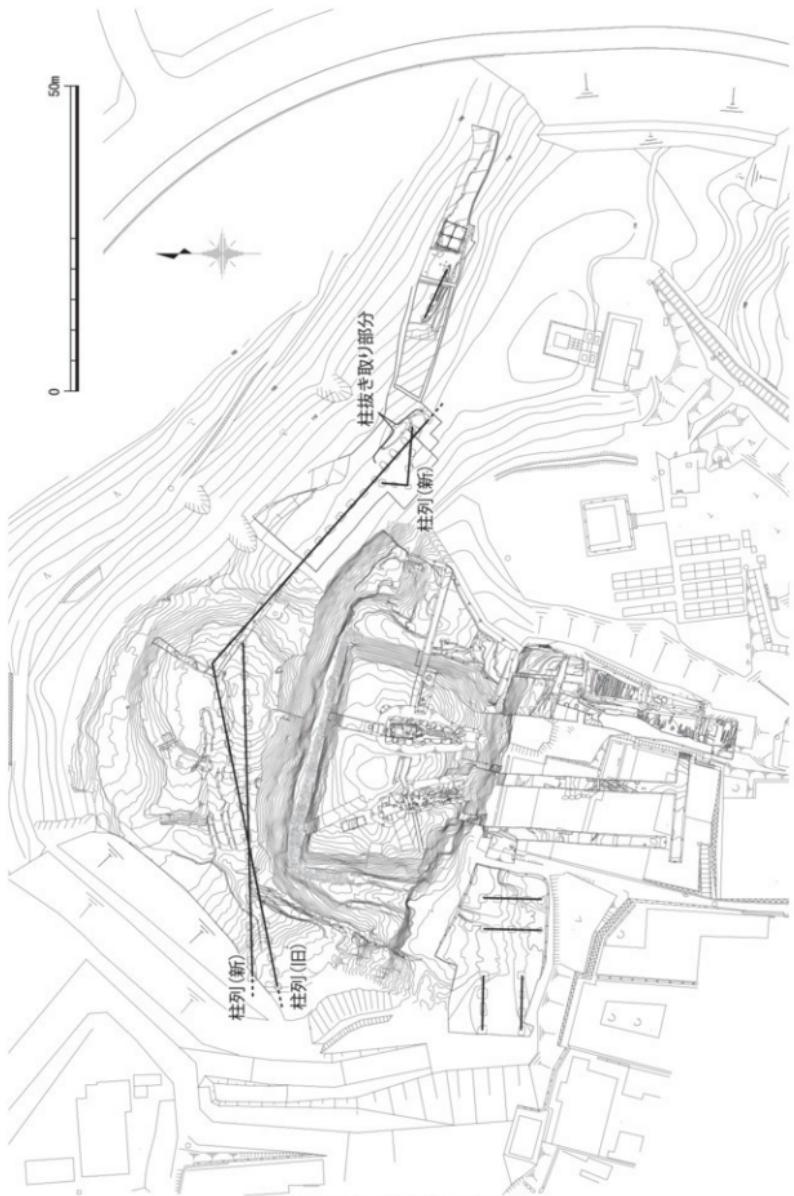


図107 植山古墳柱列平面図 ( $S = 1/800$ )

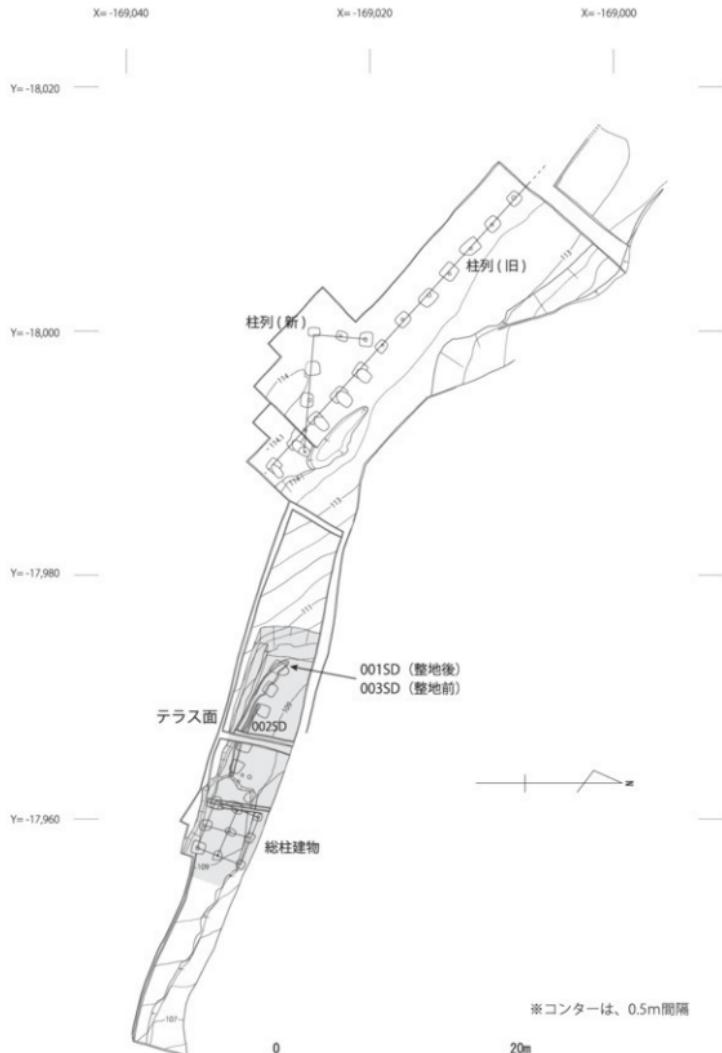


図 108 2009 年度調査区 平面図 (S = 1/400)

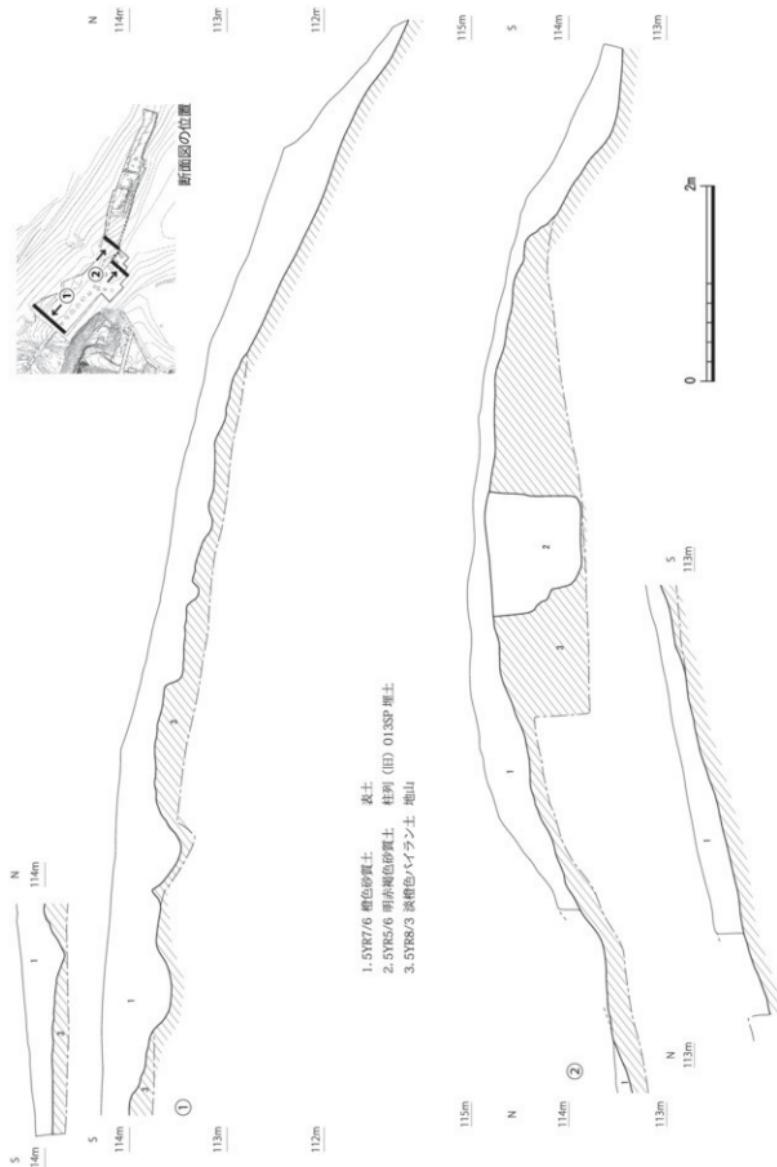


図 109 2009 年度調査区壁面土層断面図 ( $S = 1/50$ )

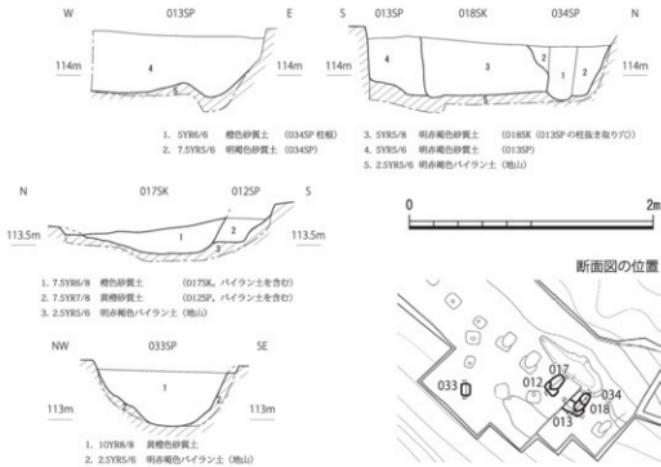


図 110 2009 年度調査区西半 柱列 土層断面図 (S = 1/40)

西側は斜面、東側はほぼ平坦な面を通る。屈折点より西側は、植山北古墳の前方部南半上を通るが、この範囲は前方部が大きく削られている。柱列を構築する際に前方部を削って、東から西へと緩やかに下る斜面を整えたものと考えられる。

南東端から 5 基分に関しては、柱の抜き取り痕跡が存在する。いずれも抜き取り穴が北東側から柱列と直行する角度で掘られている。柱の抜き取りは一括して行われた作業であると考えられる。

背面丘陵の柱穴については基本的に現地保存しているが、2009 年度調査時に抜き取り穴および柱列（新）との関係を確認するため、一部で断面確認を行った。確認を行ったのは柱列南東端付近の 012・013SP である（図 110）。012SP は上部が後世の攢乱を受けていたため遺存状態は悪かったが、抜き取り穴 017SK が柱穴中心部に向かって深く掘り込まれていることを確認している。013SP は深さ約 0.5 m を測る。013SP に対する抜き取り穴 018SK の上から柱列（新）を構成する 034SP が掘り込まれていることも確認している。

柱列（新）は 2000 年度調査区と 2012 年度調査区南西隅の 2ヶ所に存在する。2000 年度調査区内の柱列はほぼ東西方向に即して構築されており、屈折点は無い。東端は植山北古墳の塚付近で途切れている。西端は柱列（旧）と同様に崖面によって断ち切られている。一方、2012 年度調査区の柱列（新）は柱穴 7 基分を検出しており、L 字状に屈折する。柱列の方位は北でわずかに東に振れるが、ほぼ正方位である。二つの柱列は一連のものであるかは確実ではないが、ここでは柱列（新）として一括する。柱列（新）の復元については、第 IV 章第 3 節で述べる。

西側の柱列（新）は検出長約 55 m を測る。柱穴の掘方は平面形が方形で、一辺約 0.9 ~ 1.5 m である。柱間は 2.7 ~ 3.0 m である。直径約 0.2 ~ 0.3 m の柱痕跡が確認できるものが含まれる。西端の柱穴 4 基で断面確認を行った（図 106）。掘方はほぼ垂直に掘り込まれており、最大で深さ約 1.1 m を測る。

また、この一帯では地山上に盛土による整地を行っていることを確認している。

東側の柱列（新）では南北約 4.4 m（柱 2 間分）、東西約 9.8 m（柱 4 間分）を検出した。柱列の屈折点の柱穴は丘陵南斜面に差し掛かる地点に位置する（図版 72 下）。柱穴の掘方は平面形が方形で、一辺約 0.7 ~ 1.2 m である。柱間は 2.1 ~ 2.7 m である。

構築された時期は柱列（新）が藤原京期頃であると考えられる。これは植山古墳と同じ丘陵上に存在した五条野内垣内遺跡の建物群（詳細は第IV章第3節で述べる）との共通性からの推測である。柱列（旧）は古墳築造後から藤原京期頃までのいずれかの時期であると考えられる。

柱列は古墳に附随する塀ないし柵のような施設であったと考えられる。墓の内外を隔てるような役割を果たしていたと位置付けられる。

### 第3項 テラス面

ここでは 2009 年度調査区の東半部の成果について、斜面中段で検出したテラス面を中心に述べる。

春日神社の北側は頂上から谷底（現在の道路面）まで高低差約 15 m の斜面となっており、その中腹に東から西に向かって高くなるスロープ地形が存在する。スロープは西端で丘陵頂上部（2009 年度調査区中央付近）に接続する。スロープ幅は約 3 ~ 4 m である。調査区はそのスロープ部分に設定した。調査区の東端と丘陵頂部とでは約 6 m の比高差がある。

調査区の大部分では厚さ約 0.2 ~ 0.5 m の表土の直下で地山（花崗岩風化層）が遺構面となる。スロープ中央付近に位置するテラス面周辺のみは状況が異なり、表土から約 0.3 ~ 1.1 m 下でテラス面を整形する盛土層を検出している（図 111）。テラスの西端部付近は地山が落ち込んでおり、その旧地形を活かしてテラスを造り出している。テラス面の西辺及び南辺は、地山を切土して壁面を造り出している。特に南辺西半は地山をほぼ垂直に削り落としている。テラス面の西端上から丘陵頂部にかけてはスロープ地形を成しているが、傾斜がきつく通行には適さない。

斜面地の自然崩落と後世の削平によりテラス形成時の規模は不明であるが、検出規模は南北幅約 2 ~ 5 m、東西長約 20 m である。ただしテラス面の東端については、なだらかにスロープ地形に取り付くため、判然としない。

テラス面は利用時期のある段階において、厚さ約 0.05 ~ 0.10 m の盛土によって再整形が行われており、遺構はその前・後の二時期に分かれ。整地が行われた範囲は平面的にはテラス西端から東に約 15 m の範囲である。

整地前の遺構は溝 1 条（003SD）、柱穴 5 基（048 ~ 052SP）、土坑 1 基（043SK）、ピット 4 基がある（図 111・112）。003SD はテラス西辺から南辺西半に掘られており、幅約 0.3 m を測る。整地後にもほぼ同じ位置に掘り直しが行われている。柱穴はテラス南辺に沿って 5 基が一列に並び、西の 3 基と東の 2 基に分かれ。柱穴掘方は一辺約 1.0 ~ 1.2 m の方形で、深さ約 0.7 m を測る。それぞれ直径約 0.25 m の柱痕が確認できる。043SK は一辺約 1.1 × 0.7 m の隅丸方形を呈し、深さ約 0.4 m を測る。

整地後の遺構は溝 2 条（001・002SD）と総柱建物 1 棟がある。001SD は整地前の 003SD とほぼ同じ位置に掘り直された溝で、幅約 0.3 m、長さ約 11.5 m を測る。溝の東端はなだらかに消えていく。

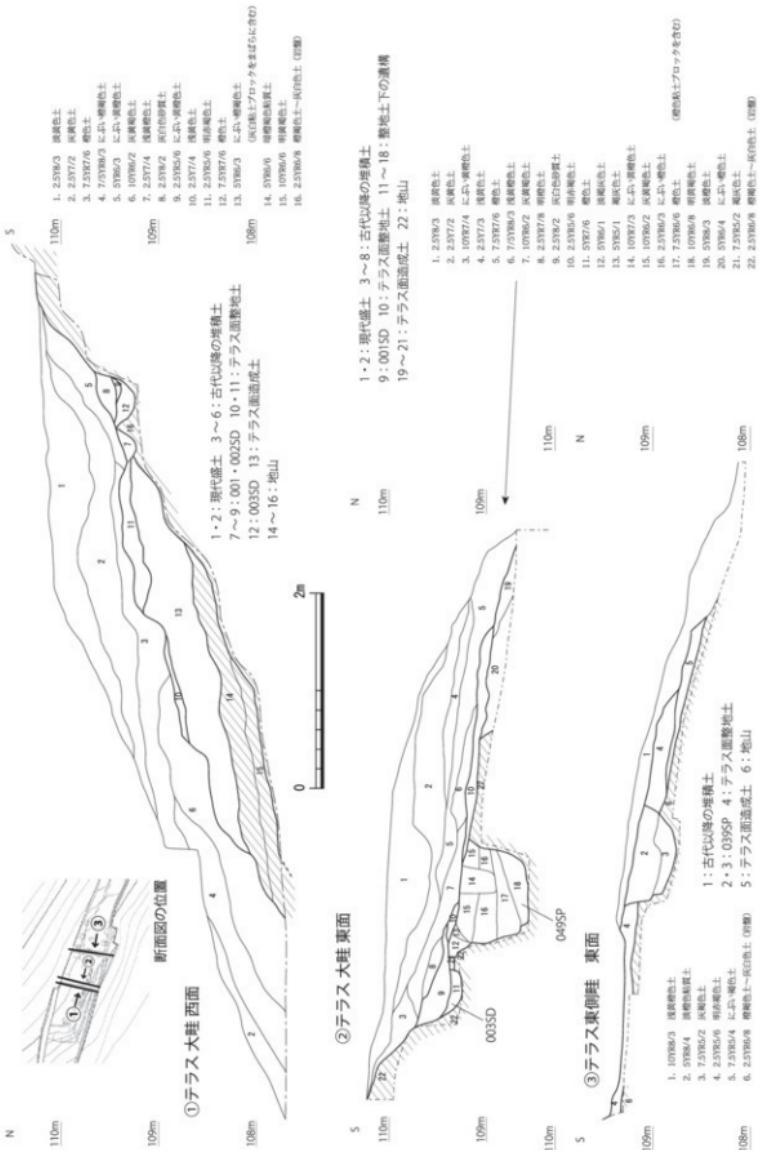


図 111 2009 年度調査区テラス面南北畦土層断面図 (S = 1/50)

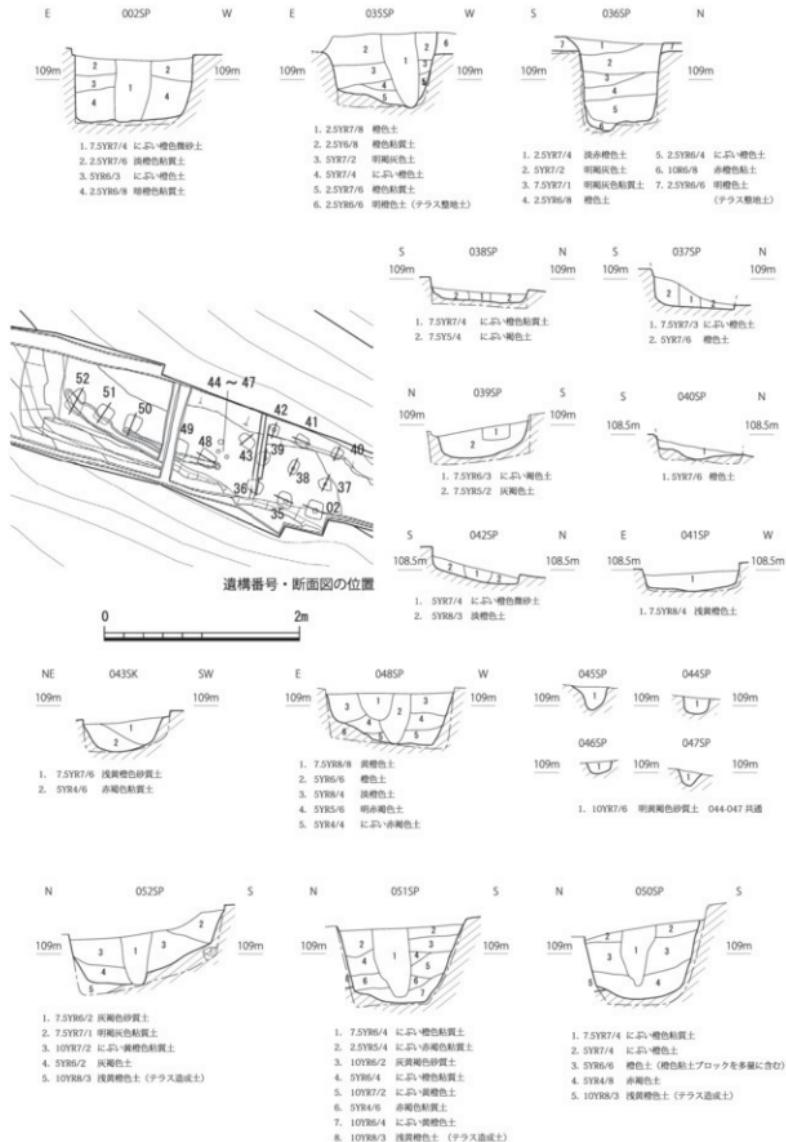


図 112 2009 年度調査区テラス面 運構断面図 (S = 1/50)

埋土からは飛鳥II～IVの須恵器および土師器が出土している。002SDは001SDの北隣に掘削された溝で、001SDと同様の遺物が出土する。縦柱建物はテラス面の東側で検出した柱間2×2間の建物である。南北約3.6m、東西約3.9mを測る。建物は地形に即した向きで建てられており、主軸方位は北で約21度東に傾く。柱穴掘方は一辺約0.6～1.0mの方形で、遺構面の残りが良好な南側で深さ約0.6mを測る。

テラス面で出土した遺物は大半が整地後の遺構やその上面の堆積土に含まれるものであり、整地前の遺構やテラス造成上に伴う遺物は非常に少ない。整地後の遺構の時期は飛鳥III～IVの時期であると考えられる。整地後のテラス全体の形状や溝は、おおむね整地前のものを踏襲しており、当初のテラス形成時期もそれほど遡らないと推測される。テラスが利用された時期は7世紀後半に収まると考えられる。

#### 第4項 出土遺物

古墳背面の丘陵からの出土遺物は、出土地点をもとに、植山北古墳周辺で出土した遺物（図113～115）とテラス面周辺から出土した遺物（図116）に分かれる。この他では柱列周辺からも土器片などが出土しているが、数量はごく少数であり、図化も困難な小片ばかりである。丘陵頂部に関しては、むしろ遺物がほぼ出土しないことを特徴として認識すべきである。

208～214は植山北古墳の周辺、とくに北東から東側の埴丘壠付近を中心として出土した須恵器である。出土地点は図102に記している。植山北古墳との位置関係や、丘陵上の他の部分では遺物が出土しない点を踏まえると、これらは植山北古墳に伴う遺物である可能性が高いと言える。ただし必ずしも植山古墳よりも古い時期の土層から出土していることが確認できているわけではなく、植山北古墳よりも後、植山古墳の築造時に伴う可能性も否定できない。

208～210は壺蓋である。口径は208が13.3cm、209が15.6cm、210が15.1cmである。いずれも肩部下に凹線が巡る。肩部の張り出しは210→209→208の順に目立たなくなる。211は環身である。出土地点は北古墳南東の壠の埋土である。口径13.3cm、器高4.7cmを測り、やや背の高い個体である。212は壺である。ほぼ完形である。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ2.4cmを測る。213は高环である。环部を2割程度欠く。縦長1段の方形透かしが三方向に穿たれる。环部は

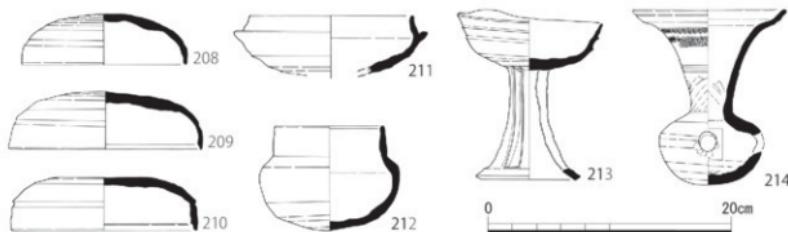


図113 植山北古墳周辺出土土器 (S=1/4)

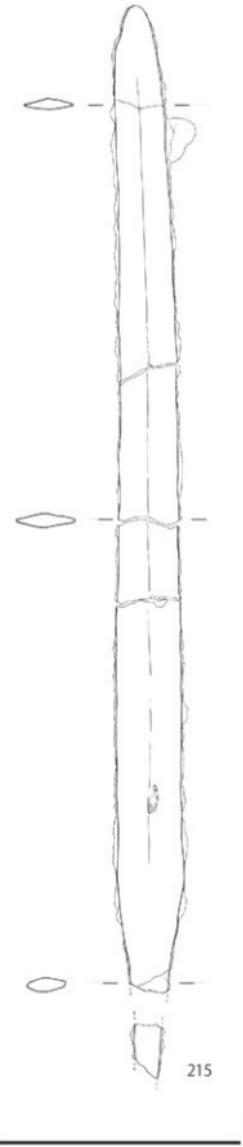


図 114 植山北古墳周辺出土 鉄器 (S = 1/2)

一部が歪んでいる。214は鍔である。口縁部を一部欠くが、ほぼ完形である。頭部下半が細く、口縁部が大きくラッパ状に開く形状である。口縁部下には波状文が施される。植山北古墳周辺で出土した須恵器の中ではやや新しい様相を示している。

215は植山北古墳の墳丘東肩付近から出土した鉄劍である。植山北古墳の副葬品であった可能性もある。残存長約43cmを測る。断面の形状は刀部では細長い菱形、柄部で細長い楕円形を呈する。厚さは、刀部先端付近で0.4cm、同中央付近で0.6cmを測る。一部に鞘の痕跡と考えられる木質が付着しているが、わずかである。

216は植山北古墳の墳丘盛土から出土したサヌカイト製の石鐵である。長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm、重量0.35gを測る。

丘陵北側斜面に築かれたテラス面周辺からは須恵器と土師器が出土している(図116)。丘陵頂上部と比較して調査面積は狭いが、出土遺物量はこちらのほうが多い。

遺物は大半がテラス面上の表土層からの出土である。テラス面で用いられていた遺物の他、丘陵斜面上(春日神社境内にあたる)から流れてきた遺物が含まれている可能性がある。

遺構から出土した遺物は、001SDから出土した230の壺と、テラス面整地層下の051SPから出土した235の壺の口縁部である。残る遺物は、表土を中心とした遺構面より上層の堆積土からの出土である。

217~238は須恵器である。217~219は蓋で、宝珠つまみが付く。つまみの形状は概ね共通する。220・221・223~225・228はかえりをもつ蓋である。224など、宝珠つまみが付く可能性のある破片も含む。227はかえ

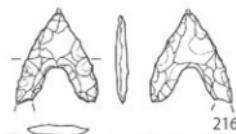


図 115 植山北古墳周辺出土 石器 (S = 1/1)

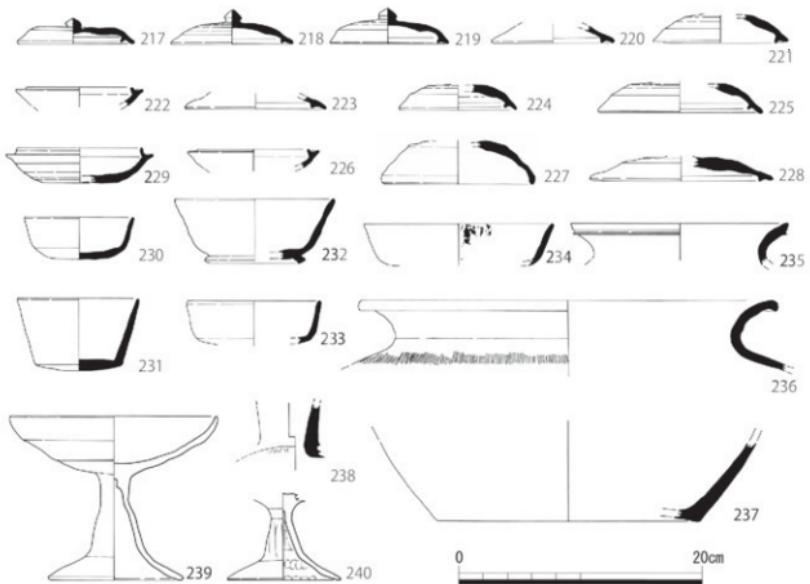


図 116 テラス面出土 土器 (S = 1/4)

りをもたない蓋である。口径 12.1 cm を測る。

222・226・229 は环身である。222 と 226 は断面三角形の低い立ち上がりが内側に向かって伸びる。229 は強く外反して立ち上がるが、高さは低い。

230 は整地後にテラス南辺に掘られた 001SD から出土した环である。約半分が遺存している。口径 9.0 cm を測る。底部は狭い平底である。231 は直線的に立ち上がる环である。底部は中央が突出しており、安定に欠ける。232 は高台が付く环である。口縁端部はわずかに外側に開く。233 は环で、口径 10.8 cm に復元できる。234 は环で、内面に漆が付着している。

235 はテラス面整地前の遺構である 051SP から出土した甕の口縁部である。236 は甕の口縁部で、復元口径 33.4 cm を測る。237 は平底の瓶類ないし壺の底部である。表面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。238 は瓶類の頸部付近の破片である。頸部下に同心円文が刻まれている平坦な面が存在する。

239 は土師器の高环である。約 6 割が遺存しているが、表面は損傷が激しく調整は不明である。脚部は环部の直下まで中空になっている。240 も土師器の高环の脚部である。表面は磨滅しているが、外面にはわずかに面取りを行った痕跡が確認できる。

## 第IV章 総括

### 第1節 調査成果の概要

#### 調査の経緯

植山古墳では 2000 年度、2001 年度、2009 年度、2012 年度に発掘調査を実施した。植山古墳の調査の端緒となる 2000 年度の発掘調査は、檜原市五条野町周辺で計画された土地区画整理事業を契機として行われた。調査の結果、2 基の大型の横穴式石室を有する古墳であることを始めとして、多大な成果が得られた。また、墳丘の周辺にも古墳に関係すると考えられる遺構が展開していることも明らかとなった。2001 年度には墳丘より南から南西にかけての平坦地にも遺構が存在することを確認した。これらの成果をもとに、平成 14（2002）年に墳丘および遺構が存在すると考えられる周辺部について、国史跡の指定を受けた。2009 年度と 2012 年度には古墳背面丘陵の東側および墳丘前面斜面、墳丘南側平坦面において、範囲確認を目的とする発掘調査を実施し、植山古墳の築造から藤原京期頃にかけての時期を中心とする様々な成果を得た。以下に、これらの調査で得られた成果について、項目別にまとめる。

#### 墳丘

古墳は東南東－西北西方向に伸びる丘陵地に築かれている。墳丘は丘陵の南斜面を不整な直方体上に削り出し、その上に土を盛ることで構築されている。周濠の掘削によって生じた排土を盛土として利用したと考えられる。

墳形は東西方向に長い長方形墳で、墳丘の規模は東西約 40 m、南北約 30 m を測る。墳丘の前面（南辺）については大幅に削平されており、墳丘から前底部にかけての接続部の形状も含めて、築造当初の状況は正確な復元が困難になっている。石室入口の位置から考えると、墳丘が横長である点は確かであると考えられる。

現在の墳丘の最高所は両石室奥壁の中間付近であり、その標高は 111.5 m である。墳丘の残存高は周濠底を基準とすると約 3 ~ 6 m である。墳丘の上部は後世に大幅に削り取られている。西石室の天井面の標高は約 110.3 m であり、東石室の天井面についても牧野古墳等のほぼ同じ構造の石室を参考にすると西石室とほぼ同様の標高であったと考えられる。その上に天井石が架けられ盛土が施された場合、墳頂部の標高は約 113 m 前後であったと復元できる。

墳丘の主軸（南北）はほぼ正方位を向き、北で約 13 度 30 分東に振れる。正方位からの若干のズレは、古墳南東の高台部分等の旧地形に左右された結果であると考えられる。

段築については、二段目の存在は確認できない。現在の墳丘の上に二段目の墳丘が存在していた可能性も否定できないが、墳丘の外面や墳丘盛土からはその痕跡を見出し難い。

墳丘の表面には葺石や貼石などの外表施設は存在しない。

#### 周濠

墳丘の西・北・東には『 』字形に周濠が巡る。周濠は丘陵を掘削して構築されている。規模は

上幅約7～10m、底幅約1.6～3.0mを測る。周塙の断面形は北側と西側では逆台形を呈し、東側では緩やかな弧を描く。

北から西にかけての周塙底面には幅約1mの石敷きが施されている。石敷きの東端は墳丘の北東隅裾付近にある。石敷きは飛鳥川上流域の花崗岩と古野川流域の結晶片岩が用いられている。石敷きは、人頭大の花崗岩を下位に厚く積み重ね、上部に15～25cm大の扁平な結晶片岩を敷き詰める構造をしている。断面確認を行った墳丘北西隅での石敷きの厚さは約1.2mを測る。石敷きの上面高は東端がもっとも高く、西、南に向かって次第に低くなる。

石敷きは、雨水の流入による墳丘裾や塙底の損傷を軽減する役割を果たしていると考えられる。

#### 墳丘盛土と石室の構築

植山古墳には南側に開口する横穴式石室が2基、東・西に並んで構築されている。墳丘東半に位置する石室が東石室、墳丘西半に位置する石室が西石室である。

墳丘は地山を削り出した後、盛土を施して構築されている。東側周塙の底面にも盛土は施されている。墳丘前面では盛土を施すにあたり、地山上で整地を行っていることも確認している。地山は北から南に向かって低くなっている、基本的にはその傾斜を利用しているようであるが、石室構築時の掘方など、地山を大きく掘り込んでいる部分も存在する。

全体としては、盛土は厚さ約0.05～0.25m程度の単位で水平に施されているが、墳丘の核にある墳丘主軸付近では厚さ約0.05～0.10m程度の非常に細かな単位の盛土が見られる。その一方、墳丘の外側、とくに西側は主軸付近よりも粗い単位で盛土を施す傾向にある。

東石室の構築は、当初の墳丘の構築と一緒にとて行われていることが墳丘断面によって確認されている。一方、西石室については構築掘方が現在の墳頂部から掘り込まれていることを確認しており、墳丘が上部まで盛り上げられた後に構築されたこととなる。東石室の構築が墳丘構築と並行して行われていることを踏まえると、西石室は墳丘および東石室の完成後、やや時を経てから造り足されたと考えられる。なお、西石室の構築にあたって西側への墳丘の拡張は行われておらず、当初から横長の墳丘が造られている。西石室を造り足すことが当初の墳丘築造時から計画されていたようである。

#### 東石室

東石室は、ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室である。石室主軸は墳丘主軸に沿う。構築時期は6世紀末であると考えられる。

石室の規模は全長約13.7m、玄室長約6.5m、同幅約3.0～3.2m、同残存高約2.9m、羨道長約7.2m、同幅最大約1.9m、同残存高約2.2mを測る。

石室石材は天井石と玄室の上半部が失われている。石材は近世以降に取り去られている。石材は主として貝吹山周辺で産出される花崗岩が用いられている。

床面には結晶片岩と花崗岩を用いた排水溝が構築されている。排水溝の平面形は羽子板状を呈し、玄室では石榴の周囲を巡り、玄門下で一筋に集約され、石室外へと伸びる。排水溝は少なくとも玄門より南側においては、造り替えが行われている。奥壁側の排水溝内からは金銅製歩搖付飾金具、三輪玉、軒などが出土している。

玄室には熊本県宇土半島産の阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇ピンク石）で作られた刎り抜き式の家形石棺が

遺存している。石棺の身は蓋から外され、割れた状態で出土したが、完存している。蓋には計6個の縄掛け突起が存在する。石棺の法量は、蓋が全長2.52m、幅1.53～1.58m、高さ0.62m。身が2.43m、幅1.40～1.50m、高さ1.10mである。棺の幅は羨道幅よりも広い。

石棺内から遺物は出土していない。石棺と同じ阿蘇溶結凝灰岩の破片は、いずれも小片であるが墳丘盛土や古墳周辺の整地層、後世の堆積土などから出土している。古墳周辺で石棺の加工を行った際に生じた屑である可能性がある。

#### 西石室

西石室は南南東に開口する両袖式の横穴式石室である。東石室と比較して袖部の張り出しある。石室主軸は墳丘主軸よりも西に傾いている。西石室は玄室主軸と羨道主軸にもズレが見られる。構築時期は7世紀前半であると考えられる。

石室の規模は全長約13.0m、玄室長約5.2m、玄室幅約2.5m、玄室高約4.5m、羨道長約7.8m、羨道幅約2.0～2.3m、羨道残存高約2.0mを測る。

石室石材は天井石と羨道の上部が失われている。石材は飛鳥川上流域（細川谷周辺）および寺川流域の花崗岩、石英閃緑岩、川原石が使用されている。

羨道床面には結晶片岩を用いた排水溝が構築されている。

玄室と羨道の境界には、兵庫県高砂市所在の揖保山周辺で産出される凝灰岩（竜山石）製の闕石が据えられている。闕石は石製扉の底板であると考えられる。闕石および扉の詳細については次節で述べる。

石室には棺は残されていない。石室内からは須恵器や鉄器などが出土している。当初の位置からは移動していると考えられるが、西石室に作る遺物である可能性がある。

#### 石室閉塞土

東・西の石室の開口部が盛土（閉塞土）によって閉塞されていることを確認している。閉塞土が盛られた後は、外部から石室入口（羨門部）が完全に見えなくなっていたと考えられる。

東石室では、閉塞土が羨門部から墳丘前面東側にかけての非常に広い範囲を覆っている。範囲は高さ約4m、奥行（南北）約4m、幅（東西）約10mに及ぶ。

西石室においても閉塞土を検出しているが、大部分が後世に削平されており、墳丘前面にわずかにへばり付く形で遺存している。

東石室の閉塞土は、西石室の閉塞土の上から盛られており、閉塞土が施された時期は7世紀前半以降となる。東石室の構築時期は6世紀末であり、閉塞土が盛られる以前にも何らかの方法で閉塞を行っていたはずであるが、その痕跡は残されていなかった。

#### 墳丘・石室に対する後世の改変

墳丘は前面および上面が後世に大幅に削平されている。前面ではとくに西側での削平が著しい。改変を受けた時期は、大きく中世と近世に分かれ。墳丘南側の一帯では、中世の遺構が確認されており、石室内の堆積土にも中世の遺物が含まれている。近世には両石室上部の石材が多数取り去られている。その作業時に、墳丘上部から前面にかけての盛土も大幅に削平されている。

### 南側平坦面の整地層

墳丘の南側に広がる平坦面では、古墳築造に伴う整地層を検出している。現在の墳裾付近については後世に地山まで削平されているものの、当初は平坦面のほぼ全域に整地層が広がっていたと考えられる。

平坦面の北側と南東隅では表土直下で岩盤を検出しており、古墳築造以前はこの間が深い谷地形となっていたことを確認している。古墳築造時に谷を埋め立てて整地を行い、墳丘の前面に広い空間を作り出している。確認している範囲内では、谷の最深部における整地層の厚さは約 2.0 m に及ぶ。整地層の上面は概して北から南に向かって低くなる。また、東側が高台状になっていた可能性もある。

整地層は厚さ約 0.05 ~ 0.15 m の細かい単位で互層上に盛土を施す地点もあれば、厚さ約 0.2 m 以上の単位で盛土を施す地点もあるなど、盛土方法には地点によって差異が見られる。

### 南西側平坦面の柱列

墳丘の南西前に存在する平坦部では、南北方向の柱列 2 列と東西方向の柱列 2 列を確認している。柱列の方位は正方位である。二つの柱列は北辺が揃う。柱穴掘方は一辺約 0.9 ~ 1.4 m の方形である。

南北方向の柱列は、西側周壕の延長部分に位置する。柱列は古墳に関連する遺構であると考えられる。

### 植山北古墳

植山北古墳は、植山古墳のほぼ真北、丘陵頂上部に築かれている帆立貝形古墳である。墳丘長約 35 m を測り、前方部を西に向いている。

植山古墳築造以前から存在していた古墳であり、植山古墳の周壕掘削によって墳丘の南側が削り取られている。築造時期は 6 世紀前半頃であると考えられる。墳丘の南東側には幅約 8 m の壕が存在しているが、植山古墳の築造時ないし柱列の構築時に埋められている。

### 背面丘陵の柱列

植山古墳の背面丘陵上には、新・旧 2 時期の柱列が存在する。墓の内外を隔てることによって墓域を明示するための堀もしくは柵のような施設であったと考えられる。

柱列（旧）は丘陵の稜線に沿って構築されており、墳丘の北東隅の北付近で屈折する。検出長は約 114 m を測る。柱列（新）は、ほぼ東西方向に即して構築されている。検出長は約 55 m を測る。墳丘の東側では、同様にほぼ正方位に沿った柱列を確認している。これらの柱列の関係性や丘陵の利用状況については、第 3 節で詳しく述べる。

柱列（新）の構築時期は藤原京期頃、柱列（旧）は古墳築造から藤原京期までのいずれかの時期であると考えられる。

### テラス面

植山古墳の東側、丘陵の北側斜面上には人為的に築かれたテラス面が存在する。テラス面は丘陵斜面の岩盤を削り出した後、盛土によって平坦に整形を行って造り出されている。テラス面の北側は丘陵の斜面であり、北側はある程度流失していると考えられる。

テラス面の検出規模は南北幅約2～5m、東西長約20mである。テラス面上には柱列や総柱建物が存在する。これらの遺構は地形に即した向きに構築されている。

テラス面が利用された時期は7世紀後半であると考えられる。

## 第2節 西石室の石製扉

西石室の玄門部には竜山石製の闕石が据えられている。闕石の平面形は小判形を呈し、規模は全長約2.5m、幅約1.3m、厚さ約0.5mを測る。

上面西側には円筒形の穴が、東と西には幅約0.2mの細長い溝が彫られている。溝の断面形はL字状を呈する。これらはそれぞれ、扉材の軸受け穴と方立をはめ込む溝にあたり、西石室玄門部には石製の扉が存在していたと考えられる（図117）。この場合、闕石は扉の底板に相当する。

植山古墳が位置する櫛原市五条野町には、春日神社、八咫烏神社、素盞鳴命神社の三つの神社が存在する。春日神社は植山古墳と同一の丘陵上、古墳から東南東に約60mの地点に位置する。八咫烏神社は植山古墳から北に約250m、素盞鳴命神社は南西に約300mの地点に位置する。それぞれの神社の境内地から、西石室より運び出されて転用されたと考えられる石材が2000年度調査時に発見された。

素盞鳴命神社では、長さ約0.9m、幅約0.6m、厚さ約0.12～0.16mを測る竜山石が社殿前の踏み石として使用されている（図版94上）。石材の北西コーナー側面はL字形に加工されており、闕石の方立をはめ込む溝に施されている段に対応する形状をしている。西側の方立を転用していると考えられる。

八咫烏神社では、社殿前の階段下に長さ約0.76m、幅約1.20m、厚さ約0.15～0.20mを測る竜山石が踏み石として使用されている（図版78上）。石の東側面が半円状に加工されており、幅が闕石の扉部分の長さに一致する。加えて、南側木口面の端には突起物を削り取った痕跡が窺えること

から、闕石に伴う扉石として使用されている石材であると判断できる。北側木口面には石材を切断した際の矢穴が残る。

春日神社には、社殿下の階段下に踏み石として長さ約1.88m、幅約0.76m、厚さ約0.25～0.29mを測る竜山石が存在する（図版94下）。形状や大きさから、扉の上位部分となる鶴居（石）である可能性が考えられる。また、踏み石と石段の間のテラスの上留めとして最大で幅約1.3mの長方形の結晶片岩の板石が用いられている。植山古墳において結晶片岩は、塹底の石敷き、石室排水溝などに用いられているが、これほど大きな結晶片岩が見られるの

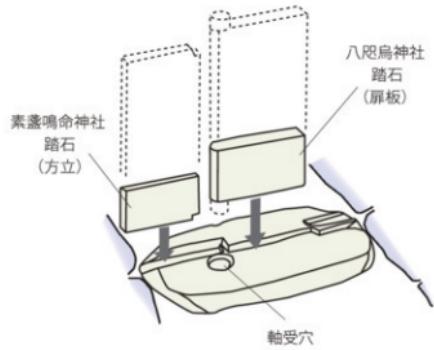


図117 西石室 石製扉 想定復元模式図

は、西石室玄室床面に置かれた一枚のみである。テラスの土留めに用いられている結晶片岩は、西石室床面の敷石であったと考えられる。

西石室の両側壁の玄門部には、他の石室石材とは組み合はず、周囲を盛土によって保持されている石材が存在する。図 55 の両側壁中央付近に描いている一見宙に浮いたような石材が、それにあたる。石材の下面是敷石から約 1.8 ~ 2.0 m の高さ、上面は闇石から約 2.8 ~ 3.0 m の高さにある。いずれも東側が低い。これらの石材は、闇石との位置関係などから、鶴居石を保持する役割を果たしていたと考えられる。

### 第 3 節 柱列と丘陵利用の変遷

植山古墳の背面丘陵上には新・旧二時期の柱列が存在する(図 118)。柱列(旧)は丘陵の稜線に沿つて構築されており、丘陵のさらに南東方向へと続いている。一方、柱列(新)はほぼ正方位に則っており、墳丘の北側および東側で確認されている。さらに、墳丘から南西側の平坦面においても東西方向および南北方向の柱列が確認されている。これらも方位や掘方形状の共通性から、柱列(新)と同じ時期の遺構である可能性が高い。

さらに丘陵の広い範囲に目を向けると、植山古墳から東南東に約 100 m の地点、同一の丘陵の頂上部に五条野内垣内遺跡(ごじょうのうちがいと)という遺跡が存在する。五条野内垣内遺跡では、櫛原市教育委員会が植山古墳と同じく土地区画整理事業に伴う発掘調査を実施し、藤原京期の大型建物群が存在することを確認している(櫛教委 1999 - 9 次調査)。調査後、五条野内垣内遺跡が存在していた地点は、丘陵ごと削平され道路が築造されている。付図 1 には道路築造後の状況を記している。図版 5 下のブルーシート部分は削平後の丘陵南東斜面である。五条野内垣内遺跡では、丘陵頂部を削って斜面には盛土造成を行い、一辺約 50 m 四方規模の宅地を造り出して複数の大型建物からなる施設を形成している。少なくとも宅地の東側と南側は塀で区画されている。立地や建物規模から、高位の人物の邸宅であった可能性などが考えらえる。

植山古墳の柱列(新)は、五条野内垣内遺跡の建物群と同一の方位で建てられている。2009 年度調査で検出した墳丘の東側の柱列(新)については、正方位からのズレも五条野内垣内遺跡と同一である。柱列(新)と建物群は、方位と柱穴掘方の構造が共通していることから、ほぼ同時期に構築されたと考えられる。藤原京期頃に、植山古墳周辺を含む丘陵一帯に大幅に手が加えられたようである。なお、それ以前から柱列(旧)によって古墳は周囲と隔てられており、藤原京期には造り替えが行われたということになる。

柱列(新)には丘陵北側(2000 年度調査分)と東側(2009 年度調査分)との間に直線距離にして約 35 m 分の柱列空白部分が存在する。そのため、両者が完全に同一時期の遺構であるのかは、なお検討の余地が残るが、ここでは一連の遺構であると考え、この空白部分についての検討を加える。

図 119 には空白部分の構造について想定される可能性を示している。①は本来、正方位に柱列が繋がっていたものが完全に削平されて消失した可能性である。検出した地形の傾斜を踏まえると、東側柱列の北側など、完全に削平されたとは考え難い部分が存在し、①の可能性は低いと言える。②は当初から施設に空白があったとするものである。現在検出している遺構のみで説明が完結し、東西での

若干の方方位のズレも施工の段階によって生じたとの説明が可能になる点が利点である。ただし、この部分に空白を設けた理由については明確な説明が難しい点が問題となる。古墳への通行路とも考え難い。地形的にもこの範囲には区画が不必要であると見出せる特徴も無い。③は空白部分について柱列（旧）を利用し、東半では丘陵頂部に柱列を通した可能性である。東側の柱列（新）の北端を境に、その南東側のみ柱列（旧）に対し抜き取りが行われている点は、この可能性を支持しうる要素である。ただし、西側では柱の全面建て替えが行われている中で、この部分のみ再利用が可能なほど良好に柱が遺存していたかについては疑問が残る。調査地の丘陵頂部は強い風雨に晒されやすい環境にあり、柱の耐用年数は短くなりがちであったと想定される。柱列（旧）の構築時期がどの程度遡るものかは不明であるため、この点は明確にし難い。

ここに示した可能性についてはいずれも疑問点が残り、柱列（新）構築時の姿は明確にし難いが、相対的には②か③である可能性が高いと考えられる。

調査地の丘陵の土地利用の変遷についてまとめる。まず6世紀前半頃、丘陵頂部に植山北古墳

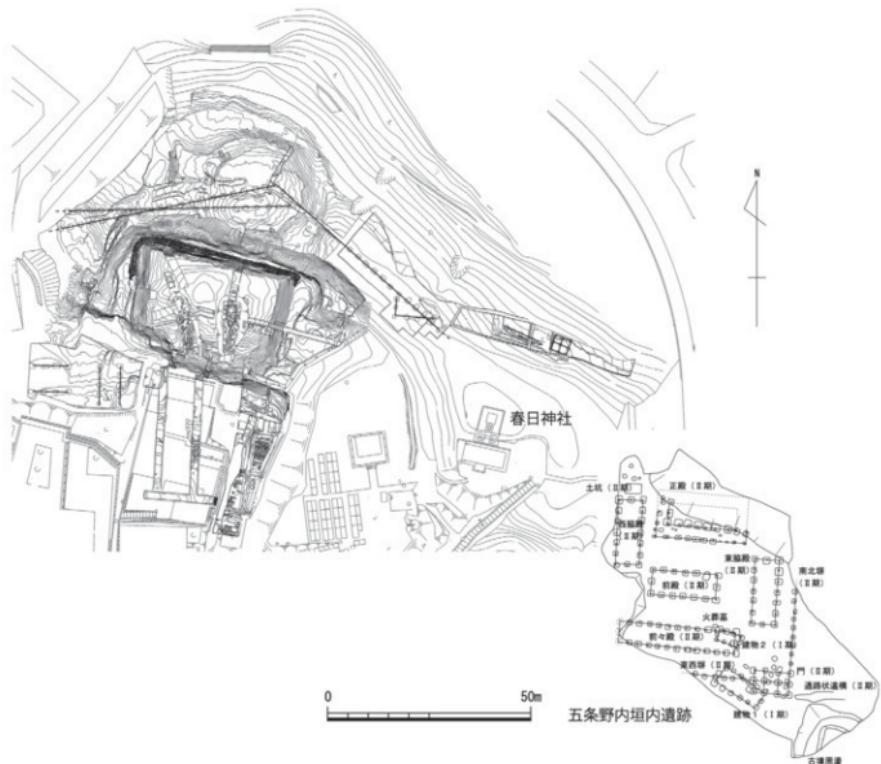


図 118 植山古墳と五条野内垣内遺跡 (S = 1/1,200)

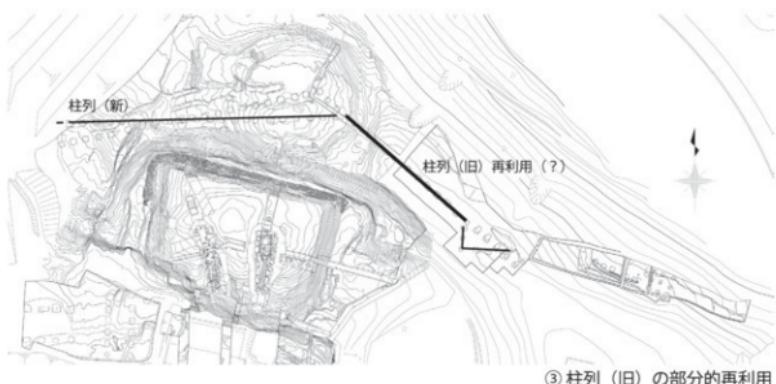
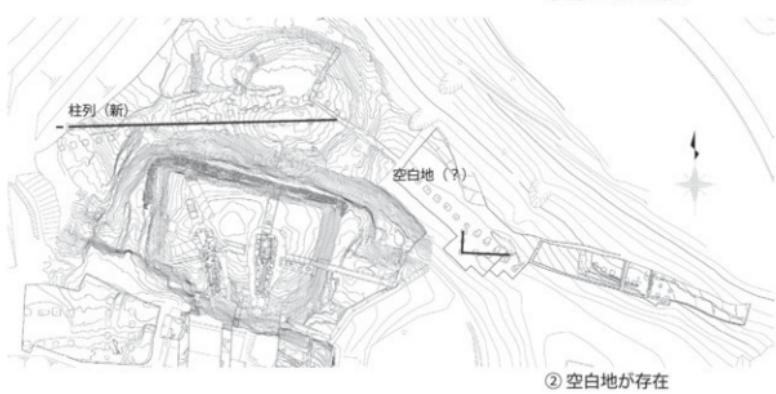
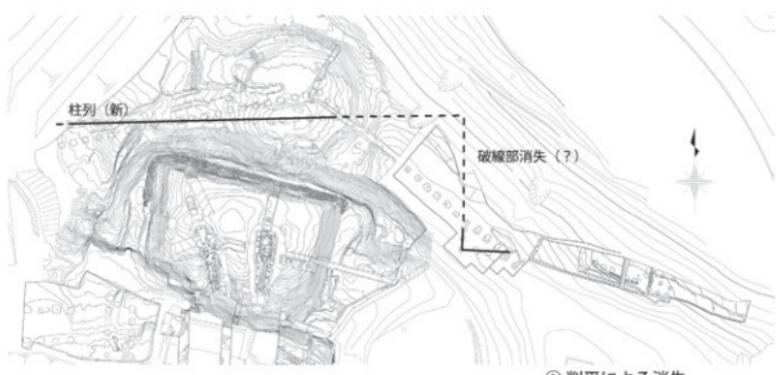


図 119 背面丘陵柱列変遷想定図

が構築される。北古墳周辺からは石鏃も出土しており、それ以前から人の立ち入りはあったと考えられるものの、明確な遺構が形成されるようになるのは北古墳築造以降である。6世紀末には植山古墳が築造される。以後の丘陵利用は植山古墳の存在を意識したものとなる。柱列（旧）による区画がなされるのは、植山古墳築造から藤原京期までのいざれかの時期である。7世紀後半には丘陵北側斜面でテラス面の利用が行われている。テラス面は位置や時間関係から、植山古墳よりは五条野内垣内遺跡との関係が深いと考えられる。五条野内垣内遺跡では土器の出土がかなり限られるのに対し、テラス面からは食器・煮炊具・貯蔵具といった多様な土器が出土している点は、両者の役割の違いを表している可能性がある。藤原京期には五条野内垣内遺跡の建物群と柱列（新）が構築される。植山古墳の築造から約100年ほど後であるにも関わらず、古墳の外側を画し、管理が行われていることを示している。その後、中世になると古墳の南側一帯で造成工事が行われる等、再び丘陵周辺での活動が盛んになる。これ以降の土地変更は古墳にも大きな影響を与えており、近世には石室上部の石材が抜き取られるなど、古墳に対してさらに大掛かりな変更が行われる。以後、石室石材の一部のみが露出する状態となり、横穴式石室をもつ古墳が存在するという認識のみが残り現代へと至ったのである。

#### 第4節 植山古墳の評価

ここでは発掘調査で明らかとなった植山古墳に関わる一連の事象について、埋葬行為と古墳の管理を主軸として概括し、まとめとして植山古墳の価値について述べる。

6世紀末、植山古墳が築かれる。墳丘部分のみならず、前庭部部分を始めとして周囲の環境を変化させる大規模な工事であった。墳丘と並行して築かれたのが東石室である。玄室に遺存する家形石棺は石室の完成よりも早い段階で据えられており、石室の主が埋葬されたことは間違いない。特筆すべきは、当初から墳丘が横長に造られており（東石室は墳丘の東に偏した位置に築かれる）、後に西石室を造り足す空間がすでに確保されていた点である。植山古墳の築造当初から、二つの石室を東西に並べることが計画されていたことが窺える。

7世紀前半には西石室が造り足される。西石室の主軸が墳丘主軸とずれる点や石材の積み方が東石室と比較してやや乱雑である点は、後に造り足された石室であることに起因するのか、あるいは急いで構築しなくてはならない何らかの理由に起因するのか、判断は難しい。西石室の特徴として、玄門部に石製扉が存在していたと考えられる点が挙げられる。他の横穴式石室には見られない構造であり、西石室の被葬者の特異性が反映されていると考えられる。

両石室ともに改葬が行われている可能性が指摘できる。東石室では石室、石棺、排水溝からの遺物出土状況がその可能性を示している。石室床面や石棺内からは埋葬行為に伴うと考えられる遺物は出土していない。その一方、排水溝内からは丁寧に入れ込まれたような形で歩幅付金具や三輪玉を始めとする遺物が出土している。これらの状況からは、石室・石棺内の片付けが行われたことが窺える。その契機として、改葬行為が想起される。ことによると、石棺の蓋が大きく動かされている点も、改葬行為に起因すると捉えられる要素である（一般的な石棺への盗掘行為のあり方とは異なる）。また、西石室については、開閉可能な石製扉が設けられている点や、石室内に棺が残されていない点が改葬に繋がりうる要素として挙げられる。いずれの石室についても、後世の盗掘による影響も考慮する必

要は残るが、発掘調査で確認された状況は埋葬行為の一環として、初葬時よりも後の段階に被葬者を含む石室内に対して手が加えられた可能性が高いことを示している。ただし、それらは追葬という形では無いようである。

少なくとも西石室構築よりも後に、両石室の入口は石室閉塞土によって塞がれる。これは狭道内ないし狭門部付近に閉塞石を詰む方法とは異なり、埴丘前面の非常に広い範囲に土を盛ることで、完全に石室入口を覆い隠す方法である。盛土後は外観から石室入口の正確な位置を判断できなくなっている。追葬を想定する一般的な横穴式石室とは性質が異なる特殊な封印方法である。石室閉塞土を施した段階で、石室には二度と立ち入ることは無いという意思が感じられる。

植山古墳の背面の丘陵上には、二時期の柱列が存在している。柱列は古墳と外部を隔てる塀のような施設であったと考えられ、植山古墳の重要性を物語る要素のひとつである。柱列（旧）が構築された時期は不明で、古墳築造時、西石室構築時、（行われたと仮定して）改葬時、閉塞時など様々な時機を想定できる。柱列（新）の時期については先に述べたように、藤原京期頃であると考えられる。これは古墳築造から 100 年程度のことであり、それだけの時間が経過した段階においても、古墳を管理するという意識が存在していたことを示している。閉塞土が施された時点で植山古墳はひとまずの役割を終えていると考えられる。さらに、改葬が行われているとするならば、被葬者が他所へ移された状態（所謂、空墓）となっている。そのような状況においても古墳の管理が続けられている点は、特筆に値する。この後、古墳周辺の管理がいつまで継続したのかは不明である。

古墳築造以後、約 100 年もの期間における埋葬に関わる行為や古墳の管理についての実態が明らかとなったことは、非常に貴重な成果である。古墳本体のみならず、その周辺部も含めて管理が行われている点は、今後の古墳の調査にも影響を与えるものだろう。

植山古墳は長方形の埴丘に二つの石室を東西に並べる、所謂「双室墓」「双室墳」である。ただし、一般的な双室墳においては二つの石室が性質的にほぼ並立するような関係であるのに対し、植山古墳では東・西の石室で構築時期や構造、埋葬行為の内容等にかなりの差異が見られる点は注意が必要である。

植山古墳から周囲に目を向けると、丸山古墳や菖蒲池古墳、五条野宮ヶ原 1・2 号墳、五条野城脇古墳など、甘樺丘から西側に展開する丘陵地（現在の橿原市菖蒲町・五条野町一帯）に多くの古墳が築かれている。特に 6 世紀後半から 7 世紀にかけての時期に造墓活動は活発になる。この時期には、すぐ東の飛鳥の地が政治の中心地となっており、古墳の造営者たちもそこに深く関わる存在であったことは想像に難くない。植山古墳は、これらの古墳の中でも比較的早い段階に築かれた古墳であり、周辺における造墓活動の道筋を作った可能性が考えられる。丸山古墳はそれに先立って 6 世紀後半に築かれた奈良県最大の前方後円墳で、最後の巨大前方後円墳ともされる古墳である。植山古墳の前庭部付近に立って西を向くと、丸山古墳の後円部がちょうど正面に見える点などは、両者の関係性を考える上でも興味深い要素である。

このように、植山古墳は日本の古代史を考える上で重要な位置を占める古墳であり、発掘調査によって得られた多くの情報は、今後の研究にも大きな影響を与えると考えられる。



植山古墳 航空写真（俯瞰。上が南）

図版 2



植山古墳 航空写真 近景（南から。2000 年撮影）



植山古墳 航空写真（南東から。2000 年撮影）

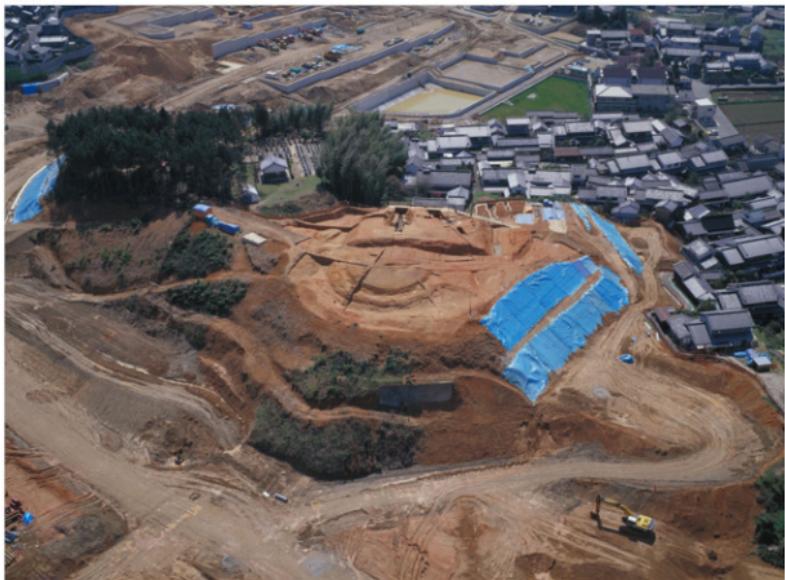


植山古墳 航空写真(南南西から。2000年撮影)



植山古墳 航空写真(東南東から。2000年撮影)

図版 4



植山古墳 航空写真（北から、2000年撮影）



植山古墳 航空写真（北東から、2000年撮影）



植山古墳 航空写真（西北西から。2000年撮影）



植山古墳 航空写真（南東から。右奥は敵傍山、左奥は二上山。2000年撮影）

図版 6



植山古墳 航空写真（東北東から。中央右は丸山古墳、奥は金剛山・葛城山。2000年撮影）



丸山古墳後円部から見た植山古墳（西から）



楢山古墳 調査前状況（東から。東側堆積土上から。窪みは東石室）



東石室 調査前状況（南から）

図版 8



西石室 調査前状況（南から）



西石室玄室 調査前状況（南から）



墳丘背面 完掘状況（北東から）



墳丘西側面 完掘状況（西から）

図版 10



填丘背面 完掘状況（北西から）



西側周塙 土層断面（南から）



西石室玄門部西側 墓丘断面（南西から）



西石室北側 墓丘断面（北東から）

図版 12



埴丘北西隅周塙 土層断面（北東から）



埴丘北西隅 塙底 石敷断面（東から）



東側周縁 遺物出土状況（南東から）



東石室北側 墓丘断面土層断面（北東から）

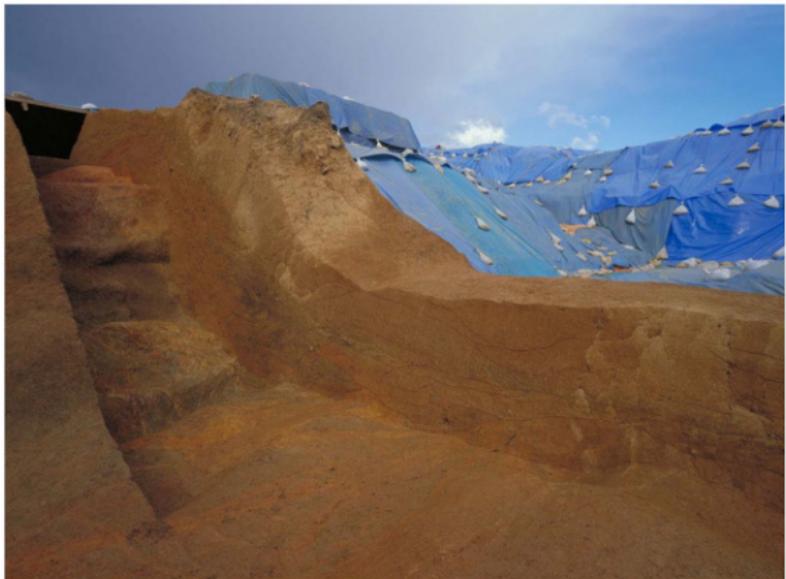
図版 14



東石室北側周塙 土層断面（東から）



東石室東側 塗丘断面土層断面（南から）



東石室東側 墓丘部断削土層断面（南東から）



両石室間 墓丘断削土層断面（南から）

図版 16



両石室間 墳丘断面土層断面（南西から）



西石室玄門部西側 塗丘断面（南東から）



塗丘北西隅 周縁石敷設状況（北西から）

図版 18



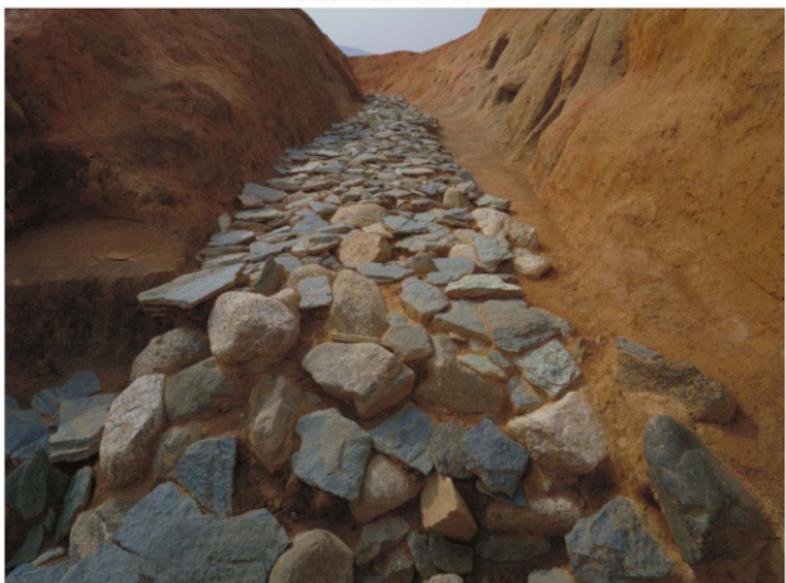
周塙西辺 石敷検出状況（北から）



周塙西辺 石敷南端検出状況（南から）



周塙北辺 石敷検出状況（西から）



周塙北辺 石敷検出状況（東から）

図版 20



墳丘一周塙南東隅 土層断面（北北東から）



墳丘南東隅 土層断面（北東から）



墳丘南東隅 墳裾部土層断面（北から）



墳丘南東隅 墳丘断削土層断面（南東から）

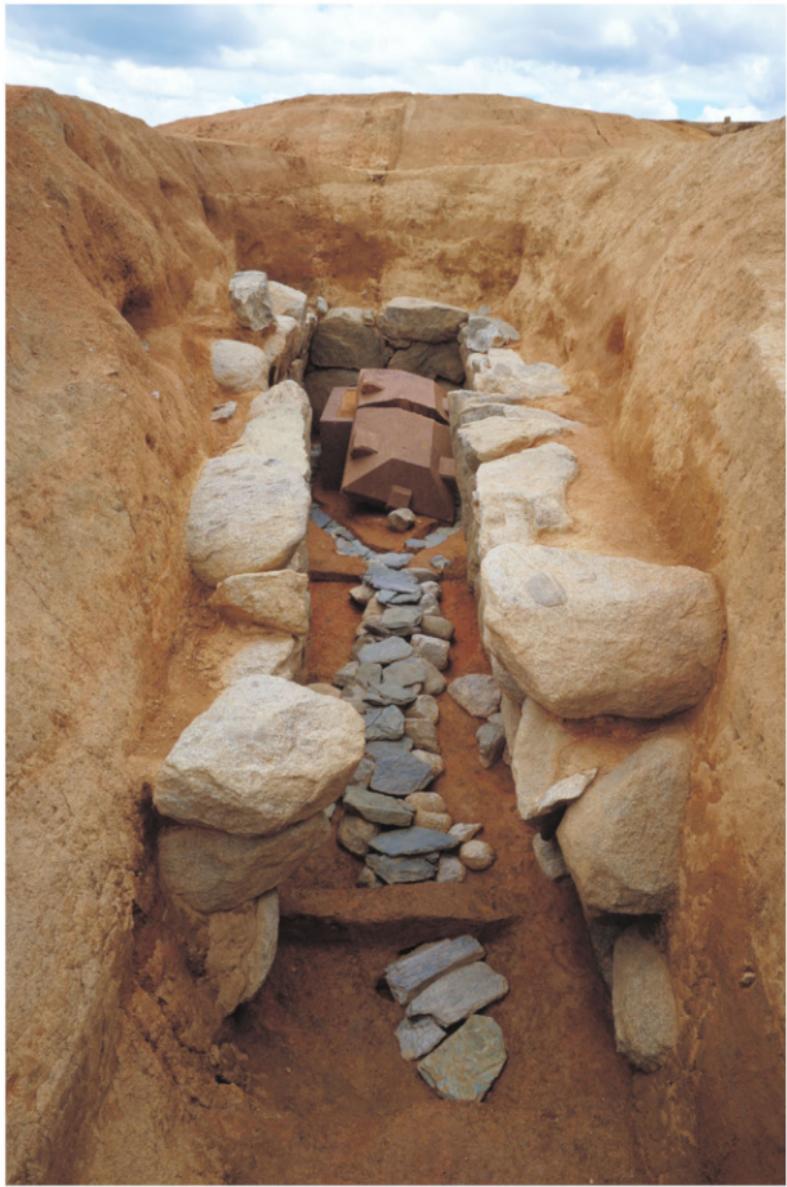
図版 22



墳丘前面 2012 年度調査前状況（南西から。覆屋下が両石室）



墳丘前面 2012 年度調査前状況（東から）

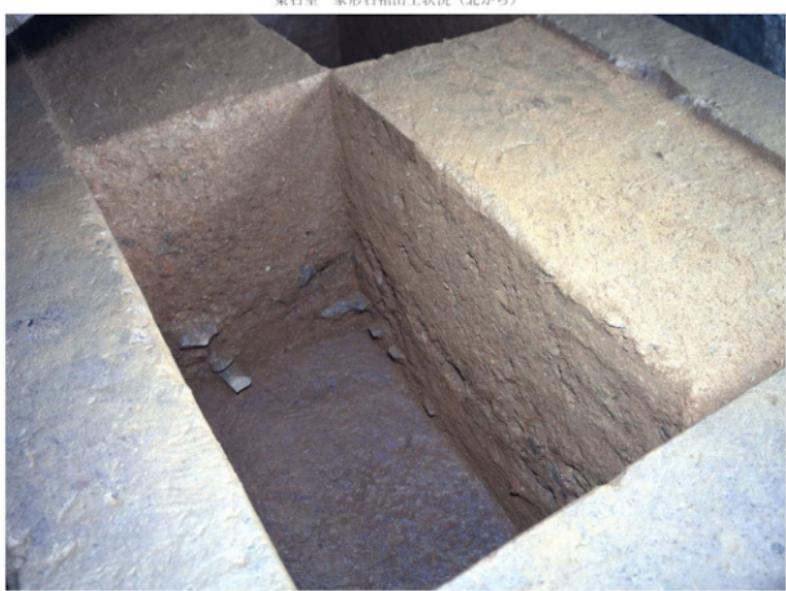


東石室全景（南から）

図版 24



東石室 家形石棺出土状況（北から）



東石室 家形石棺内堆積土層断面（南西から）



東石室全景（北から）



東石室全景（北東から）

図版 26



東石室正面観（南から）



東石室 家形石棺出土状況（南から）



東石室 玄道（北から）



東石室 玄門部（北北西から）

図版 28



東石室 玄室（南から）



東石室奥壁側 排水溝（北西から）



東石室羨道 排水溝（新）（上が入口側）



東石室羨道 排水溝（古）（上が入口側）



東石室玄室 排水溝（新）（上が入口側）



東石室玄室 排水溝（古）（上が入口側）

図版 30



東石室玄門部 排水溝（古）（北西から）



東石室甬道 排水溝（古）（南から）



東石室石棺東側 排水溝（北から）



東石室石棺西側 排水溝（北から）



東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（俯瞰。手前は石棺の身）

図版 32



東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（西から）



東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（東から）



東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（北東から）



東石室奥壁側 排水溝内遺物出土状況（西から）



東石室北側埴丘断面内 14OSP 土層断面（東から）

図版 34



東石室北側埴丘断面内 140SP 完掘状況（南から）



東石室家形石棺 繩掛突起 加工痕跡（南西から）



東石室 家形石棺身 加工痕跡（北東から）



東石室 家形石棺蓋 加工痕跡（南から）

図版 36



墳丘前面 東石室排水溝検出状況（南から）



墳丘前面 東石室排水溝検出状況（南西から）



填丘前面 東石室排水溝構築掘方断面（南から）



填丘前面 東石室排水溝（新）構築掘方断面（南から）



西石室 玄室（南東から）



西石室 正面観（南東から）



西石室 圓石（俯瞰。上が入口側）

図版 40



西石室 圏石（南東から）



西石室 圏石（南から）



西石室　圓石　羨道側床面下断割（南東から）

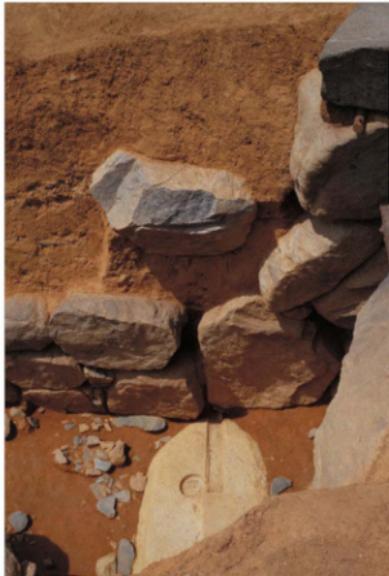


西石室　圓石　玄室側床面下断割（北西から）

図版 42



西石室玄門部 東壁（南西から）



西石室玄門部 西壁（北東から）



西石室渓道 排水溝（南東から）



西石室 渓道（俯瞰。上が入口側）



西石室羨道 遺物出土状況（北西から）



西石室入口部壁面 排水溝構築掘方断面（北西から）

図版 44



墳丘前面 西石室前面土削断面（南から。表土除去時点）



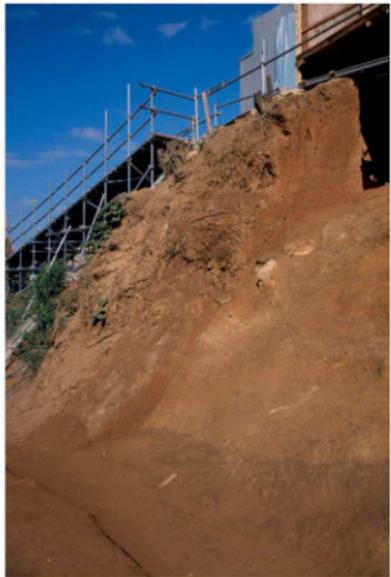
墳丘前面 両石室前面土削断面（南西から。表土除去時点）



埴丘前面 東石室前面土層断面（南から。表土除去時点）



埴丘前面 東石室主軸上土層断面（南東から）



埴丘前面 西石室主軸上土層断面（南東から）

図版 46



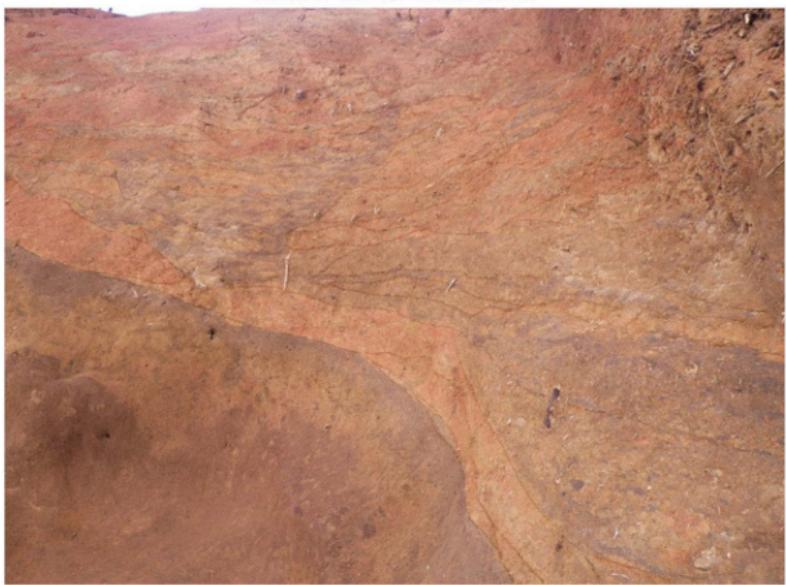
墳丘前面 完掘状況（南から）



墳丘南西部 盛土・地山土層断面（南から）



埴丘南西部 盛土・地山土削断面（西から）



埴丘南西部東半 盛土・地山土削断面拡大（南から）

図版 48



東石室前面 閉塞土検出状況（南から）



東石室入口部 溝状遺構断面（北から）



東石室入口部 溝状遺構検出状況（南から）



東石室入口部 閉塞土断面（北西から）

図版 50



東石室入口部 閉塞土断面（西から）



東石室入口部 閉塞土断面（南西から）



西石室前面 西石室構築掘方断面（南から）



西石室前面 閉塞土検出状況（南から）

図版 52



西石室入口部 土層断面（北西から）



西石室入口部 土層断面（北から）



西石室入口部西壁側 土層断面（北北東から）



西石室西壁羨門部 土層断面（北東から）



西石室前面 墳丘盛土（南から）

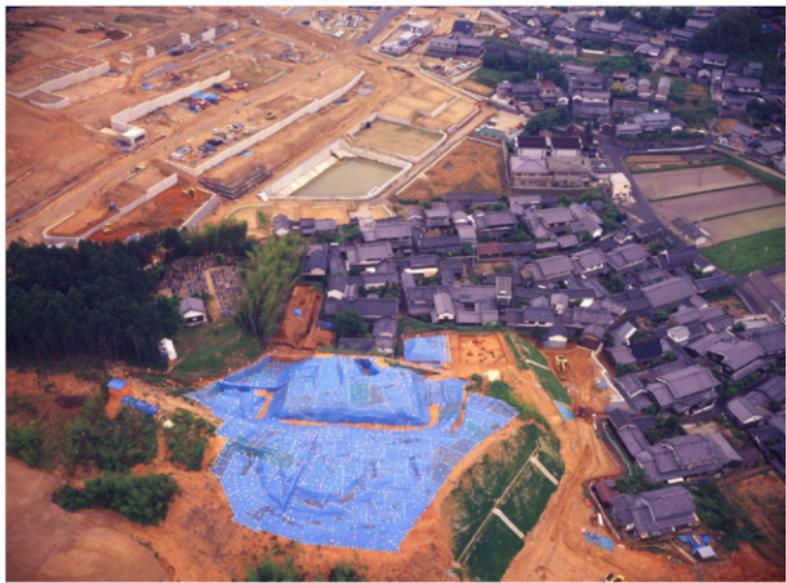


西石室前面 石室構築掘方・石室閉塞土（南から）

図版 54



植山古墳 航空写真（俯瞰。上が北。2001年撮影）



植山古墳 航空写真（北から。2001年撮影）



墳丘南側平坦面 2012年度調査前状況（西から）



1 トレンチ北端 土層断面（南から）

図版 56



1・2 トレンチ 完掘状況（南から）



2トレンチ中央西半 耕作溝・整地層検出状況（南から）



2トレンチ 004・005SK 検出状況（西から）



2トレンチ中央西半 整地層検出状況（西北西から）



2トレンチ南端 整地層・地山検出状況（南から）

図版 58



2 レンチ北半 整地層・地山土層断面（西北西から）



2 レンチ中央 整地層・地山土層断面（北西から。谷地形最深部）



2 トレンチ南半 整地層・地山土層断面（北西から）



2 トレンチ 整地層内 阿蘇溶結凝灰岩片 出土状況（西から）

図版 60



2 トレンチ 整地削内 阿蘇溶結凝灰岩片 出土状況（西から）



2 トレンチ中央 整地削断面（西から）



5トレンチ 整地層検出状況（南から）



3・6トレンチ 整地層検出状況（南から）



3トレンチ北半 整地層検出状況（北から）



3トレンチ南半 整地層検出状況（西から）

図版 62



3 トレンチ南壁 土層断面（北西から）



3 トレンチ南壁 整地層断面（北西から）



3 トレンチ北半東壁 土層断面（北西から）



6 トレンチ南端 整地層・地山検出状況（南西から。手前が整地層）

図版 64



4 トレンチ西壁 墓丘前面盛土・地山土層断面（東から）



4 トレンチ・5 トレンチ北半・墓丘南西部 地山検出状況（南から）



南西トレンチ 完掘状況（北西から）



南西トレンチ 完掘状況（西から）

図版 66



南西トレンチ 完掘状況（北から）



南西トレンチ 柱列（北から）



西トレンチ 完掘状況（北から）



西トレンチ 完掘状況（東から）

図版 68



東トレンチ 完掘状況（北西から）



東トレンチ中央 整地層・地山検出状況（北東から。右手前が地山）



植山古墳と植山北古墳（南東から。右奥の高まりが北古墳）



植山北古墳全景（南東から）

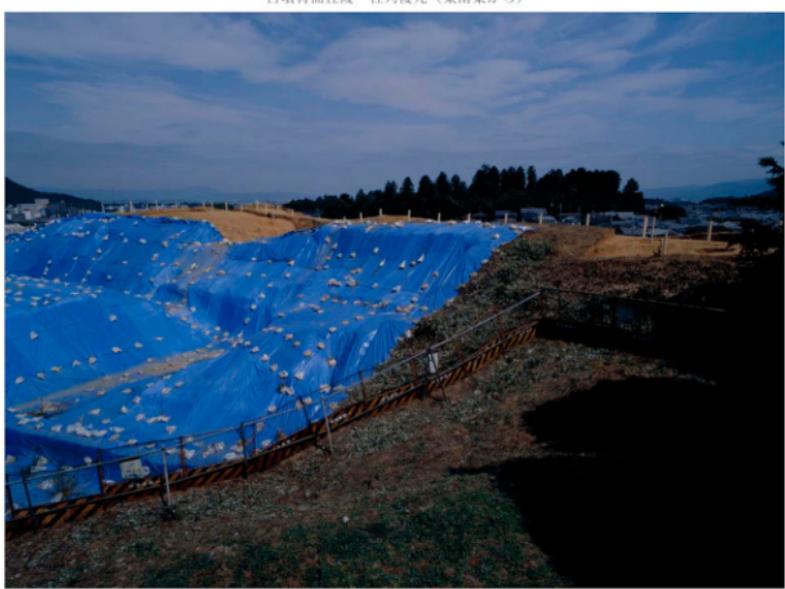
図版 70



古墳背面丘陵東半 柱列検出状況（南東から）



古墳背面丘陵 柱列復元（東南東から）



古墳背面丘陵東半 柱列復元（南から）

図版 72



古墳背面丘陵東半 柱列復元（北西から。奥の林の中が春日神社）



2009 年度調査区 柱列（新・旧）（北から）



2009 年度調査区 013・034SP・018SK 断面（東から）



植山北古墳周塁東側 土層断面（北東から）



植山北古墳周塁北側 遺物出土状況（北から）



植山北古墳周塁北側 遺物出土状況（南東から）



植山北古墳と柱列（西から）

図版 74



2009 年度調査区東半 テラス面検出状況（西から）



2009 年度調査区東半 テラス面検出状況（東から）



2009 年度調査区東半 テラス面検出状況（南西から）



テラス面中央駐西面 土層断面（南西から）

図版 76



テラス面 遺構検出状況（西から）



テラス面東半 総柱建物検出状況（東から）



2009 年度調査区東半 スロープ地形（北北西から）



テラス面 側面観（北から）



テラス面 002SP 検出状況（北東から）



テラス面西半 柱列検出状況（北東から）



テラス面 002SP 断面（東北東から）



テラス面 037SP 断面（東から）



テラス面 035SP 断面（北東から）



テラス面 052SP 断面（北西から）

図版 78



八咫鳥神社 拝殿前の踏石に転用された扉石（北東から）



植山古墳埴丘盛土出土 阿蘇溶結凝灰岩



東石室出土 步搖付飾金貝



東石室出土 三輪玉

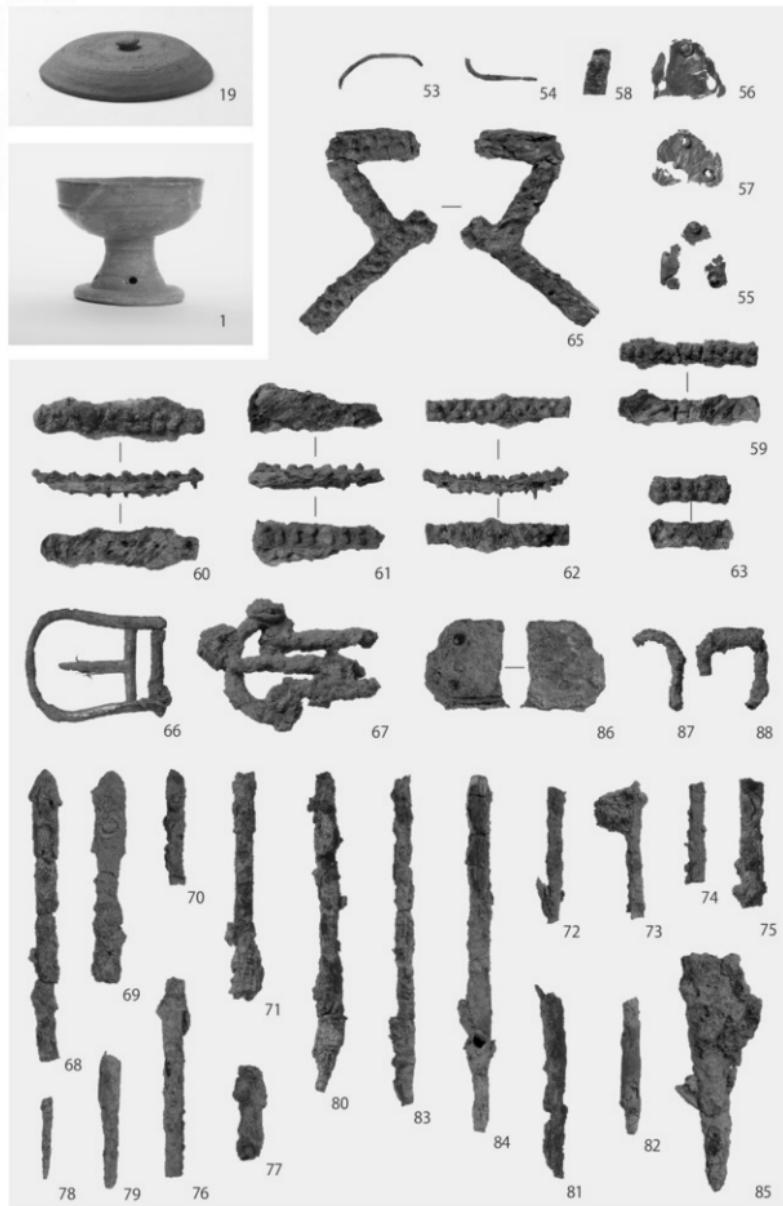


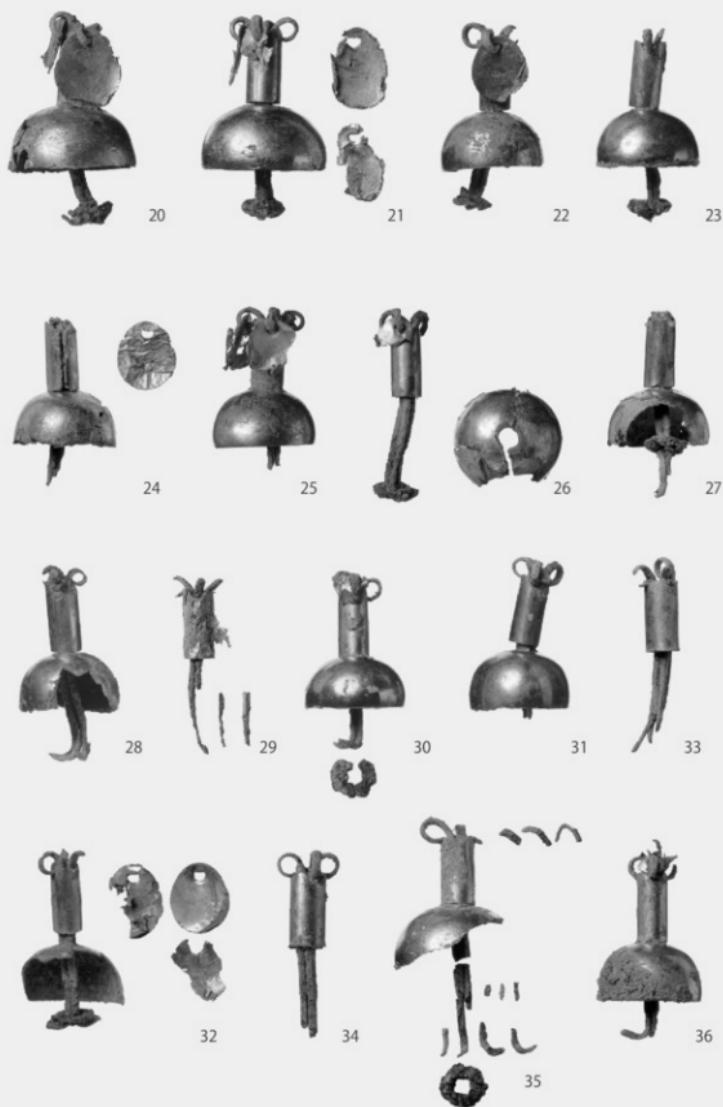
西石室出土 須恵器



図版 82

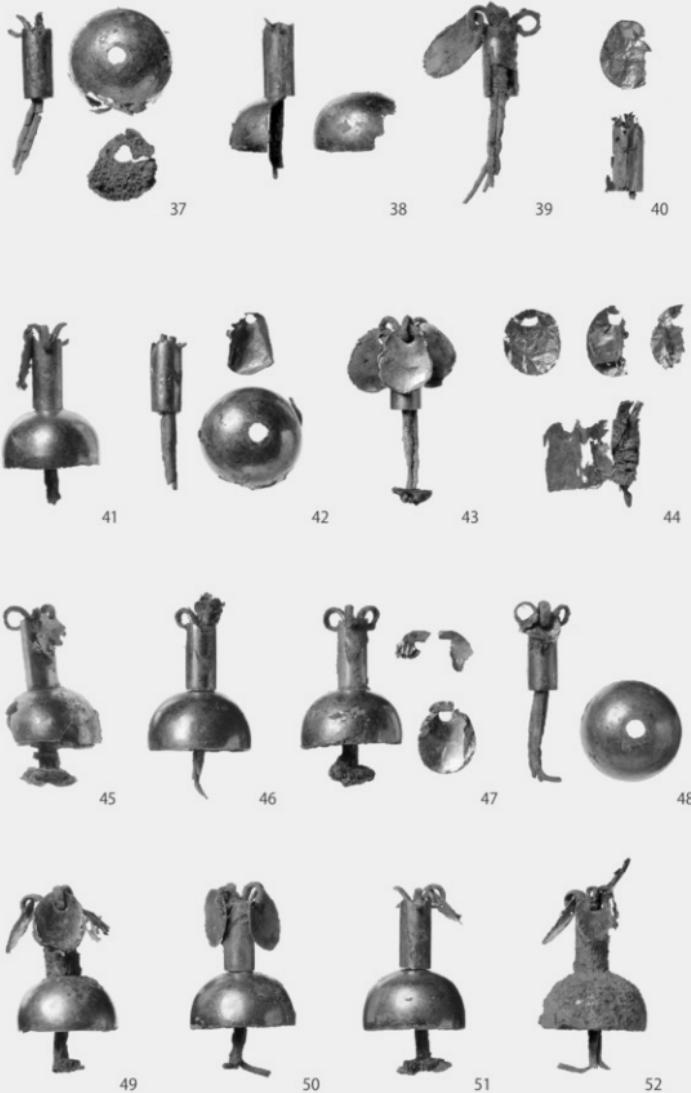
墳丘盛土・東石室出土遺物

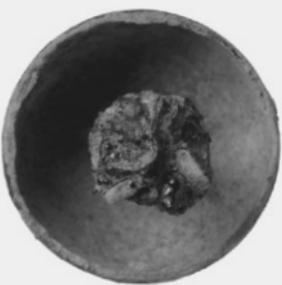




図版 84

東石室出土  
歩搖付飾金具②

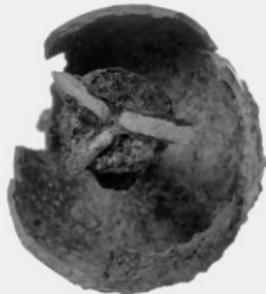




23



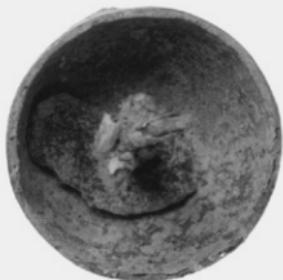
24



45



44



49



28

図版 86

西石室出土遺物①



100



102



101



103



105



106



152

西石室出土遺物②（竪石）



154



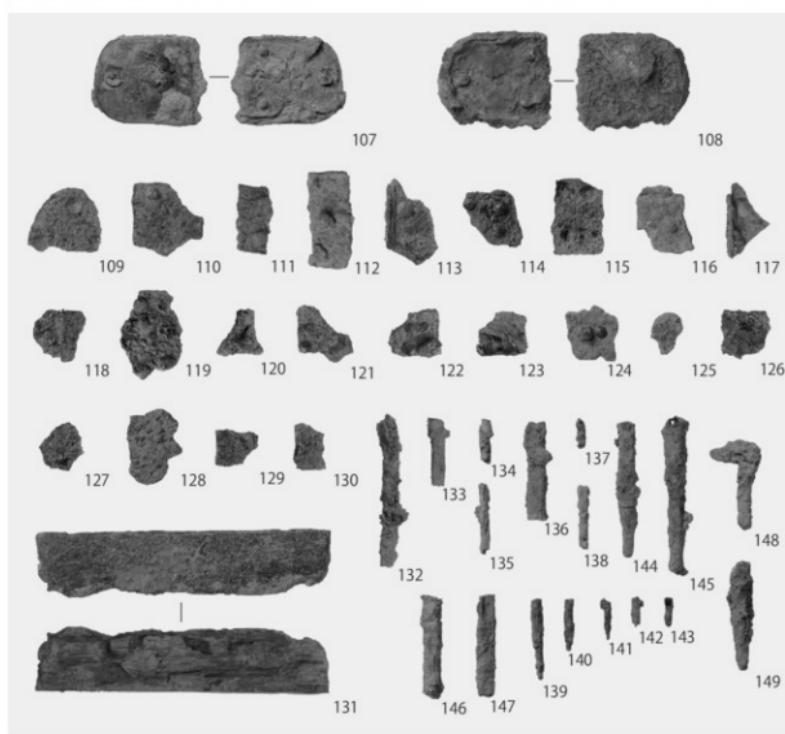
150

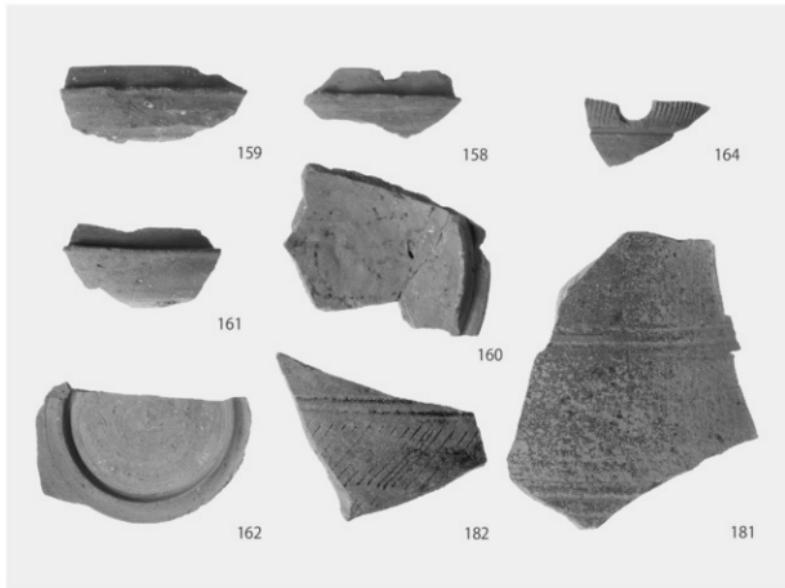
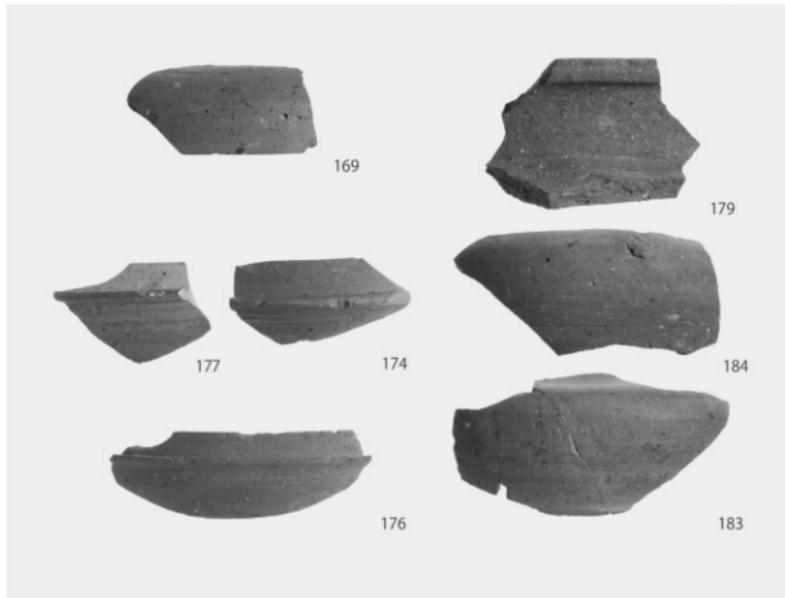


151

図版 88

西石室出土遺物③





図版 90

墳丘南側平坦面出土遺物②



185



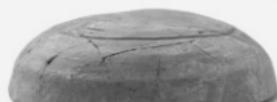
187



180



172



171



178



170



173



156



157



155



175

南西トレンチ・西トレンチ出土遺物



図版 92

植山北古墳周辺出土遺物



208



209



210



211



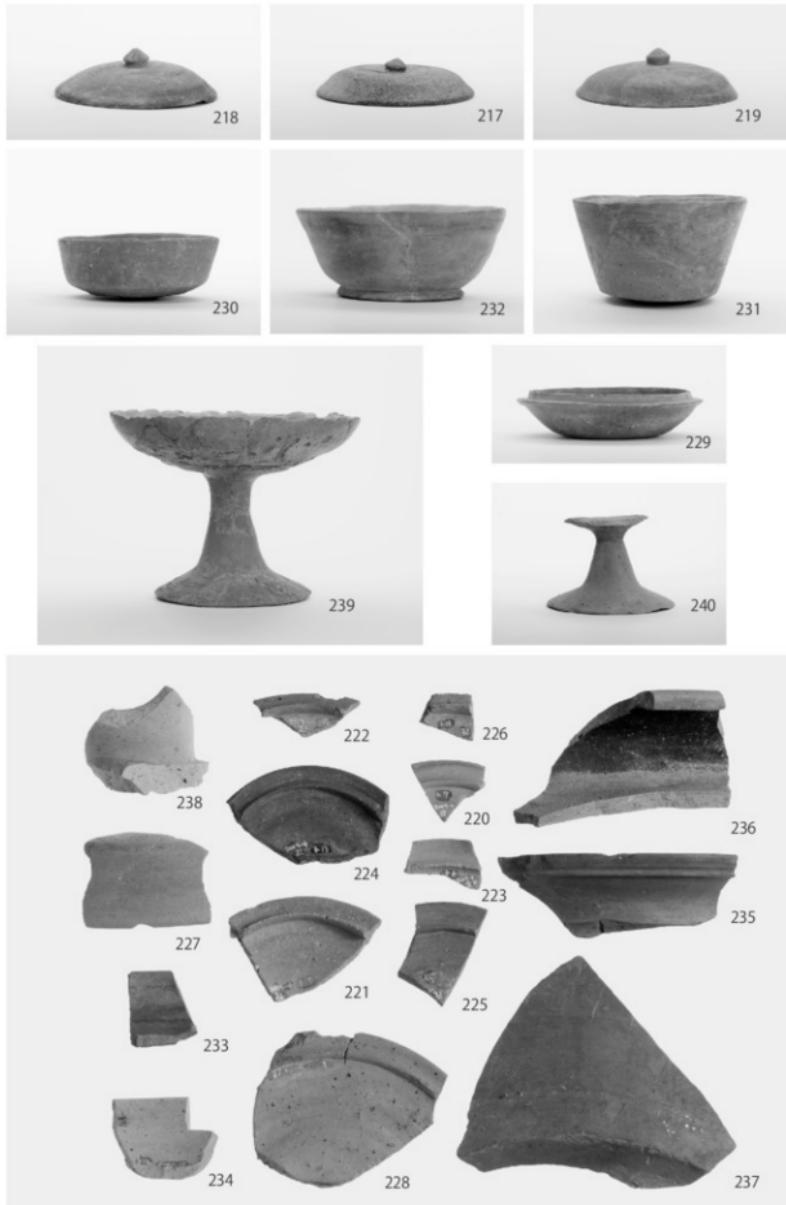
212



213



214



図版 94

素盞嗚命神社踏み石（上）・春日神社踏み石（下）



報告書抄録

ふりがな	しせきうえやまこふん							
書名	史跡 楠山古墳							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第9冊							
編著者名	橿原市教育委員会 石坂泰士(編)・竹田正則							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財課							
所在地	〒 643-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2014年3月28日							
所取遺跡	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
史跡 楠山古墳	奈良県 橿原市 五条野町	29205 14C545A	34° 28' 34°	135° 48' 13°	2000/5/11 ~ 2001/3/30	4.300 m <sup>2</sup>	区画整 理事業	
					2001/4/23 ~ 2001/7/31	257 m <sup>2</sup>	範囲確 認調査	
					2009/6/26 ~ 2009/10/2	660 m <sup>2</sup>	範囲確 認調査	
					2012/7/26 ~ 2013/2/28	1,200 m <sup>2</sup>	範囲確 認調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
史跡 楠山古墳	古墳	6世紀前半	楠山北古墳		須恵器	橿教委 2000- 4・8次		
		6世紀末~ 7世紀前半	楠山古墳 東石室 西石室		須恵器・三輪玉・ 歩搖付飾金具	2001- 3次		
		藤原京期	テラス面 柱列		須恵器・土師器	2009- 4次		
		中世~近世	土坑・溝		瓦器・陶磁器	2012- 3次		
要約	楠山古墳は丘陵の南側斜面に築かれた長方形墳で、南側に開口する2基の横穴式石室が設けられている。墳丘規模は東西約40m、南北約30mである。墳丘の上部は後世に削平されており、石室上部の石材も取り去られている。 墳丘と東石室の築造は6世紀末、西石室の築造は7世紀前半であると考えられる。東石室玄室には阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が安置されている。石棺の蓋は身から外され、割れた状態で出土している。西石室の玄門下には竈山石製の闕石が据えられている。闕石は石製扉の底板であると考えられる。両石室の開口部一帯に広く盛土を施す石室閉塞土の存在も確認している。 古墳の背面丘陵上では、古墳の内外を隔てる壜のような施設であったと考えられる新・旧二時期の柱列が存在する。柱列（新）の構築時期は藤原京期であると考えられる。							

橿原市埋蔵文化財調査報告 第9冊

## 史跡 植山古墳

発行年月日 平成 26 (2014) 年 3 月 28 日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会

印 刷 関西美術印刷（株）

奈良市西木辻町 153 番地 1



付図1 植山古墳周辺図(S=1/400)

